2017年度国際医療福祉大学

自己点検・評価報告書

学校法人 国際医療福祉大学

「自己点検・評価報告書（２０１７年度）」の刊行にあたって

国際医療福祉大学は、保健医療福祉の専門職をめざす人材を育成することを目指しており、単なる専門知識や技術の習得のみならず幅広い教養や豊かな人間性を養うための教育理念とカリキュラムを通して、1995年の開学以来その目標の実現に努力してまいりました。

2017年度自己点検・評価は本学にとって６度目となります。2002年度の自己点検・評価では「学生生活」の実態とその評価に中心をおき、学生から寄せられた様々な意見を参考にしながら、教育内容の充実はもとより図書館の拡充整備、レストランの新設、学内バリアフリー対策の実施、職員の接遇教育などに真摯に取組んでまいりました。

2004年度の自己点検・評価では、前回の評価の延長線上にある卒業生を対象に、第三者的視点問題点等を調査把握し、そこで得られた課題等について全学的に検討し教育の改善を図りました。同時に、今後の臨床教育の更なる充実に役立てたいと考え卒業生の就職先にも調査を依頼し、その意見等も活用させていただきました。

2006年には、翌2007年度に(財)日本高等教育評価機構による第三者評価を初めて受審すべく、認証評価委員会を立ち上げ、同機構が定める大学評価基準「建学の精神」「教育研究組織」「教育課程」「学生」「教員」「職員」「管理運営」「財務」「教育研究環境」「社会連携」「社会的責務」の１１の項目に対して自己点検評価を行い、自己評価報告書の作成及び関連資料の提出、書面調査及び実地調査などを経て、「同機構が定める大学評価基準を満たしている」と、2008年3月19日付で認定を受けました。

2008年度自己点検・評価は、本学の３つの基本理念のひとつである「社会に開かれた大学」に関して自己点検を行いました。この機会にこれまで本学の持てる財産をどの程度、どのように社会及び地域等へ還元してきたかを検証するために整理し、今後の地域連携の方法や在り方などを見直すとともに、各学科・大学院・センター等においては、臨床実習を含めた教育全般の充実度、学生生活のみならず就職や国家試験対策をも視野に入れた学生への支援体制などについても自己点検を行った結果、概ねその目的が達成されていると考えております。

前回2010年度自己点検・評価では、3つの基本理念の最後にあたる「国際性を目指した大学」に関し主に国際交流にテーマを絞り、開学より本学が海外に対してどのような活動を行ってきたかを、他大学との協定・留学生の状況・研修生の受入れ・海外研修・海外協力（JICA等）・海外での学術発表等の項目にて整理し纏めました。

2014年には、2007年度に続き二回目となる(財)日本高等教育評価機構による第三者評価を受審し、大学評価基準に適合している判定を頂いております。評価基準は、大学の使命・目的等、学修と教授、経営・管理と財務、自己点検・評価の４基準であり、独自に設定した基準は、国際性と社会貢献と地域連携でありました。

今回のテーマである「国際交流の更なる展開」は、前回2010年に整理してきた国際交

流を更に追究したものでありますが、この間海外協定校の増加、留学生奨学金制度の拡充、「さくらサイエンスプラン」を活用した海外研修、留学生別科の開設、医学部設立に伴い、国際交流が目覚しく進展してきました。そこで、変革・発展の時期に自己点検・評価を実施し、今後基本理念である「国際性を目指した大学」について、中長期ビジョンを策定するために役立てたいと考えております。

組織を挙げて本学の発展のために、本報告書を実際の教育研究の場に活用出来るよう努めてまいる所存であります。

本報告書をご一読いただき、本学の活動をご理解いただく一助となりますれば望外の喜びと感じます。また、忌憚のないご意見、ご批判を賜れば幸いに存じます。

2018年4月

国際医療福祉大学
学長 大友　邦

目　　次

目　次

Ⅰ．2017 年度自己点検・評価のねらい…………………………………… 1

Ⅱ．建学の精神・基本理念、ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝﾎﾟﾘｼｰ、使命・目的、個性・特色等

１．建学の精神・基本理念、ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝﾎﾟﾘｼｰ…………………………… 4

２．使命・目的…………………………………………………………… 5

３．個性・特色等………………………………………………………… 6

Ⅲ．沿革と現況

１．沿革…………………………………………………………………… 11

２．現況…………………………………………………………………… 15

Ⅳ．大学の新たな課題：国際交流の更なる進展

１．留学生及び研修生の受入れ………………………………………… 20

２．国際協力協定の締結………………………………………………… 36

３．海外研修……………………………………………………………… 38

４．教員による海外活動………………………………………………… 44

Ⅴ．各学部各学科の自己点検・評価と今後の課題

（１）保健医療学部 看護学科…………………………………………… 136

（２）保健医療学部 理学療法学科……………………………………… 138

（３）保健医療学部 作業療法学科……………………………………… 140

（４）保健医療学部 言語聴覚学科……………………………………… 142

（５）保健医療学部 視機能療法学科…………………………………… 145

（６）保健医療学部 放射線・情報科学科……………………………… 147

（７）医療福祉学部 医療福祉・マネジメント学科…………………… 150

（８）薬学部 薬学科……………………………………………………… 152

（９）小田原保健医療学部 看護学科…………………………………… 157

（10）小田原保健医療学部 理学療法学科……………………………… 160

（11）小田原保健医療学部 作業療法学科……………………………… 162

（12）福岡看護学部 看護学科…………………………………………… 164

（13）福岡保健医療学部 理学療法学科………………………………… 166

（14）福岡保健医療学部 作業療法学科………………………………… 168

（15）福岡保健医療学部 言語聴覚学科………………………………… 170

（16）福岡保健医療学部 医学検査学科………………………………… 178

（17）医学部 医学科……………………………………………………… 181

（18）成田看護学部 看護学科…………………………………………… 184

（19）成田保健医療学部 理学療法学科………………………………… 186

（20）成田保健医療学部 作業療法学科………………………………… 188

（21）成田保健医療学部 言語聴覚学科………………………………… 190

（22）成田保健医療学部 医学検査学科………………………………… 193

（23）留学生別科…………………………………………………………… 195

Ⅵ．大学院各専攻分野の自己点検・評価と今後の課題

（１）保健医療学専攻 特定行為看護師養成分野……………………… 198

（２）保健医療学専攻 助産学分野……………………………………… 199

（３）保健医療学専攻 理学療法学分野 ･････････････････････････････････････ 200
（４）保健医療学専攻 作業療法学分野 ･････････････････････････････････････ 203
（５）保健医療学専攻 言語聴覚分野 ･････････････････････････････････････ 206
（６）保健医療学専攻 視機能療法学分野 ･････････････････････････････････ 207
（７）保健医療学専攻 福祉支援工学分野 ･････････････････････････････････ 209
（８）保健医療学専攻 ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学分野 ･････････････････････････････････ 210
（９）保健医療学専攻 放射線・情報科学分野 ･････････････････････････････ 211
(10) 保健医療学専攻 生殖補助医療胚培養分野 ･････････････････････････････ 213
(11) 保健医療学専攻 医療福祉教育・管理分野 ･････････････････････････････ 215
(12) 保健医療学専攻 臨床検査学分野 ･････････････････････････････････････ 216
(13) 医療福祉経営専攻 医療経営管理分野 ･････････････････････････････････ 217
(14) 医療福祉経営専攻 診療情報ｱﾅﾘｽﾄ養成分野 ･････････････････････････････ 219
保健医療学専攻 診療情報管理・分析学分野
(15) 保健医療学専攻 医療福祉国際協力学分野 ･････････････････････････････ 220
(16) 医療福祉経営専攻 医療通訳・国際医療ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ分野 ･････････････････････ 221
(17) 臨床心理学専攻 臨床心理学分野 ･････････････････････････････････････ 226
(18) 薬学研究科・薬科学研究科 ･･･ 227
Ⅶ. 2017 年度自己点検・評価の総括･････････････････････････････････････ 231

国際医療福祉大学自己点検・評価委員会規程 ･････････････････････････････ 235
2017 年度自己点検・評価委員会名簿･････････････････････････････････････ 237

Ⅰ．２０１７年度自己点検・評価のねらい

本学は、これまで６回の自己点検・評価及び公益社団法人日本高等教育評価機構の認証評価を２回受審してきた。平成 26（2014）年に日本高等教育評価機構の認証評価を受け、大学評価基準に適合している判定を頂いている。評価基準は、大学の使命。目的等、学修と教授、経営・管理と財務、自己点検・評価の４基準であり、独自に設定した基準は、国際性と社会貢献と地域連携であった。

今回は、本学の基本理念である、人間中心の大学、社会に開かれた大学、国際性を目指した大学の３大理念のうち、国際性である国際交流について総括を行った。国際性では、平成 22（2010）年に整理してきたが、医学部設立に伴い、国際化が急激に変革が生じてきた。そこで、変革の時期に自己点検・評価を実施し、今後の国際性についての将来構想に役立てればと考える。また、例年実施している、学科・センター、大学院の自己点検評価を継続して行った。

以下に今まで行ってきた自己点検。評価について概略を説明する。

国際医療福祉大学は、平成 7(1995)年度に保健学部（平成 19(2007)年 4 月に保健医療学部に改称）5 学科で栃木県大田原市に開学した。その後、大田原本校に医療福祉学部、薬学部、福岡県福岡市に福岡リハビリテーション学部、神奈川県小田原市に小田原保健医療学部を開設し、また、その間には大学院修士課程、博士課程を開設し、全国各地で同じ授業が受けられるよう各地にサテライトキャンパスを設け、本学の新たな展開を図った。

本学の自己点検・評価は、平成 12(2000)年度に初めて実施したが、この時の報告書は本学にとって初めての報告書ということもあり、全体的に網羅した内容となっている。テーマは大学の基本理念と教育理念、大学の沿革と組織、各学科等の教育・研究の方針と取り組み、学生の受け入れ、カリキュラム、教育指導状況、成績評価と単位認定、学生生活への配慮、卒業生の進路状況、研究活動、国際交流、社会と連携などであるが、資料的なものが多く見られる。

平成 14(2002)年度の自己点検・評価は、「学生生活の実態把握・評価」という副題を置き、それらを中心に実施されている。また、その他に教育研究における各学科・センター等の課題と今後、大学としての新たな課題等が取り上げられている。この時の自己点検・評価を機会に行った学生生活に関するアンケートの実施により、学生が抱えている問題の把握及び大学として如何にそれらに対処しているかが報告されている。一方、精神衛生面に関して、在籍する学科の教員のあり方、学科全体の理解が今後の重要な課題であることが指摘されている。また、大学としての今後の課題として、教育理念の点検、カリキュラムの改編、大学関連施設との連携（備品の設置・増設と本学臨（地）床実習施設としての利用状況、大学附属施設としての熱海病院、大学クリニック）、衛星放送授業の導入、国際交流の進展について検討されている。

平成 16(2004)年度に実施された自己点検・評価は、卒業生の社会活動、教育と臨床現場の一体化による専門職教育、それ以外に、教育研究における各学科・センター等の課題と今後、大学の新たな課題及び大学院の総合的な自己点検・評価が取り上げられた。卒業生の社会活動では、卒業生の意識調査と雇用者によるアンケート調査報告がなされ

ている。雇用者である施設長からのアンケートでは概ね良好で、高い評価を得ている。卒業生の9割が就業していること、国家試験等を活かした就業をしていること、5割以上の学生が学会などに属し研鑽を重ねていることなど専門職としての意識が高いことが報告されている。また、大学の新たな展開として、①薬学部の設置、②リハビリテーション学部の設置、③国際医療福祉大学附属三田病院の設置について言及されている。附属三田病院は平成17(2005)年3月に東京専売病院から継承し、薬学部及びリハビリテーション学部（現福岡リハビリテーション学部）は平成17(2005)年4月の開設であり、これらの新たな展開については本学の教育研究の発展に大いに寄与するとともに、それぞれが所属する地域社会の発展への貢献も大である。

本学の、他地域への学部キャンパスの設置、新たな附属病院及び大学関連施設の設置などを振り返ると、開学以来10年間の発展はまことに目覚しい限りである。今後は、国際医療福祉大学を中心とした大学院や大学関連施設間の教育研究機能の連携のあり方について具体的に検討を重ねていくことが大切であり、さらにそのあり方をそれぞれの持ち場で互いに共有することが本学のますますの発展につながると考えると報告されている。

平成19(2007)年度には、財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受審した。建学の精神、大学の沿革と現況、基準ごとの自己評価（教育研究組織、教育課程、学生、教員、職員、管理運営、教育研究環境、社会連携、社会的責務）という予め決められたテーマに沿って本学の臨床実習教育、国際交流活動、社会的貢献教育・活動、大学院などについてまとめた。総評としては、建学の精神及び基本理念などは周知されていること、FD、学生の授業評価アンケート結果から教育方法の改善がみられていること、種々の公開講座の開催など社会貢献も活発であること、学部及び大学院の定員超過に対する対策、遠隔授業、医療福祉チャンネル774（本学関連施設が運営する衛星放送）の授業が教育効果をあげていること、財政的努力がなされていること、各種委員会などの組織等が適切に運営されていることなどについて評価を得た。一方、入学希望者及び保護者等外部の方に対して本学の建学の精神、教育理念、大学の使命・目的を明確に示すこと、3キャンパスの同一学科の講義内容・試験のレベル評価・進級基準などの統一に齟齬がないこと、総合教育科目については授業評価結果等を参考に見直しをすること、定期試験不合格者に対する対応の検討、大学院生の定員の過剰に対する対応、大学院生学位授与率の向上への対応、国家試験不合格者への対応、院生数の増加に伴う大学院教員の配置、科学研究費等の外部研究費の申請率の向上と獲得件数の増加、研究協力課などの設置の検討、図書館の蔵書数、および閲覧座席数、学生食堂、学生ホールの整備、大学コンソーシアムとちぎとの単位互換制度の検討、危機管理体制の整備などが参考意見として指摘された。

平成20（2008）年度自己点検・評価の主たるねらいを、地域連携、学生活動としてサークル及び同窓会の運営と学生調査、各学科・センター等の課題と今後に絞った。また、大学機関別認証評価時の(財)日本高等教育評価機構から指摘を受けたことも踏まえながら実施を計画した。

地域連携のこのねらいの背景には、開学当初からの基本理念に“人間中心の大学”“社会に開かれた大学”“国際性を目指した大学”が掲げられており、この“社会に開かれ

た大学”の中で、地域連携による社会的貢献度をこの機会に確認し、再度見直し、今後の地域連携の拡大及びあり方を検討する目的が据えられている。

本学では毎年継続的に学生アンケートを実施しているが、これまでは最終学年の４年生のみを対象に実施していたものを、より多くの意見を集約しよりよい学生生活のための支援策などを検討するため、今回は全学年を対象に実施した。

卒業生の動向などについては、平成 14(2002)年度の自己点検・評価報告書にもまとめられているが、キャリアアップのための卒業生支援を検討する上で、同窓会の運営についても言及した。

平成 22(2010)年度自己点検・評価は本学の基本理念である、人間中心の大学、社会に開かれた大学、国際性を目指した大学の３大理念のうち、国際性である国際交流について総括を行った。国際交流では、他大学との協定、留学生の状況、研修生の受け入れ、海外研修旅行、海外協力（JICA など）、各教員による海外での学術発表などを中心に言及した。また、例年実施している学生の生活アンケート調査、学科・センターの自己点検評価を継続して行った。

平成 26（2014）年の日本高等教育評価機能の認証評価を受けた。自己評価報告書及びエビデンス集を作成した。その結果、国際医療福祉大学は、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準に適合していると認定された。

「基準１.使命・目的等」について「共に生きる社会」という建学の精神に基づき、大学の使命・目的及び教育目的は明確に示されており、 学内外へも周知している。使命・目的などに基づき、ディプロマポリシー、カリキュラム ポリシー、アドミッションポリシー及び「中期目標・中期計画」を策定が評価された。

「基準２.学修と教授」について 学科ごとにアドミッションポリシーを定め、多様な入試を行っている。大学の特色に応じた授業科目を各学科に設定し、関連病院、関連施設における臨地実習によって、学生は講義・演習などで得た知識・技術を実践している。担任制、チューター 制など、少人数単位で学修支援を行う体制を構築し、それぞれの学生の学修状況に合わせた指導体制をとっていること、国家資格の取得に向けた教育・支援の取組みが充実しており、 高い国家試験合格率及び就職率を維持していることが評価された。

「基準３.経営・管理と財務」について、理事長、学長が適切にリーダーシップを発揮できる体制をと っていること、財政状況については、収支のバランスをとり、適切な財政運営を行っていることが評価された。

「基準４.自己点検・評価」について 学長を委員長に、副学長、事務局長などから構成している「自己点検・評価委員会」を置き、定期的に明確なテーマを設定し、多様な資料・データなどを用いて、評価の根拠となるエビデンスに基づいた自己点検・評価を行うとともに認証評価に臨んでいることが評価された。

Ⅱ. 建学の精神・基本理念、アドミッションポリシー、使命・目的、個性・特色等

Ⅱ．建学の精神・基本理念、アドミッションポリシー、使命・目的、個性・特色等

１．建学の精神・基本理念、アドミッションポリシー

国際医療福祉大学（以下「本学」という）は、建学の精神である「共に生きる社会」の実現のために、「３つの基本理念」及び「７つの教育理念」を掲げている。

これら「３つの基本理念」を念頭に、専門職種である前に人間としての人格向上に努力すること、大学が地域社会と共に生きるということ、広く世界的視野に立つということを目標に、保健・医療・福祉の各界や国際的ニーズに応え得る大学を目指しており、障害者も病者も健常者もお互いを認め合って暮らせる「共に生きる社会」の実現のため、各々の学科が、それらの専門性を学びながら「人間」を追究するという共通した目標で結ばれることにより、将来の医療福祉専門職へのより明確な動機付けができると考えている。

また、「７つの教育理念」を掲げることで、教員同士が目的を一つにし、保健・医療・福祉の各界や、国際的ニーズに応え得る大学が実現でき、社会の発展に大きく寄与できると考えている。

本学は、学科の壁を越えた、チーム医療に貢献できる医療福祉専門職としての総合的な資質を身につけた人材の育成をめざしている。

『３つの基本理念』

１）人間中心の大学

プロフェッショナルとしての専門的な知識や技能の習得にとどまらず、幅広くバランスの取れた良識ある人間を育成すること。

２）社会に開かれた大学

学問を創造的に追究するとともに、地域社会と一体となり、地域の医療福祉のニーズに応え、地域社会や医療福祉に関わる各界の人々の生涯教育の拠点としても機能できる大学となること。

３）国際性を目指した大学

国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること。

『７つの教育理念』

１）人格形成

知識・技術のみに偏しない知・情・意を兼ね備えた人材を育み、「共に生きる社会」を目指していく。自ら考え、自ら行動する幅広くバランスの取れた人格の形成を図る。

２）専門性

日進月歩する医療福祉の高度化･専門分化に対応した､学問の確立と研究の推進を行う。医療福祉のプロフェッショナルとしてふさわしい能力を学生生活で身につけていく。

３）学際性

医療福祉分野の大学の特性を生かして、他学科の専門科目も教養として習得し、授業外活動も重視する。総合的教養を併せ持つ医療福祉専門職を目指す。

４）情報科学技術

情報化社会の進展に対応できるよう、すべての学科において最新の知識・技術を習得

させ、情報科学技術に強い医療・福祉専門職を育成する。

5）国際性

語学教育など一般教育だけでなく、専門教育や学生生活を通じて、人間(私人)としても専門家(公人)としても国際的視野を持った人材を育てる。

6）自由な発想

人間としての品位や、社会のルール・マナーの遵守を前提におきながら、学生個人の自由な発想や行動を歓迎し、特に宗教・思想・社会運動への関心や探究を尊重する。

7）新しい大学運営

時代の変化に即応して、大学の運営も年功序列を廃し、学生の立場から教員の評価もできるシステムを導入するなど、適時見直しを進め、自由闊達な校風の中で学生の自主性を育む努力をする。大学院教育については、特に生涯学習の視点に立って専門職育成のための教育、研究の充実を図る。

『アドミッションポリシー（入学者受入れの基本方針)』

＜国際医療福祉大学が求める学生像＞

1）国際医療福祉大学の基本理念と教育理念とを充分に理解し、専門職業人として「共に生きる社会」の実現に強く貢献したいと考える人

2）これからの時代の健康、医療、福祉分野を担っていこうとする情熱をもち、自ら積極的に学ぶ意欲と能力とをもつ人

3）健康、医療、福祉分野における科学技術の高度化、専門化、及び国際化に対応するための努力を継続できる人

4）幅広い教養と広い視野を備えた豊かな人間性を養うため、積極的に自らを磨いていける人

5）あらゆる人に対して自らの心を開き、コミュニケーションをとれる人

6）学業・社会貢献・技術・文化・芸術・スポーツの分野で優れた活動実績を有し、さらに国際医療福祉大学での学びを活かして将来それぞれの分野で活躍したいという意欲をもつ人

7）国際医療福祉大学での学びを活かし、将来、母国および国際社会における健康、医療、福祉分野の発展に貢献したいという強い意志をもつ人

2．使命・目的

本学は、学則第１章第１節第１条に「目的」を次のように規定している。

第１条　国際医療福祉大学（以下「本学」という。）は、教育基本法及び学校教育法に基づき、保健医療福祉に関する理論と応用の教授研究を行い、幅広く深い教養及び総合的判断力を培い、豊かな人間性を涵養し、保健医療福祉に関する指導者とその専門従事者を育成するとともに、学術文化の向上と国際社会の保健医療福祉に貢献する有能な人材を育成することを目的とする。

本学の掲げる「３つの基本理念」及び「7 つの教育理念」の下、障害者や病者、健常者がお互いに尊重しあいながら「共に生きる社会」の実現を目指し、広い視野を持つ医療福祉の専門職を育成することを、全学を挙げて取り組んでいる。

臨床実習の経験を重視し、医療福祉分野での技術の高度化や専門化に迅速に対応できるような、高い技能を有した人材の教育にも本学では力を入れている。

また、自分の専門科目はもちろんのこと、他の医療福祉関連職種や一般教養についても学習できるようなカリキュラムを組み、幅広い総合的な資質を身につける機会を設けている。

３．個性・特色等

本学は「保健医療福祉の総合大学」として、医師以外の医療や福祉の専門職（メディカルスタッフ）の育成とその地位向上を志し、栃木県及び大田原市の協力・支援の下「公私協力方式」として、平成７(1995)年に栃木県大田原市に開学し、平成 17(2005)年には開学 10 周年を迎えた。

より質の高い教育を行えるよう、また、「チーム医療」に貢献できる高い技術と教養を身につけた医療福祉の専門職を育成できるよう臨床実習教育を重視し、本学は現在４つの附属病院とクリニック及び各地に多数の関連施設（臨床医学研究センター）を有し、臨床実習の充実を図っている。豊富な施設での臨床実習教育は、本学の特色の一つでもある。

平成 12(2000)年度には、大田原キャンパス内に福祉施設「国際医療福祉リハビリテーションセンター」を開設し、学生は日常的に障害者や病者と直接触れ合い、将来の医療福祉専門職としての自覚を持ち、患者様との人間関係を体験して「共に生きる社会」を実感している。

また、本学は、大学名に記されているように「国際」的貢献にも力を入れている。本学独自の奨学金制度を設け、アジアや開発途上国等からの留学生を受け入れ、本国において医療福祉分野のリーダーになり得る人材を育成することで、各国の医療発展に貢献することができると考えている。これらの教育事業と併せて、ＪＩＣＡ（国際協力機構）の依頼による医療協力専門家の派遣及び研修員の受け入れや、長期休暇を利用した学生の海外研修では各国の医療施設でボランティア活動を行うなど、海外の医療福祉事情を直に体験できるような世界を視野に入れた教育にも力を注いでいる。

学生は、その専門学科についての知識や技術を習得すると同時に、医療福祉という性格上人と向き合う職種柄、豊かな人間性を養うという観点から、全学科共通の科目を取り入れている。共通科目は総合教育科目と専門基礎科目があり、専門基礎科目では 21 世紀の「チーム医療」を視野に入れ、各々の学科の壁を越えて必要な知識が共有できるようになっている。

本学はそのための施設や設備、必要な情報の提供等、学習の支援を図っている。

入学試験においては、高校推薦入試を始め AO 入試、社会人特別選抜入試、一般入試前期日程及び後期日程などの多岐に渡る受験機会を設けている。

一般入試前期日程は全国で実施しており、地方からの受験生にも入学のチャンスが広がっている。第１期生より全国各地の医療・福祉の現場で多くの卒業生が活躍している。

・関連職種連携教育

本学の教育理念の実現に貢献する科目の一つとして IPE（専門職種連携教育、関連職種

連携教育）がある。在学期間中、全学部・学科の学生には、人を中心とした保健医療福祉の連携と協働に基づく総合的なサービス提供の担い手としての存在意義を明確にしたうえで、専門職優位の考え方から患者・利用者中心の考え方へ、そして目標達成を重要視した問題解決型への転換を図り、地域社会への貢献などを実現するための方法を学ばせる。また、患者・利用者が暮らしや人生の中で持っている価値観や規範を尊重し、専門領域に関する基礎知識・技術の修得を基盤とした多領域に関する理解、総合的で幅広い知識と技術を身につけそれらを応用して連携・協働する力、トータルなサービスを提供できる力を涵養する。併せてコミュニケーション、チームワーク、演習や実践を通して連携技法等を修得する。これらの教育は他の多くの科目と同様、知識や理論を修得するための講義と、知識及び技術とその実践方法を修得するための演習・実習(実践)から構成されている。

本学では教育の質の向上と効果を高めるために、オリジナル教材として「医療福祉をつなぐ関連職種連携ー講義と実習にもとづく学修のすべて」を刊行した。全学部・学科でこの教材を用いて講義・問題解決型体験学習・隣地実習を展開し、教育の質を担保している。講義となる「関連職種連携論」では学内専任教員と臨床系教員が一体となって教育にあたる。

問題解決型体験学習に相当する「関連職種連携ワーク」では、学内専任教員が専門領域を問わず指導する体制を構築し、学修を支援する。同一キャンパス内（福岡看護学部・福岡保健医療学部は合同）で各学部・学科学生の混合チームを編成し、PBL チュートリアルによる学修を展開しており、大学全体に活力を与える機会となっている。授業期間中に学修成果発表会を実施し、優秀な成果を上げたチームには学長賞の授与など、学習意欲を刺激する工夫をしている。なお、小田原保健医療学部では「関連職種連携論」の中で「関連職種連携ワーク」を取り入れている。

「関連職種連携実習」は本学の附属病院・関連施設を中心に、他学科の学生とチームを組み臨地実習にあたる実践的な教育内容になっており、本学の教育理念の実現に貢献する科目の一つとなっている。実践の場で学内専任教員と臨床系教員及び事務職員が一体となって「チーム医療・チームケア」の教育にあたる。省察を繰り返しながら目標を達成できるよう、学修成果を実習施設及び国際医療福祉大学学会で報告させ、更に報告書作成等の指導を通して教育の質を向上させる工夫をしている。

上記関連職種連携教育の教育方法は教務委員会、臨床教育委員会、FD 委員会の委員により構成されている「関連職種連携ワーキンググループ」で検討され、学部長・学科長会議や教授会（専任教員代表者会議）で決定している。

・国際交流

本学では国際交流センター及び国際部を学内組織に設置し、海外情報の収集、留学生との交流会の開催、短期研修生の受入れ、海外からの優れた招聘学者による講演会の開催など、多彩な活動に取り組んでいる。日本の医療福祉分野や高度な医療福祉技術を高い教育レベルで学びたいという留学生を積極的に受け入れており、これまで累計（別科生、研究生、科目等履修生を除く）で約 480 名、この内 98 名の留学生（学部生 68 名、大学院生 30 名）が現在本学で学んでいる。また、経済的理由により学費の納入が困難と認められる留学生に対し、入学金および授業料を50%免除する「学費減免制度」を設けているほか、試験日を年 3 回設定するな

ど、財政面・体制面でのサポートも充実している。留学生の多くが日本で国家資格を取得し、国内外で活躍中である。

また、本学では、約3か月の国内事前研修の後、夏季休暇、あるいは冬季休暇中、必修科目あるいは選択科目として、「海外保健福祉事情」を実施している。約 2 週間海外の提携医療機関を中心に患者のケアの補助や医療スタッフのサポートなど、海外各国における医療福祉の現場に直接触れ、貴重な体験を積んでいる。2017年度までの累計で3,367名、2017年度は827名の学生がこの海外研修に参加しており、国際的視野の涵養を図っている。

同時に、これらの実施に随行する教員・職員には、各国の教員・職員との教育法などの協議を通じて、国際的ファカルティ・ディベロップメント（FD）、スタッフ・ディベロップメント（SD）を実施し、本学の教育の国際化に寄与している。

・語学教育

本学は、1995年の開学以来、「国際性を目指した大学」を基本理念のひとつに掲げ、"国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること"を目標に、"語学教育などの一般教養だけではなく、専門教育や学生生活を通じて、人間（私人）としても専門家（公人）としても国際的視野を持った人材を育てる"ことを教育理念としてきた。「英語が使える医療・保健・福祉の専門家」を英語教育の目標と定め、専門別英語教育への取り組みを実施している。また、毎年1回英語の語学力を競う「学長杯スピーチコンテスト」を実施しており、学生の学習意欲の動機づけとなっている。

また、全学的に語学力の向上を目指す学生が自主的に取り組めるよう、各種の選択科目を置く方針を取っている。必修科目では専門職に必要な講読能力の向上を目指し、選択科目では作文・会話の向上を目指し、学生の修学状況に合わせ、段階的にレベル向上を図ることができるように科目を設定している。なお、外国語は中国語・韓国語（コリア語）などの科目も置き、英語だけでなく語学教育の充実を図っている。また、順次各キャンパスに英語学習教材「CALL（Computer Assisted Language Learning）システム」を導入し、学生の自主学習を促す環境を整えている。

・実習施設の充実

大田原キャンパスには、健康管理センター及びアジアで有数の専門施設である言語聴覚センターを併設する「国際医療福祉大学クリニック」がある。また、栃木県内及び東京都・静岡県・千葉県に計5つの附属病院を設置している。附属病院や臨床医学研究センターでは、患者さんに先進の医療を提供すべく、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ Si」や320列マルチスライス CT、PET-CT など最新鋭の医療機器を揃えている。

関連施設には、重症心身障害児施設・身体障害者療護施設を併設した国際医療福祉リハビリテーションセンター、通所リハ・通所介護・グループホームを併設したおおたわら総合在宅ケアセンターを始め、老人保健施設、特別養護老人ホーム等多数の医療福祉施設があり、臨床実習教育に多くの場を提供している。

・最先端の教育機器

学内には最先端の教育機器を揃え、学生が現場に出ても即座に対応できるような教育を実施している。各学科にある実習室等においても、実際の病院・福祉施設のイメ

ージを模したレイアウトをしている。大田原キャンパス薬学棟 3 階全フロアを占める実習施設には、実際の保険薬局を模した模擬保険薬局や、スタッフステーション・診察室、各種調剤室などがあり、臨床薬学教育を重視した充実の設備を整えている。成田キャンパス看護学科ではあらゆる臨床現場を想定し、モニター室も備えたラボ。病室やナースステーションを模した設備と最新鋭のシミュレーション機器を揃え、ICU や CCU、NICU などの高度医療に対応した実践的な演習を行う。教員からは「細かな指導ができる」、学生からは「指導がイメージし易い」と評価されている。大川キャンパス言語聴覚学科の演習室は、1,600m² のフロアに 16 室にもおよぶ最新の演習施設を整備している。広さ、演習室数とも、言語聴覚士養成校としてはこれまでにない規模を誇っている。

2017 年 4 月開設した成田キャンパス医学部棟内に設置の「医学教育シミュレーションセンター」は広さ 5,000² を超え、世界最大級の規模を誇ります。講義・演習においてシミュレータを用いたシミュレーション教育を多用して、基礎的な臨床技術を効果的に修得ている。

・図書館及び図書室

本学図書館は、学生および教職員の教育・研究・調査・学習を支援するため、医学・医療福祉関連の資料を中心に収集している。図書の他にも専門雑誌や電子ジャーナル・ブックを所蔵し、図書館ホームページから蔵書検索が可能となっている。また、教養としての読書の手がかりとなるような一般書、充実した学生生活のための実用書も選定している。

図書館は、大田原キャンパスを本館とし、成田・東京赤坂・小田原・福岡・大川の各キャンパスに分館、附属病院および看護学校内に分室を設置した総称であり、相互に連携した運営を行い、資源の有効活用を図っている。各館に専任の司書を配置し、所蔵資料の管理だけでなく、未所蔵の場合でも国内外の機関の協力のもと、利用者へ迅速に資料提供できる態勢をとっている。また、自ら問題解決できるよう調べもの相談（レファレンス）サービスを提供したり、定期試験や国家試験に取り組む学生が落ち着いて勉強できる環境も整えている。地域貢献の一環としては、近隣の医療従事者や一般の方にも図書館を公開している。

・衛星放送授業（平成 23(2011)年度からは VOD 授業に特化）

本学は、ＣＳ放送「医療福祉チャンネル 774」（㈱医療福祉総合研究所）の番組企画・制作を全面的にサポートし、学生には入学と同時に衛星放送の受信システムを無償貸与及び衛星放送授業での単位取得を可能とするなど、補助教材としても役立てるよう取り組んできた。同授業は、平成 23(2011)年度からはビデオ・オン・デマンド（ＶＯＤ）システムに特化し、学内のコンピュータルームのパソコン、自宅のパソコン等インターネットに接続できるものであれば視聴できるように学生の利便性を図っている。視聴後に確認問題へ回答する機能を追加して双方向性を向上させている。

・健康管理等

本学は全キャンパスとも、学生の体調不良やけがの応急処置等の対応ができるように「学生保健室」を設置している。また、キャンパス内に併設もしくは近隣にある附属病院や関連施設と連携し、学生の健康管理を行っている。

大田原キャンパスに併設されている「国際医療福祉大学クリニック健康管理センター」では、学内や病院実習での感染予防対策などを検討するとともに、インフルエンザをはじめ、感染症が流行した場合等において、速やかな対応策を検討し、その検討結果を、各キャンパス学生課を通じて全学的に予防を励行するとともに、注意喚起を行って

いる。また、全キャンパスで入学生に対し、心身の健康状態を把握するための「UPI 調査（学生精神的健康調査：University Personality Inventory）」 を実施している。

学生が学内クリニックや関連病院を受診した場合、医療費の自己負担分は教育後援会が補助している。健康診断は、全キャンパスとも学内併設もしくは近隣の附属病院・関連施設を利用して実施しており、毎年 100%の受診率となっている。

本学は「学生相談室」若しくは「こころの相談室」を各キャンパスに設置し、悩みや精神的な問題を抱えている学生に対して、常駐または非常勤の臨床心理士が、精神的不調はもちろん、人間関係、学習上の悩み等の相談に応じている。また、学生本人に配慮しつつ、必要に応じて保護者に対する相談や、クラス担任、アドバイザーとの調整を行い、学生の不調に対し早期対応を心がけている。学生に対しては、「学生相談室ご案内」リーフレットを作成し、各所窓口に常設して周知を図っている。

Ⅲ. 沿革と現況

Ⅲ．沿革と現況

１．沿革

本学は医師以外の医療や福祉の専門職（メディカルスタッフ）を育成する「保健医療福祉の総合大学」として、平成７年に開学し、平成 17(2005)年には開学 10 周年を迎えた。

初年度は保健学部 5 学科で開学し、平成 9(1997)年度には医療福祉学部を開設した。その後平成 11(1999)年度には大学院医療福祉学研究科を開設、平成 14(2002)年度には保健学部に視機能療法学科を増設して、2 学部 8 学科、1 研究科の体制となった。平成 17(2005)年度には大田原キャンパスに薬学部薬学科を開設するとともに、福岡県大川市にリハビリテーション学部 2 学科を、平成 18(2006)年度には神奈川県小田原市に小田原保健医療学部 3 学科を開設し、大田原キャンパス以外にも学部の展開を行った。

平成 17(2005)年度には、学生のボランティア活動を支援するため大田原キャンパスにＩＵＨＷボランティアセンターを開設し、専属のコーディネーターによるボランティアに関する学生の相談やボランティアの斡旋のほか、病院や施設等への学生ボランティアの紹介をするなど、地域との連携を促進している。

平成 19(2007)年度には、保健学部を保健医療学部に改称、リハビリテーション学部を福岡リハビリテーション学部に改称及び言語聴覚学科を増設して 3 学科とした。

平成 21(2009)年度には、医療福祉学部の医療経営管理学科及び医療福祉学科を統合し、医療福祉・マネジメント学科として再スタートを切った。新たに、福岡県福岡市に本学の 6 番目となる福岡看護学部、大学院には薬科学研究科を開設した。

平成 25(2013)年福岡リハビリテーション学部を福岡保健医療学部に改称するとともに、福岡保健医療学部に医学検査学科を開設した。

平成 27(2015)年 6 月には大田原キャンパスに留学生別科開設した。平成 28（2016）年 4 月 成田看護学部・成田保健医療学部（成田キャンパス）を開設、平成 29(2017)年 4 月医学部医学科（成田キャンパス）を開設した。これにより、本学の教育研究体制は 9 学部 22 学科 3 研究科に拡充した。全国各地から入学者を迎え、それぞれの地域社会で活躍できる保健医療福祉専門職の人材育成を図っている。

＜大学院＞

平成 11(1999)年度の保健医療学専攻修士課程の開設に続き、平成 13(2001)年度には医療福祉経営専攻修士課程及び保健医療学専攻博士課程を開設、平成 19(2007)年度には臨床心理学専攻修士課程を加え、1 研究科 3 専攻の体制となった。

平成 21(2009)年度には、新たに薬科学研究科修士課程を開設し、2 研究科 4 専攻の体制となった。ただし、翌年の平成 22(2010)年度には、医療・生命薬科学専攻の募集を停止し、生命薬科学専攻を開設した。

大学院は、平成 13(2001)年度からサテライトキャンパスの展開を始め、働きながら学びたいという社会人の要請にも応えている。現在、東京、小田原、熱海、福岡、大川、熊本の各キャンパスにおいて、遠隔授業システムを用いた同時双方向の授業を併用して、より高度な専門職の養成と研究指導を行っている。

平成 20(2008)年度からは文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」に選定された「全人的ながん医療の実践者養成」推進のため、自治医科大学にも遠隔システムを設置

し、連携して取り組みを進めている。平成 24(2012)年 4 月大学院薬学研究科 医療・生命薬学専攻（博士課程）開設している。

＜附属施設及び関連施設＞

臨床実習教育及び臨床研究の場として、附属病院等の整備を進めている。平成 8(1996)年度に学内に国際医療福祉大学クリニックを開設、本学学生・教職員の健康管理センターとしてスタート。平成 9(1997)年度からは言語聴覚センターを、言語聴覚障害学科（現言語聴覚学科）の臨床実習施設として開設した。また、平成 14(2002)年度に国際医療福祉大学熱海病院（静岡県熱海市）、平成 16(2004)年度に国際医療福祉大学三田病院（東京都港区、東京都認定がん診療病院）、平成 18(2006)年度に国際医療福祉大学病院（栃木県那須塩原市、平成 10(1998)年度に医療法人経営の病院として開設後、平成 18(2006)年度に学校法人が承継、同時に介護老人保健施設マロニエ苑・にしなすの総合在宅ケアセンターも学校法人が承継）、平成 21(2009)年度には国際医療福祉大学塩谷病院（栃木県矢板市）をそれぞれ開設した。

その他、キャンパス敷地内には関連法人である社会福祉法人邦友会により、平成 12(2000)年度に重症心身障害児施設なす療育園、身体障害者療護施設那須療護園、身体障害者デイサービスセンター那須デイセンターの複合施設である国際医療福祉リハビリテーションセンターを開設。平成 15(2003)年度にはおおたわら総合在宅ケアセンターを、平成 18(2006)年度には特別養護老人ホームおおたわら風花苑を、それぞれ学内に開設した。

充実した豊富な医療・福祉施設群は、本学の特色の一つであり、障害者や高齢者が学生と生活空間を共有する、「共に生きる社会」を実感できるキャンパスとなっている。

＜国際交流活動＞

(1) 医学部留学生特別奨学生制度

2017 年 4 月に開設した医学部では、優秀な留学生を受入れるために医学部留学生特別奨学生制度を設置し、ベトナム、モンゴル、ミャンマー、インドネシア、ラオス、カンボジアの 6 カ国の政府や大学と覚書を締結しました。入学金や授業料、教材費、生活費などを、医学部を卒業するまでの 6 年間にわたり奨学金で給付するものです。留学生が日本の医師免許を取得し、本学関連施設などで臨床経験を積んだ後に、母国で保健医療分野の発展に寄与することを目的としている。

(2) ＩＵＨＷ奨学生制度

アジア各国の医療福祉分野で指導的立場となる人材の養成に寄与したいと考え、アジア出身の特待留学生に対して、学費全額およびその他の経費などを負担する本学独自の奨学金制度を設けています。この制度を適用した留学生に対しては、卒業後はすみやかに帰国し、母国の医療福祉発展のため、その分野で指導的立場として従事するよう義務付け、制度趣旨の実効性を図っています。これまでに、ベトナム、ミャンマー、モンゴル、カンボジア、ラオスなどを主とするアジア各国から多数の留学生を受入れています。本制度は「アジア婦人友好会」から高い評価を得ており、留学生の推薦などの協力を頂いている。

⑶ 学術交流協定

海外の大学と学術交流協定の締結など国際的な交流を積極的に進めており、現在 23 カ国・地域（タイ、ミャンマー、ベトナム、シンガポール、中国、台湾、韓国、豪州、英国、ハンガリー、ロシア、米国など）にわたる４１の大学・機関・病院と協定を結び、教員・学生の相互交流を積極的に実施している。

⑷留学生

開学以来の留学生の受入れに加え、平成 13(2001)年度からは本学独自の奨学金制度、「IUHW アジア学生奨学金制度」を設け、アジア各地から毎年留学生を受入れ、本国において医療分野面でリーダーとして活躍できる人材の育成を行っている。国際交流センター及び国際部を学内組織に設置し、海外情報の収集、留学生との交流会の開催、短期研修生の受入れ、海外からの優れた招聘学者による講演会の開催など、多彩な活動に取り組んでいる。日本の医療福祉分野や高度な医療福祉技術を高い教育レベルで学びたいという留学生を積極的に受け入れており、これまで累計（別科生、研究生、科目等履修生を除く）で約 480 名、この内 98 名の留学生（学部生 68 名、大学院生 30 名）が現在、本学で学んでいる

⑸海外研修活動

国際的センスを磨くため、平成 9(1997)年度から始まった、夏休みを利用した海外ボランティア活動は、平成 12(2000)年度から、総合教育科目「海外保健福祉事情」として単位を認定することとなった。現在は毎年中国、ベトナム、オーストラリア、アメリカの 4 カ国での活動に学生が参加している。約 3 か月の国内事前研修の後、夏季休暇、あるいは冬季休暇中、必修科目、あるいは選択科目として、約 2 週間、海外の提携医療機関を中心に患者のケアの補助や医療スタッフのサポートなど、海外各国における医療福祉の現場に直接触れ、貴重な体験を積める「海外保健福祉事情」を実施している。2017 年度までの累計で 3,367 名、2017 年度は 827 名の学生がこの海外研修に参加しており、国際的視野の涵養を図っている。

＜沿革＞

平成 7(1995)年 4 月 国際医療福祉大学開学保健学部開設
（看護学科、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚障害学科、放射線・情報科学科）

平成 9(1997)年 2 月 国際医療福祉大学クリニック開設
（健康管理センター、言語聴覚センター）

平成 9(1997)年 4 月 医療福祉学部開設（医療経営管理学科、医療福祉学科）

平成 9(1997)年 8 月 学生による第 1 回国際ボランティア活動（ベトナムチョーライ病院）
（平成 20(2008)年 8 月現在 4 カ国にて実施）

平成 10(1998)年 3 月 ＪＩＣＡ／ケニア医療技術教育強化プロジェクト協力
（平成 16(2004)年 3 月本プロジェクト終了）

平成 10(1998)年 4 月 「通信・放送機構(ＴＡＯ)那須遠隔リハビリリサーチセンター」開設
（平成 13(2001)年 3 月本プロジェクト終了）

平成 11(1999)年 4 月 大学院医療福祉学研究科保健医療学専攻（修士課程）開設

平成 12(2000)年　4 月　社会福祉法人邦友会国際医療福祉リハビリテーションセンター開設
（重症心身障害児施設なす療育園、身体障害者療護施設那須療護園、身体障害者デイサービスセンター那須デイセンター）
平成 13(2001)年　2 月　JICA カンボジア医療技術者育成プロジェクト協力
平成 13(2001)年　4 月　大学院医療福祉学研究科に保健医療学専攻（博士課程)、医療福祉経営専攻（修士課程）開設
平成 13(2001)年　4 月　大学院サテライトキャンパス開設（東京・福岡・柳川）
平成 13(2001)年　4 月　ＩＵＨＷアジア学生奨学金制度による留学生受入れ開始
平成 13(2001)年　4 月　衛星放送授業番組の放送開始（医療福祉チャンネル７７４）
平成 13(2001)年 11 月　ＪＩＣＡ/中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト協力
（教育課程支援）
平成 14(2002)年　4 月　保健学部に視機能療法学科、医療福祉学部医療福祉学科に介護福祉士コース開設
平成 14(2002)年　7 月　国際医療福祉大学附属熱海病院開設
平成 15(2003)年　4 月　言語聴覚障害学科を言語聴覚学科に改称
平成 15(2003)年　4 月　社会福祉法人邦友会おおたわら総合在宅ケアセンター開設
（通所リハビリテーションおおたわらマロニエデイケアサービス、通所介護おおたわらマロニエデイサービス、グループホームおおたわらマロニエホーム）
平成 15(2003)年　5 月　栃木県立大田原女子高校との高大連携事業開始
平成 16(2004)年　4 月　国際医療福祉大学大学院乃木坂スクール（公開講座）開講
平成 17(2005)年　3 月　国際医療福祉大学附属三田病院開設
平成 17(2005)年　4 月　大田原キャンパスに薬学部を開設（薬学科）、福岡県大川市にリハビリテーション学部を開設（理学療法学科、作業療法学科)
平成 17(2005)年　4 月　国際医療福祉大学 Video on Demand（ＶＯＤ）サービス開始
（衛星放送授業科目の常時視聴サービス）
平成 17(2005)年 10 月　ＩＵＨＷボランティアセンター開設
平成 18(2006)年　4 月　神奈川県小田原市に小田原保健医療学部を開設（看護学科、理学療法学科、作業療法学科）
平成 18(2006)年　4 月　国際協力機構（ＪＩＣＡ）草の根技術協力プロジェクト受託（ベトナムにおける地域リハビリテーション及び障害当事者エンパワメントを通した身体障害者支援事業）
平成 18(2006)年 10 月　台湾元培科技大学との協定締結
平成 19(2007)年　2 月　国際医療福祉病院の経営を学校法人にて承継し、国際医療福祉大学病院と改称、併せて介護老人保健施設マロニエ苑・にしなすの総合在宅ケアセンターを承継
国際医療福祉大学附属熱海病院を国際医療福祉大学熱海病院に改称
国際医療福祉大学附属三田病院を国際医療福祉大学三田病院に改称
特別養護老人ホームおおたわら風花苑開設（大田原キャンパス敷地内）
平成 19(2007)年　4 月　保健学部を保健医療学部に改称
リハビリテーション学部を福岡リハビリテーション学部に改称
福岡リハビリテーション学部に言語聴覚学科開設
福岡リハビリテーション学部理学療法学科 40 名から 80 名へ定員増

大学院医療福祉学研究科に臨床心理学専攻開設
平成 19(2007)年　7 月　本学大学院とタイ国マヒドン大学公衆衛生学部とで学部間協定締結
平成 19(2007)年　8 月　文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」に自治医科大学と連携して取り組む「全人的がん医療の実践者養成」が選定
平成 20(2008)年　4 月　国際協力機構（ＪＩＣＡ）中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト協力
平成 20(2008)年　7 月　元培科技大学（台湾）研修生受入れ
マヒドン大学（タイ）研修生受入れ
平成 20(2008)年　9 月　北京パラリンピックに学生派遣
平成 20(2008)年 11 月　平成 20 年度設置計画履行状況調査「実地調査」（薬学部薬学科）
平成 21(2009)年　4 月　福岡看護学部看護学科開設
医療福祉学部の医療経営管理学科と医療福祉学科を統合し、医療福祉・マネジメント学科を開設
薬科学研究科医療・生命薬科学専攻（修士課程）開設
国際医療福祉大学塩谷病院開設
平成 22(2010)年　4 月　薬科学研究科医療・生命薬科学専攻（修士課程）の募集を停止し、生命薬科学専攻（修士課程）を開設
平成 24(2012)年　2 月　国際医療福祉大学放射線防災研究センター開設
4 月　大学院薬学研究科 医療・生命薬学専攻（博士課程）開設
8 月　湯布院セミナーハウス、アミティ湯布高原（大分県由布市）開設
平成 25(2013)年　4 月　福岡リハビリテーション学部を福岡保健医療学部に改称、
福岡保健医療学部に医学検査学科開設
4 月　福岡看護学部が福岡市早良区のシーサイドももち地区に移転（福岡キャンパス）
4 月　大学院 文部科学省の「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に基づく「がん先端医療に対する多職種連携重点コース（看護師、診療放射線技師、薬剤師）」開設
平成 27(2015)年　6 月　大田原キャンパスに留学生別科開設
平成 28(2016)年　3 月　小田原キャンパス 城内校舎が完成
4 月　成田看護学部・成田保健医療学部（成田キャンパス）開設
平成 29(2017)年　4 月　医学部医学科（成田キャンパス）開設

２．現況

国際医療福祉大学は、栃木県北部に位置する大田原市に平成 7 年 4 月に 1 学部 5 学科で開学し、 2015（平成 27）年には開学 20 周年を迎えた。

2017 年 4 月、成田キャンパスに医学部を開設いたし、現在では、9 学部 22 学科及び大学院 3 研究科 5 専攻を設置し、大学院を含めると約 7,800 人の学生が学ぶ大学となりました。

また、大田原キャンパスを始め、神奈川県小田原市、福岡県大川市そして千葉県成田市に 4 キャンパスを有しているが、どのキャンパスに在籍していても、公平な教育が受けられるようなカリキュラムを組んでいる。2018 年には東京都港区に赤坂キャンパスを新設し、

大学院の青山キャンパスを移転させるとともに、赤坂心理・医療福祉マネジメント学部を開設する予定である。

大学院は大田原キャンパスの他、東京都港区、神奈川県小田原市、静岡県熱海市、福岡県福岡市・大川市そして千葉県成田市にもキャンパスを開設しており、これらの地域のどこに在籍していても同時双方向遠隔授業システムを利用して受講できるようになっている。多くの授業を平日の夕方以降と土曜日の昼間に行い、e ラーニングシステムを使ったＶＯＤ（ビデオ・オン・デマンド）授業を開講して自宅での聴講を可能にするなど、社会人に学びやすい環境を整備している。

本学は、クリニック及び 5 つの附属病院のほか、「臨床医学研究センター」という位置づけの関連医療福祉施設を多数保有しており、学生の臨床実習の場としても非常に恵まれた環境が整備されている。

・学部及び大学院の構成

学部	保健医療学部		看護学科　理学療法学科　作業療法学科　言語聴覚学科 視機能療法学科　放射線・情報科学科
	医療福祉学部		医療福祉・マネジメント学科
	薬学部		薬学科
	小田原保健医療学部		看護学科　理学療法学科　作業療法学科
	福岡看護学部		看護学科
	福岡保健医療学部		理学療法学科　作業療法学科　言語聴覚学科　医学検査学科
	医学部		医学科
	成田看護学部		看護学科
	成田保健医療学部		理学療法学科　作業療法学科　言語聴覚学科　医学検査学科
大学院	医療福祉学研究科 ［修士課程］	保健医療学専攻	看護学分野　特定行為看護師養成分野　助産学分野　理学療法学分野　作業療法学分野　言語聴覚分野　視機能療法学分野　福祉援助工学分野　リハビリテーション学分野　放射線・情報科学分野　生殖補助医療胚培養分野　医療福祉教育・管理分野　臨床検査学分野　災害医療分野　遺伝ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ分野
		医療福祉経営専攻	医療経営管理分野　診療情報ｱﾅﾘｽﾄ養成分野　医療福祉国際協力学分野　先進的ケア・ネットワーク開発研究分野　医療福祉学分野　　医療福祉ｼﾞｬｰﾅﾘｽﾞﾑ分野　医療通訳・国際医療ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ分野
		臨床心理学専攻	臨床心理学分野
大学院	薬学研究科 ［修士課程］	医療・生命薬学専攻	
	薬科学研究科 ［修士課程］	生命薬科学専攻	医療薬学分野　生命薬学分野

	医療福祉学研究科 ［博士課程］	保健医療学専攻	看護学分野　助産学分野　理学療法学分野　作業療法学分野　言語聴覚分野　視機能療法学分野　放射線・情報科学分野　福祉援助工学分野　リハビリテーション学分野　医療福祉経営学分野　医療福祉国際協力学分野　医療福祉学分野　先進的ケア・ネットワーク開発研究分野　医療福祉ｼﾞｬｰﾅﾘｽﾞﾑ分野
		臨床心理学専攻	臨床心理学分野

・学部の学生数　（平成 29(2017)年 5 月 1 日現在）　　（　）内の数値は完成年次の収容定員

学部	学科	入学定員	収容定員	在籍学生数						
				1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合計
保健医療学部	看護学科	115	415	110	99	133	121			463
	理学療法学科	100	340	97	78	103	97			375
	作業療法学科	80	320	78	78	106	101			363
	言語聴覚学科	80	320	85	83	90	98			356
	視機能療法学科	50	170	45	41	45	48			179
	放射線・情報科学科	120	420	124	100	118	132			474
	医療福祉・マネジメント学科	160	650	138	163	158	170			629
薬学部	薬学科(6 年制)	180	1080	204	204	182	184	168	222	1164
小田原保健医療学部	看護学科	80	290	86	91	77	59			313
	理学療法学科	80	200	89	43	52	46			230
	作業療法学科	40	160	39	42	50	48			179
福岡看護学部	看護学科	100	360	106	105	98	99			408
福岡保健医療学部	理学療法学科	80	320	93	85	100	102			380
	作業療法学科	40	160	42	41	43	48			174
	言語聴覚学科	40	160	43	48	45	48			184
	医学検査学科	80	320	87	86	85	100			358
医学部	医学科	140	140	140						140
成田看護学部	看護学科	100	200	107	107					214
成田保健医療学部	理学療法学科	80	160	85	92					177
	作業療法学科	40	80	42	42					84
	言語聴覚学科	40	80	43	40					83
	医学検査学科	80	160	84	85					169
		1905	6, 505	1, 967	1753	1485	1501	168	222	7096

※注１　平成 15(2003)年 4 月 1 日　保健学部の言語聴覚障害学科を言語聴覚学科に改称
※注２　平成 19(2007)年 4 月 1 日　保健学部を保健医療学部に改称

※注３ 平成 19(2007)年４月１日 リハビリテーション学部を福岡リハビリテーション学部に改称
※注４ 平成 19(2007)年４月１日 福岡リハビリテーション学部に言語聴覚学科開設
※注５ 平成 19(2007)年４月１日 福岡リハビリテーション学部の理学療法学科 40 名から 80 名へ定員増
※注６ 薬学部薬学科は、平成 17(2005)年度のみ４年制・入学定員 150 名、平成 18(2006)年度から６年制・入学定員 180 名（４年制は平成 18(2006)年度以降学生の募集停止）
※注７平成 21(2009)年４月１日 福岡看護学部看護学科開設
医療福祉学部の医療経営管理学科と医療福祉学科を統合し、医療福祉・マネジメント学科を開設
※注８ 平成 25(2013)年４月１日 福岡リハビリテーション学部を福岡保健医療学部に改称、福岡保健医療学部に医学検査学科開設
※注９ 平成 28(2016)年 4 月 1 日 成田看護学部・成田保健医療学部（成田キャンパス）開設
※注 10 平成 29(2017)年 4 月 医学部医学科（成田キャンパス）開設

・大学院の学生数 （平成 29(2017 年５月１日現在） ( )内の数値は完成年次の収容定員

研究科	専攻	入学定員	収容定員	在籍学生数				
				1 年	2 年	3 年	4 年	合計
医療福祉学研究科（修士課程）	保健医療学専攻	100	200	146	176			322
	医療福祉経営専攻	50	100	56	50			106
	臨床心理学専攻	25	50	25	26			51
薬科学研究科（修士課程）	生命薬科学専攻	5	10	1	1			2
医療福祉学研究科（博士課程）	保健医療学専攻	50	150	68	64	73		205
薬科学研究科（博士課程）	医療・生命薬科学専攻	5	20	4	1	2	4	11
合 計		235	530	300	318	75	4	697

※注１ 平成 19(2007)年４月１日 医療福祉学研究科臨床心理学専攻（修士課程）開設
※注２ 平成 21(2009)年４月１日 薬科学研究科医療・生命薬科学専攻（修士課程）開設
※注３ 平成 22(2010)年４月１日 薬科学研究科医療・生命薬科学専攻（修士課程）の募集を停止し、生命薬科学専攻（修士課程）を開設
※注４ 平成 24(2012)年４月１日 大学院薬学研究科 医療・生命薬学専攻（博士課程）開設

・教員数 （平成 29(2017)年５月１日現在）

学部・大学院・その他	教授	准教授	講師	助教	助手	合計
保健医療学部	31	20	30	22	10	113
医療福祉学部	9	6	7	8	0	30
薬学部	18	5	8	6	2	39
小田原保健医療学部	15	14	18	19	2	68
成田看護学部	10	7	7	6	0	30
成田保健医療学部	12	10	15	15	0	52
福岡看護学部	11	12	9	9	1	42
福岡保健医療学部	25	11	10	12	3	61
医学部	129	26	18	18	0	191
大学院	33	15	3	4	0	55
その他	75	27	41	4	2	149
合 計	368	153	166	123	20	836

・職員数　（平成 29(2017)年 5 月 1 日現在）

事務系	技術技能系	医療系	教務系	その他	合　計
662	25	2,225	4	15	2,931

・所在地

大田原キャンパス（保健医療学部・医療福祉学部・薬学部・大学院）
〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1

東京青山キャンパス（大学院）
〒107-0062 東京都港区南青山 1-3

小田原キャンパス（小田原保健医療学部・大学院）
〒250-8588 神奈川県小田原市城山 1-2-25

熱海キャンパス　（大学院）
〒413-0012 静岡県熱海市東海岸町 13-1　国際医療福祉大学熱海病院内

大川キャンパス（福岡保健医療学部）
〒831-8501 福岡県大川市榎津 137-1

福岡キャンパス（福岡看護学部・大学院）
〒810-0072 福岡県福岡市早良区百道浜 1-7-4

成田キャンパス（医学部・成田看護学部・成田保健医療学部）
〒286-8686 千葉県成田市公津の杜 4-3

・附属施設

国際医療福祉大学クリニック	〒324-8501	栃木県大田原市北金丸 2600-6
国際医療福祉大学病院	〒329-2763	栃木県那須塩原市井口 537-3
国際医療福祉大学三田病院	〒108-8329	東京都港区三田 1-4-3
国際医療福祉大学熱海病院	〒413-0012	静岡県熱海市東海岸町 13-1
国際医療福祉大学塩谷病院	〒329-2145	栃木県矢板市富田 77
国際医療福祉大学市川病院	〒272-0827	千葉県市川市国府台 6-1-14
介護老人保健施設マロニエ苑	〒329-2763	栃木県那須塩原市井口 533-4
にしなすの総合在宅ケアセンター	〒329-2763	栃木県那須塩原市井口 537-3
しおや総合在宅ケアセンター	〒329-2145	栃木県矢板市富田 77

Ⅳ. 新たな課題：国際交流の更なる進展

1. 留学生及び研修生の受入れ
2. 国際協力協定締結
3. 海外研修
4. 教員による海外活動

Ⅳ.新たな課題：国際交流の更なる進展

1．留学生及び研修生の受入れ

前回の報告書では本学の開学以降、2010年度までにおける留学・研修生の受け入れ状況について述べたので、ここでは2011年度より17年度までについて取り上げたい。

まず学部留学生の趨勢について見ると17年度末現在、同年4月に新設された医学部を含め、全キャンパスの学部課程に在籍する留学生は68名である。11年度の学部在籍者数はわずかに15名だったものが、翌12年度には19名、13年度31名、14年度35名、15年度42名、16年度44名と、年毎に順次増加してきたことが読み取れる。彼らの出身国は、11年度では中国、韓国、タイ、モンゴル、ネパール、インドネシア、ラオス、ベトナム、カンボジアの9ヵ国であったものが、2017年度においては卒業によりネパールおよびラオス出身者が皆無となった反面、13年度より台湾、そして17年度からは新たにミャンマーからの留学生が加わることとなった。いずれの年も中国出身者が多数を占めていることに変わりはないものの、11年度に48.5%だったものが17年度では44%と若干の低下を示しているのは、本学の留学生が東アジア・東南アジアを中心としつつも、その出身地域において次第に多様化とともに均等化の様相へと転じつつあることが関わっていると思われる。

これに対して大学院は、11年度の23名に始まり12年度28名、13年度32名、14年度29名と続き、15年度には36名まで至ることとなった。しかし翌16年度には34名へと微弱へ転じたのち、17年度にはさらに多少の減少を迎え30名となっている。出身国も学部留学生に準じて中国、韓国、タイ、モンゴル、ネパール、ベトナム、カンボジアの6ヵ国（11年度）から中国、韓国、台湾、モンゴル、ベトナム、ネパール、ミャンマーの7ヵ国（17年度）へと一部変動は見られつつも、ほぼ同様の推移を示している。この経緯、すなわち学部留学生に対して大学院が7ヵ国30名前後の規模にあるのは、本学独自の奨学金制度によって招聘する「IUHW 奨学生」が、それまでの大学院から学部での受け入れに転換し、それによって学部留学生の増加へと転じたことと関わっていることに留意せねばなるまい。

なお当該期の留学生および研修生受け入れに関して、まず大田原キャンパスにおける海外協定校からの派遣留学生受け入れが挙げられる。2012年度より、台湾所在の元培医事科技大学より視機能療法学科へ毎回、1名から3名の留学生を受け入れることとなった（初年のみ医療福祉マネジメント学科での受け入れ）。本学での在籍期間はその年ごとによって異なり、派遣元の希望等によって後期のみの半年、もしくは前後期の一年間のいずれかの期間、同学科に所属しながら日本語や専門科目、関連する実習等を受講するというプログラムである。

今一つ特筆すべき点は、留学生別科の新設である。2015年度より大田原キャンパスで、翌2016年度より成田キャンパスにおいて、それぞれ学部課程への進学を目的とする教育課程として留学生別科が設置された。本学医学部への進学者を対象とする後者に対し、前者は本学以外への進学希望者も在籍可能であるため、両者では就学条件等で相違は存在するものの前者では2～5名、後者では14～19名の留学生が毎学期学んでいる。

上記の教育課程における留学生教育のほか、本学では海外より広く研修や視察団の受け入れも実施している。海外協定校・協定機関からの研修は毎年数回から十数回の頻度で受

(1) 留学生の状況

2011年度

1) 学年別

学年 / 出身地	1年	2年	3年	4年	5年	6年	大学院	研究生	合計
中国	1	1	1	2	0	0	11	0	16
韓国	2	0	1	2	0	0	4	1	10
タイ	0	0	0	0	0	1	0	0	1
モンゴル	0	0	1	0	0	0	1	0	2
カンボジア	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ネパール	0	0	0	1	0	0	1	0	2
インドネシア	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ベトナム	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ラオス	0	1	0	0	0	0	0	0	1
合計	3	2	3	6	0	1	19	1	35

2) 学科別

学部学科 / 出身地	保健医療学部						医療福祉学部			薬学部	小田原保健医療学部			福岡看護学部	福岡リハビリテーション学部			合計
	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	HM	HS	SHM	PS	NS	PT	OT	NS	PT	OT	ST	
中国	1	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
韓国	1	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
タイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
モンゴル	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
カンボジア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ネパール	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
インドネシア	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ラオス	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	3	5	1	0	0	1	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	15

3) 課程別(大学院)

課程 / 出身地	博士課程	修士課程	研究生	合計
中国	5	6	0	11
韓国	4	0	1	5
ネパール	1	0	0	1
モンゴル	1	0	0	1
ベトナム	0	1	0	1
カンボジア	0	1	0	1
合計	11	8	1	20

4) 男女別(大学院を含む)

性別 / 出身地	男子学生	女子学生	合計
中国	10	6	16
韓国	5	5	10
タイ	0	1	1
モンゴル	0	2	2
カンボジア	0	1	1
ネパール	1	1	2
インドネシア	0	1	1
ベトナム	0	1	1
ラオス	0	1	1
合計	16	19	35

2012年度

1) 学年別

学年 / 出身地	1年	2年	3年	4年	5年	科目等履修生(学部)	研究生(学部)	大学院	研究生	合計
中国	7	1	1	1				17	1	28
韓国	2	2		1				5		10
モンゴル	2			1				1		4
台湾						2	1			3
ネパール								1		1
インドネシア								1		1
ベトナム								1		1
ラオス			1							1
ブラジル									1	1
合計	11	3	2	3	0	2	1	26	2	50

2) 学科別

学部 / 学科 / 出身地	保健医療学部						医療福祉学部			薬学部	小田原保健医療学部			福岡看護学部	福岡リハビリテーション学部			合計
	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	HM	HS	SHM	PS	NS	PT	OT	NS	PT	OT	ST	
中国	3	3								1				1	2			10
韓国		2					1			1	1							5
モンゴル	2						1											3
台湾					2		1											3
ラオス									1									1
合計	5	5	0	0	2	0	3	0	1	2	1	0	0	1	2	0	0	22

3) 課程別(大学院)

課程 / 出身地	博士課程	修士課程	研究生	合計
中国	4	13	1	18
韓国	3	2		5
ネパール	1			1
インドネシア		1		1
モンゴル	1			1
ブラジル			1	1
ベトナム	1			1
合計	10	16	2	28

4) 男女別(大学院を含む)

性別 / 出身地	男子学生	女子学生	合計
中国	15	13	28
韓国	5	5	10
タイ			
モンゴル		4	4
台湾	3		3
ネパール	1		1
インドネシア		1	1
ブラジル		1	1
ベトナム		1	1
ラオス		1	1
合計	24	26	50

2013年度

1) 学年別

学年 / 出身地	1年	2年	3年	4年	5年	科目等履修生（学部）	大学院	科目等履修生	合計
中国	10	7	1	1			20		39
韓国	2	2	2	1			3		10
タイ								1	1
モンゴル	1	2					1		4
台湾	1					3			4
ネパール									1
ミャンマー									3
カンボジア									1
ベトナム									1
キルギス									1
アメリカ									1
ラオス				1					1
合計	14	11	3	3	0	3	24	1	67

2) 学科別

学部 / 学科 / 出身地	保健医療学部						医療福祉学部			薬学部	小田原保健医療学部			福岡看護学部	福岡リハビリテーション学部			合計
	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	HM	HS	SHM	PS	NS	PT	OT	NS	PT	OT	ST	
中国	4	4				2			2	1	2			2	2			19
韓国		2				1			1	2	1							7
モンゴル	2								1									3
台湾	1				3													4
ラオス									1									1
合計	7	6	0	0	3	3	0	0	5	3	3	0	0	2	2	0	0	34

3) 課程別（大学院）

課程 / 出身地	博士課程	修士課程	科目等履修生	合計
中国	4	16		20
韓国	1	2		3
ネパール	1			1
ミャンマー	2	1		3
ベトナム	1			1
カンボジア		1		1
キルギス	1			1
アメリカ	1			1
モンゴル	1			1
タイ			1	1
合計	12	20	1	33

4) 男女別（大学院を含む）

性別 / 出身地	男子学生	女子学生	合計
中国	19	20	39
韓国	5	5	10
タイ		1	1
モンゴル		4	4
台湾	2	2	4
ネパール	1		1
ミャンマー	1	2	3
カンボジア		1	1
ベトナム		1	1
キルギス		1	1
アメリカ		1	1
ラオス		1	1
合計	28	39	67

2014年度

1) 学年別

学年 / 出身地	1年	2年	3年	4年	5年	科目等履修生	大学院	科目等履修生	合計
中国	7	10	7	1	0	1	13	2	41
韓国	2	0	2	2	0	1	2	1	10
タイ	0	0	0	0	0	0	2	0	2
モンゴル	0	1	2	0	0	0	0	0	3
台湾	0	1	0	0	0	3	0	0	4
ネパール	0	0	0	0	0	0	0	3	3
ミャンマー	0	0	0	0	0	0	7	0	7
カンボジア	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ベトナム	0	0	0	0	0	0	1	0	1
キルギス	0	0	0	0	0	0	1	0	1
アメリカ	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ラオス	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計	9	12	11	3	0	5	29	6	75

2) 学科別

学部学科 / 出身地	保健医療学部						医療福祉学部			薬学部	小田原保健医療学部			福岡看護学部	福岡保健医療学部			合計
	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	HM	HS	SHM	PS	NS	PT	OT	NS	PT	OT	ST	
中国	5	5	1	0	0	2	0	0	2	2	3	1	0	3	2	0	0	26
韓国	0	2	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	7
モンゴル	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
台湾	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
ラオス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	8	7	1	0	3	3	0	0	4	3	4	2	0	3	2	0	0	40

3) 課程別(大学院)

課程 / 出身地	博士課程	修士課程	科目等履修生	合計
中国	5	8	2	15
韓国	0	2	1	3
ネパール	0	0	3	3
ミャンマー	3	4	0	7
ベトナム	1	0	0	1
カンボジア	0	1	0	1
キルギス	1	0	0	1
アメリカ	1	0	0	1
ラオス	0	1	0	1
タイ	1	1	0	2
合計	12	17	6	35

4) 男女別(大学院を含む)

性別 / 出身地	男子学生	女子学生	合計
中国	20	21	41
韓国	4	6	10
タイ	1	1	2
モンゴル	0	3	3
台湾	2	2	4
ネパール	2	1	3
ミャンマー	1	6	7
カンボジア	0	1	1
ベトナム	0	1	1
キルギス	0	1	1
アメリカ	0	1	1
ラオス	0	1	1
合計	30	45	75

2015年度

1) 学年別

学年 / 出身地	1年	2年	3年	4年	科目等履修生	大学院	別科	合計
中国	9	7	10	4	0	13	0	43
韓国	2	2	0	3	0	4	0	11
タイ	0	0	0	0	0	2	1	3
モンゴル	0	0	1	2	0	0	0	3
台湾	0	0	1	0	3	0	0	4
ネパール	0	0	0	0	0	2	0	2
ミャンマー	0	0	0	0	0	10	0	10
ベトナム	0	0	0	0	0	1	0	1
キルギス	0	0	0	0	0	1	0	1
アメリカ	0	0	0	0	0	1	0	1
ラオス	0	0	0	0	0	1	0	1
ブラジル	0	0	0	0	0	1	0	1
パラグアイ	0	0	0	0	0	1	0	1
インドネシア	0	0	0	0	0	1	0	1
フィリピン	0	0	0	0	0	0	13	13
合計	11	9	12	9	3	38	14	96

2) 学科別

学部学科 / 出身地	保健医療学部						医療福祉マネジメント学部	薬学部	別科	小田原保健医療学部			福岡看護学部	福岡保健医療学部			合計
	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	SHM	PS		NS	PT	OT	NS	PT	OT	ST	
中国	9	3	1	0	0	3	2	1	0	3	1	0	5	2	0	0	30
韓国	0	1	0	0	0	1	0	3	0	1	1	0	0	0	0	0	7
モンゴル	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
台湾	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
フィリピン	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	13
タイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	12	4	1	0	3	4	3	4	14	4	2	0	5	2	0	0	58

3) 課程別(大学院)

課程 / 出身地	博士課程	修士課程	研究生	合計
中国	6	6	0	12
韓国	2	2	0	4
タイ	1	1	0	2
ネパール	1	1	0	2
ミャンマー	6	5	0	11
ベトナム	0	1	0	1
キルギス	1	0	0	1
アメリカ	1	0	0	1
ラオス	0	1	0	1
ブラジル	0	0	0	0
パラグアイ	0	0	1	1
インドネシア	0	1	1	2
合計	18	18	2	38

4) 男女別(大学院を含む)

性別 / 出身地	男子学生	女子学生	合計
中国	17	25	42
韓国	6	5	11
タイ	1	2	3
モンゴル	0	3	3
台湾	3	1	4
ネパール	1	1	2
ミャンマー	1	10	11
ベトナム	1	0	1
キルギス	0	1	1
アメリカ	0	1	1
ラオス	0	1	1
ブラジル	1	0	1
パラグアイ	0	1	1
インドネシア	0	1	1
フィリピン	4	9	13
合計	35	61	96

2016年度

1）学年別

学年 / 出身地	1年	2年	3年	4年	5年	科目等履修生	研究生	別科	大学院	合計
中国	8	8	7	9	0	0	3	2	15	52
韓国	2	3	1	0	1	0	2	0	4	13
台湾	1	0	0	1	0	2	0	2	0	6
モンゴル	0	0	0	1	0	0	0	2	1	4
ベトナム	2	0	0	0	0	0	0	7	2	11
ミャンマー	0	0	0	0	0	0	0	3	9	12
インドネシア	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
タイ	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
ネパール	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
カンボジア	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
マレーシア	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計	13	11	8	11	1	3	5	20	34	106

2）学科別

学部学科 / 出身地	保健医療学部						医療福祉マネジメント学部	薬学部	別科	小田原保健医療学部			福岡看護学部	福岡保健医療学部				成田看護学部	成田保健医療学部				合計
	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	SHM	PS	JP	NS	PT	OT	NS	PT	OT	ST	MT	NS	PT	OT	ST	MT	
中国	7	4	1	0	0	4	4	1	2	3	1	0	4	0	0	0	1	2	0	0	0	0	34
韓国	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7
台湾	1	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6
モンゴル	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ベトナム	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	9
ミャンマー	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
インドネシア	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
タイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
カンボジア	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
マレーシア	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	9	4	1	0	3	5	4	4	20	3	2	0	6	0	0	0	1	4	0	0	1	0	67

3）課程別（大学院）

課程 / 出身地	博士課程	修士課程	研究生	合計
中国	6	9	3	18
韓国	3	1	2	6
モンゴル	1	0	0	1
ベトナム	0	2	0	2
ミャンマー	6	3	0	9
タイ	1	0	0	1
ネパール	1	1	0	2
合計	18	16	5	39

4）男女別（大学院・別科・非正規生を含む）

性別 / 出身地	男子学生	女子学生	合計
中国	18	34	52
韓国	6	7	13
台湾	2	4	6
モンゴル	2	2	4
ベトナム	9	2	11
ミャンマー	1	11	12
インドネシア	0	2	2
タイ	1	1	2
ネパール	1	1	2
カンボジア	1	0	1
マレーシア	0	1	1
合計	41	65	106

2017年度

1) 学年別

学年 / 出身地	1年	2年	3年	4年	5年	6年	科目等履修生	研究生	別科	大学院	合計
中国	12	7	11	4	1	0	0	3	4	15	57
韓国	3	3	2	1	0	1	1	0	0	4	15
台湾	2	1	0	0	0	0	0	0	1	2	6
モンゴル	3	0	0	0	0	0	0	1	2	1	7
ベトナム	7	2	0	0	0	0	0	0	9	1	19
ネパール	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	4
ミャンマー	5	0	0	0	0	0	0	0	3	5	13
ウガンダ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ラオス	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
インドネシア	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3
カンボジア	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3
合計	35	13	13	5	1	1	1	5	25	30	129

2) 学科別

学部学科 / 出身地	保健医療学部						医療福祉マネジメント学部	薬学部	別科	小田原保健医療学部			福岡看護学部	福岡保健医療学部				成田看護学部	成田保健医療学部				医学部	合計
	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	SHM	PS	JP	NS	PT	OT	NS	PT	OT	ST	MT	NS	PT	OT	ST	MT	MD	
中国	6	6	1	0	1	1	3	1	4	2	1	0	5	0	0	0	1	5	1	0	0	0	1	39
韓国						1		4			1		1					1					2	10
台湾				1					1									1					1	4
モンゴル									2											1			2	5
ベトナム									9				1					1			1		6	18
ネパール									1															1
ミャンマー			1	1					3														3	8
ウガンダ									1															1
ラオス									1															1
インドネシア									1														2	3
カンボジア									2														1	3
合計	6	6	2	2	1	2	3	5	25	2	2	0	7	0	0	0	1	8	1	1	1	0	18	93

3) 課程別(大学院)

課程 / 出身地	博士課程	修士課程	研究生	科目等履修生	合計
中国	3	12	3		18
韓国	4			1	5
台湾	1	1			2
モンゴル	1		1		2
ベトナム		1			1
ネパール	1	1	1		3
ミャンマー	4	1			5
合計	14	16	5	1	36

4) 男女別(大学院・別科・非正規生を含む)

性別 / 出身地	男子学生	女子学生	合計
中国	22	35	57
韓国	8	7	15
台湾	1	5	6
モンゴル	2	5	7
ベトナム	15	4	19
ネパール	2	2	4
ミャンマー		13	13
ウガンダ		1	1
ラオス	1		1
インドネシア		3	3
カンボジア	3		3
合計	54	75	129

(2)国別　受入れ留学生数一覧（開学～現在）

入学年度	学部大学院	中国		台湾		韓国		ﾍﾞﾄﾅﾑ		ﾈﾊﾟｰﾙ		ﾓﾝｺﾞﾙ		ﾐｬﾝﾏｰ		ﾌｨﾘﾋﾟﾝ		ﾊﾞﾗｸﾞｱｲ		ｹﾆｱ		ﾀｲ		ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ		ﾗｵｽ		ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ		ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ		ｷﾙｷﾞｽ		ﾏﾚｰｼｱ		計		総計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
1995	学部		3	1		1																														2	3		5
1996	学部				1																															0	1		1
1997	学部	1		1		1																														3	0		3
1998	学部	2				1																														3	0		3
1999	学部		1			2																														2	1	3	5
	大学院		1	1																																1	1	2	
2000	学部	2																																		2	0	2	3
	大学院		1																																	0	1	1	
2001	学部	1		1	1	1			1		1																									3	3	6	10
	大学院	2				1	1																													3	1	4	
2002	学部	3	3		1		1																													3	5	8	18
	大学院	3	5														1			1																4	6	10	
2003	学部		1				3						1																							0	5	5	14
	大学院	3	3			1	1													1																5	4	9	
2004	学部	3	6												1																					3	7	10	21
	大学院	5	1		2	1											1		1																	6	5	11	
2005	学部	5	1			1	1																													6	2	8	19
	大学院	5	3			2														1																8	3	11	
2006	学部	3	2				2															1	1		1											4	6	10	18
	大学院	3	3								1		1																							3	5	8	
2007	学部					2																														2	0	2	12
	大学院	3	3		1				1				2																							3	7	10	
2008	学部	1	1			2	1				1																				1					3	4	7	20
	大学院	5	7				1																													5	8	13	
2009	学部	1	1										1																							1	2	3	13
	大学院	5	1			2				1																							1			8	2	10	
2010	学部		1																								1									0	2	2	14
	大学院	7	1			1	1		1																1											8	4	12	
2011	学部		1				2																													0	3	3	16
	大学院	6	1			2				3			1																							11	2	13	
2012	学部	3	4	1		1	1							2																						7	5	12	28
	大学院	8	4			1	1		1																						1					9	7	16	
2013	学部	3	7		1	2	1						1																							5	10	15	29
	大学院	5	4											1	2								1		1								1			6	8	14	
2014	学部	3	5	2	1	1																														6	6	12	30
	大学院	5	1			1	1			2	1				4							1	1				1									9	9	18	
2015	学部	1	6			2																														3	6	9	25
	大学院	3	3			2	1			1	1				5																					6	10	16	
2016	学部	4	4	1	2		2	1	1																										1	6	9	15	32
	大学院	2	8				3	1					1		2																					3	14	17	
2017	学部	6	6		2	2	1	5	2			2	1		5									1					2							16	19	35	45
	大学院	3	4	1	1		1																													4	6	10	
合計	学部	42	53	7	9	19	15	6	4	0	2	2	4	2	6	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	3	0	0	0	0	0	1	44	49	**93**	**223**
	大学院	73	54	2	4	14	11	1	3	7	3	0	5	1	13	0	2	0	1	3	0	1	2	0	2	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	74	56	**130**	

(3) 研修生の受入

2011年度

○短期研修生の受入

コース名	受入人数	期間
平成23年度国別研修「地方人材に対する本邦研修」(応用研修)	8名	H23年10月17日-H23年12月17日
平成23年度「地方人材に対する本邦研修」(幹部)	8名	H24年2月16日-H24年2月20日

4) 協定校からの研修の受入れ

【台湾】

①元培科技大学より研修生13名(引率教員7名)を受入れ(大田原キャンパス)
(H24年1月9日～H24年1月13日)

【韓国】

①建陽大学校から研修生32名(引率教員4名)を受け入れ (九州地区)
(H23年12月19日～H23年12月28日)

②建陽大学校から研修生11名(引率教員1名)を受け入れ (九州地区)
(H24年1月16日～H24年2月10日)

③仁済大学校から研修生10名(引率教員2名)を受け入れ (大川キャンパス)
(H24年1月16日～H24年2月10日)

2012年度

○短期研修生の受入

コース名	受入人数	期間
平成24年度国別研修「中核人材(応用)本邦研修」コース	9名	H24年10月18日～H24年11月22日

4) 協定校からの研修の受入れ

【タイ】

①マヒドン大学より研修生8名(引率2名)を受入れ

本学大学院助産学分野での研修の後、東京、神奈川、栃木県内の関連施設にて研修を実施
(H24年5月25日～6月3日 10日間)

【韓国】

韓国建陽大学校①平成25年1月7日～1月18日(教員1名、学生19名、計20名)

韓国建陽大学校②平成25年1月21日～2月15日(教員2名、学生11名、計13名)

韓国建陽大学校③平成25年2月4日～2月15日(教員2名、学生23名、計25名)

韓国仁済大学校①平成25年1月9日～1月9日(教員2名、学生3名、計5名)

韓国仁済大学校②平成25年1月21日～2月15日(教員2名、学生10名、計12名)

莉花女子大学 平成25年1月7日～1月9日(教員1名、学生10名、計11名)

2013年度

1) 短期研修生の受入

JICAを通じ、海外日経人協会からの要請により、日本における高齢者対策と作業療法を学ぶアルゼンチンからの研修生を大田原キャンパスで受け入れた。

コース名	受入人数	期間
平成25年度日系研修	1名	H25年6月6日～H26年3月4日

2) 協定校からの研修の受入れ

【ヤンゴン看護大学】

ミャンマー国立ヤンゴン看護大学より教員2名来校。大田原、小田原、東京にて研修及び視察を実施
（H25年4月13日～27日　14日間）

【韓国】
韓国建陽大学校　4回（延教員6人、学生57人）
韓国仁済大学校　1回（延教員2人、学生9人）
乙支大学校　1回（教員2人、学生8人）
【台湾】
元培科技大学より教員10名、学生9名の研修を福岡・大川キャンパスにて受け入れた

2014年度

1）短期研修生の受入
経済産業省、厚生労働省プロジェクトの一環としてミャンマーヤンゴン総合病院、ヤンゴン第一医科大学等の研修生を大田原、東京で受け入れた。

大学名	受入人数	期間
ヤンゴン総合病院、国立リハビリテーション病院、ヤンゴン第一医科大学、ヤンゴン医療技術大学、ヤンゴン看護大学	10名	H27年1月28日～H27年2月24日

2）協定校からの研修の受入れ
【ミャンマー ヤンゴン第一医科大学、ヤンゴン医療技術大学、ヤンゴン看護大学】
ミャンマー3大学より教員14名来校。大田原、小田原、東京にて研修及び視察を実施
（H26年6月28日～　7月13日　16日間）
【タイ クリスチャン大学】
学長、副学長、国際部長及び院生39名来校。大田原、東京にて研修及び視察を実施
（H26年11月16日～22日　7日間）
【台湾 元培医事科技大学】
放射線科学生4名来校。大田原、九州、東京にて研修及び視察を実施
（H27年1月18日～2月13日　27日間）

【韓国】
韓国建陽大学校　2回（37名）
韓国仁済大学校　1回（10名）

2015年度

1）協定校からの研修の受入れ
【タイ クリスチャン大学】
看護学部5名+引率教員1名来校。大田原、東京にて研修及び視察を実施
（H27年5月7日～16日　10日間）
【台湾 元培医事科技大学】
医療マネジメント学科学生2名来校。大田原、東京にて研修及び視察を実施
（H27年6月29日～8月2日　5週間）
医療マネジメント学科学生4名来校。福岡、大田原、東京にて研修及び視察を実施
（H28年1月11日～2月14日　5週間）
大学院生29名、教員4名来校。福岡、大川にて研修及び視察を実施。
（H28年1月11日～1月16日　6日間）
【ベトナム　ホーチミン医科薬科大学病院】
理学療法士3名来校。大田原、東京にて研修及び視察を実施
（H27年9月27日～10月17日　21日間）
【ベトナム　チョーライ病院】
人間ドック事業に関わる研修生4名来校。大田原、東京にて研修及び視察を実施。
（H27年12月16日～平成28年1月23日　30日間）
【韓国　コニャン大学校】
物理治療学科（理学療法学科）学生6名、引率教員1名来校。大田原にて研修及び視察を実施。
（H28年1月5日～15日　10日間）
看護学部学生16名、引率教員1名来校。福岡看護学部にて研修及び視察を実施。
（H28年1月26日～2月5日　11日間）
物理治療学科(理学療法学科)学生4名、作業治療学科(作業療法学科)学生6名、引率教員1名来校。
福岡保健医療学部にて研修及び実習を実施。
（H28年1月22日～2月17日　27日間）
【韓国　インジェ大学校】
作業治療学科学生10名、引率教員1名来校。福岡保健医療学部にて研修及び実習を実施。
（H28年1月22日～2月17日　27日間）

【韓国　テグハニ大学校】
臨床病理学科(医学検査学科)学生25名、引率教員2名来校。福岡保健医療学部にて研修及び視察を実施。
(H27年12月19日～12月26日　8日間)
2)協定校以外の研修・視察の受入れ
【英国スコットランド高校生】
大田原市の高校生交流事業の一環で来日した高校生4名来校。大田原にて視察を実施
(H27年8月7日)
【ミャンマー　保健省】
JICA青年研修事業「地域保健医療実施管理コース」の研修生15名が来校。大田原及び西那須野地区で視察を実施。
(H28年3月2日)
【さくらサイエンスプラン(日本・アジア青少年サイエンス交流事業)】
ベトナム　ハノイ医科大学、台湾元培医事科技大学、タイクリスチャン大学の3校より学生8名、教員3名を招聘。大田原及び東京で研修及び視察を実施。
(H28年3月4日～3月13日　10日間)

2016年度
1)協定校からの研修の受入れ
【台湾 元培医事科技大学】
医療マネジメント学科学生3名来校。大田原、東京にて研修及び視察を実施
(H28年6月27日～7月30日　5週間)
視光系学科より3名の短期留学生の受入を視機能療法学科で実施
(H28年9月～H29年2月　5ヵ月間)
【シンガポール　ナンヤンポリテクニック】
理学療法学科・作業療法学科・放射線科学生28名、教員2名来校。大田原にて研修を実施。
(H28年10月7日～8日　2日間)
看護学科教員1名来校。大田原にて研修を実施。
(H28年9月22日～10月1日　10日間)
【韓国　コニャン大学校】
物理治療学科(理学療法学科)学生30名、引率教員3名来校。大田原にて研修及び視察を実施。
(H28年12月15日～12月31日　14日間)
看護学部学生16名、引率教員1名来校。福岡看護学部にて研修及び視察を実施。
(H29年1月10日～20日　11日間)
作業治療学科(作業療法学科)学生14名、引率教員1名来校。福岡保健医療学部にて研修及び実習を実施。
(H28年12月17日～29日　13日間)
【韓国　インジェ大学校】
作業治療学科(作業療法学科)学生6名、引率教員1名来校。福岡保健医療学部にて研修及び実習を実施。
(H28年12月17日～29日　13日間)
【韓国　テグハニ大学校】
臨床病理学科(医学検査学科)学生22名、引率教員1名来校。福岡保健医療学部にて研修及び視察を実施。
(H29年1月13日～1月21日　9日間)

2)協定校以外の研修・視察の受入れ
【カンボジア　プティサストラ大学】
薬学科・検査学科の学生11名、引率教員2名来校。成田保健医療学部、大田原及び西那須野地区、東京にて研修を実施
(H28年9月22日～10月1日)
3)さくらサイエンスプラン(日本・アジア青少年サイエンス交流事業)研修受入
【第1回】
ベトナム　ホーチミン医科薬科大学、ハノイ医科大学医学部生　計10名、教員2名を招聘。
成田・大田原及び東京で研修及び視察を実施。
(H28年6月29日～7月8日　10日間)
【第2回】
モンゴル国立医科大学、インドネシアウダヤナ大学医学部生　計8名、教員2名を招聘。
成田・大田原及び東京で研修及び視察を実施。
【第3回】
カンボジア国立保健科学大学、ラオス国立健康科学大学医学部生　計8名、教員2名を招聘
成田・大田原及び東京で研修及び視察を実施。

2017年度
1.協定校からの研修の受入れ

【台湾 元培医事科技大学】
視光系学科より1名の短期留学生の受入を視機能療法学科で実施
（H29年4月～H30年1月　9か月）
視光系学科より1名の短期留学生の受入を視機能療法学科で実施
（H29年9月～H30年1月　4か月）
同校の教職員4名、大学院生7名、学部生9名来校。福岡看護学部にて研修及び視察を実施。
（H30年1月11日　1日間）
【韓国　コニャン大学校】
物理治療学科（理学療法学科）学生23名、引率教員2名来校。大田原にて研修及び視察を実施。
（H29年12月13日～12月26日　14日間）
物理治療学科（理学療法学科）学生1名、国際医療福祉大学病院にて実習を実施。
（H29年12月27日～H30年1月23日　4週間）
看護学部学生13名、引率教員1名来校。福岡看護学部にて研修及び視察を実施。
（H30年2月3日～14日　12日間）
作業治療学科(作業療法学科)学生15名、引率教員1名来校。福岡保健医療学部にて研修及び実習を実施。
（H29年12月16日～12月28日　13日間）
【韓国　インジェ大学校】
作業治療学科(作業療法学科)学生6名、引率教員1名来校。福岡保健医療学部にて研修及び実習を実施。
（H29年12月16日～12月28日　13日間）
【韓国　テグハニ大学校】
臨床病理学科(医学検査学科)学生11名、引率教員1名来校。福岡保健医療学部にて研修及び視察を実施。
（H30年1月13日～1月19日　7日間）
【シンガポール　ナンヤンポリテクニック】
看護学科教員1名、学生10名来校。大田原にて研修を実施。
（H30年3月3日～3月10日-学生、3月3日～3月17日-教員）

2）協定校以外の研修・視察の受入れ
【カンボジア医療技術学校】
同校の教員4名来校。主に、放射線情報科学科で研修を実施。
（H29年10月2日～5日）
【オーストラリアノーザンビーチ市】
小田原市主催の交換留学生プログラムの一環で中学生、高校生20名を受け入れ
（H29年9月、1日間）
3）さくらサイエンスプラン（日本・アジア青少年サイエンス交流事業）研修受入
【第1回】
ミャンマー第一医科大学、第二医科大学医学部生　計10名、教員1名を招聘。
成田・大田原及び東京で研修及び視察を実施。
（H29年7月26日～8月2日　8日間）
【第4回】
ネパール　国立トリブヴァン大学・私立カトマンズ大学　医学部生計9名、職員2名を招聘
成田・大田原及び東京で研修及び視察を実施。
（H30年2月21日～28日　8日間）

(4)海外視察（海外からの来訪者）

2011年度

○協定校からの視察(栃木、東京、九州地区)

国	相手先	来訪人数
韓国	建陽大学	48
韓国	仁済大学	12
台湾	元培科技大学	20
合　計		80

○その他海外からの視察

国	相手先	来訪人数
オーストラリア	マンリー市中・高校生	28
ベトナム	ホーチミン提携病院	13
中国	天津泰達国際心血管病医院	21
中国	日中形成外科学会	20
韓国	韓国国民健康保険公団及びイルサン病院関係者	5
中国	北京医療関係者団体	5
中国	中国民生部公立福祉専門大学北京会社管理職業学院	20
中国	億達集団有限公司	8
中国	アジアアライアンスホールディング株式会社	8
韓国	大邱漢医大学	25
韓国	東元大学	32
タイ	タイ王国陸軍営ＴＶ	8
韓国	大韓老人療養病院協会	41
韓国	高神大学校	27
韓国	釜山センタム病院	31
台湾	国立台湾師範大学健康促進教育学	27
合　計		319

2012年度

○協定校からの視察

国	相手先	来訪人数
タイ	マヒドン大学医学部	6
韓国	ウォンガン大学	3
合計		9

○その他海外からの視察

国	相手先	来訪人数
韓国	釜山センタム病院	3
中国	首都医科大学附属北京友誼医院	14
ロシア	Sovermenny Meditesinskie	12
韓国	ハンリム大学看護大学院	7
中国	慶北科学大学校	31
中国	中慎医療健康産業集団有限公司	3
ロシア	オーポラロシア福岡及びロシア政府等の医療関係者	3
中国	平安銀行上海分行	4
中国	中国　耕海不動産開発(株)及び　　佐世保玉屋	6
モルドバ	モルドバ共和国保健省一行	18
合計		101

2013年度

○協定校からの視察

国	相手先	来訪人数
韓国	乙支大学校	10
シンガポール	ナンヤンポリテクニック	5
合計		15

○その他海外からの視察

国	相手先	来訪人数
ベトナム	ダナン市　外務局他	4
ベトナム	ダナン市　ドンア大学	1
中国	大連市都市建設視察団	8
韓国	大邱朴病院	3
韓国	ナザレ大学言語聴覚学科	6
合計		22

2014年度

○協定校からの視察

国	相手先	来訪人数
ミャンマー	保健省、国立リハビリテーション病院、ヤンゴン医療技術病院	6
合計		6

○その他海外からの視察

国	相手先	来訪人数
中国	中国教育処	4
モンゴル	モンゴル国立医療科学大学	5
合計		9

2015年度

ミャンマー保健省　保健大臣他　計6名来校。大田原、東京で視察及び調印式を実施。
(H28年2月8日～2月12日　5日間)

○協定校からの視察

国	相手先	来訪人数
ベトナム	チョーライ病院　病院長他	3
ベトナム	バックマイ病院　病院長他	6
ベトナム	ホーチミン市医科薬科大学　学長	1
ベトナム	ハノイ医科大学　学長他	4
タイ	マヒドン大学公衆衛生学部	7
台湾	元培医事科技大学　理事他	33
合計		54

○その他海外からの視察

国	相手先	来訪人数
ラオス	ラオス国立健康科学大学　学長他	3
	セタテラート病院　病院長	1
ミャンマー	ミャンマー国立リハビリテーション病院　病院長	4
タイ	マヒドン大学言語コミュニケーション学部	3
タイ	クイーンシリキット小児病院　病院長他	9
合計		20

2016年度

ミャンマー保健スポーツ省　保健大臣他　計6名来校。大田原、東京で視察
(H28年9月15日)
ベトナム保健省　保健大臣他　計3名来校。大田原、東京で視察
(H28年10月25日)
中国の軍地養生苑より劉斌氏（河北省人民病院所属）他1名　計2名来校。福岡保健医療学部にて視察を実施。（H28年12月9日　1日間）
社会福祉法人お年寄りヘルスリハビリセンター昼間保護施設職員4名来校。福岡保健医療学部にて視察を実施。（H29年3月6日～3月7日　2日間）
タイUbon Ratchathani大学講師　Surasak Wanram, Ph. D. を福岡保健医療学部にて客員研究員として受け入れ。（H29年3月15日～5月15日　2ヶ月間）

○協定校からの視察

国	相手先	来訪人数
インドネシア	ウダヤナ大学　学長他	3
フィリピン	フィリピン大学　学長他	6
カンボジア	国立保健科学大学　学長等	4
合計		13

○その他海外からの視察

国	相手先	来訪人数
モンゴル	新モンゴル高校理事長	1
中国	中国科学院　院長等	8
ベトナム	ヴィンメック病院　放射線医・放射線技師	2
ミャンマー	教育省　高等教育副局長等	2
ラオス	保健省　国際教育局長等	3
合計		16

2017年度

タイUbon Ratchathani大学講師　Surasak Wanram, Ph.D.を客員研究員として受入れ。
（H29年3月15日～5月15日　2ヶ月間）
医学部開設式（2017年4月2日　成田キャンパス）
海外提携校16大学（12か国）より学長・医学部長等35名及びベトナム、ラオス保健省高官が式典に出席。成田キャンパス医学部棟および大学諸施設を視察。
中国山東省泰安市泰山医学院職員6名来校。福岡保健医療学部にて視察を実施。
（H29年4月20日　1日間）
韓国リハビリ看護協会会員8名来校。福岡看護学部にて視察を実施。
（H29年7月17日～7月21日　5日間）

○協定校からの視察

国	相手先	来訪人数
ハンガリー	センメルワイス大学　学長他	4
イギリス	イーストアングリア大学　保健医療学部長他	2
シンガポール	シンガポール工科大学　PT、OT学科長、国際部長	3
マレーシア	マネジメント＆サイエンス大学　学長等	3
ベトナム	フエ医科薬科大学　学長等	6
タイ	クリスチャン大学学長等役員	15
ミャンマー	ヤンゴン医療技術大学	4
合計		37

○その他海外からの視察

国	相手先	来訪人数
インドネシア	ムハマディア大学機構	38
中国	中国科学院大学　副学長他	12
	興安職業専門学校　副院長他	5
	首創置業株式会社北京支社　副社長他	5
合計		60

２．国際協力協定の締結

海外学術交流協定先一覧（大学）

	国・地域	提　携　先	締　結　日
大学	台湾	元培醫事科技大学	2006. 10. 22
	タイ	マヒドン大学　（公衆衛生学部）	2007. 7. 23 (Renewed 2017. 5. 3)
		クリスチャン大学	2009. 4. 7
	USA	ハワイ大学　カピオラニ校	2009. 4. 2
		フィラデルフィア科学大学　メイズカレッジ	2009. 8. 28
		ピッツバーグ大学医学部	2016. 4. 1
		コロラド大学デンバー校（看護学部）	2009. 12. 22
	中国	首都医科大康復医学院	2009. 3. 23
		中国科学院大学	2017. 4. 28
	韓国	建陽大学校	2009. 10. 26
		仁済大学校	2009. 10. 26
		乙支大学校	2014. 2. 06
		大邱韓医大学校	2013. 11. 4
	ミャンマー	ヤンゴン第一医科大学	2013. 12. 14
		ヤンゴン医療技術大学	2013. 12. 14
		ヤンゴン看護大学	2013. 10. 31
		ヤンゴン第二医科大学	2017. 7. 22
	ベトナム	ホーチミン市医科薬科大学	2014. 7. 1
		ハノイ医科大学	2015. 3. 5
		フエ医科薬科大学	2017. 11. 1
	オーストラリア	グリフィス大学	2015. 1. 23
	ニュージーランド	オタゴ大学	2017. 4. 4
	シンガポール	シンガポール工科大学	2017. 11. 24
	モンゴル	国立モンゴル医科大学	2015. 7. 16
	ラオス	ラオス国立健康科学大学	2015. 11. 10
	インドネシア	ウダヤナ大学	2016. 1. 25
	マレーシア	マネージメント＆サイエンス大学	2016. 2. 26
	フィリピン	フィリピン大学マニラ校医学部	2016. 3. 24
	スペイン	アルカラ大学	2016. 5. 21
	カンボジア	カンボジア国立保健科学大学	2016. 7. 28
	イギリス	イーストアングリア大学	2016. 8. 19
	フランス	パリ第 11 大学	2016. 11. 8
	ハンガリー	センメルワイス大学	2016. 11. 7
	ロシア	モスクワ第一医科大学	2017. 10. 10
	フィンランド	ヘルシンキ大学	2018. 2. 13

海外学術交流協定先一覧（機関・病院）

	国・地域	提　携　先	締　結　日
機関	中国	中国リハビリテーション研究センター	1998.10.28
	オーストラリア	テイフ　クイーンズランド	2009.5.27
	シンガポール	ナンヤンポリテクニック	2013.4.8
病院	ベトナム	国立チョーライ病院	2014.7.1
		国立バックマイ病院	2015.3.5

3. 海外研修

(1)海外研修の引率教員と参加者数

年度	国名	学科	氏名	職位(当時)	参加者数	小計
2011	中国	国際部	田中 浩子	なし	26	369
		OT	新川 寿子	講師		
	台湾	RT	室井 健三	講師	20	
		NS	長弘 千恵	教授		
	ベトナム	ST	谷合 信一	助教	32	
		OT	奈良 進弘	教授		
	オーストラリア 夏	語学	神戸 百合香	助教	41	
		NS	永井 あけみ	講師		
	ハワイ 夏	NS	古川 秀敏	准教授	14	
	韓国 仁済大学	PT	中原 雅美	講師	97	
		OT	多賀 誠	講師		
		NS	松下 智美	助教		
		事務課長	龍 督茂	事務課長		
		国際交流室長	池 扶可也	国際室室長		
	韓国 建陽大学	PT	金子 秀雄	准教授	94	
		ST	難波 雄	助教		
		OT	濱本 邦洋	教授		
		NS	仲前 美由紀	助教		
		事務副部長	神塚 泰史	事務副部長		
	オーストラリア 冬	NS	谷山 牧	講師	19	
		語学	神戸 百合香	助教		
	ハワイ 冬	PT	藤城 直二	教授	26	
2012	中国	PT	谷 浩明	学科長	22	310
		OT	新川 寿子	講師		
	台湾	RT	室井 健三	講師	30	
		NS	今村 桃子	教授		
	ベトナム	ST	柴本 勇	准教授	24	
		NS	姫野 深雪	講師		
	タイ	NS	大野 明美	講師	6	
	オーストラリア夏①	OT	菅原 洋子	教授	38	
		NS	永井 あけみ	講師		
	オーストラリア夏②	語学	神戸 百合香	助教	39	
		PT	永井 良治	講師		
	韓国 仁済大学	PT	藤城 直二	教授	79	
		OT	石橋 英恵	講師		
		国際交流室	杉原 活郎	助教		
	韓国 建陽大学	PT	黒澤 和生	学科長	58	
		PT	金子 秀雄	准教授		
		NS	尹 玉鐘	教授		
		国際交流室	田端 佑理	主任		
	オーストラリア 冬	ST	内田 信也	講師	14	
		国際室	藤原 志保	主任		

年度	国名	学科	氏名	職位（当時）	参加者数	小計
2013	中国	OT	新川　寿子	講師	10	372
	台湾	NS	斉藤　ひさ子	学部長	33	
		NS	世良　喜子	教授		
	ベトナム	NS	下條　三和	教授	48	
		ST	柴本　勇	准教授		
	タイ	NS	篠崎　克子	准教授	23	
		RT	西木　雅行	教授		
	オーストラリア夏①	NS	永井あけみ	准教授	61	
		ST	為数　哲司	教授		
		福岡山王	久我　賢太郎	課長		
	オーストラリア夏②	PT	中原　雅美	講師	40	
		OT	谷口　敬道	教授		
	韓国　仁済大学	PT	黒澤　和生	学科長	47	
		OT	石橋　英恵	講師		
		国際交流室	杉原　活郎	助教		
	韓国　建陽大学	OT	原口　健三	学科長	70	
		PT	永井　良治	講師		
		NS	尹　玉鐘	教授		
		国際交流室	惠良　博之	主事		
	シンガポール	PT	谷　浩明	学科長	19	
		NS	谷山　牧	准教授		
	オーストラリア　冬	SHM	中田　健吾	講師	21	
		NS	大谷　喜美江	講師		
2014	台湾	NS	斉藤　ひさ子	学部長	58	518
		ST	城間　将江	教授		
	ミャンマー	NS	デッカー清美	講師	11	
		東京国際部	加瀬　文彦	主事		
	ベトナム①	福岡NS	中嶋　恵美子	教授	50	
		大川ST	安立　多惠子	准教授		
	ベトナム②	大川OT	日田　勝子	准教授	52	
		RT	荒川　哲	准教授		
	タイ夏	福岡NS	山口　みどり	准教授	24	
		大川PT	徳江　武	講師		
	オーストラリア夏①	大川PT	金子　秀雄	准教授	92	
		大川ST	平島　ユイ子	講師		
		福岡NS	永井　あけみ	准教授		
		小田原PT	宮森　隆行	講師		
	オーストラリア夏②	MT	永沢　善三	教授	58	
		大川OT	石橋　英恵	講師		
		国際室	藤原　志保	主任		
	韓国　仁済大学	大川PT	永井　良治	准教授	38	
		国際交流室	井上　里緒			
	韓国　建陽大学	大川PT	森田　正治	学科長	44	
		福岡NS	長弘　千恵	学科長		
	韓国　大邱韓医	MT	福島　伯泰	教授	25	
		国際交流室	井上　里緒			
	シンガポール夏	大川PT	高野　吉朗	准教授	20	
		国際交流室	田中　由佳			
	オーストラリア　冬	SHM	林　和美	准教授	18	
		語学	三浦　美恵子	助教		
	タイ冬	NS	藤田　京子	准教授	9	
	シンガポール冬	SHM	今野　広紀	准教授	19	
		語学	佐藤　寛子	講師		

年度	国名	学科	氏名	職位(当時)	参加者数	小計
2015	中国	PT	久保 晃	学科長	52	491
		大川OT	新川 寿子	准教授		
		大川PT	中原 雅美	准教授		
	台湾	福岡NS	長弘 千恵	学科長	59	
		MT	小坂 克子	教授		
		RT	平間 信	教授		
	ミャンマー	OT	谷口 敬道	学科長	16	
		大川OT	原口 健三	学科長		
	ベトナム①	大川ST	安立 多恵子	准教授	50	
		福岡NS	山本 真弓	准教授		
		小田原OT	岩上 さやか	助教		
	ベトナム②	大川PT	髙野 吉朗	准教授	41	
		RT	荒川 哲	准教授		
	タイ夏	福岡NS	山口 みどり	准教授	27	
		語学	三浦 美恵子	助教		
	ハワイ	大川OT	石橋 英恵	講師	37	
		ST	岩崎 淳也	講師		
	オーストラリア夏①	MT	宇治 義則	教授	29	
		福岡NS	永井 あけみ	准教授		
	オーストラリア夏②	PS	渡邊 敏子	学科長	39	
		大川PT	金子 秀雄	准教授		
	シンガポール夏	大川語学	徳江 武	講師	27	
		小田原PT	渡邊 観世子	講師		
	オーストラリア冬 Tafe	語学	三浦 美恵子	助教	10	
	オーストラリア冬グリフィス	PS	清水 貴壽	准教授	19	
		NS	藤田 京子	准教授		
	タイ冬	語学	佐藤 寛子	講師	7	
	韓国 仁済大学	語学	福井 譲	准教授	21	
		大川ST	平島 ユイ子	准教授		
	韓国 建陽大学	大川ST	為数 哲司	教授	9	
	韓国 大邱韓医	MT	福島 伯泰	教授	20	
		MT	安田 聖子	助教		
	シンガポール冬	RT	西木 雅行	教授	28	
		SHM	小嶋 章吾	教授		

年度	国名	学科	氏名	職位(当時)	参加者数	小計
2016	台湾	大川MT	小坂　克子	教授	30	480
		ORT	鎌田　泰彰	助手		
	中国	大川OT	新川　寿子	准教授	5	
	ラオス	福岡NS	溝部　昌子	准教授	16	
		成田語学	フロレスク・コスミン	講師		
	ベトナム夏(ハノイ)	大川PT	江口　雅彦	講師	24	
		語学	宮崎　路子	教授		
	ベトナム夏(ホーチミン①)	大川ST	石川　幸伸	准教授	32	
		福岡NS	山本　真弓	准教授		
	ベトナム夏(ホーチミン②)	大川OT	濱本　邦洋	教授	27	
		成田NS	二田水　彩	助教		
	タイ	大川PT	金子　秀雄	准教授	29	
		福岡NS	山口　みどり	准教授		
	ミャンマー	OT	小賀野　操	教授	15	
		PT	西田　裕介	学科長		
	オーストラリア夏(Tafeケアンズ)	大川MT	宇治　義則	教授	27	
		小田原OT	篠崎　雅江	准教授		
	オーストラリア夏(グリフィス)	福岡国際室	遠藤　可奈	職員	26	
		PS	藤井　幹雄	准教授		
	オーストラリア夏(TafeGC①)	福岡NS	永井　あけみ	准教授	28	
		成田PT	志村　圭太	講師		
	オーストラリア夏(TafeGC②)	大川MT	湯澤　聡	講師	26	
		OT	藤田　亘	教授		
	イギリス	大川PT(語学)	徳江　武	講師	8	
	韓国　仁済大学	大川ST	平島　ユイ子	准教授	19	
		成田OT	堀田　英樹	准教授		
	韓国　建陽大学	大川PT	永井　良治	准教授	73	
		大川OT	原　麻理子	講師		
		語学	福井　譲	准教授		
		福岡NS	白石　裕子	教授		
	韓国　大邱韓医	大川MT	佐藤　信也	教授	27	
		福岡国際室	中嶋　美優	職員		
	シンガポール夏	大川PT	鈴木　あかり	助手	29	
		RT	西木　雅行	教授		
	オーストラリア冬(グリフィス)	ORT	伊藤　美沙絵	准教授	8	
	オーストラリア冬(Tafe)	NS	鈴木　由美	教授	13	
	シンガポール	PS	角南　明彦	教授	18	
		小田原NS	青柳　美樹	准教授		

年度	国名	学科	氏名	職位(当時)	参加者数	小計
	台湾	大川MT	佐藤　信也	教授	42	
		成田NS	高山　裕子	講師		
		RT	三輪　建太	講師		
	中国	PS	三浦　隆史	教授	12	
		大川OT	新川　寿子	准教授		
	ラオス	大川ST	安立　多惠子	教授	19	
		成田MT	梅宮　敏文	教授		
	ベトナム夏(ハノイ①)	大川ST	原　富英	教授	32	
		成田NS	二田水　彩	助教		
	ベトナム夏(ハノイ②)	成田PT	森井　和枝	准教授	18	
		成田MT	清宮　正徳	准助教		
	ベトナム夏(ホーチミン①)	大川MT	永沢　善三	学科長	43	
		成田NS	實吉　佐知子	准教授		
		成田NS	葛城　健史	助教		
	ベトナム夏(ホーチミン②)	大川OT(基礎)	濱本　邦洋	教授	36	
		成田OT	五味　幸寛	講師		
	タイ夏	大川PT	高野　吉朗	准教授	29	
		成田PT	牧原　由紀子	講師		
	ミャンマー	OT	小賀野　操	教授	18	
		成田NS	宮本　圭	講師		
	オーストラリア夏(Tafeケアンズ①)	大川PT	江口　雅彦	講師	15	
		小田原PT	前田　佑輔	講師		
	オーストラリア夏(Tafeケアンズ②)	成田(基礎)	三宅　克也	教授	13	
		OT	馬屋原　学	講師		
	オーストラリア夏(グリフィス①)	成田総合	宮嶋　宏行	教授	44	
		福岡NS	溝部　昌子	准教授		
	オーストラリア夏(グリフィス②)	PS	藤井　幹雄	准教授	7	
	オーストラリア夏(TafeGC①)	福岡NS	永井　あけみ	准教授	44	
		小田原OT	岩上　さやか	講師		
	オーストラリア夏(TafeGC②)	大川MT	佐藤　謙一	講師	33	
		RT	丸山　純人	講師		
2017	イギリス	大田原語学	宮崎　路子	教授	9	827
		大川PT(語学)	徳江　武	講師		
	韓国　仁済大学	成田PT	糸数　昌史	准教授	23	
		大川ST	岩﨑　裕子	講師		
	韓国　建陽大学	福岡NS	大池　美也子	学部長	61	
		大田原語学	福井　譲	准教授		
		大川PT	池田　拓郎	講師		
	韓国　大邱韓医大学	成田MT	長沢　光章	教授	57	
		成田MT	河野　弥季	助教		
		大川MT	安田　聖子	助教		
	韓国　乙支大学	福岡NS	白石　裕子	教授	19	
		PT	韓　憲受	講師		

年度	国名	学科	氏名	職位(当時)	参加者数	小計
	シンガポール夏	大川OT	石橋　英恵	講師	29	
		大田原語学	佐藤　雄介	助教		
	カンボジア(新規)	大川PT	森田　正治	学科長	19	
		成田総合	佐藤　寛子	講師		
	フィリピン(新規)	大川MT	宇治　義則	教授	25	
		成田MT	工藤　芳子	准教授		
	マレーシア(新規)	成田NS	森山　ますみ	准教授	33	
		大川OT	長谷　麻由	講師		
	インドネシア(新規)	福岡NS	山口　みどり	准教授	26	
		成田PT	澤　龍一	助教		
	タイ冬	NS	笹谷　孝子	教授	24	
		成田ST	菅野　倫子	准教授		
	ベトナム冬(ホーチミン)	成田NS	新藤　悦子	教授	11	
		NS	武田　彩子	助教		
	オーストラリア冬(グリフィス)	NS	藤田　京子	准教授	11	
	オーストラリア冬(TafeGC)	成田ST	内田　信也	教授	38	
		SHM	松永　千恵子	教授		
	オーストラリア冬(Tafeケアンズ)	成田NS	木戸　久美子	教授	14	
		小田原NS	青柳　美樹	准教授		
	シンガポール冬	成田総合	高須賀　茂文	教授	23	
		小田原NS	谷山　牧	准教授		

4．教員による海外活動

（1）保健医療学部　看護学科

1．業務出張

氏名	国	都市　渡航先名	目的	期日
大野明美	タイ		「海外保健福祉事情」学生引率	H248.7～8.20
世良喜子	台湾	新竹	「海外保健福祉事情」学生引率	H258.11～8.21
デッカー清美	ミャンマー		「海外保健福祉事情」学生引率	H268.7～8.20
藤田京子	タイ		「海外保健福祉事情」学生引率	H271.25～2.7
藤田京子	オーストラリア		「海外保健福祉事情」学生引率	H281.29～2.11
鈴木由美	オーストラリア	ゴールドコースト	「海外保健福祉事情」学生引率	H291.28～2.10
笹谷孝子	タイ	バンコク	「海外保健福祉事情」学生引率	H30 1.27～2.7
藤田京子	オーストラリア	ゴールドコースト	「海外保健福祉事情」学生引率	H301.27～2.9
武田彩子	ベトナム	ホーチミン	「海外保健福祉事情」学生引率	H302.24～3.5

2．公的国際協力

なし

3．国際学会などの委員

なし

4．国際学会学術発表

氏名	国	都市　渡航先名	目的	期日
糸井裕子	英国	バーミンガム	国際生理学会第 37 回世界大会（学会発表） テーマ：The Influenses of Hand Work and stand up on the Function of Autonomic Nervous System During Menstrual Cycle in Healthy Female College Students	H257.21～7.26
王麗華	中国	大連	3rd World Academy of Nursing Science (Seoul, Korea) Different attitudes between the VNSes toward the utilization of website	H263.23～3.24
王麗華	台湾	台北	19th East Asia Forum on Nursing Science A Study on the Strategy of the Visiting Nursing Station in the Local Area in Japan A Study on the Visiting Nurses' Attitude toward the Home Care Patients	H2710.21～1.23
王麗華	P. R. China	WUHAN	Global Human Caring Conference Connotations of 3 Concepts for Discharge Facilitation in Japan	H2810.21～1.23

王麗華	P. R. China	Beijing	2016 The 4th CJK Nursing Conference A Study on the Nursing Approach to Chinese Medicine	H2811.12～11.14
世良喜子	中国	香港	The 20th East Asian Forum of Nursing Scholar Sera Y,Suzuki E,Takayama Y,TakanoM Theme：Public Perception of and Engagement in Health Literacy among Parents and Preschool Teachers in Japan — Towards Developing Early Childhood Health Literacy and Foundations for Health Education	H293.9～.10
世良喜子	中国	香港	The 20th East Asian Forum of Nursing Scholar TakanoM,Suzuki E,Tahara K,Sera Y Theme：Literature review of "organizational climate" in the nursing field in Japan	H293.9～.10
松本明美	スペイン	パンプローナ	International Conference and Expo on Family Nursing ・Supporting Nurses to Realize the Balance Between Work and In-Home Caregiving While Continuing to Work ・The Process of Continuous Caregiving Administered by Females who are Providing to Their Husbands with Early-Onset Dementia.	H296.14～6.17
中田かおり	カナダ	トロント	The 31st ICM Triennial Congress "Possible relationship between maternal hydration status and elevated blood pressure in late pregnancy in Japan"	H296.18～.22
小池純子	チェコ	プラハ	XXXVth International Congress on Law and Mental Health 学会発表	H297.12～7.16
王麗華	台湾	台北	the 2nd Asia-Pacific Nursing Research Conference (APNRC) The Actual conditions of Japanese visiting nurse cooperation action	H298.2～8.4
藤田京子	オーストラリア	ゴールドコースト	The Mental Health of Junior High School Students in East Japan and the Factors of the Stress Reactions Concerned, 18th International Mental Health Conference ,2017	H298.21～8.23
世良喜子	タイ	バンコク	TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017 Sera Y,Inaba F Theme：Perspectives of Japanese Parents and Preschool Teachers on Educating Children About Their Body's Functions： to Foster Health Literacy	H2910.20～.22
稲葉史子	タイ	バンコク	TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017 Sera Y,Inaba F	H2910.20～0.22

			Theme:Perspectives of Japanese Parents and Preschool Teachers on Educating Children About Their Body's Functions: to Foster Health Literacy	
世良喜子	アメリカ	ハワイ	16th Hawaii International Conference on Education Sera Y,Inaba F Theme:Development of health education programs in collaboration with daycare centers for 5 to 6-year-old children to learn about the structure and functioning of the human body	H301.4～1.8
稲葉史子	アメリカ	ハワイ	16th Hawaii International Conference on Education Sera Y,Inaba F Theme:Development of health education programs in collaboration with daycare centers for 5 to 6-year-old children to learn about the structure and functioning of the human body	H301.4～1.8
松本明美	韓国	ソウル	Scientific Committee of 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conference. ・Care prevention program using cable TV in Japan—Promotion prevention activities to prevent nursing care using cable television	H301.11～1.12
橋本幹子	韓国	ソウル	Scientific Committee of 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 12th International Nursing Conference. ・Care prevention program using cable TV in Japan—Promotion prevention activities to prevent nursing care using cable television	H301.11～1.12
郷原志保	韓国	ソウル	Scientific Committee of 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 13th International Nursing Conference. ・Care prevention program using cable TV in Japan—Promotion prevention activities to prevent nursing care using cable television	H301.11～1.12
世良喜子	韓国	ソウル	Scientific Committee of 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 13th International Nursing Conference. Takano M,Suzuki E,SeraY,Tahaea K,Kinouchi C,Mishima M Theme:Selection of question items for a scale to measure perceptions of nurses of organizational climate in wards	H301.11～1.12

5. その他

氏名	国	都市　渡航先名	目的	期日

松本明美	デンマーク スウェーデン	ファルケンベリ、 ルンド、マルメ	北欧高齢者福祉施設と在宅看護視察研修	H273.21～3.28
藤田京子	イタリア	ボローニャ	地域精神保健機関の視察	H293.13～3.16
藤田京子	オーストラリア	ゴールドコースト	Headspace(若者のメンタルヘルス機関)の視察	H298.24～8.25
世良喜子	タイ	バンコク	国連(バンコク)視察	H2910.20
謝海棠	中国	上海	上海医科大学看護学部講義	H2911.22
謝海棠	中国	上海	上海健康医学院附属病院の看護管理・教育の指導	H2911.23

（2）保健医療学部　理学療法学科

1．業務出張

JICA 協力

2011 年度(平成 23 年度)

JICA 第 3 回技術協力プロジェクト中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト

・藤沢しげ子：平成 22 年 8 月 23 日～平成 25 年 8 月 22 日
・上村さと美：平成 22 年 8 月 23 日～平成 23 年 8 月 22 日
・丸山仁司：平成 24 年 2 月 5 日～平成 24 年 2 月 11 日
・岸田あゆみ：平成 24 年 2 月 8 日～平成 24 年 2 月 16 日

2012 年度(平成 24 年度)

JICA 第 3 回技術協力プロジェクト中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト

・丸山　仁司：平成 25 年 3 月 3 日～平成 25 年 3 月 9 日
・糸数　昌史：平成 24 年 5 月 13 日～平成 24 年 5 月 19 日
　　平成 25 年 1 月 20 日～平成 25 年 1 月 26 日
・下井　俊典：平成 24 年 8 月 12 日～平成 24 年 8 月 18 日

JICA　ベトナム南部地域、医療リハビリテーション強化プロジェクト

・柊　幸伸：平成 24 年 11 月 17 日～平成 24 年 11 月 23 日

2．公的国際協力

1) 研修生受入

2011 年度(平成 23 年度)

JICA 第 3 期技術協力プロジェクト中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト

短期研修：8 名　平成 23 年 2 月 16 日～20 日

リハビリ中核人材養成：8 名　平成 23 年 10 月～11 月　9 週間

2012 年度(平成 24 年度)

JICA 第 3 期技術協力プロジェクト中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト

リハビリ中核人材養成：9 名　平成 24 年 10 月 16 日～12 月 15 日　9 週間

3．国際学会などの委員

2011 年度(平成 23 年度) ～2016 年度(平成 28 年度) 該当なし

4．国際学会学術発表

2011 年度(平成 23 年度)

1)16th International WCPT Congress Amsterdam, 20-23 June 2011

参加者：下井

2)第 10 回理学療法科学学会国際学術大会　南寧　平成 24 年 3 月 23-25 日

参加者：大田原：丸山、霍明、糸数、小林

3)第 6 回北京国際リハビリフォーラム（中国リハビリテーション研究センター）

平成 23 年 10 月 22-23 日

参加者：丸山、久保、霍明、小林

2012 年度(平成 24 年度)

1)第 11 回理学療法科学学会国際学術大会　上海　平成 25 年 3 月 21-25 日

＜参加者＞大田原：丸山、森田、久保、柊、霍明、岸田、野村、小野田、小林

小田原：宮口

2)第7回北京国際リハビリフォーラム（中国リハビリテーション研究センター）

平成24年9月21-23日

＜参加者＞大田原：丸山、久保、柊、霍明、小林

2013年度(平成25年度)

1）第12回理学療法科学学会国際学術大会　韓国　平成25年7月20-21日

＜参加者＞：丸山、黒澤、久保、柊、糸数、野村、韓、小野田、小林

2）WCPTアジア太平洋地区学会／アジア理学療法連盟学会　台湾　平成25年9月5-9日

＜参加者＞大田原：丸山、黒澤、久保、柊、下井

3）第8回北京国際リハビリフォーラム（中国リハビリテーション研究センター）

平成25年9月13-15日

＜参加者＞：丸山

4）13回理学療法科学学会国際学術大会　中国　平成26年3月21-23日

＜参加者＞大田原：丸山、黒澤、久保、柊、糸数、韓、小野田、小林

2014年度(平成26年度)

1）第14回理学療法科学学会国際学術大会　韓国　平成26年8月7-10日

＜参加者＞：丸山、黒澤、久保、柊、石坂、韓、小野田

2）第9回北京国際リハビリフォーラム(中国ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ研究センター)平成26年9月19-21日

＜参加者＞：丸山、黒澤、柊、韓、小野田

3）15回理学療法科学学会国際学術大会　中国　平成27年3月27-29日

＜参加者＞：丸山、柊、野村、韓、小野田、小林

2015年度(平成27年度)

1）第16回理学療法科学学会国際学術大会　韓国　済州島　平成27年7月17-19日

＜参加者＞大田原：　丸山　仁司，久保　晃，糸数　昌史，韓　憲受，石坂　正大

2）第17回理学療法科学学会国際学術大会　ミャンマー　平成27年9月5-6日

＜参加者＞大田原：丸山　仁司，久保　晃，下井俊典，糸数　昌史，韓　憲受，小野田　公

福　岡：森田　正治

3）第9回北京国際リハビリフォーラム(中国ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ研究センター)平成27年9月12-13日

＜参加者＞大田原：丸山　仁司，小野田　公

4）18回理学療法科学学会国際学術大会　中国　平成28年3月26-27日

＜参加者＞大田原：丸山　仁司，堀本ゆかり，韓　憲受，野村　高弘，小野田　公

福　岡：森田　正治，金子　秀雄，池田　拓郎，鈴木あかり

2016年度(平成28年度)

1）第19回理学療法科学学会国際学術大会　韓国　平成28年7月16-17日

＜参加者＞大田原：丸山仁司，　韓憲受，　佐藤珠江

小田原：渡邉 観世子，鈴木啓介，大武聖，齋藤孝義，和田三幸

福　岡：森田正治

2）第20回理学療法科学学会国際学術大会　ベトナム　平成27年8月5-6日

＜参加者＞大田原：丸山仁司，久保晃，堀本ゆかり，糸数昌史，小野田公，本澤薫

福　岡：森田正治

3) 第 11 回北京国際リハビリフォーラム　中国　平成 27 年 12 月 2-4 日

＜参加者＞大田原：丸山仁司　　福　岡：森田正治

4) 第 21 回理学療法科学学会・作業療法科学学会　国際学術大会　中国　平成 29 年 3 月 25-26 日

＜参加者＞大田原：丸山仁司，堀本ゆかり，小野田公，佐藤珠江

福　岡：森田正治，金子秀雄，中原雅美，池田拓郎

5．留学生（外国人含む）・研修生・視察・特別講演事業

2011 年度(平成 23 年度)

(1)学部（保健医療学部）

1 年生（2011）：ライム

2 年生（2010）：易　晶晶（中国）　KIM SUNKYOUNG（韓国）

3 年生（2009）：邵　双燕（中国）

4 年生（2008）：CHO　SANGDAE（韓国）、

(2)大学院（PT 分野のみ）

修士課程

1 年生(2011)：張　鈺瑩、張　明暉、張　明東、Tety　FADILLAH（インドネシア）、李　徳盛、　李　麗

博士課程

1 年生（2011）：黄秋晨

2012 年度(平成 24 年度)

1)学部および院生

(1)学部（保健医療学部）

1 年生（2013）：Yang Yoheng（中国）

2 年生（2012）：Lei Meng（中国）

3 年生（2011）：易　晶晶（中国）　Kim Sunkyoung（韓国）

4 年生（2010）：邵　双燕（中国）　Cho Sangdae（韓国　2008）

(2)大学院（PT 分野のみ）

修士課程

1 年生（2013）：周　斌、鄭　涛、GAO HAIBIN（中国）、New Ni Thein（ミャンマー）

2 年生（2012）：張　鈺瑩、張　明暉、張　明東、李　徳盛、李　麗、周　丹陽（中国）

博士課程

2 年生（2013）：黄　秋晨

2013 年度(平成 25 年度)

1)学部および院生

(1)学部（保健医療学部）

1 年生（2014）：XU SHENGJIE、ZHANG NAIWEN（中国）

2 年生（2013）：Yang Yoheng（中国）

3 年生（2012）：Lei Meng（中国）

4 年生（2011）：易　晶晶（中国）、Kim Sunkyoung（韓国）

(2)大学院（PT 分野のみ）

修士課程

1 年生（2014）：PHYOE PA PA MIN（ミャンマー）、YIN LU、邵　双燕（中国）

2年生（2013）：周 斌、鄭 涛、GAO HAIBIN、高 海滨（中国）、New Ni Thein（ﾐｬﾝﾏｰ）

博士課程

1年生（2014）：WANG　HONGZHAO（中国）

2年生（2013）：

3年生（2012）：黄　秋晨（中国）

2)視察

・大田原キャンパス（保健医療学部）

シンガポール　ナンヤンポリテック大学　来校

2014年度(平成26年度)

1)学部および院生

(1)学部

保健医療学部（大田原）

2年生（2014）：YANG YUHENG（楊 昱恒）、ZHANG NAIWEN（張 乃文）、
XU SHENG JE　（徐 勝杰）・中国

4年生（2012）：Lei Meng（雷梦）・中国、KIM SUNKYONG　（金　ソンギョン）韓国

(2)大学院（PT分野のみ）

修士課程

1年生（2015）：RYU TAE SON　（柳 太善）

2年生（2014）：PHYOE PA PA MIN・ミャンマー
YIN LU（尹 璐）、SHAO SHUANGYAN（邵 双燕）・中国

博士課程

1年生（2015）：Thanda Aye・ミャンマー

2年生（2014）：WANG HONGZHAO　（王 洪昭）・中国

2)視察

海外視察・研修

・韓国　Konyang University 理学療法学科&附属病院，平成26年8月9日

＜参加者＞：丸山、黒澤、久保、柊、石坂、韓、小野田

・中国　北京大学，北京大学国際病院，PKUCare Industrial Park，

中国リハビリテーションセンター，平成27年3月27-29日

＜参加者＞大田原：丸山、柊、野村、韓、小野田、小林

・大田原キャンパス（保健医療学部）

ヤンゴン医療技術大学デモンストレーター　理学療法士　Hnin Nu Aung

平成27年2月1-11日

3)研修生受入

仁済大学（PT5名、OT5名）・建陽大学（PT10名、OT10名）学生研修

平成27年1月19日～2月13日

4) 特別講演事業

・Thomas Lundeberg MD PhD（Associate Prof Rehabilitation Medicine University Clinic Stockholm Sweden）：「What is this thing called Pain？」平成26年10月2日 乃木坂スクール

・Steve Tumilty, PhD Mphty（Associate Dean of Postgraduate Studies
Centre for Health, Activity & Rehabilitation Research School of Physiotherapy University of Otago）：Physiotherapy in New Zealand、平成26年10月12日

5) 学術大会交流事業

・第 72 回理学療法科学学会学術大会　平成 26 年 9 月 27-28 日　大川（福岡）

Kim Myung-Chul（Eulji University），Lee, Byoung Kwon（KonYang University）

・第 74 回理学療法科学学会学術大会　平成 27 年 1 月 24-25 日　小田原（神奈川）

An ChangSik（Eulji University）院生発表引率

・第 15 回理学療法科学学会　国際学術大会,平成 27 年 3 月 27-29 日　中国（北京）

Lee, Byoung Kwon（KonYang University），Han DongWook（Silla University）

An ChangSik，Kim MyungChul，Whang JukWon（Eulji University）

Yoo Won Gyu，SeYeon Park（Inje University）

2015 年度(平成 27 年度)

1)学部および院生

(1)学部

保健医療学部（大田原）

1 年生（2016）：YIN LU（尹　璐），NI HAOWEI（倪　昊偉）・中国

3 年生（2014）：ZHANG NAIWEN（張 乃文），XU SHENG JE （徐 勝杰）・中国

(2)大学院（PT 分野のみ）

・　修士課程

1 年生（2016）：Xie HuaLong（解　化龍），Jiang YingCheng（姜　瀛澄），
Liu Zhen（劉　振）・中国

2 年生（2015）：Li Wenju（李　文菊），Ryu Tae Son（柳 太善）・中国

・　博士課程

1 年生（2016）：Shao Shuangyan（邵　双燕），Liu Haijuan（劉　海絹）・中国

2 年生（2015）：Thanda Aye（ミャンマー）

3 年生（2014）：Wang　Hongzhao（王　洪昭）・中国

3)研修生受入

・韓国，建陽大学（PT6 名）学生研修：　大田原キャンパス　平成 28 年 1 月 5 日～1 月 15 日

5) 学術大会交流事業

第4回日本ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ国際交流協会：平成27年11月28日　東京

LEE HANSUK（Eulji University）

2016年度(平成28年度)

1)学部および院生

(1)学部

保健医療学部（大田原）

1年生：LI WENJU（李　文菊）, LIU JINMO（劉　今墨）・中国

2年生：YIN LU（尹　璐），NI HAOWEI（倪　昊偉）・中国

3年生：ZHANG NAIWEN（張 乃文），XU SHENG JE （徐 勝杰）・中国

小田原保健医療学部

1年生：WU YANG（呉　陽）・中国

3年生：SHIN JEONGYONG（申貞容）・韓国

(2)大学院（PT分野のみ）

・　修士課程

1年生（2017）：HE DALEI（劉 珊），LIU　SHAN（鄭 飛），Lie Me(雷 夢)
Wang Qiongjie (王 瓊捷)

2年生（2016）：Xie HuaLong（解　化龍），Jiang YingCheng（姜　瀛澄），
Liu Zhen（劉　振）・中国

・　博士課程

2年生（2016）；Shao Shuangyan（邵　双燕），Liu Haijuan（劉　海絹）・中国

3年生（2015）：Thanda Aye（ミャンマー）

2)研修・視察

・　Silla University 見学，韓国　釜山　平成28年7月17日

＜参加者＞大田原：丸山仁司，韓憲受、佐藤珠江

3)研修生受入

・韓国，　Konyang University　理学療法学科学生25名，大田原キャンパス,2016.12.17-31

（３）保健医療学部　作業療法学科

１．　業務出張

谷口敬道　16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo（Pacifico Yokohama）

9th Beijing International Forum on Rehabilitation（Beijing International Conference Center）

塩田あかり　The 7th Beijing International Forum on Rehabilitation

関森　英伸　第16回世界作業療法士連携大会　第48回　日本作業療法学会参加（横浜市）

高村 直裕　第16回世界作業療法士連盟大会･第48回日本作業療法学会：6/18-21 パシフィコ横浜（神奈川県）

関 優樹　2015.9.10-13　第 10 回北京国際リハビリテーションフォーラム

中村美緒　韓国リハビリテーション工学カンファレンス　参加・発表

18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing　参加・発表

野﨑智仁　18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing

第 3 回アジア太平洋 CBR 会議　運営・参加

２．公的国際協力

３．国際学会などの委員

前田眞治　国際リハビリテーション医学会（ISPRM: International society of physical & rehabilitation medicine）

国際水治療法学会（ISMH; International society of medical hydrogy）

中村美緒　世界作業療法士連盟　会員

野﨑智仁　世界作業療法士連盟　会員

４．国際学会学術発表

Hirano D, Taniguchi T	The application of functional near-infrared spectroscopy (fNIRS) in the intervention for persons with severe motor and intellectual disabilities	The first Asia-Pacific regional roundtable on profound intellectual and multiple disabilities (PIMD)	キャンパスプラザ京都	京都府／京都市	2011.10.20-21
Masaharu Maeda	Medical use of the artificial bicarbonate warm water in Japan	3rd International Jeju water Forum.	Ramada Plaza Hotel Jeju	Jeju/Korea	2011,5,4
Masaharu Maeda, Masaru Ichikawa, Mariko Hara, Yoshimi Sakurai,	Investigation of prostaglandin E2 to vasodilatation caused in bicarbonate warm water	6th World Congress of the ISPRM International Society of Physical and Rehabilitation Medicine	Puerto Rico Comvention Center	San Juan, Puerto Rico	2011.6.12-15

Emi Hirano, Jun Yamamoto, Eisuke Kogure, Shinobu Shimizu	bathing	(ISPRM)			
Masaharu Maeda, Mariko Hara, Yoshimi Sakurai, Osamu Kinoshita, Misaki Ohmura, Jun Yamamoto, Eisuke Kogure, Akari Shioda	Cleaning effects for the hair and the skin of the carbonate water. 3	8th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology (38th ISMH).	Hotel Balnerio de Lanjarón	Granada Spain.	2012.6. 20-23
白砂　寛基、谷口　敬道、藤田亘、塩田あかり、杉原　素子	Analysis of assessments and intervention policies by gathering case studies on occupational therapy for cancer	第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会（WFOT Congress 2014）	パシフィコ横浜	神奈川県横浜市	2014.6. 21
Huang F, Hirano D, Taniguchi T, Ogihara Y	Research on the activation of the cerebral cortex during common occupational activities: a near-infrared spectroscopy study	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo	Pacifico Yokohama	神奈川県／横浜市	2014.6. 17-21
Hirano D, Taniguchi T	Application of functional near-infrared spectroscopy (fNIRS) for the intervention process for individuals with severe motor and intellectual disabilities	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo	Pacifico Yokohama	神奈川県／横浜市	2014.6. 17-21
Seki Y, Hirano D, Fujioka T, Kurumai M, Taniguchi T	Cerebral blood flow changes in the region surrounding the somatosensory cortex motor area associated with sequence motor learning: a study using functional near infrared spectroscopy	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo	Pacifico Yokohama	神奈川県／横浜市	2014.6. 17-21

Fujioka T, Hirano D, Seki Y, Kurumai M, Taniguchi T	Changes the brain activity in the dorsolateral prefrontal cortex using the handicraft treatment: a functional near-infrared spectroscopic study	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo	Pacifico Yokohama	神奈川県／横浜市	2014.6.17-21
Kurumai M, Hirano D, Fujioka T, Seki Y, Taniguchi T	The effect of dominant hand motor sequence learning on improving non-dominant hand exercises	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo	Pacifico Yokohama	神奈川県／横浜市	2014.6.17-21
Suzuki T, Inoue C, Ikebuchi K, Hirano D, Iwakami S, Mimori Y	Is it necessary for occupational therapy students to use COPM for OSCE?	Association for Medical Education in Europe Conference 2014	MiCo Milano Congressi	Milan, Italy	2014/8/30-9.3
Masaharu Maeda, Jun Yamamoto, Osamu Kinoshita, Akari Shioda	Spread to medical and beauty industry of the artificial high-concentrate bicarbonate warm water in Japan, and the utility.	39th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology (39th ISMH)	国立京都国際会館	京都府／京都市	2014.5.11-14
Hiroharu Kamiokaa, Kiichiro Tsutanic, Masaharu Maeda, Shinya Hayasaka, Hiroyasu Okuizumi, Yasunaki Goto	Assessing the Quality of Study Reports on Spa Therapy based on Randomized Controlled Trials by the SPA therapy Checklist "SPAC".	39th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology (39th ISMH)	国立京都国際会館	京都府／京都市	2014.5.11-14
Mitsuharu Sugawara. Masaharu Maeda, Hirotaka Nagumo,	Effectiveness of the Cognitive Rehabilitation for Left Unilateral Spatial	WFOT第16回世界作業療法連盟・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	神奈川県／横浜市	2014.6.18－21

Mariko Hara	Neglect.				
Mitsuharu Sugawara. Masaharu Maeda, Hirotaka Nagumo, Mariko Hara	Effectiveness of Approach for the visual space cognitive impairment of the case with the Ba'lint syndrome.	WFOT第16回世界作業療法連盟・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	神奈川県／横浜市	2014.6.18－21
Mariko Hara, Masaharu Maeda, Hirotaka Nagumo, Mitsuharu Sugawara	A case of basal forebrain amnesia after subarachnoid hemorrhage treated by occupational therapy.	WFOT第16回世界作業療法連盟・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	神奈川県／横浜市	2014.6.18－21
Mariko Hara, Masaharu Maeda, Hirotaka Nagumo, Mitsuharu Sugawara	Cerebral lesions and tool use disorders.	WFOT第16回世界作業療法連盟・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	神奈川県／横浜市	2014.6.18－21
Hirotaka Nagumo, Masaharu Maeda, Mitsuharu Sugawara, Mariko Hara	Association between STEF and Barthel index in neurodegenerative disease accompanied by ataxia.	WFOT第16回世界作業療法連盟・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	神奈川県／横浜市	2014.6.18－21
Hirotaka Nagumo, Masaharu Maeda, Mitsuharu Sugawara, Mariko Hara	Calls for help, self-body recognition, character type, and anxiety of ALS patients at home.	WFOT第16回世界作業療法連盟・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	神奈川県／横浜市	2014.6.18－21
座長：Education 1-1 - New Perspectives on OT Education（※小賀野操先生）		16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo	パシフィコ横浜	横浜	2014年6月18日
Masaharu Maeda, Jun Yamamoto, Osamu Kinoshita, Akari Shioda	Spread to medical and beauty industry of the artificial high-concentrate bicarbonate warm water in Japan, and the utility.	39th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology (39th ISMH).	Kyoto International Conference Center	Kyoto Japan	2014.5.11-14
白砂　寛基、谷	Analysis of assessments	第16回世界作業療法士	パシフィ	神奈川県	2014.6.

口　敬道、藤田亘、塩田あかり、杉原　素子	and intervention policies by gathering case studies on occupational therapy for cancer	連盟大会・第48回日本作業療法学会（WFOT Congress 2014）	コ横浜	横浜市	21
関森　英伸	普通小中学校における個別指導計画立案に向けた作業療法士の役割について	第16回世界作業療法士連盟大会 第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	神奈川県横浜市	平成26年 6月18日（水）
Yuki Seki Daisuke Hirano Takashi Fujioka Motoki kurumai Takamichi Taniguchi	Cerebral blood flow changes in the region surrounding the somatosensory cortex motor area associated with sequence motor learning —A study using functional near infrared spectroscopy—	第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	横浜市	2014.6.21
Takashi fujioka Daisuke Hirano Yuki Seki Motoki kurumai Takamichi Taniguchi	Changes the activity in the dorsolateral prefrontal cortex using the handicraft treatment : afunctional near-infrared spectroscopic study	第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	横浜市	2014.6.20
Motoki kuruma Daisuke Hirano Takashi Fujioka Yuki Seki Takamichi Taniguchi	The effect of dominant hand motor sequence learning on improving non-dominant hand exercises	第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会	パシフィコ横浜	横浜市	2014.6.21
Masaharu Maeda	Spa in Japan, Medical use and its effects.	East Asia SPA Industry Union Forum 2015 Okinawa	沖縄コンベンションセンター	沖縄県／那覇市	2015.6.18
Masaharu Maeda, Wakako Fujita, Tomoko Manaka, Jun Yamamoto, Tomo Kondo	Influence on fetal heart rate and uterine contraction rate of the CO2 warm water bathing in the late pregnancy period	40th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology (40th ISMH)	Windsor Barra Hotel and Convention Center	Rio de Janeiro／Brazil.	2015.8.26-28
谷口敬道、黄富表、陣内大輔、奥村隆彦、関優樹、渡邊清美、	早期離床を目的とした脳血管障害者のための立ち上がり動作練習用ロボットの試作	第18回理学療法科学学会国際学術大会（作業療法科学学会国際学術大会）	ベストウエスタンOLスタジアムホテ	中国／北京市	H27.3.26

高村直裕、平野大輔			ウｒ		
Mio Nakamura, Jun Suzurikawa, Shohei Tsukada, Yohei Kume, Hideo Kawakami, Takenobu Inoue	Validation of the ULCEAT methodology by applying it in retrospect to the Roboticbed using development process	13thAAATE Conference 201	Novotel Congress Budapest	Budapest, Hungary	2015 年 8 月 23 日
Kaoru Inoue, Chihiro Sasaki, Mio Nakamura	Communication Robots for Elderly People and Their Families to Support Their Daily Lives	13thAAATE Conference 201	Novotel Congress Budapest	Budapest, Hungary	2015 年 8 月 23 日
Mio Nakamura,	Development of Transfer assist robot based on the user needs concept.	18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing	Best Western OL Stadium Hotel	China ／Beijing	2015 年 3 月 26 日
野﨑智仁、谷口敬道	An example of employment support in the company for schizophrenia subject.	18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing	Best Western OL Stadium Hotel	China ／Beijing	2015 年 3 月 26 日
Taniguchi T	The development of neural rehabilitation and functional robot.	The11th Beijing International Forum on Rehabilitation	China National Convention Center	China Beijing	2016.12.03
Hirano D, Taniguchi T	Variation of stereotypical hand movements and objects of interest in individuals with Rett syndrome	Rett Syndrome International Symposium 2017 in Kobe	Kobe Convention Center	Kobe, Hyogo, Japan	2017.03.18-19
Masaharu Maeda	Spa in Japan, Medical use and its effects.	East Asia SPA Industry Union Forum 2015 Okinawa	沖縄コンベンションセンター	沖縄県／那覇市	2015.6.18
Masaharu Maeda, Wakako Fujita, Tomoko Manaka, Jun Yamamoto, Tomo Kondo	Influence on fetal heart rate and uterine contraction rate of the CO2 warm water bathing in the late pregnancy	40th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology (40th ISMH)	Windsor Barra Hotel and Convention Center	Rio de Janeiro ／Brazil.	2015.8.26-28

	period				
谷口敬道他	早期離床を目的とした脳血管障害患者のための立ち上がり動作練習用ロボットの試作	第18回国際学術大会	ﾍﾞｽﾄｳｴｽﾀﾝOLｽﾀｼﾞｱﾑﾎﾃﾙ	中国北京	H28.3.26
Mio Nakamura, Jun Suzurikawa, Shohei Tsukada, Yohei Kume, Hideo Kawakami, Takenobu Inoue	Validation of the ULCEAT methodology by applying it in retrospect to the Roboticbed using development process	13thAAATE Conference 201	Novotel Congress Budapest	Budapest, Hungary	2015 年 8 月 23 日
Kaoru Inoue, Chihiro Sasaki, Mio Nakamura	Communication Robots for Elderly People and Their Families to Support Their Daily Lives	13thAAATE Conference 201	Novotel Congress Budapest	Budapest, Hungary	2015 年 8 月 23 日
Mio Nakamura,	Development of Transfer assist robot based on the user needs concept.	18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing	Best Western OL Stadium Hotel	China ／ Beijing	2015 年 3 月 26 日
野﨑智仁、谷口敬道	An example of employment support in the company for schizophrenia subject.	18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing	Best Western OL Stadium Hotel	China ／ Beijing	2015 年 3 月 26 日

（4）保健医療学部　言語聴覚学科

1．業務出張（氏名、出張先、目的、日時）

1）海外研修引率

谷合信一　海外保健福祉事情学生引率（ベトナム）　2011年8/3-8/16
柴本勇　海外保健福祉事情学生引率（ベトナム）　2012年8/4-8/19
内田信也　海外保健福祉事情学生引率（オーストラリア）　2013年1/31-2/9
柴本勇　海外保健福祉事情学生引率（ベトナム）　2013年8/4-8/17
城間将江　海外医療福祉事情引率（台湾）　2014年8/3-8/16　城間
岩崎淳也　海外保健福祉事情学生引率（ハワイ）　2015年8/2～8/16

2）その他

柴本勇：Dysphagia Rehabilitation and Speech Therapists in Japan、北京/中国、2012.5.5.
城間将江：Asian Training Programs in Audiology and Phoniatrics. 20th IFOS World Congress, Seoul/Korea, 2013.6.4
城間将江：Education for Speech Language Pathologist. 29th World Congress of IALP, Trino/Italia, 2013.8.28
前新直志：国際流暢性学会(International Fluency Association)視察 Embracing Our Differences, Sharing Perspectives on Stuttering and Cluttering. 2015, Portugal Lisbon, 2015.7.6-8

2．公的協力（JICA）氏名、出張先、目的、日時

柴本勇　JICA中国中西部リハビリテーション人材育成プロジェクト派遣（2011年10/10-15）
内田信也　JICA中国中西部リハビリテーション人材育成プロジェクト派遣（2011年12/10-17）
遠藤重典　JICA中国中西部リハビリテーション人材育成プロジェクト派遣（2012年3/25-4/1）
城間将江　JICA中国中西部リハビリテーション人材育成プロジェクト派遣（2012年12/9-12/15）
阿部晶子　JICA中国中西部リハビリテーション人材育成プロジェクト派遣（2013年1/13-19）

3．国際学会などの委員　氏名、委員、期間

城間将江　International Phoneatric Logopedic Association ST養成教育委員
城間将江　Society of Asian Pacific Cochlear Implant and Related Sciences 理事
城間将江　Asia Pacific Society for the Study of Speech, Language, and Hearing 理事、広報委員長
柴本勇　Asia Pacific Society for the study of Speech, Language, and Hearin 理事・監事
前新直志　The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering（吃音・クラタリング世界合同会議）．日本国内プログラム委員長

4．国際学会学術発表　演者名、発表演題名、学会研究会名、日時、場所

【2011】

（論文発表）

・Urano M, Anamizu S, Mimura M Plural Information Processing and a Large Neural Network Are Necessary for Numerical Processing. European Neurological Journal Vol. Ⅲ(1) 2012.

（学会発表）

・Hirashima Y, Shiroma M. Communication Breakdown and the use of Communication Strategies on cochlear implant children in oral conversation The 8th Asian Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences EXCO Daegu, Korea 2011.10.25- 27

・Harashima T, Obuchi C, Shiroma M. Artifacts in the auditory middle latency responses in an adult cochlear implant user. The 8th Asian pacific symposium on cochlear implant and related sciences, 2011. 10. 27, Daegu, Korea

・Minami S, Kaga K, Takegoshi H, Shiroma M, Shinjo Y, Enomoto C. Cases of profound hearing loss secondary to enterohemorrhagic escherichia coli infection in two children The 8th Asian Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences EXCO Daegu, Korea 2011. 10. 25-27

・Obuchi C, Harashima T, Shiroma M. Auditory evoked potentials under active and passive hearing conditions in adult cochlear implant users The 8th Asian pacific symposium on cochlear implant and related sciences, 2011. 10. 27, Daegu, Korea

・Ohgane S, Shiroma M, Obuchi C, Kikucti Y. The ability of perception of melody including the identification of melodic contour patterns in Cochlear Implant Users and Hearing Aid Users. The 8th Asia Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences、Korea、2011. 10. 28

・Sakamoto K, Obuchi C, Ikezono T, Shiroma M. The correlation between temporal resolution and individual backgrounds in cochlear implants. The 8th Asian pacific symposium on cochlear implant and related sciences, 2011. 10. 27, Daegu, Korea

・Shiroma M. Habilitation of Cochlear Implant Children with Special Needs: Focusing on Autism Spectrum Disorders The 8th Asian Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences EXCO Daegu, Korea 2011. 10. 25- 27

(座長)

・Shiroma M. New Trends in Hearing Implant Sciences: Language Development of CI children 第73回耳鼻咽喉科臨床学会 サテライトシンポジウム白馬東急ホテル 長野県白馬 2011. 6. 25-26

【2012】

(論文発表)

・Saigusa H, Tnuma K, Niimi S, et al : Fiber arrangements of the vertical lingua muscle in human adult subjects. European Journal of Anatomy, Vol. 16, No. 3, 177-183, 2012.

・Saigusa H, Yamaguchi S, Niimi S, et al : Surgical Improvement of Speech Disorder Caused by Amyotrophic Lateral Sclerosis. The Tohoku Journal of Experimental Medicine, Vol. 228, No. 4, 267-376, 2012.

・Obuchi C, Harashima T, Shiroma M : Auditory evoked potentials under active and passive hearing conditions in adult cochlear implant users. Clinical & Experimental Otorhinolaryngology 5(S), 6-9, 2012.

(学会発表)

・Harashima T, Obuchi C, Ohgane S & Shiroma M. uditory middle-latency responses in elderly persons: A case of abnormal waveforms. Adult Hearing Screening Conference, The second meeting, 2012. 6. 8, Como lake, Italy

・LaSalle L, Huffman G, Groher M, Maeara N, Shibamoto I : Selecting basic units for sample analysis of Japanese stuttering. 2012 ASHA Convention Atlanta USA Nov. 2012

・Obuchi C, Harashima T, Ohgane S & Shiroma M. Central auditory processing in aging and hearing handicap in everyday life. Adult Hearing Screening Conference, The second meeting, 2012. 6. 8, Como lake, Italy

・Ohgane S, Obuchi C, Harashima T, & Shiroma M Music discrimination performance in elderly persons. Adult Hearing Screening Conference, The second meeting, 2012. 6. 8, Como lake, Italy

(座長)

・Niimi S. : Phonosurgery East Asian Conference on Phonosurgery. Korea. 2012.11.30-12.1

【2013】

(学会発表)

・Hirashima Y, Shiroma M: Effective Communication repair strategies by adults when communication breakdown occurs with Cochlear implant children. The 9th Asia Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences, 2013.11.27. Hyderabad/India.

・Hirata A, Shibamoto I. Effect of attention and bolus temperature on swallowing reflex. 9th Asia Pacific conference Speech Language and Hearing (APCSLH2013) , 2013.11.2, Taiwan

・Matsumoto Y, Maruyama Y, Shiroma M, Music Activities for Cochlear Implant Recipients in Japan. The 9th Asia Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences, 2013.11.27. Hyderabad/India.

・Ohgane S, Obuchi C, Shiroma M : Identification of melody in two different frequency bandwidths for cochlear implant recipients. The 9th Asia Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences (APSCI 2013), 2013.11.28 Hyderabad, India

・Sakamoto K, Obuchi C, Shiroma M, Matsuda H, Sugizaki K, Shindou S, Ikezono T:Auditory temporal processing in cochlear implant users -Effectiveness of time compressed speech and individual backgrounds. 29th Politzer Society meeting, 2013.11.15. Antalya, Turkey.

・Shibamoto I, Zhang Q, Hirata A, Li S, Groher M: The effect of volitional control on swallowing-generated sounds in healthy adults. 9th Asia Pacific conference Speech Language and Hearing (APCSLH2013) , 2013.11.2, Taiwan

・Shibamoto I : The effect of volitional control on swallow-generated sounds in healthy adults、9th Asia Pacific Conference in Speech, Language and Hearing -APCSLH 2013、2013.10.31-11.2、Taiwan

・Shiroma M:The scope of Speech Language and Hearing Therapy in Japan. 9th Asian Pacific Conference on Speech Language Pathology and Hearing, 2013.11.1. Taichon/Taiwan.

(座長)

・Shiroma M:Education of Speech Language Pathology and Audiology in Asia. 9th Asian Pacific Conference on Speech Language Pathology and Hearing, 2013.11.2. Taichon/Taiwan.

【2014】

(著書)

・Kaga K ed : Vertigo and Balance Disorders in Children. Springer, 2014

(論文発表)

・Kaga k, Fukami T, Masubuchi N, Ishikawa B: Effects of button pressing and mental counting on N100, N200, and P300 of auditory-event-related potential recording. Int Adv Otol, 10(1), 14-18, 2014

(学会発表)

・Hirashima Y, Shiroma M: Effective Communication repair strategies by adults when communication breakdown occurs with Cochlear implant children. The 9th Asia PacificSymposium on Cochlear Implant and Related Sciences, 2013.11.27. Hyderabad/India.

・Isogai Y, Shono N, Niimi S, Fukuda H: Video-Endoscopic Laryngo-Surgery (VELS) through a forceps channel of the hood-attached video-hypopharyngeal scope with an airflow channel (the 4th

report). The 9th East Asian Conference on Phonosurgery, 2014.11.29, Taipei

・Matsumoto Y, Maruyama Y, Shiroma M, Music Activities for Cochlear Implant Recipients in Japan. The 9th Asia Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related Sciences, 2013.11.27. Hyderabad/India.

・Ohgane S, Shiroma M:Identification of Melody in two different frequency bandwidths for cochlear implant recipients. The 9th Asian Pacific Conference on Cochlear Implant and Related Sciences, 2013.11.27. Hyderabad/India.

・Sakamoto K, Obuchi C, Shiroma M, Matsuda H, Sugizaki K, Shindou S, Ikezono T. Auditory temporal processing in cochlear implant users -Effectiveness of time compressed speech and individual backgrounds. 29th Politzer Society meeting, 2013.11.15. Antalya, Turkey

・Shiroma M: Asian Training Programs in Audiology and Phoniatrics. 20th IFOS World Congress, 2013.6.4. Seoul/Korea.

・Shiroma M: Education for Speech Language Pathologist. 29th World Congress of IALP, 2013.8.28. Trino/Italia.

・Shiroma M:The scope of Speech Language and Hearing Therapy in Japan. 9th Asian Pacific Conference on Speech Language Pathology and Hearing. 2013.11.1. Taichon/Taiwan.

(座長)

・Niimi S (Chairperson) Special Lecture 2 18th World Congress of Broncho-Esophagology Kyoto Internatioanl Conference Center Kyoto 2014,5.15

・Niimi S (Chairperson) Free Paper 1 9th East Asian Conference on Phonosurgery National Taiwan University Hospital Tipei, Taiwan 2014.11.30

・Shiroma M(座長):Education of Speech Language Pathology and Audiology in Asia. 9th Asian Pacific Conference on Speech Language Pathology and Hearing, 2013.11.2. Taichon/Taiwan.

【2015】

(論文発表)

・Hashimoto R, Komori N, Abe M: Heading disorientation after right posteromedial infarction. Case Reports in Neurological Medicine, Article ID 396802, 2015

・Kaga K, Shinjo Y, Enomoto C, Sindo M: A case of cortical deafness and loss of vestibular and somatosensory sensations caused by cerebrovascular lesions in bilateral primary auditory cortices, auditory radiations, and postcentral gyruses-complete loss of hearing despite normal DPOAE and ABR. Acta Oto-Laryngologica, 135, 389-94, 2015

・Kaga K:Auditory nerve disease and auditory neuropathy spectrum disorders. Auris Nasus Larynx, 43(1), 10-20, 2016

・Wasano K, Mutai H, DVM, Obuchi C, Masuda S, Matsunaga T. A novel frameshift mutation in *KCNQ4* in a family with autosomal recessive non-syndromic hearing loss. Biochemical and Biophysical Research Communications, 2015

・Obuchi C, Shiroma M, Ohgane S, Kaga K. Binaural integration ability in bilateral cochlear implant user. Journal of otology, 10, 150-153, 2015

(学会発表)

・Hirashima Y, Shiraoma M. The use of communication repaired strategy in cochlear implant children Asia Pacific Cochlear implant and related sciences中国、北京、2015年4.30-5.3

・Hirata A, Shibamoto I : Duration between suprahyoid muscle contraction and thyroid cartilage elevation in dry swallow and water swallowing. 10th Asia Pacific Conference on speech,

language and hearing, Yhei Hotel, China/Guangzhou, 2015.10.10.

- Minami S, Enomoto C, Masuda T, Obuchi C, Shiroma M, Kaga K. Evaluation by CT and MRI imaging, vestibular function and EABR for cochlear nerve deficiency 20 cases. 16th Japan-Korea Joint Meeting of Otorhinolaryngology- Head and Nech Surgery. 2016.3. 29, Tokyo Shibuya
- Obuchi C, Shiroma M, Ohgane S, Kaga K, Nakamura M, Iwasaki S. Binaural integration abilities in bilateral cochlear implant user. The 10th Asian pacific symposium on cochlear implant and related sciences, 2015. 5. 2, Beiging, China.
- Ohgane S, Obuchi C, Shiroma M, Harashima T. Relationship between melody perception and music preference of cochlear implant children. Asia Pacific Society of Speech, Language and Hearing. 2015.10.10. Guangzhou, China.
- Shiroma M : The States of Japanese Speech Language Therapists、The 9th Asia Pacific Symposium on Speech Language Hearing。広州、中国：2015.10.8-11
- Shiroma M : Current States of SLP Education in Japan/ American Speech Language Hearing Conference2015.Dever, Colorado. 2015.11.12-15

【2016】

(論文発表)

- Kaga K, Asato H: Sound lateralization test in patients with unilateral microtia and atresia after reconstruction of auricle and external canal and fitting of canal-type hearing aids. Acta Otolaryngol, 136 (4) : 368-372, 2016

(学会発表)

- Harashima T, Obuchi C, Ohgane S. Unique inclusive education in Singapore, France, and Germany for persons with a hearing handicap. 12th Asia pacific congress on deafness. 2016.7.9, Christchurch, New Zealand.
- Obuchi C, Harashima T. Assessment system for people with auditory processing disorder in Japan. 12th Asia pacific congress on deafness. 2016.7.9, Christchurch, New Zealand.
- Obuchi C. Personality traits in adults with auditory processing disorder. 31th International congress of psychology. 2016.7.27. Yokohama, Japan.
- Ohgane S, Obuchi C, Shiroma M, Tsuneo H : Comparisons of music perception with Hearing aids and after Cochlear implantation in a post-lingually deafened adult. 28th Australian and New Zealand Conference for Educators of the Deaf (ANZCED) and the 12th Asia Pacific Congress on Deafness (APCD).2016.7.9, Christchurch, New Zealand
- Oshima M, Obuchi C. Support to mothers caring for their hard of hearing infants on early education. 12th Asia pacific congress on deafness. 2016.7.9, Christchurch, New Zealand.
- Watanabe M, kenjo M, Watanabe T, Maeara N : Guidance to children who stutter accompanied by unnatural pauses. 30th World Congress of the IALP. 21-25 August 2016. Dublin Ireland

【2017】

(著書)

- Kaga K, ed. Cochlear implantation in children with Inner ear malformation and cochlear nerve deficiency. Tokyo, Springer, 2017

(論文発表)

- Kaga K, Asato H. Sound lateralization ability of patients with bilateral microtia and atresia after bilateral reconstruction of auricles and external auditory canals and fitting of new

canal-type hearing aids to replace a bone conduction hearing aid. Acta Otolaryngol, 2017;137(4):370-374.

・Obuchi C, Ohgane, S, Sato Y, Kaga K. Auditory symptoms and psychological characteristics in adults with auditory processing disorders. Journal of Otology, 2017;12:132-137.

(学会発表)

・Abe M, Komori N, Kawada T, Yoshida T, Uechi M: Semantic/lexical processing of unreported words in a patient with left unilateral spatial neglect. 10th Asia Pacific Conference of Speech, Language, and Hearing (APCSLH 2017) , Narita, Japan. 2017.9.19

・Ban X, Obuchi C, Shiroma M. Comparing Japanese and Chinese support for hard of hearing people. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.19. Narita, Japan.

・Ishigami S, Motoyama M, Sakamoto A, Maeara N : Speech and language communication for children with down syndrome, 10th Asia Pacific Conference of Speech, Language, and Hearing (APCSLH 2017) , Chiba／Narita, 2017.17-19

・Hashimoto R, Komori N, Tagawa A, Ogawa T, Katoh H, Yumura W: Egocentric and allocentric spatial representation in aMCI and Alzheimer' s disease. XXIII World congress of Neurology. Kyoto International conference hall. Kyoto. 2017.9.16.

・Hirata A : The effects of preoral sensorimotor cues on swallowing reflex, . 10th Asia Pacific Conference on speech, language and hearing, International University Health and Welfare, 日本／成田市, 2017.9.19

・Hirata A , Shibamoto I:Tongue and Palate Contact during Cup and Straw drinking observing with Electropalatography, Dysphagia research society 26th Annual Meeting, Boltimore , Maryland ,USA, 2018.03.15

・Iwasaki J, Azegami Y. Atypical gaze following in Autism Spectrum Disorders in the novel word acquiring. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Hearing and Language. International University of Health and Welfare, Narita, Japan.

・Kimura Y, Masuda T, Minami S, Kaga K. Vestibular function and gross motor development in 195 children with congenital hearing loss-Assessment of inner ear malformations-. IFOS ENT World Congress 2017, 2017.6.24-28, Paris

・Koide C, Obuchi C, Suganami S, Ohgane S, Kaga K. Narrative development and intervention effect in preschool children with hearing loss. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.17. Narita, Japan

・Komori N, Fujita I; Relationships in sign and orthography -a case with sign language aphasia. 10th Asia Pacific Conference of Speech, Language, and Hearing 2017. Chiba, Narita. 2017.9.19.

・Kubota E, Iwasaki S, Takahashi M, Furutate S, Shinagawa J, Sakurai A, Obuchi C, Shiroma M. Effect of cochlear implantation for a patient with mild dementia. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.19. Narita, Japan.

・Ochiai Y, Maeara N, Ono T, Hori K, Fujiwara S : Analysis of contact pressure on the tongue-posterior lateral part of the palate during articulation, 10th Asia Pacific Conference of Speech, Language, and Hearing (APCSLH 2017), Chiba／Narita, 2017.9.17-19

・Ohgane S, Harashima T, Obuchi C, Shiroma M, Kaga K. A study on music perception using a pure tone for children with cochlear implant. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.19. Narita, Japan.

・Oshima M, Obuchi C. Support to mothers caring for their hard of hearing infants on early

education. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.19. Narita, Japan.

- Sakamoto K, Obuchi C, Matsuda H, Seki E, Araki R, Ikezono T, Shiroma M. Speech perception of natural fast speech by cochlear implant and hearing aid users. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.17. Narita, Japan.
- Sasaki K, Azegami Y. The comprehension of words indicating feelings by high functioning Autism Spectrum Disorder - Focusing on ONOMATOPOEIA -. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Hearing and Language. International University of Health and Welfare, Narita, Japan.
- Sato T, Fujita I : Comprehension of figurative language in Alzheimer's disease. 10th Asia Pacific Conference of Speech, Language, and Hearing (APCSLH 2017), Narita, Japan. 2017.9.19
- Sato Y, Obuchi C, Shiroma M, Ohgane S, Kaga K. Speaker discrimination in everyday life for children using hearing aids and cochlear implants. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.17. Narita, Japan.
- Suganami S, Obuchi C, Shiroma M, Kaga K. Evaluation of speech discrimination in infants by visual reinforcement audiometry. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.18. Narita, Japan.
- Yamamoto Y, Obuchi C, Sato Y, Shiroma M. Validation of auditory temporal resolution measurements for use in infants with sensorineural hearing loss. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.18. Narita, Japan.

(座長)

- Kaga K. (Moderator) Educational Seminor 1. "A look into the crystal ball for children who are deaf or hard of hearing: Needs, opportuniteis and challenges". 10th Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing, 2017.9.17, Narita
- Kaga K. Moderator: Section III. Life Science advanced Forum/ The 2nd International Advanced Forum on Auditory Neuropathy, 2017.11.3, Stockholm

5. 講演

【2011】

- Shiroma M. Status of Japanese Education on Speech-Language Pathology and Audiology. Korea Nazarene University, Korea, 2011.10.28.
- 柴本勇：「Dysphagia Rehabilitation in Neurogenic Disorders」 3rd conference of SLP in China 青海 2011年7月1日—4日

【2012】

- Shibamoto I : Cortical representation during oral preparation and oropharyngeal transport in solid and liquid bolues 、第17回/18回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会 English session、2012.8.31、北海道札幌市
- Huffman G, Lasalle L, Groher ME, Maeara N, Shibamoto I : Selecting basic units for sample analysis of Japanese stuttering, 2012 ASHA Convention、2012.11.15、Atlanta, USA

【2015】

- Kaga K. Historical development of Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery. 13th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery. Keynote

Lecture, 2015.12.3, Tokyo

【2017】

・Kaga K. 156 years of Jefferson Medical College and Japan in the medicine and medical education -From Prof. Gross to Prof. Gonnella-. 5th Anniversary of the Japan Center for Health Professions Education and Research at part of Japan Week. 2017.5.3, Philadelphia

・Kaga K, Minami S, Kimura Y. Symposium EQSYMPO07/ Vestibular ocular reflex and development of gross motor function in children with inner ear malformation ～Focusing common cavity～. IFOS ENT World Congress 2017, 2017.6.27, Paris

・Kaga K. Development of balance function in deaf infants and children. Karolinska University' s Lecture, 2017.11.1, Karolinska

・Kaga K. Auditory neuropathy and auditory neuropathy spectrum disorders. Life Science advanced Forum/ The 2nd International Advanced Forum on Auditory Neuropathy, 2017.11.2, Stockholm

・Kaga K. (Special Lecture) Who is Philipp Franz Balthasar von Siebold? What did Siebold contribute for Japan and World? The 9th Siebold Memorial Symposium on Hearing Implants, 2017.11.24, Yokohama

・Obuchi C. Assessment and management for people with listening problems. 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing. 2017.9.19. Narita, Japan

6．その他

言語聴覚学科では、2017年度に初めて2名の留学生（台湾、ミャンマー（IUHW奨学生））が入学した。学科では留学生担当の教員を2名配置し、履修および大学生活をサポートする体制を整えた。

（5）保健医療学部　視機能療法学科

1．業務出張

- 新井田孝裕、元培医事科技大学（Hsinchu, Taiwan）でのVIth International Students Academic Conference, 2013.3.20-22 での学生引率.
- 新井田孝裕、元培医事科技大学（Hsinchu, Taiwan）の設立 50 周年記念式典出席. 2014.11.6-9
- 鎌田泰彰、台湾、海外保健福祉事情研修の引率、2016.8.4-8.14
- 伊藤美沙絵、オーストラリア、海外保健福祉事情研修（Griffith University）の引率、2017.1.28-2.10
- 新井田孝裕、元培医事科技大学（Hsinchu, Taiwan）でのXth International Students Academic Conference, 2017.3.24-26 での学生引率.

2．公的国際協力

3．国際学会などの委員

- 原　直人. International Programming Committee (IPC) and symposium organizers for the International Society Autonomic Neuroscience (ISAN) in 2017

4．国際学会学術発表

・鈴木賢治、四之宮佑馬、小町祐子、山田徹人、新井田孝裕、Comparison of Visal Acuity and Contrast Sensitivity in Normal Young Subjects, XIIth International Orthoptic Congress, 2012.6.26-29, Toronto, Canada

・四之宮佑馬、山田徹人、鈴木賢治、小町祐子、新井田孝裕、Saccadic reaction times in alternating cover, XIIth International Orthoptic Congress, 2012.6.27, Toronto Canada

・小町祐子、新井田孝裕、鈴木賢治、山田徹人、四之宮佑馬、恩田幸子、下泉秀夫、The assessment of visual functions in individuals with severe motor and intellectual disabilities and the role of orthoptists in their intervention, XIIth International Orthoptic Congress, 2012.6.27, Toronto Canada

・平山真奈美(学部 3 年生)、Importance of Children' s Vision Screening in the Development of Vision: My Practical Experience in Vision Screening for Children, VIth International Students Academic Conference, 2013.3.20, Hsinchu, Taiwan

・原　直人. The mesuaring between preoperative and postoperative near response to 3 dimensional images and surgical outcomes in intermittent exotropia. The 12th Meeting of the International Strabismological Association ISA2014.　in Kyoto.

・鈴木賢治、新井田孝裕、四之宮佑馬、内山仁志、小町祐子、望月浩志、Objective assessment of visual functions in individuals with severe motor and intellectual disabilities, Asia-ARVO 2015, 2015.2.16-19, Yokohama, Japan

・伊藤美沙絵、Changes over time in visual acuity in Ogasawara Islands, Japan. 13th International Orthoptic Congress, 2016.6.26-7.2, Rotterdam, Neth.

・伊藤美沙絵、Relationship between corneal and ocular higher-order wavefront aberrations and age in children. 13th International Orthoptic Congress, 2016.6.26-7.2, Rotterdam, Neth.

・伊藤美沙絵、Effect of astigmatic blur on kinetic visual acuity and eye-hand coordination. 13th International Orthoptic Congress, 2016.6.26-7.2, Rotterdam, Neth.

・中島遥（学部 3 年生）、Evaluation of effect of vision screening on visual function in preschool children, Xth International Students Academic Conference, 2017.3.24, Hsinchu, Taiwan.

・伊藤美沙絵、Long-term outcomes of pseudophakic monovision: ten-year follow up study, American Society of Cataract and Refractive Surgery 2017, 2017.5.4-5.7 Los Angeles, USA.
・鎌田泰彰、原直人、Choroidal structure analysis of Parkinson's syndrome by Binarization of Optical Coherence Tomography, The International Society for Autonomic Neuroscience 2017, 2017.8.30-9.2, Aichi, Japan
・原直人 (Chair) Change of autonomic nervous system associated with vision due to stress. The International Society for Autonomic Neuroscience 2017, 2017.8.30-9.2 Aichi, Japan.
・原直人 The effect of the digital devise with prolonged screen time on near response and on autonomic nervous system. The International Society for Autonomic Neuroscience 2017, 2017.8.30-9.2 Aichi, Japan
・原直人. Scientific basis for comfortable treatment methods for the face-Botulin therapy for the blepharospasm and periocular thermotherapy for fatigue as the comfortable therapeutic method for the face. The International Society for Autonomic Neuroscience 2017, 2017.8.30-9.2 Aichi, Japan
・原直人 Differences in accommodative response and pupillary constriction of near response with refractive errors. The International Society for Autonomic Neuroscience 2017, 2017.8.30-9.2 Aichi, Japan

（6）保健医療学部　放射線・情報科学科

1．業務出張

・室井健三：台湾、海外保健福祉事情学生引率、2011.8.3～8.16
・勝俣健一郎：山本智朗、韓国、放射線・情報科学科 韓国研修(高麗大学、延世大学セブランス病院)、2011.9.4～9.8
・山本智朗：アメリカ、日本放射線技術学会 平成23 年度海外短期留学（スタンフォード大学)、2011.9.21～2012.1.21
・室井健三：アメリカ、日本放射線技術学会 平成24年度海外研修派遣(スタンフォード大学)、2012.7.22～7.29
・室井健三：台湾、海外保健福祉事情学生引率、2012.8.7～8.20
・山本智朗、丸山純人：韓国、放射線・情報科学科 韓国研修(高麗大学、延世大学セブランス病院)、2012.9.9～9.13
・西木雅行：タイ、海外保健福祉事情学生引率、2013.8.6 ～8.19
・室井健三、丸山純人：韓国、放射線・情報科学科 韓国研修(高麗大学、延世大学セブランス病院)、2013.9.9～9.12
・丸山純人：アメリカ、日本放射線技術学会 平成26年度海外研修派遣(スタンフォード大学)、2014.7.21～7.28
・丸山純人：韓国、放射線・情報科学科 韓国研修(高麗大学、延世大学セブランス病院)、2014.8.24～8.27
・荒川哲：ベトナム、海外保健福祉事情学生引率、2014.8.31～9.14
・西木雅行：シンガポール、海外保健福祉事情学生引率、2015.2.27～3.5
・荒川哲：ベトナム、海外保健福祉事情学生引率、2015.8.30～9.13
・西木雅行：シンガポール、海外保健福祉事情学生引率、2015.9.1～ 9.11
・三輪建太：アメリカ、米国核医学会2016、2016.6.11～6.15
・岡村直利：イギリス、The XXVII International Conference on Neutrino Physics and Astrophysics への出席、2016.7.4～7.9
・細貝良行：スペイン、ヨーロッパ核医学会16、2016.10.15～10.19
・三輪建太：アメリカ、米国核医学会2017、2017.6.10～6.14
・三輪建太：台湾、海外保健福祉事情学生引率、2017.8.7～8.17
・丸山純人：オーストラリア、海外保健福祉事情引率、2017.8.26～9.8
・細貝良行：オーストリア、ヨーロッパ放射線学会、2018.2.28～3.4

2．公的国際協力

・金場敏憲：国際医療技術交流財団 講師、2011、2012
・金場敏憲：JICA 医療技術集団研修 講師、2011、2012
・金場敏憲：国際医療技術交流財団 セミナー企画運営委員、2011、2012

3．国際学会などの委員

・山本智朗：Medical Olympic Association, Advisor of Japan 2011
・鈴木元：ICRP 翻訳委員会（RI 協会）委員、2014、2015
・鈴木元：UNSCEAR 国内対応委員会（放射線医学総合研究所）委員、2014、2015

4．国際学会学術発表

・T Koike, et al. A new gamma camera with a Gas Electron Multiplier. 2nd International

Conference on Micro Pattern Gaseous Detectors Seaside 2011, Japan(神戸)

- T Koike, et al. A New Gamma Camera with a Gas Electron Multiplier. IEEE Nuclear Science Symposium 2011, Spain
- 山本智朗. Measurement of environmental radiation dose due to accident at Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant. International Symposium on Environmental monitoring and dose estimation of residents after accident of TEPCO' s Fukushima Daiichi Nuclear Power Stations 2012, Japan(京都)
- 西木雅行. Evaluation of the effective focal spot size of x-ray tubes by utilizing edge response analysis. SPIE Medical Imaging 2015, San Diego USA
- Kenta Miwa, et al. Development of a normalization template for quantitative analysis of bone SPECT/CT images. SNMMI 2016, San Diego USA
- Kenta Miwa, et al. Comparison of a novel index using anatomical standardization based on statistical Z-scores and standardized uptake values for quantitative bone SPECT/CT. SNMMI 2017, Denver USA
- Kenta Miwa. Review of standardization and harmonization for PET image acquisition and standardized uptake value(招待講演). The 12th Asia Oceanian Congress of Nuclear Medicine and Biology 2017, Japan(横浜)
- 西木雅行, 他. Use of high purity aluminum filter with different processing methods in the DQE measurement. SPIE Medical Imaging 2018, Houston USA

（7）医療福祉学部　医療福祉・マネジメント学科

1．業務出張

なし

2．公的国際協力

なし

3．国際学会などの委員

なし

4．国際学会学術発表

・水島洋,佐藤洋子,筒井久美子,河野真一,小林修三, MEASURING SIRTUIN MRNA LEVEL IN BLOOD FOR HEALTH SCORE 11th World Congress on Polyphenols Applications:Vienna Polyphenols 2017.6.20-21, University of Vienna, Austria

・滝澤雅美, The Educational System at the International University of Health and Welfare, International Federation of Health Information Management Associations, 2016.10.11, Tokyo

・西堀眞弘, Medical Application of Multispectral Imaging. International Workshop on Artificial Life and Robotics; AROB WS, 2017.09.07, Busan, Korea

・小川俊夫, 滝澤雅美, et al, Utilization of ICD classification in Japan: Comparative analysis between ICD and a disease classification for clinical practices, WHO-FIC Network Annual Meeting 2017, WHO-FIC Network Annual Meeting, 2017.10.16-21, Mexico City, Mexico

・西堀眞弘,田中博, A Novel evidence-based laboratory medicine in the era of the big data and AI. 29th World Congress of Pathology and Laboratory Medicine; WASPaLM 2017.11.17, Kyoto, Japan

（8）薬学部薬学科

1．業務出張

・角南　明彦、アメリカ（サンディエゴ）、シカゴ大、現地民間企業との共同研究に関する打合せ、2012.2.29
・山田　治美、フランス（パリ）、厚生労働省保険局医療課による委託事業　薬剤使用状況等に関する調査研究、2013.1.28-2.3
・山田　治美、フランス（パリ）、厚生労働省保険局医療課による委託事業　薬剤使用状況等に関する調査研究、2014.1.26-2.1
・山田　治美、フランス（パリ）、厚生労働省保険局医療課による委託事業　薬剤使用状況等に関する調査研究、2015.2.8-2.15
・渡邊　敏子、オーストラリア（クイーンズランド）、授業「海外保健福祉事情」のオーストラリア海外研修で学生を引率、2015.8.29-9.10
・清水　貴壽、オーストラリア（クイーンズランド）、授業「海外保健福祉事情」のオーストラリア海外研修で学生を引率、2016.1.29-2.11
・山田　治美、フランス（パリ）、厚生労働省保険局医療課による委託事業　薬剤使用状況等に関する調査研究、2016.1.31-2.7
・藤井　幹雄、オーストラリア（クイーンズランド）、授業「海外保健福祉事情」のオーストラリア海外研修で学生を引率、2016.8.8-8.20
・山田　治美、フランス（パリ）、厚生労働省保険局医療課による委託事業　薬剤使用状況等に関する調査研究、2017.1.29-2.5
・角南　明彦、シンガポール、授業「海外保健福祉事情」のシンガポール海外研修で学生を引率、2017.2.25-3.6
・中村　裕義、ベトナム（ハノイ）、ビンメック国際病院事前調査団として当該病院を視察、2017.2.26-3.4
・三浦　隆史、中国（北京）、授業「海外保健福祉事情」の中国海外研修で学生を引率、2017.8.3-8.14
・藤井　幹雄、オーストラリア（クイーンズランド）、授業「海外保健福祉事情」のオーストラリア海外研修で学生を引率、2017.8.27-9.8

2．公的国際協力

3．国際学会などの委員

・佐藤　忠章、Academic Editor of Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine

4．国際学会学術発表

・角南　明彦、Sunami A: Drug-binding sites of cardiac sodium channel. 4th Asia Pacific Heart Rhythm Society Scientific Session, 福岡、2011.9.20
・武田　弘志、Takeda H: Evaluation method of the effect of nutrition and food composition on brain function – utility of behavioral and pharmacological technique –. ILSI Japan 30th Anniversary/The 6th International Conference on Nutrition and Aging, 東京、2011.9.28-9.30
・角南　明彦、Ishikawa M, Katayama N, Kawakubo A, Somjai K, Sunami A: Preferential block of cardiac sodium channels by flecainide. Biophysical Society 56th Annual Meeting, San Diego, USA, 2012.2.25-2.28
・角南　明彦、Sunami A: The pore structure of sodium channel determined by toxin- and drug-binding. American Heart Association Annual Research Forum, Chicago, USA, 2012.3.1

・髙石　雅樹、浅野　哲、Takaishi M, Tanaka Y, Otake A, Ikeda K, Numata A, Oikawa M, Takeda T, Asano S: Effects of applying cold or warm compress to skin lesions induced by extravasation of anticancer drugs. The 6th International Congress of Asian Society of Toxicology, 仙台、2012.7.17-7.20

・宮川　和也、武田　弘志、Umeda A, Okada Y, Yamane T, Ieiri T, Miyashita Y, Ueda R, Sato A, Takeda K, Yonemaru M, Kiyofuji K, Watanabe T, Kadowaki H, Miyagawa K, Takeda H, Kubota N, Kadowaki T: Prevalence of diabetes and impaired glucose tolerance in patients with sleep apnea syndrome. The 18th Congress of the Asian Pacific Society of Respirology, 横浜、2013.11.11-11.14

・宮川　和也、武田　弘志、Umeda A, Kato T, Mochizuki T, Watanabe T, Yamane T, Miyagawa K, Takeda H, Okada Y: Effect of incomplete smoking cessation with varenicline or nicotine patch on vascular endothelial function as assessed by flow-mediated vasodilation. The 19th Congress of the Asian Pacific Society of Respirology, Bali, Indonesia, 2014.11.13-11.16

・齋藤　淳美、宮川　和也、武田　弘志、Umeda A, Okada Y, Yamane T, Ieiri T, Mochizuki T, Watanabe T, Kadowaki H, Takeda K, Saito A, Miyagawa K, Takeda H, Kubota N, Kadowaki T: Does intermittent hypoxia always produce weight loss in mice? The 21st Congress of the Asian Pasific Society of Respirology, Bangkok, Thailand, 2016.11.12-11.15

・宮川　和也、齋藤　淳美、武田　弘志、Umeda A, Yamane T, Mochizuki T, Watanabe T, Inoue Y, Miyagawa K, Saito A, Takeda H: Effect of once-a-day use of inhaled steroid (fluticasone furoate) combined with a long-acting beta-2 agonist (vilanterol) on bronchial asthma - before-after study on the switch from previous treatments -. The 22nd Congress of the Asian Pasific Society of Respirology, Sydney, Australia, 2017.11.23-11.26

・多田納　豊、八木　秀樹、Tatano Y, Kanehiro Y, Yamabe S, Sano C, Shimizu T, Yagi H, Tomioka H: ATP has antimicrobial activity based on the chelating action of the ferric ions and shows its combined effect with anti-*Mycobacterium avium* complex drugs. 30th International Congress of Chemotherapy and Infection, Taipei, Taiwan, 2017.11.24-11.27

（９）小田原保健医療学部看護学科

１．業務出張

氏名	国	目的	期日
青柳　美樹	シンガポール	「海外保健福祉事情」学生引率	2016.1.29～2.11
青柳　美樹	オーストラリア	「海外保健福祉事情」学生引率	2018.1.27～2.9
谷山　牧	シンガポール	「海外保健福祉事情」学生引率	2018.2.24～3.5

２．公的国際協力

なし

３．国際学会などの委員（2016 年度研究活動報告書より抜粋）

山下留理子　国際看護交流協会、国際看護研究会

衣川さえ子　国際看護師協会（ICN）、国際助産師連盟（ICM）

青柳美樹　国際保健医療学会、日本渡航医学会（評議員、看護部会運営委員）

鳥本靖子　Gerontological Society of America(米国老年学会)

山本佳代子　国際リハビリテーション看護研究会（事務局、会計担当）

４．国際学会学術発表

発表者･座長等	研究題目	学会･研究会等の名称	開催場所(会場名，施設名)	開催地（県／市）	発表年月日
Ryuji Ichinoyama, Masashi Kawano, Kiyoko Funasaki, Eiichi Ueno, Junko Ishikawa, Noriko Katayama, Jumpei Matsuura, Yukiko Ageno, Takako Sogaya, Michel Galbraith	Examination of nurse's communication skills in role playing	The3rdKorea-China-Japan Nursing Conference	Ewha Womans University	Korea/ Soul	2011.10.25-10.27
Nagaoka, Y. Kishida, S. Shimizu K.	Trend in Pregnancy After Infertility Treatment ;A Literature Review-	第56回日本生殖医学会学術講演会	54（4）	p303(431)	2011.12
青柳美樹（ファシリテーター）	災害時における健康管理	国際看護研究会第14回学術集会	JICA広尾	東京都	2011.9.10
Miwa I, Taniyama M, Cheng S, Shimanouchi S, Minai J.	Effectiveness of Intervention in Improving Independent Living in Elderly People Requiring	The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health	神戸市看護大学	兵庫県神戸市	2011.7.18

	Mild Care Assistance: Randomized Controlled Trial to Study the Effect on Depression.	Nursing. (Hyogo)			
富谷友枝，清水清美	The medical care needs of recipients of international donor oocytes	ASPIR（第4回アジア太平洋生殖医学会学術集会）	大阪府立国際会議場	大阪府大阪市	2012.9.1
青柳　美樹（ファシリテータ）	異文化で体験する災害	国際看護研究会	JICA横浜	横浜市	2012.9.15
Maki Taniyama, Ichiro Kai, Miyako Takahashi, Rieko Koichi.	Difficulties faced by clinical nursing educators and faculty in Japan	The 16th EAFONS	Emerald Hotel	Bangkok, Thailand	2013.2.22
Rieko Koichi, & Maki Taniyama.	Nursing support of social participation by patients with mental illnesses	The 16th EAFONS	Emerald Hotel	Bangkok, Thailand	2013.2.22
Saori Yoshioka, et.al.	Characteristics of the attitudes of mid-career nurses toward end-of-life care for end stage cancer patients and their families in Japan (Poster)	7th Conference of East Asian Forum of Nursing Scholars	Century Park Hotel	Philippines Manila	2014.2.21
Mikako Arakida, , Miki Aoyagi , Kimie Otani , Ruriko Yamashita	Current Activities and Cooperation of Childcare Support for Parents With Mental Health Problems: An Investigation into Maternal and Child Health and Mental Health Department in Health Centers	the 21st IUHPE World Conference on Health Promotion	attaya	Thailand	2014.8.26-29
Maki Taniyama,,Rieko Koichi, Ruriko Yamashita, Saori Yoshioka	Poverty and Nursing in Japan Difficulties Faced by HomeVisit Nurses Who Care for Elderly Werfare Recipients and Potential Solution	EAST ASIAN FORUM OF NURSING SCHOLARS 17TH INTERNATIONAL CONFERENCE	Century Park Hotel	Manila, Philippines	2014.2.20-21

Masako Saito,Yoshiko Nagao, Yuko Takayama, Yumi Kondo, Mari Suenaga , Hayami Hayashida , Kiyoko Hayashi Emiko Kawauchi, Sayaka Tsuchiya, Emiko Suzui, Yuka Iio, Kazutomo Ohashi	Mother-child interaction assessment at one-month postpartum-Using Japanese version of Nursing Child Assessment Teaching Scale (JNCAST) -	East Asian Forum of Nursing Scholars 17th International Conference	Century Park Hotel,	Manila, Philippines	2014.2.20-21
Yoshioka, S., & Taniyama, M	Characteristics of the attitudes of mid-career nurses toward end-of-life care for end- stage cancer patients and their families in Japan.	Century Park Hotel, Manila	Century Park Hotel, Manila	Manila, Philippines.	2014.2.21
Taniyama, M., Koichi, R., Yamashita, R., & Yoshioka, S.	Poverty and nursing in Japan: Difficulties faced by home visit nurses who care for elderly welfare recipients and potential solution	EAFONS 17th international conference	Century Park Hotel, Manila	Manila, Philippines.	2014.2.21
Kimie Otani, Mikako Arakida, Mayumi Sato, Eiko Suzuki	・The Effect of Daily Uplifts on Health Promotion: Review of the Literature Using Concept Analysis	the 21st IUHPE World Conference on Health Promotion	PEACH	タイ／パタヤ	2013.8.26-29
Mikako Arakida , Kimie Otani , Mayumi Sato	Examination of the Cost-Effective of Three Health Consultation Programs for Metabolic Syndrome	the 21st IUHPE World Conference on Health Promotion	PEACH	タイ／パタヤ	2013.8.26-29
Mayumi Sato, Reiko Sato, Eiko Suzuki, Kimie Otani, Mikako Arakida	Changes in Quality of Life of Gynecology Cancer Patients after Lymphadenectomy	the 21st IUHPE World Conference on Health Promotion	PEACH	タイ／パタヤ	2013.8.26-29
Eiko Suzuki, Kazutaka Makidaira, Tomomi Azuma, Akiko Maruyama, Miyuki Saito, Mayumi Sato, Kimie Otani	The relative factor of violence toward Nurses from Inpatients	the 21st IUHPE World Conference on Health Promotion	PEACH	タイ／パタヤ	2013.8.26-29

Masako Saito,Yoshiko Nagao, Yuko Takayama, Yumi Kondo, Mari Suenaga , Hayami Hayashida, Kiyoko Hayashi Emiko Kawauchi, Sayaka Tsuchiya, Emiko Suzui, Yuka Iio, Kazutomo Ohashi	Characteristics related to mother-child interaction at one-month postpartum assessed by Japanese version of Nursing Child Assessment Satellite Training Project (JNCAST)	18th EAFONS （Abstract Book 223頁）	NTUH International Convention Center No. 2, Xuzhou Road, Zhongzheng District 100, Taipei City	Taipei City Taiwan	2015.2.2-5
内野聖子，野中恭子，大谷喜美江，吉田一子	Development of scales to determine the abilities of people who implement group reminiscence therapy	Gerontology Society of America：GSA	ワシントン・コンベンションセンター	アメリカ	2014.11.5-9
小野智佐子	RC30：Health Professions and Organizations: Issues of International Comparison The Competency of Midwives in Independent Practice: Their Supporting Mothers' Autonomy in Childrearing	ISA世界社会学会	パシフィック横浜	横浜市	2014.7.17
Yoshioka, S., Kajiyama, M., & Taniyama, M.	Characteristics of communication skills of general ward nurses for end-stage cancer patients and their families	EAFONS 18th international conference	NTUH International Convention Center	Taipei, Taiwan	2015.2.6
Taniyama, M., Koichi, R., Yamashita, R., Yoshioka, S., & Akizuki, Y.	Problems and effective supports for homeless people in Japan: views from support people	EAFONS 18th international conference	NTUH International Convention Center	Taipei, Taiwan	2015.2.5
K. Otani*1, E.Tomizawa 2, Y. Matsuda 1 , M. Arakida 1	Developing the Daily Uplifts Scale to Support Health Behavior for Workers	The21StAsianConference on Occupational Health（第21回　アジア産業保健学会会）	ヒルトン福岡シーホーク	福岡/福岡	2014.9.2 - 4

EikoTomizawa, Kimie Otani, Yuko Matsuda, Mikako Arakida	Study of eating behavior and Daily Hassles	The21StAsianConference on Occupational Health（第21回　アジア産業保健学会会）	ヒルトン福岡シーホーク	福岡/福岡	2014.9.2-4
Matsuda Yuko ,Otani Kimie , Tomizawa Eiko ,Arakida Mikako	State of Competencies for Emergency Response of Occupational Health Nurses: The Second Report of The acquisition situation of the knowledge of Emergency Response	The 21St Asian Conference on Occupational Health （第21回アジア産業保健学会会）	ヒルトン福岡シーホーク	福岡/福岡	2014.9.2-4
Eiko Suzuki, Tomomi Azuma, Yuko Takayama, et al.	Situations among novice nurses and preceptor, they cannot be assertive	Sigma Theta Tau International's 25th Internationl Nursing Research Congress	トルコ	トルコ	2014.7
Masako Saito, Yoshiko Nagao , Yuko Takayama, et al	Characteristics related to mother-child interaction at one-month postpartum assesssd by Japanese version of Nursing Child Assessment SatelliteTraining Project (JNCAST)	18th EAFONS in Taiwan	台湾	台湾	2015.2.5-6
Kazumi Aizawa	Study on the Assessment at Crise Intervention by Visiting Nurse affiliated with a Hospital -Ａｎexamination based on the model of crisis intervention for the person with mental disorder at home-	AsIan society of Human SERVICE	Community Chest of korea	Eoul,Korea	2015.9.10.14
Mikako Arakida, Kimie Otani, Yuko Matsuda, Motomi Negishi, Saori Yoshioka, Ciyo Igarashi, Tomomi Miyoshi, Miki Aoyagi, Hiroaki Tani,Syunya Ikeda.	Current Situations and Problems of Health Services for Aging Workers in Japan	International Commission Occupational Health	COEX	Korea/Seoul	2015.5.31

Mikako Arakida, Emiko Ruruhata, Miki Aoyagi, Kimie Otani、Kanako Takenaka. Mizuho Watanabe, Ruriko Yamashita	An Examination of the Relationship between Health Knowledge and the Desires of Workers in Japan for an Increase in Occupational Health Services	19th EAFONS2016 - Confirmation	幕張メッセ	千葉県	2016. 3. 13
衣川さえ子　他	Creation of the Safety Checklist for IV Management of Japanese Nurses	4th World Congress of Clinical Safety International Association of Risk Management in Medicine	Schonbrunn	Vienna, Austria	2015. 9. 23
Masako Saitou, Yoshiko Nagao , Yuko Takayama, Yumi Kondo, Mari Suenaga,. Hayami Hayashida, Kiyoko Hayashi , Emiko Kawauchi, Sayaka Tsuchiya, Emiko Suzui, Kazutomo Ohashi 、	Association between the Father's Age and Mother-Child Interactions One Month after Delivery	19th EAFONS,2016、Abstract Book 643頁	幕張メッセ国際会議場	千葉県千葉市	2016.3.14-15
A.Takahashi1, E.Yoshimura, Y. Urbain1	Coping with the Occupational Stress of the Nursing Profession: Comparison between Nurses in their Second and Third Year	ENDA-WANS-Congress2015	Hannover, Germany（コングレスセンター）	Hannover, Germany	2015.10.16
Maki Taniyama, Ruriko Yamashita, Rieko Hashimoto, et.al.	Requests for health care professionals caring for homeless people in Japan: an Interview study of advocates' view.	19th Conference of East Asian Forum of Nursing Scholars.	幕張メッセ	千葉県	2016.3.14
Maki Taniyama（Modelater）	Home Care Nursing	19th Conference of East Asian Forum of Nursing Scholars.	幕張メッセ	千葉県	2016.3.15

Ruriko Yamashita Mikako Arakida Maki Taniyama Chiharu Fujita Megumi Hobo AtsukoAurues	The role of an all-phase disaster nursing education program in shaping students' awareness of nursing needs at various disaster phases	19th East Asian Forum of Nursing Scholars	Makuhari Messe	Chiba Japan	2016.3.14-15
Maki Taniyama, Ruriko Yamashita, Rieko Koichi Hashimoto, Megumi Hobo, Chiharu Fujita	Requests For health care Professionals caring for homeless people in Japan: An interview study of advocates' views	19th East Asian Forum of Nursing Scholars	Makuhari Messe	Chiba Japan	2016.3.14-15
Matsuda Y, Negishi M, Otani K, Tomizawa E, Arakida M.	State of Competencies for Emergency Response of Occupational Health Nurses: A comparison of basic life support skills acquisition according to years of clinical experience	The 31st International Congress on Occupational Health	COEX Intercontinental Seoul	Seoul／Korea	2015.5.31-6.5
Otani K, Matsuda Y, Negishi M, Tomizawa E, Arakida M.	The relationship of worker's resilience and Daily Uplifts on the health behaviors	The 31st International Congress on Occupational Health	COEX Intercontinental Seoul	Seoul／Korea	2015.5.31-6.5
Tomizawa E, Otani K, Matsuda Y, Arakida M.	Study of Health Behavior and Daily Hassles of Workers	The 31st International Congress on Occupational Health	COEX Intercontinental Seoul	Seoul／Korea	2015.5.31-6.5
Arakida M, Otani K, Matsuda Y, Negishi M, Yoshioka S, Igarashi C, Miyoshi T, Aoyagi M, Tani H, Ikeda S.	Current Situations and Problems of Health Services for Aging Workers in Japan	The 31st International Congress on Occupational Health	COEX Intercontinental Seoul	Seoul／Korea	2015.5.31-6.5
Mika TAKANO Eiko SUZUKI Yuko TAKAYAMA	Relationship between burnout risk in novice nurses working in university hospitals of Japan and educational support in the workplace	19th EAFONS	幕張メッセ	千葉県	2016.3.14

Yuko TAKAYAMA Eiko SUZUKI Mika TAKANO	Factors related to burnout in hospital nurses with children	19th EAFONS	幕張メッセ	千葉県	2016.3.14
KOBIYAMA Atsuko, SUZUKI Eiko, TAKAYAMA Yuko.	Factors affecting alleviation of anemia in postnatal anemia sufferers	International Confederation of Midwives	パシフィコ横浜	横浜	2015.7
SAITO Masako, NAGAO Yoshiko, TAKAYAMA Yuko	Association between the Father's Age and Mother-Child Interactions One Month after Delivery	19th EAFONS	幕張メッセ	千葉	2016.3
KanakoTAKENAKA, Mikako ARAKIDA	Relationship between developmental features and difficulties in school life of very low birth weight (VLBW) infants, obtained from mothers' interviews	ICHHNR	Cultural Centre, Seoul National University,	Seoul ／South Korea	2015.8.20
Mikako ARAKIDA, Kanako TAKENAKA,Fumiko NAKAMURA,Sawako TAKAHASHI	Examination of the Actual Health Promotional Activities and the Promotional Factors in the Workplace	ICHHNR	Cultural Centre, Seoul National University,	Seoul ／South Korea	2015.8.21
Kanako TAKENAKA, Mikako ARAKIDA	Mothers' Perceptions of Difficulties Faced by Children Who Were Very Low Birth Weight Infants When They Are in a RegularElementary school	第19回EAFONS	幕張メッセ	千葉県／千葉市	2015.3.15
衣川さえ子，岩本郁子，高橋正子，梅津靖江	Development of a non-technical skills trainings for nurses	5th World Congress of Clinical Safety International Association of Risk Management in Medicine	Joseph B. Martin Conference Center, Harvard Medical School	USA/ Boston	2016.9.22
磯山あけみ，衣川さえ子	How Midwives in Japan Recognize the Support They Give to Families Having a Child	International Council of Nurses Congress	バルセロナ国際会議場	SPAIN/ Barcelona	2017.5.28

Emiko Yoshimura	Effectiveness of an educational program for hospital nurses to learn a comprehensive gerontological nursing assessment	長野県看護大学国際研修センター	University of San Francisco	San Francisco	2016.2.27
小野 智佐子, 入江 多津子	Midwife Support and Maternal Identity: Fieldwork Study at a Birth Centre	第3 回 世界ケアリング学会	シティプラザ久留米	久留米市	2017.3.26
小野 智佐子, 入江 多津子	An Investigation into the Effectiveness of Care Programs for Helping Postpartum Women Relax	第3 回 世界ケアリング学会	シティプラザ久留米	久留米市	2017.3.26
小野 智佐子, 入江 多津子	Independent Midwifes' Interaction with Clients and Their Empowerment: Focusing on continuous care from the prenatal to the perinatal and child-rearing periods	第3 回 世界ケアリング学会	シティプラザ久留米	久留米市	2017.3.26
入江 多津子, 小野 智佐子	独居高齢者のさみしさの認識とケアマネジャーとの関係に関する調査	第3 回 世界ケアリング学会	シティプラザ	久留米市	2017.3.26
RurikoYamashita, Mikako Arakida, MakiTaniyama,Megumi Hobo, Atsuko Aurues	Trend of Studies on Activities of Public Health Nurses at Disaster	Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health	帝京大学板橋キャンパス	東京都板橋区	2016.9.16-19
鳥本 靖子	The Impact of Caregiving on Subjective Health of Family Caregivers:A Comparative, Longitudinal Study	Gerontological Society of America(米国老年学会) 2016	マリオットホテルニューオーリンズ	ニューオーリンズ（米国）	2016.11.17

Horigane Y、Takahashi M、Yamada K	Effect of intervention with a soundproof low-light-intensity cover on premature infants during mydriasis	The 9th Council of International Neonatal Nurses Conference(COINN2016)	THE WESTIN BAYSHORE, VANCOUVER	CANADA/ VANCOUVER	2016.8.14-19
Eiko Suzuki, Akiko Maruyama, Yuko Takayama, Yukiko Sato	Collaboration in the Hospital -Situations Novice Nurses Cannot Be Assertive Toward Their Senior Nurse and Co-medical Staff	13th International Congress in Nursing Informatics	The International Conference Centre	Geneva	2016.6
Yuko Takayama, Eiko Suzuki, Amy Takayama, Karen Takayama, Sachie Tomita, Takako Negishi, Chiaki Kinouchi	Factors Related to Mental Health in Female Nurses with Children Aged Under Three in Japan	17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting	Kaohsiung Exhibition Center	台湾	2016.11
Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Sachie Tomita, Chiaki Kinouchi	Development of a Novice Assertiveness	17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting	Kaohsiung Exhibition Center	台湾	2016.11
Ichiro Itomine, Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Atsuko Kobiyama, Shigeko Shibata, Junna Kunii	The validity and reliability of the scale of fundamental competencies for working persons in new graduate nurses in Japan	17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting	Kaohsiung Exhibition Center	台湾	2016.11
Sachie Tomita, Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Atsuko Kobiyama, Harumi Kawamura	Factors influencing assertiveness among preceptors giving practical guidance to novice nurses	17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting	Kaohsiung Exhibition Center	台湾	2016.11
Chiaki Kinouchi, Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Harumi Kawamura	Factors related to mental health support for nurses in long-term care ward	17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting	Kaohsiung Exhibition Center	台湾	2016.11

Yuko Takayama, Eiko Suzuki, Maki Matsuo, Takako Yamamoto, Takae Machida	Research Trends Related to Burnout in Female Nurses During Childcare	The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars	The Hong Kong Polytechnic University	香港	2017.3
Yamamoto Kayoko Okumiya Akiko	Adaptation of the Self-Determination Theory to motivation of the self- management of the Japanese patients with hemodialysis treatment. －Comparison of the investigation on 2 cities of Japan －	The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars	Regal Riverside Hotel	Hong Kong	2017.3.10
Mika Takano, Eiko Suzuki, KyokoTahara , Yoshiko Sera.	Literature review of "organizational climate" in the nursing field in Japan	EAFONS	Regal Riverside Hotel	Hong Kong	2017.3
Yoshiko Sera , Eiko Suzuki , Yuko Takayama, Mika Takano	Public Perception of and Engagement in Health Literacy among Parents and Preschool Teachers in Japan	EAFONS	Regal Riverside Hotel	Hong Kong	2017.3
Machida T, Suzuki E, Takayama Y, Matsuo M	The coping behaviors of multidisciplinary professionals during a norovirus outbreak and term cooperation	The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars Hong Kong	Regal Riverside Hotel	Hong Kong	2017.3.9-10

(10) 小田原保健医療学部　理学療法学科

1．業務出張

<2011>

・昇寛：第6回北京国際リハビリフォーラム（中国リハビリテーション研究センター）、2011.10.22～2011.10.23

・柊幸信：第6回北京国際リハビリフォーラム（中国リハビリテーション研究センター）、2011.10.22～2011.10.23

・昇　寛：第10回理学療法科学学会国際学術大会（南寧）、2012.3.22～2012.3.25

・柊　幸信：第10回理学療法科学学会国際学術大会（南寧）、2012.3.22～2012.3.25

・渡邉観世子：第10回理学療法科学学会国際学術大会（南寧）. 2012.3.22～2012.3.25

・勝平純司：ISPO 2013 World Congress（インド/ハイデラバード国際会議場）、2012.2.6

<2012>

・宮口琢磨：11回理学療法科学学会国際学術大会（上海）、2013.3.21～2013.3.25

<2013>

・三浦和：WCPTアジア太平洋地区学会／アジア理学療法連盟学会（台湾）、2013.9.5～2013.9.5

・中村壮大：WCPTアジア太平洋地区学会／アジア理学療法連盟学会（台湾）、2013.9.5～2013.9.5

・渡邉観世子：WCPTアジア太平洋地区学会／アジア理学療法連盟学会（台湾）、2013.9.5～2013.9.5

<2015>

・三浦和：大地震後のネパールにおける災害リハビリテーション支援活動プロジェクト（ネパール/カトマンズ）、2016.3.19

<2016>

・渡邉 観世子：第19回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2016.7.16～2016.7.17

・鈴木啓介：第19回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2016.7.16～2016.7.17

・大武聖：第19回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2016.7.16～2016.7.17

・齋藤孝義：第19回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2016.7.16～2016.7.17

・和田三幸：第19回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2016.7.16～2016.7.17

<2017>

・河西理恵：WCPT-AWP&PTAT Congress 2017（ Bangkok Thailand）、2017.6.26～2017.6.30

・大武聖：第 22 回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2017.7.15～2017.7.16

・鈴木啓介：第 22 回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2017.7.15～2017.7.16

・斉藤孝義：第 22 回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2017.7.15～2017.7.16

・和田三幸：第 22 回理学療法科学学会国際学術大会（韓国）、2017.7.15～2017.7.16

・堀本ゆかり：第2回アジアリハビリテーション科学学会学術大会（成田）、2018.3.18

・和田三幸：第2回アジアリハビリテーション科学学会学術大会（成田）、2018.3.18

・堀本ゆかり：第3回アジアリハビリテーション科学学会学術大会（北京）、2018.3.24

・和田三幸：第3回アジアリハビリテーション科学学会学術大会（北京）、2018.3.24

2．公的国際協力

<2011>

・上村さと美：JICA第3回技術協力プロジェクト中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト、2010.8.23～2011.8.22

・武田　要：ベトナム南部リハビリテーション強化プロジェクト、2012.2.6～2012.2.11

3．国際学会などの委員

該当なし

4．国際学会学術発表

<2011年>

・渡邊観世子、谷浩明：Watanabe M, Kurosawa K, Tani H, Higuchi T, Imanaka K: Strategies and performance in a partial weight bearing task for after orthopedic surgery. 16th International WCPT congress. Amsterdam. 2011.6.22.

<2012>

・渡邊観世子：Watanabe M, Tani H, Ishihara M, Higuchi T, Yasuda K, and Imanaka K: Coordination among the upper and lower limbs in a lateral body weight-shifiting task. Joint World Congress of ISPGR and Gait & Mental Function. 2012.6.25-26

・渡邊観世子：Yasuda K, Higuchi T, Kawasaki T, Watanabe M: The immediate beneficial effect of conscious awareness of the body for upright postural stability. Joint World Congress of ISPGR and Gait & Mental Function. 2012.6.25-26

・三浦和、勝平純司：Nodoka MIURA, Junji KATUSHIRA, Kazuo KUROSAWA：Effect of applying pressure to soleus muscle of paretic limb cerebrovascular disorder person during level walking. JAPAN-KOREA 1st JOINT CONFERENCE, 2012.11.17-18

・三浦和：Nodoka MIURA：Intervention effect of local hiring staff in the support activities for the victim of the Tohoku Earthquake -the collaboration with the AAR Japan-. 1st World CBR congress, 2012.11.28

・中村壮大、今井 丈：Souta NAKAMURA, Takeshi IMAI, KazuoKUROSAWA:Verification of the Amount of Activity of Muscle around Scapula at Shoulder Joint Adbduction Movement.
The 7th Beijing International Forum on Rehabilitation. 2012.9.22-24

・中村壮大：Souta NAKAMURA , Yukari HORIMOTO, KazuoKUROSAWA:Study on the thickness of supraspinatus muscles by shoulder joint angle change in the scapular plane. -Comparison of no load and weight load-. JAPAN- KOREA 1st JOINT CONFERENCE . 2012.11.17-18

・中村壮大：KazuoKUROSAWA, SoutaNAKAMURA et al: Definition of therapy in japan andthe international comparison of scope of practice-Survey on OECD membercountries-. JAPAN- KOREA 1st JOINT CONFERENCE. 2012.11.17-18

<2013>

・三浦和：Miura N, 他: Activity of therapist for disaster victims after Earthquakeacpt.

・三浦和：Chiwaki N, Miura N, 他: Activity report of JOCV rehabilitation network for refugees from fukushima nuclear plant accident.

・三浦和：Kurosawa K, Miura N, 他: Japan' s current situation and the level of physical therapy education in OECD 34.

・渡邊観世子、谷浩明：Watanabe M, Tani H: Effects of fingertip contact with stable and unstable objects on postural stability during quiet standing.

・中村壮大：Nakamura S, Muraki T, Kurosawa K: Effects of humeral rotation on activities of the infraspinatus, trapezius, and deltoid muscles during shoulder abduction in the scapular plane.

・勝平純司：Katsuhira J, Matsudaira K, Iwakiri K, Maruyama H: Effect of mental stress on low back load while lifting an object . 40th Annual Meeting of International Society for the Study of the Lumber Spine . 2013.5.13-17.

・勝平純司:Hasegawa T, Katsuhira J, Matsudaira K, Iwakiri K, Maruyama H:Biomechanical analysis of low back load when sneezing. 8th International Conference on Prevention of Work-related

Musculoskeletal Disorders. PREMUS 2013. 2013.7.9.

・三浦和：Miura N, 他：Challenge to support activities by therapists for survivors from the Eastan Japan Earthquake.第12回理学療法科学学会　国際学術大会. 2013.9.8.

・三浦和：Miura N, Kurosawa K：Relationships among the Assessment Methods of Spasticity in Chronic Hemiplegia　　. Korea. China and Japan Joint Congress of Physical Therapy Science. 2014.2.8

・渡邊観世子：Watanabe M, Higuchi T, Imanaka K: Positive and negative effects of support by upper limbs on performance accuracy of lateral body weight-shifting. 2nd Joint ISPGR and Gait & Mental Function Congress. 2013.6.25

・渡邊観世子、谷浩明：Watanabe M, Tani H, Imanaka K: Comparison of effects of support by the upper limbs on performance accuracy during a lateral body weight-shifting task between patients with orthopedic complaints and healthy individuals. Korea, China and Japan Joint Congress of Physical Therapy Science. 2014.2.8

・中村壮大:Nakamura S, Muraki T, Kurosawa K: Gender Difference in Supraspinatus Muscke Thickness. 4th International Congress of Shoulder and Elbow Therapists. 2013. 4.11.

<2014>

・三浦和：N MIURA：Challenges to Support Activities by Therapists for Survivors from the Easten Japan Earthquake　The12th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine　　2014. 9. 17.

・三浦和：T Ito, N MIURA：A qualitative study regarding partnership working in JPTA`s initiative for disaster relief after the Great East Japan Earthquake　　KOREA-JAPAN 2nd JOINT CONFERENCE　2014.11.15.

<2015>

・三浦和：MIURA N, ITO T: An interim project report on structuring a disaster relief system with the aspect of physical therapists in japan. WCPT2015, Singapore, 2015.5.3

・勝平純司、三浦和、大村優慈：Katsuhira J, Miura N, Ohmura Y, Yasui T, Yamamoto S:Synergetic effects of a newly designed trunk orthosis with joints providing resistive force and an ankle-foot orthosis with an oil damper in adults with post-stroke hemiparesis.　International Society of Prosthetics and Orthotics 2015 World Congress.Lyon.　2015.6.21-25

・渡邊観世子、谷浩明：Watanabe M, Tani H: The effect of upper limb support on the representation of the load sense during lateral body weight shifting. 17th World Confederation for Physical Therapy Congress. Singapore, 2015.5.4.

・大村優慈Ohmura Y, Arizono N, Yano S, Kondo T: Effect of Visual Condition on Brain Activity and Motion Accuracy during Cane Usage.　2015 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science (MHS2015). Aichi／Nagoya.2015.11.23-25

・大村優慈、勝平純司、右田正澄：Ohmura Y, Yano S, Katsuhira J, Migita M, Kondo T:Effects of Tilted Visual Information on the Control of Standing Posture and Gait in Healthy Adults.The 6th International Conference on Advanced Mechatronics (ICAM2015). Tokyo／Shinjuku.2015.12.7

・山口将希：Shoki Yamaguchi, Tomoki Aoyama, Hiroshi Kuroki, et al: Efficacy of LIPUS treatment following mesenchymal stromal cell intra-articular injection in an osteochondral defect model rats. 4th annual symposium on regenerative rehabilitation poster presentation, 2015. 9. 24-25, Rochester, USA.

・山口将希：Shoki Yamaguchi, Tomoki Aoyama, Hiroshi Kuroki, et al: The effect of Low-Intensity Pulsed Ultrasound treatment combined with mesenchymal stromal cell injection for cartilage regeneration in rat knee osteochondral defect model. 2015 World Congress on Osteoarthritis

poster presentation, 2015. 4. 30- 5. 3, Paris, France

<2016>

・鈴木啓介、大武聖：Keisuke Suzuki, Taku Hirooka, Masaya Nitsu, Satoshi Otake：A path model analysis of the relationship between gait performance and physical activity in Diabetic Peripheral Neuropathy patients

・大武聖、鈴木啓介：Satoshi Otake, Keisuke Suzuki, Yoshio Nakamura：The status of implementation of self-care behavior among people aged 30-49

・齋藤孝義、勝平純司、大武聖：Takayoshi Saito, Junji Katuhira, Satoshi Otake, Ko Matsudaira, Hitoshi Maruyama：Comparison of muscle contractile property by age.

・和田三幸、渡邊観世子、黒澤和生：Miyuki Wada, Miyoko Watanabe, Kazuo Kurosawa：Solution of workplace Psychological stress on Japanese physical therapists.

<2017>

・和田三幸、大武聖、渡邊観世子、黒澤和生：Wada M, Otake S, Watanabe M, Nishida Y , Kurosawa K: Factors affecting satisfaction level of clinical practice student. 22nd International Meeting of Physical Therapy in Korea. 2017. 7. 15

・大武聖、和田三幸、渡邊観世子、黒澤和生：Otake S, Watanabe M, Wada M, Kurosawa K: Investigation of costs involved in clinical practice. 22nd International Meeting of Physical Therapy in Korea. 2017. 7. 15

・斉藤孝義：Takayoshi S, Kazuo S, Hitoshi M：Relationship between "sitting position repeated plantar flexion and dorsal flexion test" and motor function. 22nd International Meeting of Physical Therapy Science in Korea. 2017. 7. 14

・鈴木啓介、大武聖：Keisuke Suzuki, Taku Hirooka, Masaya Nitsu , Satoshi Otake, Yusuke Nishida：Effect of exercise with rhythmic auditory stimulation on lower limb muscle co-contraction and gait stability in patients with diabetic peripheral neuropathy. 22nd International Meeting of Physical Therapy in Korea. 2017. 7. 15

・和田三幸、大武聖、堀本ゆかり、黒澤和生：Wada M, Otake S, Horimoto Y, Nishida Y, Kurosawa K:Relationship between student burnout and willingness to work as physiotherapist. 2rd International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Narita. 2018. 3. 18

・和田三幸、大武聖、堀本ゆかり、黒澤和生：Wada M, Otake S, Horimoto Y, Nishida Y, Kurosawa K:Relationship between burnout and employment activities. 3rd International Meeting of Asia Rehabilitation Science in China. 2018. 3. 24

(11) 小田原保健医療学部　作業療法学科

1．業務出張

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
篠崎　雅江	Australia	Cairns	「海外保健福祉事情」学生引率	2016.8.4-17
岩上さやか	韓国	ソウル	第1回OTIPM国際セミナー参加	2013.5.11-12
岩上さやか	Vietnam	Ho Chi Minh	「海外保健福祉事情」学生引率	2016.8.2-17
岩上さやか	Australia	Gold Coast	「海外保健福祉事情」学生引率	2017.8.4-16

2．公的国際協力

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
森田　浩美	中国	南寧	JICAプロジェクト短期専門家派遣	2011.9.13-22

3．国際学会などの委員

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
窪田聡	Japan	Yokohama	16th International Congress of the Wordl Federation of Occupational Therapists Student Program 実行委員	2012.4.1～ 2014.6.30
出口弦舞	Japan	Yokohama	16th International Congress of the Wordl Federation of Occupational Therapists Student Program 実行委員	2012.4.1～ 2014.6.30
岩上さやか	Japan	Yokohama	16th International Congress of the Wordl Federation of Occupational Therapists Student Program 演題査読委員	2013-2014.6.30

4．国際学会学術発表

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
鈴木孝二	AUSTRIA	VIENNA	An International Association For Medical Education Conference 2011 学術発表（筆頭）	2011.8.30
鈴木孝二	Thailand	Chiang Mai	5th Asia Pacific Occupational Therapy Congress　学術発表（筆頭）	2011.11.23
鈴木孝二	Thailand	Chiang Mai	5th Asia Pacific Occupational Therapy Congress　学術発表（分担）	2011.11.23
平野大介	Japan	Kyoto	The first Asia-Pacific regional roundtable on profound intellectual and multiple disabilities (PIMD)	2011.10.20-21

			学術発表（筆頭）	
鈴木孝二	France	Lyon	The Association for Medical Education in Europe(AMEE)2012 学術発表（筆頭）	2012.8.29
出口弦舞	Japan	Yokohama	16th International Congress of the Wordl Federation of Occupational Therapists Student Program 学術発表（筆頭）	2014.6.21
岩上さやか	Japan	Yokohama	16th International Congress of the Wordl Federation of Occupational Therapists Student Program 学術発表（筆頭）	2014.6.21
甲本夏穂	Japan	Yokohama	16th International Congress of the Wordl Federation of Occupational Therapists Student Program 学術発表（筆頭）	2014.6.21
岩上さやか	Taiwan	Taoyuan	1st Asia-Pacific Occupational Therapy Symposium 学術発表（筆頭）	2017.10.20-22
篠崎雅江	Taiwan	Taoyuan	1st Asia-Pacific Occupational Therapy Symposium 学術発表（筆頭）	2017.10.20-22

5．その他

(12) 福岡看護学部　看護学科

1．業務出張

・今村桃子：台湾元培医科技術大学海外保健福祉事情研修学生引率 2012．8.7～8.20
・大池美也子：韓国コニャン大学　海外保健福祉事情研修学生引率、2017.8.3～8.13
・白石裕子：韓国コニャン大学　海外保健福祉事情学生研修学生引率、2016.8.4～2016．8.14
・白石裕子：韓国ウルチ大学　海外保健福祉事情学生研究学生学生引率、2017.3～2017.8.13
・永井あけみ：オーストラリア　海外保健福祉事情　2011.8.3～8.17
・永井あけみ：オーストラリア　海外保健福祉事情　2012.8.8～8.21
・永井あけみ：オーストラリア　海外保健福祉事情　2013.8.2～8.15
・永井あけみ：　オーストラリア　海外保健福祉事情　2014.8.6～8.19
・永井あけみ：オーストラリア　海外保健福祉事情研修宇学生引率　2015.8.3～8.17
・永井あけみ：オーストラリア　海外保健福祉事情研修宇学生引率　2016.8.7～8..20
・永井あけみ：オーストラリア　海外保健福祉事情研修宇学生引率　2017.8.4～8.18
・原田広枝：韓国看護協会、韓国保健診療員の地域活動視察、及びハルリム大学看護教育の研修　2013年2月
・溝部昌子：ラオス、「海外保健福祉事情」学生引率、2016.8.4～8.16
・溝部昌子：オーストラリア「海外保健福祉事情」学生引率、2017.8.4～8.18
・南嶋里佳：ラオス、災害医療支援セミナー、2016.12.21~24
・山口みどり、タイ、「海外保健福祉事情」、学生引率、2014.8.3～8.17
・山口みどり：タイ　海外保健福祉事情学生引率　2015.8.2～8.15
・山口みどり：タイ　海外保健福祉事情学生引率　2016.8.4～8.15
・山口みどり：インドネシア　海外保健福祉事情学生引率、2017.8.3～8.13
・山本真弓：ベトナム　ホーチミン海外保健福祉事情研修学生引率、2015.8.2～8.16
・山本真弓：ベトナム　ホーチミン海外保健福祉事情研修学生引率、2016.8.4～ 8.14

2．公的国際協力（海外医療教育）

・南嶋里佳：ラオス、災害医療支援セミナー、2016.12.21~24

3．国際学会などの委員

なし

4．国際学会学術発表

・猪狩明日香：Characteristic investigation of frail elderly people enrolled in the Japanese social long-term care, The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing, 2016.7.1-7.3, Korea Busan
・猪狩明日香：Characteristic investigation of frail elder enrolled in the Japanese social long-term care by the analysis of the social role situation, The 3rd International Society of Caring and Peace Conference,2017.3.25-26, Japan Kureme
・猪狩明日香：Characteristic investigation of frail elder enrolled in the Japanese social long-term care by elderly people who live alone, International Nursing Research Conference 2017,2017.10.20-22,Thailand Bangkok
・石橋昭子，山本真弓，上野恭子，森　雄太：Evaluations by nursing students in ethics education of psychiatric nursing and the importance of study support, The 3rd International Society of Caring and Peace Conference,2017.3.25-26, Kurume City Plaza

Fukuoka, Japan

・豊島泰子，彌永和美，鷲尾昌一，今村桃子：Education about infection control in home nursing for nursing college students in Japan，14thEast Asian Forum of Nursing Scholars 2011.2.1 Korea

・花田陽子，花田傑，高島利，葛山加也子，岩倉真由美：Reasonable accommodation for people with developmental disabilities who want to become nurses, IASSIDD 15th World Congress, 2016.8.14～18 ，Australia

・竹生まゆみ，大池美也子：Factors affecting the competency of wound, ostomy and continence nurse, 33rd Nursing and Healthcare congress, October 23-25, 2017, Toronto, Canada

・山口善子，原田博子，大池美也子：Antecedents of Hospital Nurses' Work-Family Conflict, TNMC & WANS International Conference, October 20-22, Bangkok, Thailand

・小山理英：Learning of students' understanding of nursing process after theoretical and practical training，March25-26，2017，the 3rd international society of caring and peace conference in Kurume

・花田傑，葛山加也子，花田陽子：Introduction to education supports for people with intellectual disabilities in japan and our new challenge，2015 IASSIDD AMERICAS REGIONAL CONGRESS 2015.A-8. IASSIDD AMERICAS REGIONAL CONGRESS 2015 HONOLULU，HAWAII

・川口賀津子：Comparing the roles self-recognized by middle-aged generalist nurses with the roles expected of them by nurse managers，The 3rd International Society of Caring and Peace Conference：2017.3.25-26,Kurume in Japan

・川口賀津子，鳩野洋子：A qualitative study on the role of middle-aged generalist nurses in a hospital: The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars： 2017.3. 9-10， Hong Kong

・福井トシ子，江藤宏美，高田昌代，堀内成子，佐藤香代：Collaborative system development by midwifery-related associations to enhance practical ability of Japanese midwives, 31st ICM Triennial Congress, 2017.6.17-22, TORONTO, CANADA

・篠崎克子：The influence of pushing technique in the second stage of labor on urinary incontinence after delivery: a review, 31st ICM Triennial Congress, 2017.6.18-22, TORONTO, CANADA

・白石裕子，田上博喜：Verification of the Psychological Effects of a Cognitive Behavioral Therapy Group Program for Depression 8th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapy, 2016.6.20-6.26 ，Melbourne，Australia.

・白石裕子，田上博喜，石橋昭子，上田智之：Effectiveness of workshop on Cognitive Behavior Therapy for home visit nurse，World Congress of Mental Health2017，2017.11.1-11.6，New Delhi，India,

・永井あけみ：Development of the hand bath methods that is effective for the brain plasticity, and cerebrophysiological and psychophysical verification of the effects on this method －A pilot study: Are there any differences in the effects of hand bath with or without massage in hot water?－ Christian University International Conference, 2015.4.22－23, Bangkok, Thailand

・小柳康子，原田広枝：Preparation and validation of a model of school nurse leadership that enhances school health assessments， WANS International Nursing Research Conference, 2017，Oct20-22,2017,Bangkok,Thailand

・松尾 里香，今村 桃子：Assessment of Livelihood Support Skill Practice in Home-care Nursing Education and Future Tasks、6th International Conference on Community Health Nursing

Research、2015.8.19、Seoul、Korea

- 溝部昌子：Faculty Development for Global Education in Nursing-Faculty members' positive experiences-TNMC and WANS International Nursing Research Conference 2017, Oct20-22,2017,Bangkok,Thailand
- 南嶋里佳：The Activities of the Nurse Volunteers in the 2016 Kumamoto Earthquake, Asian Society of Human Services,July15-18,2016,Fukuoka,Japan
- 山本真弓，洲崎好香：Problem to be solved are at Japan a death-ridden society: State of depression onset of care workers in care and education, The 22nd Asian Conference on Occupational Health (ACOH), 2017.4.27-29,Kaohsiung City, Taiwan
- 山本真弓，安藤満代：Short-Term Life Review for terminally ill cancer patients in home hospice may be useful for psychological aspect,21st East Asian Forum of Nursing Scholars &11th International Nursing Conference (21thEAFONCE &11thINC),2018.1.11-12, Lotte Hotel World Seoul Gangnam, Korea
- 吉村千草：Analysis of Career-continuation intention of female nurses - A comparison by presence/absence of child/nursing care –:2017.9.20-22, TNMC & WANS International Nursing Research Conference ,Bangkok, Thailand,

(13) 福岡保健医療学部　理学療法学科

1．業務出張

・高野吉朗、アメリカ、NASA JAXA 、ヒューストン宇宙センター、若田飛行士への運動指導および筋力評価を実施、2013.7.7～7.13

・高野吉朗、アメリカ、NASA JAXA 、ヒューストン宇宙センター、若田飛行士への運動指導および筋力評価を実施、2013.9.7～9.15

・高野吉朗、アメリカ、NASA JAXA 、ヒューストン宇宙センター、若田飛行士の帰還後後の身体データ取得のため、2014.5.19～5.24

2．公的国際協力

・下田武良、岡本龍児、ペルー（リマ）、JICA 短期ボランティア障がい者スポーツ普及・促進事業、2014.8.18～9.12

・下田武良、ペルー（リマ）、JICA 短期ボランティア障がい者スポーツ普及・促進事業、2015.8.17～9.10

3．国際学会などの委員

該当なし

4．国際学会学術発表

2011

・Kaneko H, Horie J. Breathing Movements in healthy young and elderly subjects. 16th International WCPT Congress. Amsterdam RAI. Amsterdam Holland. 2011.6.20-23.

・Takigawa W. Regional variation of musculoskeletal stress marker (MSM) in the prehistoric Jomon hunter-fisher-gatheres: implications in physical activity pattern of the Paleolithic people in Japan. Dual symposia of Annual Meeting of Asian Palaeolithic Association and the Modern Human Behavior. National Museum of Nature and Science. 2011.11.29.-31.

・Uemura T, Harada Y, Chuman T, Kawasaki T. The difference of the position exerts on the skin perfusion pressure of lower limbs for the patients with critical limb ischemia. The 21th Japan-China Joint Congress on Plastic Surgery. Fukuoka Univercity (Medical Hall). Fukuoka/Fukuoka. 2011.11.4.

2012

・Kaneko H. Reliability and validity of a newly developed breathing movement measuring device. Japan-Korealst Joint Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012.11.17-18.

・Okamoto R, Shimoda T, Oka S, Ikeda T, Kawasaki T, Kuboshita R, Matsuda M, Nakahara M, Nagai Y, Eguchi M, Kaneko H. Effects of Student Assistant System for practical skill class in physical therapy. Japan-Korealst Joint Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012.11.17-18.

・Eguchi M. Report of the present conditions and the issues of rehabilitation cooperation between medical and nursing care in Japan. Japan-Korealst Joint Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012.11.17-18.

・Nakahara M, Yasumoto S, Tahara H, Takahashi S, Kurosawa K, Kaneko H, Nagai Y, Eguchi M, Matsuda K, Kuboshita R, Ikeda T, Kawasaki T, Oka S, Shimoda T, Okamoto R. Japan-Korealst Joint

Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012. 11. 17-18.

・Kuboshita R, Okamoto R, Shimoda T, Oka S, Ikeda T Kawasaki T, Matsuda K Nakahara M, Nagai Y, Eguchi M, Kaneko H, Takahashi S, Tahara H, Kurosawa K. Conscious change to sports for the disabled by making the lectures practicalexercises. Japan-Korealst Joint Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012. 11. 17-18.

・Ikeda T, Kuboshita R, Okamoto R, Shimoda T, Oka S, Ikeda T Kawasaki T, , Matsuda K Nakahara M, Nagai Y, Eguchi M, Kaneko H, Takahashi S, Tahara H, Kurosawa K, Goto Y. Changes in visual evoked magnetic fields during mental arithmetic task. Japan-Korealst Joint Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012. 11. 17-18.

・Ikeda T, Goto Y, Tobimatsu S. Visual evoked magnetic fields to 4 Hz repetitive pattern-reversal stimulation. 18th International conference on Biomagnetism. Maison de la Chimie. France/Pari. 2012. 8. 26-30.

・S Oka. Prediction of discharge destination in patients with acute cerebral vascular disorder by using Short Form Berg Balance Scale . Japan-Korealst Joint Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012. 11. 17-18.

・Kawasaki T, Uemura T, Matsuo K, Masumoto K, Shida K, Harada Y, Chuman T, Murata T. The difference of the position exerts on the skin perfusion pressure of lower limbs for the patient with critical limb ischemia. 4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies. PACIFICO YOKOHAMA. Yokohama/Japan. 2012. 9. 5.

・Uemura T, Kawasaki T. Intra-operative indocyamine green fluorescence angiography for blood flow assessment for foot disease. 4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies. PACIFICO YOKOHAMA. Yokohama/Japan. 2012. 9. 5.

・Uemura T, Kawasaki T. Microvascular pedal bypass team for limb salvage - A new team approach at a Japanese institution—. 4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies. PACIFICO YOKOHAMA. Yokohama/Japan. 2012. 9. 5.

・Kawasaki T, Uemura T, Masumoto K, Harada Y, Chuman T, Matsuda K, Okamoto R. Japan-Korealst Joint Conference. Nagasaki NCC & Studio. Nagasaki/Japan. 2012. 11. 17-18.

2013

・Nakayoshi T, Sasaki K, Ueno T, Kajimoto H, Yokoyama S, Ohtsuka M, Koiwaya H, Itaya N, Chibana H, Imaizumi T. FOXO4-knockdown augmented anti-apoptosis and neovascularization capacities of atherosclerotic patient-derived circulating angiogenic cells. The 19th Asian Pacific Society of Cardiology 2013 Congress. Pattaya, Thailand. 2013. 2. 21-24.

・Fukami A, Adachi H, Hirai Y, Enomoto M, Obuchi A, Yoshimura A, Imaizumi T. Association of serum omega-3 to omega-6 polyunsaturated fatty acid ratio with microalbuminuria in a population of community-dwelling Japanese. Atherosclerosis Society Congress. France. 2013.

・Takii E, Ohe M, Inage T, Gondo T, Haraguchi G, Ito S, Kumanomido A, Imaizumi T. Beneficial effects of losartan for secondary prevention of atrial fibrillation:Long-term follow up using analysis of memory function in pacemaker. EHRA EUROPACE 2013. Athens, Greece. 2013. 6. 23-26.

・Kajimoto H, Kai H, Aoki H, Uchiwa H, Aoki Y, Iwamoto Y, Imaizumi T. Kajimoto H, Kai H, Aoki H, Uchiwa H, Aoki Y, Iwamoto Y, Imaizumi T Bone morphogenetic protein receptor activation plays a crucial role in endothelial dysfunction and osteogenic differentiation in mice with chronic kidney disease. ESC Congress 2013. Amsterdam, Netherlands, 2013. 8. 31-9. 4.

・Yokoi K, Adachi H, Hirai Y, Enomoto M, Fukami A, Ogata K, Tsukagawa E, Kasahara A, Imaizumi

T. Plasma endothelin-1 level is a predictor of 10-year mortality in a general population: THE TANUSHIMARU STUDY. International Conference on Endothelin, Tokyo, Japan, 2013. 9. 8-11.

・Aoki Y, Kai H, Kajimoto H, Kudo H, Takayama N, Yasuoka S, Anegawa T, Iwamoto Y, Uchiwa H, Fukuda K, Kage M, Kato S, Fukumoto Y, Imaizumi T. Large blood pressure variability aggravates arteriolosclerosis and ischemic changes in the kidney in hypertensive rats. High Blood Pressure Research 2013 Scientific Sessions, New Orleans, USA, 2013. 9. 11-14.

・Kajimoto H, Kai H, Aoki H, Uchiwa H, Aoki Y, Iwamoto Y, Anegawa T, Fukuda K, Imaizumi T. BMP type I receptor inhibition reduces endothelial dysfunction and vascular osteogenic differentiation in mice with chronic kidney disease. The American Heart Association, The 86th Scientific Sessions, Dallas, USA, 2013. 11. 16-20.

・Ohno S, Aoki H, Nishihara M, Furusyo A, Hirakata S, Nishida N, Itou S, Imaizumi T. Deciphering the sequential molecular events during onset of acute aortic dissection. The American Heart Association, The 86th Scientific Sessions, Dallas, USA, 2013. 11. 16-20.

・Nishihara M, Aoki H, Ohno S, Furusho A, Hirakata S, Nishida N, Ito S, Imaizumi T. Involvement of IL-6 in pathogenesis of abdominal aortic aneurysm. The 86th Scientific Sessions, Dallas, USA, 2013. 11. 16-20.

・Nohara Y, Yoshida K, Adachi H, Hirai Y, Enomoto M, Fukami A, Kumagai E, Ohbu K, Nakamura S, Obuchi A, Yoshimura A, Imaizumi T. Combined elevations of asymmetric dimethylarginine and homocysteine have big impact on carotid atherosclerosis — The Tanushimaru study—. The 86th Scientific Sessions, Dallas, USA, 2013. 11. 16-20.

・Haraguchi G, Inage T, Ohe M, Takeuchi T, Gondo T, Takii E, Ito S, Imaizumi T. Body-surface QRST integral mapping predicts development of ventricular arrhythmia after cardiac resynchroniztion therapy. The 28th Annual Meeting of the Japanese Heart Rhythm Society, Tokyo/Japan, 2013. 7. 11-13.

・Kaneko H. A new method of measuring breathing movements of the thoracoabdominal wall using a simple device. 12th Asian Confederation for Physical Therapy Congress, Nan Shan Education & Training Center, Taichung, Taiwan, 2013. 9. 5-9.

・Okamoto R, Kaneko H, Katsuhira J Tanaka N. The three-dimensional shooting form analysis for non-archers. 12th Asian Confederation for Physical Therapy Congress, Nan Shan Education & Training Center, Taichung, Taiwan, 2013. 9. 5-9.

・江口雅彦. Separation of medical practice and drug dispensing system and EHR—Case of Canada , South Korea and Japan—. 国際公共経済学会第28回研究大会, 慶応大学, 2013. 12. 7.

・M Eguchi. Regional characteristics of the aging rate and physiotherapist density at the Asia-Western Pacific each countries. 12th Asian Confederation for Physical Therapy Congress, Nan Shan Education & Training Center, Taichung, Taiwan, 2013. 9. 5-9.

・Matsuda R, Yagura C, Nakahara M, Sota T, Hagino H. RELATION BETWEEN SACROILIAC JOINT PAIN AND BODY CHARCTERISTICS IN YOUNG ADULT WOMEN. 12th Asian Confederation for Physical Therapy Congress, Nan Shan Education & Training Center, Taichung, Taiwan, 2013. 9. 5-9.

・Y Goto , T Ikeda. Visual evoked magnetic fields to 4 Hz repetitive pattern -reversal stimulation. International Congress of Clinical Neurophysiology2013, America Sandiego, 2013. 11.

・S Oka. Changes of autonomic nerve activity and the surface fingertip temperature by the slight pressure stimulus to breast back. 12th Asian Confederation for Physical Therapy Congress, Nan

Shan Education & Training Center, Taichung, Taiwan, 2013. 9. 5-9.

2014

・Hiroo Matsuse, Masayuki Omoto, Yoshio Takano, Hiroshi Ohshima, Yoshihiko Tagawa, Naoto Shiba. Oxygen Uptake during Awrbic Cycling Exercise Stimulation Combined with Neuromuscular Electrical Stimulation of Antagonists. the 51 st Annual Meeying of the Japanese Association of Rehabilitation Medicine, Jikei University, Tokyo/Japan, 2014. 4. 19.

・Matsuda K, Ikeda S, Ikeda T, Nakahara M, Nagai Y, Horikawa E. Influence of physical activity on the executive function in healthy college students. 14th International Meeting of Physical Therapy Science, Konyang University, Korea, 2014. 8. 9.

・中原雅美, 松田憲亮, 池田拓郎, 永井良治, 森田正治, 黒澤和生. 臨床実習が社会人基礎力および情意能力に与える影響. 15th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, 北京北大博雅酒店（北京大学近隣）, 2015. 3. 27-29.

・下田武良、高野吉朗、永井良治、舟木一弘、田川善彦. 電気刺激を用いた歩行機能改善システムの開発. 15th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, 北京北大博雅酒店（北京大学近隣）, 2015. 3. 27-29.

・Takuro Ikeda. Difference of visual evoked magnetic fields with mental arithmetic tasks and verbal fluency task. -Organize session: New Perspectives in EEG and MEG Analyses-. International Conference on Complex Medical Engineering2014, Howard International House, Taipei/Taiwan, 2014. 6. 26-29.

2015

・Masaharu Morita, Yoshiki Muramatsu, Hiroshi Kobayashi. Quantitative evaluation of skeletal muscle fatigue in isometric contraction by near-infrared spectroscopy and electromyogram. World Cofederation for Physical Therapy Congress, Suntec Singapore International Convention and Exhibition Centre, Singapore/ Singapore, 2015. 5. 1-4.

・Yuma Kajiwara, Masaharu Morita. Effect of spinal alignment and equilibrium function after SST in triceps surae muscle. 17th International Meeting of Physical Therapy Science, Panda Hotel, Myanmar/ Yangon, 2015. 9. 5.

・Yumiko Tobinaga, Masaharu Morita, Yoshiharu Nagai. Effects of incontinence on motor function and fall among elderly people. 17th International Meeting of Physical Therapy Science, Panda Hotel, Myanmar/ Yangon, 2015. 9. 5.

・Kaneko H, Shiranita S, Horie J. Relationship between reduced thoracoabdominal wall mobility and respiratory function in patients with chronic obstructive pulmonary disease. World Cofederation for Physical Therapy Congress, Suntec Singapore International Convention and Exhibition Centre, Singapore/ Singapore, 2015. 5. 1-4.

・Okamoto R, Kaneko H, Katuhira J, Tanaka N. The three-dimensional shooting form analysis of archers. World Cofederation for Physical Therapy Congress, Suntec Singapore International Convention and Exhibition Centre, Singapore/ Singapore, 2015. 5. 1-4.

・Yoshio Takano, Masayuki Omoto, Hiroo Matsuse, Yuuya Tsukada, Yoshihiko Tagawa, Naoto Shiba. Effect of the Cycling Exercise Combined with Electrically Stimulated Antagonist Muscles. World Cofederation for Physical Therapy Congress, Suntec Singapore International Convention and Exhibition Centre, Singapore/ Singapore, 2015. 5. 1-4.

・Naoto Shiba, Hiroo Matsuse, Yoshio Takano, Masayuki Omoto, Arata Narita, Shin Yamada, Hiroshi

Ohshima, Yoshihiko Tagawa. Effect of the Hybrid Training Method on the Disuse Atrophy of the Musculoskeletal System of the Astronauts Staying in the International Space Station for a Long Term – Initial Verification in ISS. The 86th Annual Scientific Meeting of the Aerospace Medical Association, the Walt Disney World Dolphin Hotel, Orlando, USA、2015. 5. 12.

・Masayuki Omoto, Yoshio Takano, Hiroo Matsuse, Ryuki Hashida, Yuuya Tsukadal, Takeshi Nago, Yoshihiko Tagawa Naoto Shiba. Cycling Exercise Interval Training Combined with Electrically Stimulated Antagonist Muscles Improves Oxygen Uptake and Muscle Strength. 30th International Symposium on Space Technology and Science, 神戸コンベンションセンター, Kobe/Japan, 2016. 7. 7.

・Takuro Ikeda, Yoshinobu Goto, Shinichiro Oka, Toru Shibuya, Keishi Kinoshita, Nozomi Ito, Kensuke Matsuda, Masami Nakahara. Changes of S-SEP by the upper limb immobilization during 10 hours. 18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, Best Western OL Stadium Hotel, China/Beijing, 2016. 3. 26-27.

・Yoshinobu Goto, Takuro Ikeda. Difference of visual evoked magnetic fields with mental arithmetic tasks and verbal fluency task. 2015 Annual Meeting of Society for Neuroscience, McCormick Place, McCormick Place, Chicago, Illionals/USA, 2015. 10. 17-22.

・Yoshinobu Goto, Takuro Ikeda. The relationship between neglect symptoms visual information process in the left hemiplegia with USN-Analyzing the exploratory eye movements and the recognition Threshold of optic flow stimuli-. 5th Biennial Meeting of International Society for the Advancement of Clinical MEG, Biomedicum Helsinki, Helsinki, Finland, 2015. 6. 23-26.

・鈴木あかり、金子秀雄. 地域在住高齢者の咳嗽力は肺活量と吸気筋力に関連する. 18th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, Best Western OL Stadium Hotel, China/Beijing, 2016. 3. 26-27.

2016

・Hidetaka Matsuzaki, Mika Yoshimura, Masaharu Morita, Kenzo Haraguchi, Seiichiro Takahashi. General joint laxity and toes flexion strength of young women with varus deformity of the knee. 19th International Meeting of Physical Therapy Science, Silla University, 韓国／釜山, 2016. 7. 16.

・Masaharu Morita, Masafumi Katayama, Yu Ito, Yoshihiro Kinoshita, Kazutaka Irie. Evaluation of the lacal muscle in cerebral palsied children using gait corrector. 19th International Meeting of Physical Therapy Science, Silla University, 韓国／釜山, 2016. 7. 16.

・Mika Yoshimura, Masaharu Morita, Hidetaka Matsuzaki. Relationship between age and oxyhemoglobin in skeletal muscle using the near infrared spectroscopy(NIRS). 19th International Meeting of Physical Therapy Science, Silla University, 韓国／釜山, 2016. 7. 16.

・Nozomi Hamachi, Masami Nakahara, Jun Sasaki, Masaharu Morita. Research of elderly status assessment set (E-SAS) in preventive health care among community-dwelling elderly in rural area of Japan. The 11th Beijing International Forum on Rehabilitation, 北京国際会議場, China/Beijing, 2016. 12. 3.

・Masaharu Morita, Nozomi Hamachi, Masami Nakahara, Jun Sasaki. Relationship between factors of obstruction in preventive health care among community-dwelling elderly in rural area of Japan. The 11th Beijing International Forum on Rehabilitation, 北京国際会議場, China/Beijing, 2016. 12. 3.

・Kaneko H, Akari S, Uchida D. Effect of chest and abdominal wall mobility and respiratory

muscle strength on forced vital capacity in community-dwelling elderly people. The 13th International Congress of Asian Confederation for Physical Therapy, Berjaya Times Square Hotel, Kuala Lumpur, Malaysia, 2016.10.7-8.

・Uchida D, Kaneko H. Differences in respiratory function between exercise and non-exercise supine positions maintained with a foam roller. The 13th International Congress of Asian Confederation for Physical Therapy, Berjaya Times Square Hotel, Kuala Lumpur, Malaysia, 2016.10.7-8.

・金子秀雄, 鈴木あかり. 地域在住高齢者における胸腹部可動性と呼吸筋力が努力性肺活量に及ぼす影響. 21th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, Convention Center Hotel Suzhou, China/ Suzhou, 2017.3.25-26.

・Yoshio Takano, Takeyoshi Shimoda, Hiroo Matsuse, Yuuya Tsukada, Ryuki Hashida , Masayuki Omoto, Naofumi Yamamoto, Yoshihiko Tagawa, Naoto Shiba. Electrically Stimulating Antagonist Muscles could Improve Strength in Healthy Older Me, The 13th International Congress of Asian Confederation for Physical Therapy, Berjaya Times Square Hotel, Kuala Lumpur, Malaysia, 2016.10.7-8.

・Ryuki Hashida , Hiroo Matsuse, Masayuki Omoto, Natsuko Shinozaki, Takeshi Nago, Yoshio Takano, Naoto Shib. Electrical Stimulation of the Antagonist Muscle added to Ergometer Training Improves Oxygen Uptake and Muscle Strength, 93rd American Congress of Rehabilitation Medicine Annual Conference, Hilton Chicago, Chicago／USA, 2016.11.3

・中原雅美, 池田拓郎, 永井良治, 原口健三. マルチターゲットステップによる二重課題歩行時の脳血流量変化, 21th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, Convention Center Hotel Suzhou, China/ Suzhou, 2017.3.25-26.

・Ikeda T, Goto K, Oka S, Takashima M, Oba T, Goto Y. Effects of steady-state visual evoked potentials during a mental arithmetic task of serial subtraction. 21th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, Convention Center Hotel Suzhou, China/ Suzhou, 2017.3.25-26.

(14)　福岡保健医療学部　作業療法学科

1．業務出張

・後藤純信、フランス、18th International Coference on Biomagnetism 運営会議、2012.8.25-30.
・後藤純信、韓国、12th International Meeting of Physical Therapy Science in Korea、2013.7.18-21.
・後藤純信、アメリカ合衆国、Annual Meeting for Neuroscience 2013、 2013.11.10-17.
・後藤純信、台湾、2014 ICME International Conference on Complex Medical Engineering (CME 2014) 総会およびOrganized sessionの運営、2014.6.25-28.
・後藤純信、フィンランド、5th Biennial Meeting of International Society for the Advancement of Clinical MEG プログラム委員会等、2015.6.20～27.
・後藤純信、アメリカ合衆国、Annual Meeting for Neuroscience 2015、 2015.10.15-20.
・後藤純信、中国、21th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing など、
2017.3.22~26.
・後藤純信、中国、5th Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, 2017.6.16-18.
・後藤純信、アメリカ合衆国、Annual Meeting for Neuroscience 2017、 2017.11.10-17.
・後藤純信、中国、The 11th ICME International Conference on Complex Medical Engineering(CME 2017)総会およびOrganized sessionの運営、2017.1121-23.
・奈良進弘、Hong Kong、2012 International occupational therapy conference、26 Feb 2012
・奈良進弘、Hong Kong、2012 International occupational therapy conference、24 Feb 2012
・奈良進弘、9th COTEC congress of occupational therapy、５月２６日、2012
・新川寿子、The 7th Beijing International Forum on Rehabilitation 、2012..9.23
・新川寿子、2015 International Occupational Therapy Conference Cum National Occupational Therapy Forum、H27.3.22
・石橋英恵、タイ、世界作業療法士連盟代表者会議出席、2011.11.20～11.24
・石橋英恵、台湾、世界作業療法士連盟代表者会議出席、2012.3.25～3.30
・齊場三十四、デンマーク、北欧福祉医療家具事情視察、2013.9.2～9.7
・石橋英恵、コロンビア、世界作業療法士連盟代表者会議出席、2016.3.4～3.14
・石橋英恵、南アフリカ、世界作業療法士連盟代表者会議出席、2018.5.12～5.25

2．公的国際協力

・奈良進弘、新川寿子、中国、中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト、2013.2.20～3.5

3．国際学会などの委員

・後藤純信、海外雑誌(① Investigative Ophthalmology and Vision Science, ② Clinical Neurophysiology, ③ Journal of Neuroscience, ④ Brain Research Bulletin, ⑤ Journal of Neurology, Neurosurgery and Psyciatry,)査読委員、2013～現在.
・後藤純信、International Conference on Complex Medical Engineering (ICME) 2014 プログラム委員.(2013~2014年度).
・後藤純信、フィンランド、5th Biennial Meeting of International Society for the Advancement of
Clinical MEG プログラム委員 (2013年度～2015年度).

・後藤純信、International Conference on Complex Medical Engineering (ICME) 2016, organized session　プログラム委員.(2015~2016 年度)
・後藤純信、International Conference on Complex Medical Engineering、Councilor、20161.1～現在
・後藤純信、International Conference on Complex Medical Engineering (ICME) 2018, organized session　プログラム委員.(2017~2018 年度)

4. 国際学会学術発表

・Goto K, Sugi T, Goto S, Goto Y, Yamasaki T, Tobimatsu S: Topography estimation of visual evoked potential by combinational use of mathematical models. The 2011 IEEE/ICME International Conference on Complex Medical Engineering, 2011.7.8-10, Yokohama, Japan.

・Ikeda T, Goto Y, Tobimatsu S: Visual evoked magnetic fields to 4 Hz repetitive pattern-reversal stimulation. 18th International Coference on Biomagnetism, 2012.8.28, Paris, France.

・Goto K, Sugi T, Matsuda Y, Goto S, Fukuda H, Goto Y, : Analysis of Visual Evoked Potentials for Different Stimuli:Effects of Color Combination and Patterns. 35th Annual International IEEE EMBS Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, 2013.7.6, Osaka Japan.

・Sueyoshi Y, Goto K, Sugi T, Matsuda Y, Goto S, Fukuda H, Goto Y, Yamasaki T, Tobimatsu S: Physiological State Evaluation of VEP Recording by Combination of Image and EEG. 35th Annual International IEEE EMBS Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, 2013.7.6, Osaka.

・Goto Y: Innovation for Brain Science—Innovation for Visual Stimuli: From the Retina to High Visual Passway. 12th International Meeting of Physical Therapy Science in Korea. 2013.7.20, Seongnam-si, Gyeonggi-do, Korea. (特別講演)

・Goto Y, Ikeda T: Visual evoked magnetic fields to 4 Hz repetitive pattern-reversal stimulation. Visual evoked magnetic fields to 4 Hz repetitive pattern-reversal stimulation, Annual Meeting for Neuroscience 2013, 2013.11.12, San Diego, CA, USA.

・Goto Y: Exploratory Eye Movements in Patients with Neurological and Psychiatric Diseases. Korea , China and Japan Joint Congress of Physical Therapy Science. 2014.2.8, Ohtawara, Japan.(特別講演)

・Yoshida T, Goto Y: The relationship between neglect symptoms and visual information process in the left hemiplegia with USN.-Analyzing the exploratory eye movements and the recognition threshold of optic flow stimuli-.第16回世界作業療法士連盟大会, 2014.6.18, Yokohama, Japan.

・Ikeda T, Goto Y: Difference of visual evoked magnetic fields with mental arithmetic tasks and verbal fluency task. 2014 ICME International Conference on Complex Medical Engineering (CME 2014), 2014.6.26, Taipei, Taiwan.

・Goto Y: The relationship between neglect symptoms and visual information process in t

he left hemiplegia with USN.-Analyzing the exploratory eye movements and the recogniti on threshold of optic flow stimuli-, 5th Biennial Meeting of International Society for the Advancement of Clinical MEG, 2015.6.23, Helsinki, Finland.

・Goto Y: Difference of visual evoked magnetic fields with mental arithmetic tasks and v erbal fluency task. 2015 Annual meeting of Neuroscience, 2015.10.17, Chicago, Illinois, USA.

・Goto Y: Organized session Chairman(Cutting edge of non-invasive brain stimulation), 20 16.8.4, Utsunomiya, Japan.

・Goto Y: Newly Methods for Evaluating the Cognitive Dysfunction using Visual stimuli. 21th International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, 2017.3.24, 蘇州, China.

・Goto Y: Visualization of brain disfunction. 5th Meeting of Physical Therapy Science in Beijing,

2017.6.17, 北京, China.

・Iwasaki Y, Goto Y, Takashima S: Long-term course of a patient with cognitive impairment in childhood. APCSLH2017 ; Asia Pacific Conference on Speech, Language, and Hearing. Narita, Japan.

・Goto Y: Difference of visual evoked magnetic fields with mental arithmetic tasks and v erbal fluency task. 2017 Neuroscience meeting, 2017.11.12, Washington DC, USA.

・Goto Y: Organized session Chairman (Unrevealing the mystery of the brain. New insights from the combined use of advanced technology), The 11th ICME International Conference on Complex Medical Engineering(CME 2017), 201711.22, Chenzhen, China.

・Oka S, Ikeda T, Goto Y: Verification of the reciprocal inhibition between visual and vestibular system using a t-DCS. The 11th ICME International Conference on Complex Medical Engineering(CME 2017), 2017.11.22, Chenzhen, China.

・Makoto Ueda, Junichi Hashimoto, Yukiko Yoshikane, Kunihiro Hamamoto, Sginnichi Hirose、Efficacy of an Initial Dose of 1 g/kg Intravenous Immunoglobulin in the Treatment of Acute Kawasaki Diseas、The 10th International Kawasaki Disease Symposium、2012.02 7-10、Kyoto

・Toshihiro Kato, Katsuko Hida, Ryoichiro Iwanaga, Atsushi Ota、Development of Japanese Sensory Integration Test (JPAN)、2nd Euro rope Sensory Integration Congress、2011.5、Portugal

・Isibashi F、WHAT KINDS OF DISCREPANCY EXIST BETWEEN OCCUPATION AND THE TRANSLATED WORDS IN THE EASTERN-ASIAN OCCUPATIONAL THERAPIES?、The 5th Asia Pacific Occupational Therapy Congress、2011. 11. 19-24、Thailand

・Murooka M、Matuno Y、Sugitani K、Kamino T、Shinnkawa H、Ishibashi F、Nara N、Promote Independent Living: OT services in Geriatric Rehabilitation、The 6th Beijing International Forum on Rehabilitation、2011 . 10. 21-23. China

・Murooka M、Matuno Y、Sugitani K、Kamino T、Shinnkawa H、Ishibashi F、Nara N、OT Services in Rehabilitation Focused Unit、The 6th Beijing International Forum on Rehabilitation、2011 . 10. 21-23. China

・Murooka M、Matuno Y、Sugitani K、Kamino T、Shinnkawa H、Ishibashi F、Nara N、OT Services for Independent Living in Community、The 6th Beijing International Forum on Rehabilitation、2011 . 10. 21-23. China

・Shinkawa H、Isibashi F、Yang Y A、Huang F、Chen X、Gu Y、Nara N、Does the Translated Word "Sagyou" Represent the Meaning of the Occupation in Japan、The 5th Asia Pacific Occupational Therapy Congress、2011. 11. 19-24. Thailand

・Shinkawa H、Isibashi F、Yang Y A、Huang F、Chen X、Gu Y、Nara N、Does the Translated Word "Xuoye" Represent the Meaning of the Occupation in Mainland China、The 5th Asia Pacific Occupational Therapy Congress、2011. 11. 19-24. Thailand

・Shinkawa H、Isibashi F、Yang Y A、Huang F、Chen X、Gu Y、Nara N、OT Services in Geriatric Setting: Supports for the Community Dwellings、The 5th Asia Pacific Occupational Therapy Congress、2011. 11. 19-24. Thailand

・Kodama N, Moriguchi Y, Maeda M, Ando T, Kikuchi H, Hamada T, Komaki G、Neural correlates of body dissatisfaction: A Functional MRI study、The 15th Congress of Asian College of Psychosomatc Medicine、August 24-26, 2012、Mongolia

・Yoshida T, Komaki G , Mitsui T、Construct validity of EDE-Q in Japanese university students: distinguishing obesity concern and influence of weight and shape on self-esteem、The 16th Congress of Asian College of Psychosomatic Medicine、22-23nd August, 2014、Indonesia

・Yoshihiro Onouchi, Ryuji Fukazawa, Kenichiro Yamamura, Hiroyuki Suzuki, Tomohiro Suenaga, Takashi Takeuchi, Norishige Yoshikawa, Hiromichi Hamada, Takafumi Honda, Kumi Yasukawa, Masaru Terai, Ryota Ebata, Kouji Higashi, Tsutomu Saji, Yasushi Kemmotsu, Shinichi Takatsuki, Kazunobu Ouchi, Fumio Kishi, Tetsushi Yoshikawa, Kunihiro Hamamoto, Yoshitake Sato, Akihito Honda, Hironobu Kobayashi, Junichi Sato, Shoichi Shibuta, Masakazu Miyawaki, Ko Oishi, Hironobu Yamaga, Noriyuki Aoyagi, Seiji Iwahashi, Yuji Murata, Akihiro Fujino, Kouichi Ozaki, Tomisaku Kawasaki, Jun Abe, Mitsuru Seki, Toru Kobayashi, Kouichi Arakawa, Shunichi Ogawa, Toshiro Hara, Akira Hata, Toshihiro Tanaka, Variations in ORAI1 gene associated with Kawasaki disease、第11回国際川崎病シンポジウム、2014.02.03-06、U.S.A.

・Hisako Shinkawa , Nobuhiro Nara , Fubiao Huang , Xiaomei Chen , Yue Gu、The current situation of occupational therapy practice in Mainland China、16th WORLD CONGRESS OF WFOT、H26.6.18、Japan

・Tomoko Fujiki, Hiroyuki Hanafusa, Hiroko Kodama, Hisako Shinkawa, Nobuhiro Nara、Upper extremity functions and health-related quality of life of stroke survivors in the convalescent phase、16th WORLD CONGRESS OF WFOT、H26.6.18、Japan

・Hiroko Kodama , Hiroyuki Hanafusa , Tomoko Fujiki , Hisako Shinkawa , Nobuhiro Nara、Health-related quality of life of stroke survivors in the convalescent phase、16th WORLD CONGRESS OF WFOT、H26.6.19、Japan

・Fubiao Huang , Yeongae Yang , Fusae Ishibashi , Hisako Shinkawa , Nobuhiro Nara、Study on the Perceptions of OT Professionals and Students in China on "Occupation"、16th WORLD CONGRESS OF WFOT、H26.6.19、Japan

・Hiroyuki Hanafusa , Tomoko Fujik , Hiroko Kodama , Hisako Shinkawa , Nobuhiro Nara、Assessment of occupational therapy for stroke patients in the convalescent rehabilitation stage from the social functioning perspective、16th WORLD CONGRESS OF WFOT、H26.6.20、Japan

・日田勝子・積山薫、Development of Body Schema in Children with Autistic Spectrum Disorders. : Examination by Mental Rotation Tasks. 16th WORLD CONGRESS OF WFOT、H26.6.21、Japan

・加藤寿宏・岩永竜一朗・太田篤志・日田勝子・土田玲子・永井洋一・山田孝、Correlation between Japanese Playful Assessment for Neuropsychological Abilities (JPAN) and the SCSIT Scores: Praxis Functions、3rd European Congress of Sensory Integration、11-13 June 2014、Finland

・永井洋一・加藤寿広・岩永竜一朗・太田篤志・日田勝子・土田玲子・山田孝、orrelation between Japanese Playful Assessment for Neuropsychological Abilities (JPAN) and the SCSIT Scores: Somatosensory Functions、3rd European Congress of Sensory Integration、11-13 June 2014、

Finland

・多賀誠、原口健三、職業の三要素から見る職業探索行動に関する一考察、第16回世界作業療法士連盟大会、2014年6月19日、Japan

・原口健三、多賀誠、ヨンエ・ヤン、石橋英恵、上城憲司、統合失調症者に対するスティグマの異文化間比較～日本と韓国の大学生に対する調査より、第16回世界作業療法士連盟大会、2014年6月20日、Japan

・Mayu Hase、Hidenaga Ikoma、Effectiveness of The Management Tool for Daily Life Performance in Day-Service Center、16th International Congress of the World Fedration of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational therapy congress and Expo. H26.6.19、JAPAN

・有久 勝彦/石附 智奈美/宮口 英樹、What should be communicated to students during skill training?
—A qualitative study on the differences in awareness between students and instructors regarding transfer assistance skills、16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo 、2014年6月21日、Japan

・Nobuhiro NARA, Hisako Shinkawa、Brain Function and Occupational Therapy: puzzle task performance and the frontal lobe brain blood flow、第10回 北京国際ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝﾌｫｰﾗﾑ China National Convention Center、H27.9.13、China

・Hisako Shinkawa, Katsuko Hida, Taeko Adachi, Hiroaki Yamaguchi, Masako Yamaguchi、Providing childcare support after children health checkup、第11回 北京国際ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝﾌｫｰﾗﾑ、H28.12.4、北京

・Katsuko Hida, Hisako Shinkawa, Taeko Adachi, Hiroaki Yamaguchi, Masako Yamaguchi、Involvement in a System Supporting Parents and Children after Children health checkups、第11回 北京国際ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝﾌｫｰﾗﾑ、H28.12.4、北京

・Nobuhiro NARA, Naoki Kusumoto, Mitsushi Sekimoto, Hiroyuki Ohgi, Takahiro Tani, Hisako Shinkawa、Contributions of Occupational Therapy in the Super-aging Society from the Experiences of Japanese Occupational Therapists、第11回 北京国際ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝﾌｫｰﾗﾑ、H28.12.4、北京

(15) 福岡保健医療学部　言語聴覚学科

1．業務出張

なし

2．公的国際協力

なし

3．国際学会などの委員

なし

4．国際学会学術発表

氏名	国	都市	学会名	演題	期日
平島ユイ子	韓国	ソウル	International Federation of Oto-Rhino-Laryngological Societies	Teaching Approaches of the communication strategies for Cl children in oral communication	2013.6.3
福井恵子	中国	北京	The 8th Beijing International Forum on Rehabilitation	Emotion Recognition from Facial and Prosodic Stimuli in Parkinson's Disease	2013.9.13-15
平島ユイ子			Asia pacific Symposium on Cochlear Implant	Relationship between the use of communication strategies and individual background of cochlear implant children in oral conversation	2013.11.29
義田俊之	インドネシア	ジャカルタ	16th Congress of Asian College of Psychosomatic Medicine	CLARIFICATION OF FACTORIAL DIFFERENCES BETWEEN THE ORIGINAL EATING DISORDER EXAMINATION-QUESTIONNAIRE(EDE-Q) AND THE EDE-Q J; "WEIGHT AND SHAPE CONCERNS" FALL INTO THE CATEGORIES "FEAR OF OBESITY" AND "INFLUENCE OF WEIGHT AND SHAPE ON SELF-ESTEEM"	2014.8.23
平島ユイ子	中国	北京	Asia Pacific Symposium on Cochlear Implants and Related Sciences	Communication with Cochlear Implant Children in a Small Group Activity	2015.5.3
福井恵子	中国	北京	The 10th Beijing International Forum on	The influence of difficult emotion expression in Parkinson's disease on the Voice	2015.9.13

			Rehabilitation	Handicap Index: A case report	
石川幸伸	中国	広州	9th Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing	Relation between verbal perseveration and naming ability in aphasia. (Best Presentation Award受賞)	2015/10/9-11
義田俊之	日本	横浜	The 31th International Conference on Psychology 2016 (ICP2016)	Which thought control strategy makes negative automatic thoughts uncontrollable? : A mediation analysis	2016.7.28
為数哲司	日本	成田	10th Asia Pacific Conferenceof Speech, Language and Hearing	A study on synatic processing in Dementia with Lewy Bodies	2017/9/17-19
平島ユイ子	日本	成田	10th Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing	Understanding of Compound Facial Emotions by Autistic Hearing Impaired Children	2017/9/17-19
岩﨑裕子	日本	成田	10th Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing	Long-term course of a patient with cognitive impairment in childhood	2017/9/17-19
石川幸伸	日本	成田	10th Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing	Investigation of Olfactory Rehabilitation for Provox Users in Japan	2017/9/17-19

(16) 福岡保健医療学部　医学検査学科

１．業務出張

氏名	出張先	目的	期間
梅村　創	College of Medicine and Public Health, Ubon Ratchathani 34190, Thailand.	・ 招聘講演: "Liquid Biopsy and exosome micro RNAs: The new biomarkers and therapeutic approaches in the Aged Society" ・ マイクロ RNA 解析の共同研究について ・ 学長表敬	2017.8.9-13

２．公的国際協力

氏名	出張先	目的	期間

３．国際学会などの委員

氏名	委員	期間
志村　華絵	Public Relations Committee, Japan Chapter, American College of Physicians(ACP)（米国内科学会日本支部 Public Relations Committee 委員）	2018.2～2020.6（さらに2年延長の可能性あり）

４．国際学会学術発表

演者名	学会・研究会名	日時	場所
佐藤　謙一	2013 AACC annual meeting	2013.7.28-8.1	Houston, USA
佐藤　謙一	IFCC WorldLab 2014	2014.7.22-26	Istanbul, Turkey
宇治　義則	IFCC WorldLab 2014	2014.7.22-26	Istanbul, Turkey
赤松　直樹	The 8th Asia Oceania Epilepsy Congress	2014.8.6-10	Singapore
赤松　直樹	8th Asian Epilepsy Surgery Congress	2014.10.5-6	Tokyo, Japan
赤松　直樹	The 8th international epilepsy colloquium	2015.6.14-18	Grenoble, France
片山　雅史	The 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Science	2016.9.2-4	Kobe, Japan
佐藤　謙一	The 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Science	2016.9.2-4	Kobe, Japan
船島　由美子	The 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Science	2016.9.2-4	Kobe, Japan
安田　聖子	The 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Science	2016.9.2-4	Kobe, Japan

共同演者

宇治　義則	2013 AACC annual meeting	2013.7.28-8.1	Houston, USA
赤松　直樹	EHRA EUROPACE - CARDIOSTIM 2015	2015.7.21-25	Milan, Italy
富安　聡	The 19th International Congress of Cytology (ICC2016)	2016.5.28-6.1	Yokohama, Japan
永沢　善三	The 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Science	2016.9.2-4	Kobe, Japan
船島　由美子	The 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Science	2016.9.2-4	Kobe, Japan
宇治　義則	The Joint Congress of The 19th International Symposium on Gnotobiology (XIX ISG)	2017.6.8	Tokyo, Japan
富安　聡	The Joint Congress of The 19th International Symposium on Gnotobiology (XIX ISG)	2017.6.8	Tokyo, Japan
太田　昭一郎	European Respiratory Society International Congress 2017	2017.9.9-13	Milan, Italy

5．その他

氏名	出張先	目的	期間
梅村　創	大川キャンパスでの外国人訪問研究員の受け入れ: Dr. Surasak Wanram, Ph.D.,Assist. Prof., College of Medical Sciences and Public Health, Center for Biomedical Sciences and Engineering, Ubon Ratchathani University, Thailand,	共同研究："Biomarkers for further clinical research: Study on the most common cancers found in Thailand."	2017.3.15-5.14
安田　聖子	Busan, South Korea	Asia Association of Medical Laboratory Scientists(AAMLS) 参加	2017.9.21-9.24
澁田　樹	Busan, South Korea	Asia Association of Medical Laboratory Scientists(AAMLS) 参加	2017.9.21-9.24

(17) 医学部医学科

1．業務出張

- 渡邉治雄、ブラジル、AMED 医療分野国際科学技術共同研究推進事業ブラジル案件調査、2017.1.7~1.16
- 渡邉治雄、タイ、AMED 医療分野国際科学技術共同研究推進事業タイ案件調査、2017.5.7~5.11
- 渡邉治雄、アメリカ、米国微生物学会、2019.5.31~6.7
- 渡邉治雄、フィリピン、WPRO IHR 会議、2019.7.10~7.11
- 後藤純信、中国、5th Meeting of Physical Therapy Science in Beijing（特別講演演者および研究指導）、2017 6.16~6.18.
- 後藤純信、アメリカ、2017 Neuroscience meeting、2017.11.10~11.16
- 後藤純信、中国、The 11th ICME International Conference on Complex Medical Engineering (CME 2017)（シンポジウム座長・演者）、2017.11.21~11.23
- 中川雅文、中国、大連大学中山病院耳鼻咽喉科（口蓋口蓋扁桃摘出術および鼓室形成術の手術指導）、2017.9.17~9.21.
- 押味貴之、アメリカ、Medical Exchange & Discovery Program（アジア人医学生を対象としたスタンフォード大学医学部を拠点とする夏期医学留学プログラム）、2017.8.6~8.27
- 森 圭介、アメリカ、ジョンズホプキンス大学ウィルマー眼研究所（施設見学と共同研究に関する打ち合わせ）、2017.5.3~5.5
- 桐生 茂、ベトナム、本学検診センター設立に関する視察、2017.8.8~8.12
- 板野 理、ベトナム、Laparoscopic Hepatobiliary and Pancreatic surgery congress（特別講演演者およびライブデモ手術）、2017.5.17~5.21
- 板野 理、タイ、4th MESDA:HPB Basic Course in Laparoscopic Liver Surgery（トレーニングプログラム特別講師）、2017.6.14~6.17
- 板野 理、韓国、第24回アジア太平洋癌 APCC 2017（シンポジウム演者）、2017.6.22~6.24
- 板野 理、フランス、International Laparoscopic Liver Society Paris-France（演者）、2017.7.5~7.10
- 板野 理、台湾、AITS/IRCAD 訪問（トレーニングプログラムの見学および打合せ）、2017.7.12~7.14
- 板野 理、スイス、47th World Congress of Surgery 2017（演者）、2017.8.13~8.19
- 板野 理、ミャンマー、ヤンゴン新病院設立プロジェクトに関する現地視察、2017.11.2~11.6
- 板野 理、フィリピン、13th Asia Pacific Congress of Endoscopic and Laparoscopic Surgeons of Asia（演者）、2017.11.16~11.19
- 板野理、ベトナム、国交樹立45周年記念 越日友好「日本医療フォーラム」（特別講演演者）、2018.1.28~1.31
- 森 一郎、潮見隆之、ベトナム、ホーチミン市チョーライ病院（病理診断体制の実態調査）、2018.2.4~2.8
- 角田 亘、ミャンマー、ヤンゴン市ミャンマー国立リハビリテーションセンター（IUHW Rehabilitation Seminar）、2017.8.6~8.10
- Le Tran Ngoan、ベトナム、Attended the meeting with the Officers of Ministry of Science and Technology for the final negotiation of the new research project entitled: "Development and Validation of Research Instruments for Observational Studies on Health Sciences in Viet Nam"、 2017.5.25~5.26
- Le Tran Ngoan、ベトナム、Field data collection for the awarded project entitled: "Development and Validation of Research Instruments for Observational Studies on Health

Sciences in Viet Nam”、2017.9.13~9.19

- Le Tran Ngoan、ベトナム、Field data collection for the awarded project entitled: “Development and Validation of Research Instruments for Observational Studies on Health Sciences in Viet Nam”、2017.12.20~12.29
- Nwe Nwe Oo、ミャンマー、Attended the 9th International Conference on Public Health among Greater Mekong Sub- Regional countries: “Adopting Healthy Lifestyle: “Combating Non Communicable Diseases (NCDs)”、2017.11.22~11.23
- 永山正雄、米国、Neurocritical Care Society 15th Annual Meeting (招待講演演者、座長、各種委員会参加、研究指導)、2017.10.10~10.15
- 村井弘之、米国、International Myasthenia Gravis Advisory Board Meeting、2017.12.9~12.10
- 荻野美恵子、米国、世界神経学会 ALS サブグループ会議、ALS 環太平洋部会会議出席 2017.12.7~12.8
- 進　伸幸、米国、Gynecologic Cancer InterGroup (GCIG) (委員会参加、討議) 2017.5.31~6.4
- 進　伸幸、韓国、The 103rd Annual Congress of KSOG (招待講演)　2017.9.22
- 進　伸幸、韓国、The 22nd Seoul International Symposium (招待講演)　2017.9.23

2．公的国際協力 (JICA)

- 渡邉治雄；AMED-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム・リサーチスーパーバイザー

3．国際学会などの委員

渡邉治雄、国際 STEC 感染症学会運営委員会委員
渡邉治雄、WHO AMR 戦略・技術諮問委員会委員
渡邉治雄、WHO-WPRO 新興再興感染症戦略・技術諮問委員会委員
後藤純信、International Conference on Complex Medical Engineering (Councilor)
後藤純信、International Conference on Complex Medical Engineering 2018 (Program committee and Symposium organizer)
押味貴之、Critical Link International 9 in 2019　実行委員会 委員長
小堀浩幸、米国心臓協会 評議員
石川和信、米国心臓協会 評議員
小堀浩幸、米国腎臓学会 評議員
小堀浩幸、米国内科学会 評議員
下澤達雄、American Heart Association (High Blood Pressure Research Council Fellow)
石川和信、Association of Medical Education in Europe (Associate Fellow)
中村俊康、European Wrist Arthroscopy Society (Board Member)
中村俊康、President-Elect. Asia Pacific Wrist Association (Founding Executive Board Member)
西村　渉、PLoS ONE (Academic Editor)
下澤達雄、PLoS ONE (Academic Editor)
下澤達雄、Current Hypertension Report (Editor)
高橋芳久、Pathology International (Associate Editor)
高橋芳久、World Journal of Gastrointestinal Pathophysiology (Editorial Board)
石川和信、Geriatrics & Gerontology International (Associate Editor)
船尾陽生、Spine Deformity, The Official Journal of the Scoliosis Research Society (Associate Editor)

石川三衛、Endocrine Journal (Editor)
石川三衛、Journal of Clinical Medicine (Editor)
奥仲哲弥、Journal of thoracic and cardiovascular surgery (Editorial Board)
小林幸夫、 Asian Journal of Clinical Oncology (Associate Editor)
村井弘之、Clinical and Experimental Neuroimmunology (Editor-in-Chief)
村井弘之、BMC Neurology (Associate Editor)
赤津晴子、フルブライト委員会 選考面接官
赤津晴子、マンスフィールドPhRMA研究者プログラム 選考面接官
山田哲司、国際逆相タンパク質ワークショップ 組織委員
山田哲司、国際がんプロテオゲノミクスコンソーシアム 日本代表
山田哲司、ヒトプロテオーム機構 アジア・オセアニア地区選出理事
永山正雄、American College of Physicians Japan Chapter, Local Nomination Committee (Vice Chair)
永山正雄、European Stroke Organization "Cerebrovascular Diseases" (Editorial Board)
永山正雄、Neurocritical Care Society International Committee/Global Task Force 日本代表委員
永山正雄、Neurocritical Care Society "Neurocritical Care" (Editorial Board)
永山正雄、Neurocritical Care Society "Currents" (Section Editor)
永山正雄、Americal Academy of Neurology (Fellow)
永山正雄、Mayo Clinic Proceedings (Ad hoc Reviewer)
永山正雄、Faculty of 1000 Critical Care and Emergency Medicine (Faculty Member)
永山正雄、The 12th Institute of Complex Medical Engineering, International Conference on Complex Medical Engineering (CME 2018)、プログラム委員（仮）
荻野美恵子、World Federation of Neurology, Subgroup of ALS 2008~
荻野美恵子、Pan Asian Committee for Treatment and Research in Amyotrophic Lateral Sclerosis 2014~
荻野美恵子、ALS Clinical Trials Guidelines 2016 committee
進 伸幸、アジア婦人科腫瘍学会 (ASGO) プログラム委員長
進 伸幸、Gynecologic Cancer InterGroup (GCIG) 委員

4. 国際学会学術発表

- Sakamoto K, Takemoto M et al. R3h domain containing-like has pivotal roles in skeletal muscle development and regeneration, 77th Scientific Sessions American Diabetes Association, San Diego, USA. 2017.6.8~6.13

- 赤津晴子、AMEE 2017 Annual Conference, Helsinki, Finland. 2017.8.26~8.30

- Ueda K, Nishimoto M, Hirohama D, Ayuzawa N, Kawarazaki W, Watanabe A, Shimosawa T, Loffing J, Zhang MZ, Marumo T, Fujita T Systemic effect of renal 11b-HSD2 deficiency on blood pressure regulation. Joint Hypertension 2017 Scientific Session/AHA Council on Hypertension/AHA Council on Kidney in Cardiovascular Disease/American Society of Hypertension, SanFrancisco, USA. 2017 September

- Conghui Wang, Sayoko Ogura, Fumiko Mori, Suang Koid, Alimila Yeerbolati, Latapati Reheman,

Beibei Liu, Tatsuo Shimosawa. Low dose L - NAME causes salt sensitive hypertension via activation of NCC. Joint Hypertension 2017 Scientific Session/AHA Council on Hypertension/AHA Council on Kidney in Cardiovascular Disease/American Society of Hypertension, SanFrancisco, 2017 September

- Ayuzawa N, Nishimoto M, Hirohama D, Ueda K, Kawarazaki W, Shimosawa T, Marumo T, Fujita T. Mineralocorticoid receptor in renal intercalated cells mediates pendrin regulation by renin-angiotensin-aldosterone system to maintain fluid homeostasis. Gordon Research Conference Angiotensin 2018, Ventura CA, 2018 February

- Mori F, Nishimoto M, Reheman L, Shimosawa T, Fujita T. The central neural mechanism of prenatal programming and salt-sensitive hypertension. Gordon Research Conference Angiotensin 2018, Ventura CA, 2018 February

- Nagate Y, Ezoe S, Fujita J, Ichii M, Toda J, Oritani K, Kanakura Y. (e-poster) Ectonucleotidases CD39/CD73 are highly expressed on ATLL cells and responsible for generating AMP/adenosine. 22nd Congress of the European Hematology Association, Madrid, Spain. 2017.6.22~6.25

- Toda J, Ichii M, Oritani K, Saito H, Kitai Y, Muromoto R, Kashiwakura J, Saitoh K, Matsuda T, Kanakura Y. (Poster) Signal transducing adaptor protein-1(STAP-1)maintains chronic myeloid leukemic stem cells. 22nd Congress of the European Hematology Association, Madrid, Spain. 2017.6.22~6.25

- Ichii M, Oritani K, Shibayama H, Toda J, Saito H, Kitai Y, Muromoto R, Kashiwakura J, Saitoh K, Matsuda T, Kanakura Y. (Poster) Signal-Transducing Adaptor Protein-2 Blocks B cell Recovery under Hematological Stress at pre-B stage via TLR4 Signaling. The American Society of Hematology 59th Annual Meeting, Atlanta, GA, USA. 2017.12.9~12.12

- Ueda T, Yokota T, Shingai Y, Doi Y, Ishibashi T, Sudo T, Tanimura A, Ichii M, Ezoe S, Shibayama H, Oritani K, Kanakura Y. (Poster) Endothelial Cell-Selective Adhesion Molecule (ESAM) plays important roles in the adult-type hemoglobin synthesis during fetal erythropoiesis. The American Society of Hematology 59th Annual Meeting, Atlanta, GA, USA. 2017.12.9~12.12

- Toda J, Ichii M, Shibayama H, Saito H, Kitai Y, Muromoto R, Kashiwakura J, Saitoh K, Matsuda T, Oritani K, Kanakura Y. (Poster) Role of Signal Transducing Adaptor Protein (STAP) Family in Chronic Myelogenous Leukemia. The American Society of Hematology 59th Annual Meeting. Atlanta, GA, USA. 2017.12.9~12.12

- Yoshinobu Goto, Visualization of brain disfunction、5th Meeting of Physical Therapy Science in Beijing、PKUCare Rehabilitation Hospital. 2017.6.17

- Yoshinobu Goto、Difference of visual evoked magnetic fields with mental arithmetic tasks

and verbal fluency task. 2017 Neuroscience meeting. Wahington DC. 2017.11.12

- Iwasaki Y, Goto Y, Takashima S、Long-term course of a patient with cognitive impairment in childhood. APCSLH2017 (Asia Pacific Conference on Speech, Language, and Hearing). Narita. 2017.9.18

- Oka S, Ikeda T, Goto Y、Verification of the reciprocal inhibition between visual and vestibular system using a t-DCS. The 11th ICME International Conference on Complex Medical Engineering (CME 2017) 2017.11.22

- Jun Miyazaki, BCG immunotherapy for bladder cancer and the effects of strain differences, The 34th Korea-Japan Urological Congress (KJUC)、2017 September

- Shingo Yamazaki, Takaaki Suzuki, Hirokazu Takatsuka, Chikako Ohwada, Emiko Sakaida, Chiaki Nakaseko, Itsuko Ishii. Pharmacokinetic analysis of once-daily intravenous busulfan in combination with fludarabine for elderly AML/MDS patients. The 15th International Congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicology, Kyoto. 2017. 9.24~9.27

- Ayako Nakamura, Chikako Ohwada, Masahiro Takeuchi, Yusuke Takeda, Shokichi Tsukamoto, Naoya Mimura, Nagisa Oshima-Hasegawa, Yuhei Nagao, Emi Togasaki, Hiroaki Tanaka, Chika Kawajiri-Manako, Yasumasa Sugita, Hisashi Wakita, Nobuyuki Aotsuka, Kosei Matsue, Koutaro Yokote, Osamu Ohara, Chiaki Nakaseko, and Emiko Sakaida. Detection of MYD88 L265P Mutation by Next Generation Deep Sequencing in Peripheral Blood Mononuclear Cells of Waldenström's Macroglobulinemia and IgM Monoclonal Gammopathy of Undetermined Significance. The 59th Annual Meeting of the American Society of Hematology, Atlanta, GA, USA. 2017.12.9~12.12

- Hidehiko Okamoto. Maladaptive reorganization in the human auditory cortex. The 6th Biennial Meeting, International Society for the Advancement of Clinical MEG(ISACM) 2017, Sendai, Japan. 2017.5.22~5.24

- Wajima, Z., Shiga, T., Nishiyama, T., Uchino, H. a case of zoster-associated pain and postherpetic neuralgia with frequent recurrence. The American Society of Anesthesiologists Annual Meeting, Boston, USA. 2017.10.21~10.25

- 森一郎、Digital Pathology in Japan, with Special Reference to Artificial Intelligence (AI) and Deep Learning. 24th Asia Pacific Cancer Conference, Seoul, Korea. 2017.6.22~6.24

- 森一郎、Simulation program for Whole Slide Image (WSI) primary diagnosis. ECP-2017 (European Congress of Pathology), Amsterdam, The Netherlands.2017.9.2~9.6

- 森一郎、Japanese guidance of Digital Pathology diagnosis. Digital Pathology Congress: Asia, Guangzhou, China. 2017.9.16~9.17

- 森一郎、Japanese guidance of Digital Pathology Diagnosis - preparation for guideline, 2017 Pathology Visions, San Diego, USA. 2017.10.1~10.3

- 森一郎、Current topics in Tele-pathology, 1st Mongolian-Japanese workshop in Diagnostic Cytology, Ulaanbaatar city, Mongolia. 2017.10.12~10.13

- 森一郎、Glass slide preparation and Digital Pathology, 2nd International Conference on Digital Pathology and Image Analysis, San Antonio, USA. 2017.11.15~11.16

- Kazuhiro Samura, Minako Kawaguchi, Yasushi Miyagi, Yasumasa Oyagi, Tsuyoshi Okamoto, Masatou Kawashima: non-motor effect of subthalamic stimulation in Parkinson's disease: An interview study by speech-language-hearing therapists; 10th biennial Asia pacific conference on speech language and hearing (Narita, Japan), 2017.9.17~9.19

  Minako Kawaguchi, Nobutaka Mukae, Kimiaki Hashiguchi, Akifumi Yokomizo, Ayumi Sakata, Tomomi Arakawa, Ichiro Kawano, Kazuhiro Samura, Kenichi Kawaguchi, Yasuharu Nakashima, Koji Iihara: necessity of verbal function monitoring during awake craniotomy for resection of seizure focuses; 10th biennial Asia pacific conference on speech language and hearing (Narita, Japan), 2017.9.17~9.19

- 北村　聖、Teaching medical professionalism, APAME2017, Vientiane Laos. 2017.8.17~8.19

- Uchiyama K, Washida N, Yube N, Kasai T, Morimoto K, Wakino S, Deentichina S, Itoh H, The impact of Remote Monitoring System of Health Resources Consumption in Patients on Automated Peritoneal Dialysis(APD): A Simulation Study, American Society of Nephrology 2017, New Orleans, USA. 2017.10.31~11.5

- Sugaya M. BET bromodomain inhibitor JQ1 decreases CD30 and CCR4 expression as well as proliferation of cutaneous T-cell lymphoma. 2017 SID annual meeting, 2017.4.26~4.29

- Takakazu Oka. Changes in autonomic functions and blood biomarkers by practicing sitting isometric yoga in patients with ME/CFS. International Association of Yoga Therapists, 7th Symposium on Yoga Research 2017. Stockbridge, MA, USA. 2017.10.16~10.18

- Takeda K, Hosogane N, Ogura Y, Yagi M, Fujita N, Nagoshi N, Tsuji O, Ishii K, Kaneko S, Kouno H, Ishikawa M, Takahashi Y, Ikegami T, Nojiri K, Okada E, Funao H, Okuyama K, Tsuji T, Nakamura M, Matsumoto M, Watanabe K, Ikegawa S: Association of degenerative lumbar scoliosis with the genetic factors in adolescent idiopathic scoliosis and disc degeneration, The 52nd Scoliosis Research Society, Philadelphia, USA, 2017.9.6~9.9

- Funao H, Isogai N, Ishihara S, Ishikawa M, Nishiyama M, Nakamura M, Kitagawa Y, Matsumoto M, Obara H, Ishii K. Comparative study of S2-alar-iliac screw and posterior iliac screw pathways between male and female using three-dimensional computed tomography. The 17th

Pacific and Asian Society of Minimally Invasive Spine Surgery, Sapporo, 2017.7.27~7.29

- Funao H, Yamane J, Nagoshi N, Isogai N, Ishihara S, Tsuji O, Fujita N, Yagi M, Watanabe K, Hosogane N, Ninomiya K, Nakamura M, Matsumoto M, Ishii K, KSRG members: The impact of patients' comorbidity on surgical results and clinical outcomes after cervical laminoplasty for cervical spondylotic myelopathy. 8th Annual Meeting of Cervical Spine Research Society Asia Pacific Section, Kobe, Japan, 2017.3.9~3.11

- Ishihara S, Ishii K, Nagoshi N, Yamane J, Ninomiya K, Kato S, Tsuji O, Fujita N, Yagi M, Watanabe K, Fukuda K, Funao H, Nakamura M, Matsumoto M, KSRG members: The impact of patients' obesity on surgical outcomes after cervical laminoplasty in patients with cervical spondylotic myelopathy. 8th Annual Meeting of Cervical Spine Research Society Asia Pacific Section, Kobe, Japan, 2017.3.9~3.11

- 森圭介、Association for Research in Vision and Ophthalmology. Baltimore, MD, USA. 2017.5.7~5.12

- Yasushi Fuchimoto, Michinobu Ohno, Makoto Komura, Higuchi Masataka , Tatsuo Kuroda, Tetsuji Yamaoka, Shin Enosawa. Tracheal reconstruction using the decellularized trachea allograft in a swine model for tracheal stenosis, PAPS 2017, Seattle, USA. 2017.5.28~6.1

- Yasushi Fuchimoto, Yohei Yamada, Nobuhiro Takahashi, Ken Hoshino, Taizo Hibi, Masahiro Shinoda, Hideaki Obara, Haruko Shima, Hiroyuki Shimada, Yuko Kitagawa, Tatsuo Kuroda. Curative surgical treatment for hepatoblastomas by live donor liver transplantation combined with ICG navigation. 49th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, Washington, DC, USA. 2017.10.12~10.15

- Kiryu S, Akai H, Nojima M, Hasegawa K, Shinkawa H, Kokudo N, Yasaka K, Ohtomo K. Impact of hepatocellular carcinoma heterogeneity on computed tomography as a prognostic indicator, RSNA. Chicago, USA. 2017.11.25~12.2

- Ishikawa K, Kobayashi G, Sugawara A, Moroi Y. Recent Changes in Simulation-based Medical Education in Japan; Comparative analysis of National Surveys 2012 and 2016. Amee conference 2017, Helsinki, Finland. 2017.8.30

- Moroi Y, Kobayashi G, Sugawara A, Ishikawa K. Implementation of medical professional education utilizing social networking service with an evidence-based checklist. Amee conference 2017, Helsinki, Finland. 2017.8.28

- Kobayashi G, Ishikawa K. Does manual dexterity in undergraduate simulation training affect the choice of clinical specialty? Amee conference 2017, Helsinki, Finland. 2017.8.29

- Kobayashi G, Sugawara A, Moroi Y, Ishikawa K. Manual dexterity and career choice observed

in a laparoscopic surgery simulation training for medical students. The 15th Asia-Pacific Medical Education Conference, Singapore, 2018.1.12

- Itano O, Shinoda M, Kitago M, Abe Y, Hibi T, Yagi H, Kitagawa Y. Laparocsopic parenchymal-sparing anatomical liver resection using parenchymal-sparing anatomical liver resection using vein-guided approach for tumors located in the posterosuperior segments of the liver. 25th International congress of the European association for endoscopic surgery Frankfurt, 2017 June

- Itano O. Basic suturing and clinical usage. 4th MESDA-HPB Basic Course in Laparoscopic Liver Surgery Bangkok, 2017 june

- Itano O. Intraoperative ultrasonography of laparoscopic hepatectomy. 4th MESDA-HPB Basic Course in Laparoscopic Liver Surgery Bangkok, 2017 June

- Itano O, Abe Y, Shinoda M, Kitago M, Hibi T, Yagi H, Kitagawa Y. Laparoscopic parenchymal-sparing anatomical liver resection using vein-guided approach for tumors located in the posterosuperior segments of the liver. First World Congress of the International Laparoscopic Liver Society Paris, 2017 July

- Masuda Y, Itano O, Shinoda M, Kitago M, Abe Y, Hibi T, Yagi H, Kitagwa Y. Use of Retractor in Laparoscopic Liver Resection. First World Congress of the International Laparoscopic Liver Society Paris, 2017 July

- Abe Y, Itano O, Shinoda M, Kitago M, Yagi H, Hibi T, Kitagawa Y. Feasibility of laparoscopic liver resection for the tumor located in right superior region of the liver. International Laparoscopic Liver Society 2017 Paris, 2017 July

- Kitago M, Aiura K, Itano O, Shinoda M, Abe Y, Yagi H, Hibi T, Kitagawa Y. Multicenter Phase II Study of Portal Infusion Chemotherapy Followed by Gemcitabine for Resected Pancreatic Cancer (TOSPAC-01). 47th World Congress of Surgery 2017 Basel, 2017 August

- Itano O, Shinoda M, Kitago M, Abe Y, Hibi T, Yagi H, Kitagawa Y. Radical Resection of Perihilar Cholangilcarcinoma Using Preceding Glissonean Pedicle Isolation by Extrahepatic Hilar Approach Based on 3D Computer Assisted Surgery Planning and Navigation. 47th World Congress of Surgery 2017 Basel, 2017 August

- Itano O, Abe Y, Shinoda M, Kitago M, Yagi H, Hibi T, Oshima G, Imai S, Fujii S, Yoshida M, Kitagawa Y. Laparoscopic Parenchymal-Sparing Anatomical Liver Resection using Vein-guided Approach for Tumors Located in the Posterosuperior Segments of the Liver. 13th ELSA Asia-Pacific Congress Cebu, 2017 November

- 窪田拓生、水野晴夫他、Incidence rate of symptomatic vitamin D deficiency in children: a nationwide survey in Japan. Inaugural combined meeting of the Australian and New Zealand

Bone and Mineral Society (ANZBMS) and the International Federation of Musculoskeletal Research Societies (IFMRS), in conjunction with the Japanese Society for Bone and Mineral Research (JSBMR), Brisbane, Australia. 2017.6.17~6.21

- Toshimitsu Momose, Qualification of physicians by JSNM for interpretation of brain amyloid PET Images. SNMMI 2017 Annual Meeting, Colorado Convention CenterHeadquarter Hotel: Hyatt Regency Denver, Denver, Colorado, USA. 2017.6.8~8.14

- Kentaro Fujiwara, Toshimitsu Momose *et al.* Biodistirbution study of 111In-anti- CDH17 minibody using CDH17-positive gastric cancer xenograft mice, EANM '17 Annual Congress of the European Association of Nuclear Medicine, Vienna,Austria. 2017.10.21~10.25

- 吉岡広陽、Single-cell RNA-sequencing shows the adipogenic potential in osteoblasts. 2017 Joint meeting of the Australian and New Zealand Bone and Mineral Society and the International Federation of Musculoskeletal Research Societies in conjunction with the Japanese Society for Bone and Mineral Research. Brisbane, Queensland, Australia. 2017.6.17~6.21.

- 吉岡広陽、Single-cell RNA sequencing provides molecular dissection of osteoblasts and their adipogenic potential. 2017 Annual meeting of the American Society for Bone and Mineral Research. Denver, Colorado, USA. 2017.9.8~9.11

- 山田哲司、Therapeutic target discovery by cancer proteomics in the era of large-scale genome-resequencing, 16th Human Proteome Organisation (HUPO) World Congress, Dublin, Ireland. 2017.9.19

- Masuda W., Yamakawa T., Umemiya T., Azuma K., Matsuno K., Kitagawa M. TM2 domain containing 3, a mammalian homologue of Drosophila neurogenic gene product Almondex, activates Notch1. The Notch Meeting X, Athens, Greece. 2017.10.1~10.5

- Yusuke Hayasaka, Chizuko Aiba, Rieko Yamashita, Jason Barrows, Nicholas Stone, "Learning Style and the Use of Computer-Based Vs. Paper-Based in the English Classroom," The 4th Teaching & Education Conference of The International Institute of Social and Economic Sciences, , Venice, Italy. 2017.4.24

- Satoshi Shibuta, Tomotaka Morita, Jun Kosaka. Intravenous anesthetic-induced neurotoxic shift with age in the developing periods, Society for Neuroscience, Washington DC. 2017.11.12

- 小林幸夫、 Impact of the Double Expression of MYC and BCL2 on Outcomes of Primary Refractory Diffuse Large B-Cell Lymphoma Following R-CHOP Chemoimmunotherapy. The 59th Annual Meeting of the American Society of Hematology, Atlanta, GA, USA. 2017.12.9~12.12

- 小林幸夫、Improved Prognosis of Extranodal NK/T-Cell Lymphoma, Nasal Type (ENKL)

of Nasal Origin but Not Extranasal Origin: An Analysis of NKEA Study. The 59th Annual Meeting of the American Society of Hematology, Atlanta, GA, USA. 2017.12.9~12.12

- Nakamura T. TFCC disorders without instability. 2017 Annual Meeting of Federation of European Societies for Surgery of the Hand (FESSH), Budapest, Hungary, 2017.6. 22~6.25

- Nakamura T. The Lasso procedure for intrinsic minus fingertip: A three dimensional study. International Society of Biomechanics, Brisbane, Australia, 2017.7.22~7.25.

- Nakamura T. Anatomy of the DRUJ. 2017 Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Sebu, Philippine, 2017.11.7~11.9

- Nakamura T. TFCC fovea repair 2017 Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Sebu, Philippine, 2017.11.7~11.9

- Tomomi Meguro, Yuko Meguro, Toshio Nagai. Local Brain Atrophy in Parahippocampal Gyrus is Prominent in Insomniac Senile Heart Failure Patients Without Dementia. American Heart Association Scientific Sessions, Anaheim California, USA. 2017.11.11-11~11.15

- Tomonobu Ezure, Satoshi Amano, Kyoichi Matsuzaki : Sweat Glands Shrink Upward with Aging, Causing Dermal Layer Defects That Lead to Loss of Skin Elasticity and Wrinkling -Establishment of 3D imaging method for skin appendages. 47th Annual European Society for Dermatological Research (ESDR) Meeting, Salzburg, 2017 September (Poster Award)

- Urano T, Shiraki M, Kuroda T, Tanaka S, Urano F, Uenishi K, Inoue S. Preventive Effects of Treatment for Osteoporosis on Age-Related Weight Loss in Postmenopausal Women, IAGG 2017 World Congress, San Francisco. 2017 July

- Le Tran Ngoan. Aging and Public Health: A Case Study from Viet Nam. International Symposium, "Towards Building a Resilient Network for Regional Health Cooperation in East Asia", Tokyo, Japan. 2018.1.15

- Le Tran Ngoan. Advantage and Limitation of Medical Doctor Training in Vietnam. International Session. The 49th Annual Meeting of the Japan Society for Medical Education (JSME), Sapporo, Japan. 2017.8.18~8.19

- Tomoko Ichiki, Seethalakshimi R Iyer, Christopher G Scott, *et al.* Circulating Corin in the General Community: A Link to Gender and Metabolic Phenotype. AHA Scientific Sessions 2018, Anaheim, USA. 2017.11.14

- Nwe Nwe Oo. Emerging infectious diseases in Myanmar. Towards building a resilient network for Regional Health Cooperation in East Asia. Tokyo, Japan. 2018.01.15.

- Masao Nagayama. Neuromonitoring in the ICU, XXIII World Congress of Neurology (WCN) 2017 Kyoto, 2017.9.17

- Masao Nagayama. Evidence-Practice Gaps Worldwide in Stroke Pharmacotherapy; Alteplase dose, Anticoagulants, and Neuroprotective agents, Neurocritical Care Society 2017 Annual Meeting, Waikoloa, Hawaii, USA. 2017.10.12

- Murai H, Uzawa A, Suzuki Y, Imai T, Shiraishi H, Tsuda E, Suzuki H, Okumura M, Utsugisawa K. Open label extension trial of REGAIN to evaluate the safety and efficacy of eculizumab in patients from Japan with refractory generalized myasthenia gravis. The 23rd World Congress of Neurology. Kyoto, Japan. 2017.9.16~9.21

- Murai H. Updates on Antibodies in Myasthenia Gravis. Asean Neurological Association Biennial Convention 2017. Manila, Philippine. 2017.11.24

- 荻野美恵子 (symposist)、TT08 TOPIC T08A: Palliative care-General Aspects, Transcultural aspects XXIII World Congress of Neurology (WCN 2017), Kyoto, Japan. 2017.9.18

- 荻野美恵子他、Induction rates of PEG and NPPV for ALS in Japanese ALS centers. 28th international symposium on ALS/MND, Boston, USA. 2017.12.9

- 荻野美恵子他、Decision-making of TV in Japan. 28th international symposium on ALS/MND, Boston, USA. 2017.12.9

- Susumu N, Yamagami W, Hirano T, Makabe T, Sakai K, Chiyoda T, Nomura H, Kataoka F, Hirasawa A, Tominaga E, Banno K, Aoki D. Fertility-preserving hormonal therapy in young patients with early-stage endometrial cancer. The 20th International meeting of the European Society of Gynaecologycal Oncology (ESGO), Vienna, Austria, 2017.11.4~11.7 (Best of ESGO)

- Susumu N, Yamagami W, Hirasawa A. Aoki D. Outcomes of fertility-preserving high-dose progestin therapy for young patients with endometrial cancer. The 5th Biennial Congress of Asian Society of Gynecologic Oncology (ASGO), Tokyo, Japan, 2017.11.30~12.2 (シンポジウム・招請講演)

国際協力事業(国際原子力機構 (IAEA) 教育講演

- 百瀬敏光、Brain Death. IAEA workshop and Final Coordination Meeting on Nuclear Medicine Techniques in Neurological Diseases II (ICNMP-PA), Multimedia Hall, the Center of Medical Innovation and Translational Research building 1F, Osaka University Graduate School of Medicine, Osaka, Japan. 2017.6.26~6.30

- 百瀬敏光、 Case presentation of PET and SPECT about dementia, IAEA/RCA Regional Training Course on Theragn ostics and Dementias, Osaka University Graduate School of Medicine, Osaka, Japan. 2017.12.4~12.8

(18) 成田看護学部　看護学科

1．業務出張

・二田水　彩、ベトナム、「健康長寿広報展 in ベトナム」への出展、2015.9.9～9.15
・野村明美、ブラジル、H28 年度科学研究助成事業による調査研究、2016.7.7～8.1
・二田水　彩、ベトナム、チョーライ病院からの短期研修員受入に係る研修の実施、2016.11.21～12.10

2．公的国際協力

・小川正子、パラグアイ、プライマリヘルスケア体制強化プロジェクト、チーフアドバイザー、2016.8.3～8.31
・小川正子、パラグアイ、プライマリヘルスケア体制強化プロジェクト、チーフアドバイザー、2016.10.26～11.25
・小川正子、ボリビア多民族国、医療技術者養成システム強化プロジェクト、準備調査団団長、2017.3.11～3.20
・小川正子、ボリビア多民族国、医療技術者養成システム強化プロジェクト、チーフアドバイザー、2017.7.25 ～8.7
・小川正子、パラグアイ、プライマリヘルスケア体制強化プロジェクトフェーズⅡ、準備調査団団長、2017.8.8～8.17
・小川正子、ボリビア多民族国、医療技術者養成システム強化プロジェクト、チーフアドバイザー、2017.8.29～9.15
・森山ますみ、ボリビア出張、JICA 短期専門家　看護教育専門家、「医療技術者養成システム強化プロジェクト」、2017.8.29～9.15
・小川正子、ボリビア多民族国、医療技術者養成システム強化プロジェクト、チーフアドバイザー、2017.10.28～11.17
・二田水　彩、ボリビア、「医療技術者養成システム強化」プロジェクト短期派遣専門家、2017.10.28～11.17

3．国際学会などの委員

なし

4．国際学会学術発表

・熊田奈津紀、林直子、新藤悦子、茶園美香、中山尚子、稲吉光子、The effects of online education for risk control of cervical Cancer, Asian Oncology Nursing Society (AONS) 2015 Conference, 2015.11.19-21, Seoul Korea
・新藤悦子、茶園美香、小松浩子、岡林剛史、鶴田雅士、Psychosocial Problems and Countermeasures in Patients with Advanced/Recurrent Colorectal Cancer on Long-Term Chemotherapy, International Symposium on Supportive Care in Cancer, 2015.6.25-27, Copenhagen Denmark
・髙山裕子, 鈴木英子, 小檜山敦子, 高野美香. Factors related to burnout in nurses with children working at hospitals, The 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2016.3.14-3.15, Chiba, Japan
・髙山裕子, 鈴木英子, 髙山詠美, 髙山かれん, 冨田幸江, 根岸貴子, 木内千晶. Factors Related to Mental Health in Female Nurses with Children Aged Under Three in Japan, 17th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting, 2016. 11.3-5, Taiwan
・小川正子、Modelo de Plomoción de la Salud con Participación Comunitaria en Paraguay、

2016.11.16～11.19、República Dominicana.

・髙山裕子,鈴木英子,松尾まき,山本貴子,町田貴絵. Research Trends Related to Burnout in Female Nurses During Childcare. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2017.3.9-3.10, Hong Kong

・髙山裕子, 鈴木英子, 小檜山敦子, 木内千晶. A gender-related comparison of factors affecting burnout among Japanese hospital nurses. ICN, 2017.5.27-6.1, Barcelona, Spain

・新藤悦子、野村明美、茶園美香、二田水彩、清水信輔、The Current Status of Health Education at Elementary and Junior High Schools in City A in Japan, ICN Congress 2017, 2017.5.27-31, Barcelona Spain

・森山ますみ、"Present State of developmental screening at young children's health check-ups by local governments and treatments for foreign children in Japan"、the International Council of Nurses congress 2017, 2017.5.27-31. Barcelona Spain

・木戸久美子、Exploring positive experiences of parenting: Japanese mothers of children with developmental disabilities, 31th International Confederation of Midwives, 2017.6.18-22, Toronto, Canada

・髙山裕子, 鈴木英子. Factors affecting burnout in Japanese female nurses Comparison of childless and non-childless nurses, Worldwide Nursing Conference, 2017.7.24-25, Singapore

(19) 成田保健医療学部　理学療法学科

1．業務出張

・宮森隆行、ミャンマー、「IUHW ミャンマーリハビリテーションセミナー」国立ミャンマーリハビリテーションセンターにて講演、2016.8.3～8.7

・牧原由紀子、タイ、基調講演、International Conference entitled "Health Science Innovation for Aging Society、2017.7.14

・志村圭太、ミャンマー、ミャンマーヤンゴン国立リハビリテーション病院、IUHW リハビリテーションセミナー講師、2017.8.6～2017.8.11

2．公的国際協力

町田和、JICA国際緊急援助隊医療チーム業務調整員 2017.4～

3．国際学会などの委員

町田　和、第10回アジア環太平洋音声語学聴覚学会学術大会、運営委員、2017年9月17-19日

4．国際学会学術発表

・志村　圭太、Characteristics of age－related changes in blood pressure, arterial oxygen saturation and physique among Bolivian people in a valley area, 13th Asian Confederation for Physical Therapy Congress 2016, 2016.10.7～10.8, Malaysia

・山口　将希、Research for the appropriate stimulation after mesenchymal stromal cells injection to treat osteochondral defect, 3rd International Symposium on Regenerative Rehabilitation in Kyoto, 2017.2.11, Kyoto, Japan

・澤　龍一、Association of fear of falling with objectively measured physical activity in community-dwelling older adults, World Congress for Physical Therapy 2017, 2017.6.30～7.6, Cape town, South Africa

・牧原　由紀子、Silva PB, Arendt-Nielsen L, Thompson AK, Mrachacz-Kersting N. Effects of the stretch amount and velocity on the amplitude and latency of the human soleus stretch reflexes. Society for Neuroscience 47th Annual Meeting, 2017.11.11-15, Washington DC, USA

・河野　健一、Comparison of effectiveness of intra-dialytic exercise on solute removal in Japanese hemodialysis patients, 22nd International Meeting of Physical Therapy Science, 2017.7.15, Jung-gu, Korea

・西田　裕介, Relationship between the lower leg circumference and physical activity in elderly people, 22nd International Meeting of Physical Therapy Science, 2017.7.15, Jung-gu, Korea

・町田　和、Past disaster in Myanmar and Rehabilitation support for victims, The23rd International Meeting of Physical Therapy Science in Myanmar, 2017.8.5, Yangon Myanmar

・糸数　昌史, Orthosis with Joint Support Function on Muscle Activities during Sit to Stand Healthy Subjects, 3rd International Meeting of Asia Rehabilitation Science, 2018.3.24, Beijing, China

5．その他

・澤　龍一、千葉、ジャパンパラ競技大会2016 世界大会、2016.5.16～5.21

・澤　龍一、カナダ、2016カナダカップ、2016.6.20～6.28

・宮森　隆行、台湾、全日本大学サッカー選抜海外強化合宿帯同、2016.8.10～8.25

・澤　龍一、Rio Paralympic Games 2016、リオデジャネイロ、ブラジル、2016.8.29～9.23

・宮森　隆行、ドイツ、全日本大学サッカー選抜海外強化合宿帯同、2017.2.27～3.9
・宮森　隆行、韓国、全日本大学サッカー選抜デンソーカップ日韓戦帯同、2017.3.10～3.13
・志村　圭太、アメリカ合衆国、Northern Arizona University、パラスイム世界選手権代表強化合宿帯同、2017.4.29～5.11
・澤　龍一、千葉、ジャパンパラ競技大会2017 世界大会、2017.5.22～5.29
・宮森　隆行、台湾、第29回ユニバーシアード競技大会男子サッカー日本代表帯同、2017.8.12～8.31
・澤　龍一、Asia-Oceania Championship、オークランド、ニュージーランド、2017.8.23～9.1
・志村　圭太、オーストラリア、Sunshine Coast University、H29年度パラ水泳有望アスリート海外強化支援事業への理学療法士/トレーナーとして帯同、2017.12.2～12.5

(20) 成田保健医療学部　作業療法学科

1．業務出張

・河野　眞、ミャンマー、第1回 IUHW リハビリテーションセミナー、2016.8.3～8.8

・圓　純一郎、ミャンマー、ハンセン病神経障害に対する電気刺激を用いた神経筋治療及び神経生理学的評価の研究（科学研究費補助金課題番号 15K01375）データ収集・研究打合せ、2016.8.20～8.26

・中村　美緒、スウェーデン、カロリンスカ研究所 KIREUM 評価プロジェクトチーム、共同研究ミーティング参加、2016.9.3～9.7、Huddinge Sweden

・石井　清志、台湾、台湾作業療法学会、2016.11.5～11.6

・圓　純一郎、ミャンマー、ハンセン病神経障害に対する電気刺激を用いた神経筋治療及び神経生理学的評価の研究（科学研究費補助金課題番号 15K01375）データ収集・研究打合せ、2017.2.5～2.10

・石井　清志、トルコ、障害のあるシリア難民を対象とした生活実態調査と障害者難民支援モデルの構築（科学研究費補助金課題番号 16H07153）現地調査、2017.2.12～2.18

・圓　純一郎、・フランス、ブルーリ潰瘍における抗酸菌による末梢神経障害機構の解明（科学研究費補助金課題番号 15K08466）共同研究打合せ、2017.3.17～3.19

・圓　純一郎、・スイス、WHO meeting on Buruli ulcer、2017.3.20～3.23

・山口　佳小里、ミャンマー、第2回 IUHW リハビリテーションセミナー、2017.8.6～8.11

・圓　純一郎、ミャンマー、ハンセン病神経障害に対する電気刺激を用いた神経筋治療及び神経生理学的評価の研究（科学研究費補助金課題番号 15K01375）データ収集・研究打合せ、2017.9.2～9.7

・石井　清志、台湾、日本・台湾ジョイントシンポジウム、2017.10.20

・石井　清志、台湾、アジア太平洋作業療法学会、2017.10.20～10.22

・圓　純一郎、ミャンマー、ハンセン病神経障害に対する電気刺激を用いた神経筋治療及び神経生理学的評価の研究（科学研究費補助金課題番号 15K01375）データ収集・研究打合せ、2017.12.27～12.31

・石井清志、トルコ、障害のあるシリア難民を対象とした生活実態調査と障害者難民支援モデルの構築（科学研究費補助金課題番号 16H07153）現地調査、2018.2.3～2.10

・田中　紗和子、タイ、東南アジア地域・境界地域の平和構築と紛争予防ガバナンスの確立（科学研究費補助金課題番号15KT0049）現地調査、2018.2.8～13

・田中　紗和子、ニカラグア、ニカラグアにおける障害者の生活実態に関する調査研究（科学研究費補助金課題番号15K12788）現地調査、2018.3.13～3.25

2．公的国際協力

・河野　眞、トルコ、日本政府資金、トルコ南東部におけるシリア難民に対する複合的支援（第2期）、2016.6.18～6.25

・河野　眞、14か国対象（本邦研修）、JICA 2016 年度課題別研修、インクルーシブ教育／特別支援教育の推進、2016.8.30

・河野　眞、ミャンマー、外務省 NGO 連携無償資金協力、カレン州ラインブエ地区における障がい者のための生活環境改善事業、2016.9.12～9.19

・河野　眞、モンゴル、JICA「モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト」本邦研修、障害の早期発見・発達支援・教育、2017.1.17

・河野　眞、ミャンマー、外務省 NGO 連携無償資金協力、カレン州チャインセチ地区およびラインブエ地区における地域に根差したリハビリテーション推進事業、2017.9.3～9.9

・河野　眞、アフガニスタン（本邦研修）、外務省 NGO 連携無償資金協力、カブール県およびパルワーン県における包括的地雷対策事業、2017.9.20 及び 9.23

・河野　眞、16か国対象（本邦研修）、JICA 2017年度課題別研修、障がいのある子どもへの教育制度、2017.11.3
・河野　眞、トルコ、障がいのあるシリア難民の子どもたちへ、2017.12.25～12.31
・河野　眞、モンゴル、JICA「モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト」本邦研修、障害のある子どもの発達支援・インクルーシブな環境での学び、2018.1.24
・河野　眞、ミャンマー、外務省NGO連携無償資金協力、カレン州チャインセチ地区およびラインブエ地区における地域に根差したリハビリテーション推進事業、2018.3.18～3.25

3．国際学会などの委員

・河野　眞、World Federation of Occupational Therapists、2011～
・杉原　素子、World Federation of Occupational Therapists、2011～
・平野　大輔、World Federation of Occupational Therapists、2011～
・杉原　素子、American Occupational Therapy Association、2011～
・河野　眞、Reviewer for 17th Congress of the World Federation of Occupational Therapists、2017
・石井　清志、Chairman of1st Asia-Pacific Occupational Therapy Symposium、2017.10.20～10.22

4．国際学会学術発表

・中村　美緒、The effectiveness of communication robot for nursing home for elderly、11th Beijing International Forum on Rehabilitation、2016.12.3-4、Beijing China
・平野　大輔、Variation of stereotypical hand movements and objects of interest in individuals with Rett syndrome、Rett Syndrome International Symposium 2017 in Kobe、2017.3.18-19、 Hyogo Japan
・河野　眞、Needs for Persons with Disability to live in Karen's village community in Myanmar-Interview Analysis by CBR Matrix-、1st Asia-Pacific Occupational Therapy Symposium、2017.10.20～10.22、Taoyuan Taiwan
・山口　佳小里、Attentional Functions in Adults with Autistic Spectrum Disorders、1st Asia-Pasific Occupational Therapy Symposium. 2017.10.20-22、Taoyuan Taiwan
・石井　清志、The Study of Syrian Refugee with Disability in Turkey、1st Asia-Pasific Occupational Therapy Symposium. 2017.10.20-22、Taoyuan Taiwan
・中村　美緒、Verification of effectiveness of introducing communication robots in residential facilities for the elderly、The 11th Conference on Rehabilitation Engineering and Assistive Technology Society of Korea、2017.11.9～11.11、Gyeonggi Korea
・圓　純一郎、Mycolactone cytotoxicity in Schwann cells could explain nerve damage in Buruli ulcer、The 52nd US-Japan Mycobacteria Panel Meeting 2018 in Niigata, Japan、2018.3.15-16, Niigata Japan
・中村　美緒、The effectiveness of Weighted Blanket for persons with sleeping disorder - verification for healthy adults -、3rd International Meeting of Asia Rehabilitation Science in China、2018.3.24、Beijing China

(21) 成田保健医療学部　言語聴覚学科

1．業務出張

・城間　将江、ミャンマー、IUHW リハビリテーションセミナー講師、2017.8.3-7

・城間　将江、原田　浩美、アイルランド、30th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics(IALP)、2016.8.21-8.25

・城間　将江、米国、2016 American Speech-Language-Hearing Association(ASHA) Convention、2016.11.16-22

・城間　将江、韓国、The 4th Soree International Cochlear Implant、2017.4.8-10

・大石　斐子、ミャンマー、IUHW リハビリテーションセミナー講師、2017.8.6-11

2．公的協力（JICA）

・特記事項なし

3．国際学会などの委員

・城間　将江、Asia Pacific Society of Speech, Language and Hearing（APSSLH、アジア環太平洋音声言語聴覚学会），Executive Committee Member

・城間　将江、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017、第 10 回アジア環太平洋音声言語聴覚学会学術大会）、Chair（大会長）、2017.9.17-19

・内田　信也、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017、第 10 回アジア環太平洋音声言語聴覚学会学術大会）、Secretary General（事務局長）、2017.9.17-19

・原田　浩美、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017、第 10 回アジア環太平洋音声言語聴覚学会学術大会）、Treasure（財務責任者）、2017.9.17-19

4．国際学会学術発表

・原田　浩美、30th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics（IALP），Dublin, Ireland, 2016.8.21-25

・石山　寿子、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・内田　信也、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・岩崎　淳也、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・大石　斐子、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・菅野　倫子、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・佐々木　香緒里、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・城間　将江、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・鈴木　倫、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH 2017），Narita, Japan, 2017.9.17-19

・塚原　恵、10th Biennial Asia Pacific Conference of Speech, Language and Hearing（APCSLH

2017), Narita, Japan, 2017.9.17-19

(22) 成田保健医療学部　医学検査学科

1．業務出張

- 長沢 光章, 韓国, 麗水, 54th Annual Conference of the Korean Society for Clinical Laboratory Science & International Symposium, 2016.5.27～5.28
- 清宮 正徳, 米国, フィラデルフィア, the 68th AACC Annual Scientific Meeting & Clinical Lab Expo , 2016.7.31～8.4
- 大澤 進, 米国, フィラデルフィア, the 68th AACC Annual Scientific Meeting & Clinical Lab Expo, 2016.7.31～8.4
- 梅宮 敏文, 日本, 神戸, 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4
- 大澤 進, 日本, 神戸, the 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4
- 長沢 光章, 日本, 神戸, 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4
- 赤堀 ゆきこ, 韓国, 天安, 26th Annual Conference of the Korean Society for Clinical Laboratory Microbiology, 2016.11.3～11.6
- 長沢 光章, 韓国, 天安, 26th Annual Conference of the Korean Society for Clinical Laboratory Microbiology, 2016.11.3～11.6
- 清宮 正徳, 台湾, 台北, 14th Asia-Pacific Federation for Clinical Biochemistry and Laboratory Medicine Congress, 2016.11.25～11.29
- 大澤 進, 台湾, 台北, 14th Asia-Pacific Federation for Clinical Biochemistry and Laboratory Medicine Congress, 2016.11.25～11.29
- 木村 明佐子, 台湾, 台北, 14th Asia-Pacific Federation for Clinical Biochemistry and Laboratory Medicine Congress, 2016.11.26～11.29
- 大澤 進, ベトナム, ハノイ, VinMec 病院検査部の業務運営アドバイス, 2017.3.7～3.14
- 長沢 光章, 台湾, 桃園, 9th Asia-Pacific Forum of Biomedical Laboratory Science, 2017.4.13～4.16
- 木村 明佐子, ギリシャ, アテネ, EUROMEDLAB ATHENS 2017 (22nd IFCC - EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine), 2017.6.11～6.15
- 清宮 正徳, ギリシャ, アテネ, EUROMEDLAB ATHENS 2017 (22nd IFCC - EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine), 2017.6.11～6.15
- 大澤 進, ギリシャ, アテネ, EUROMEDLAB ATHENS 2017 (22nd IFCC - EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine), 2017.6.11～6.15
- 大澤 進, 米国, サンディエゴ, the 69th AACC Annual Scientific Meeting & Clinical Lab Expo , 2017.7.30～8.3
- 長沢 光章, 韓国, 扶余, 20th General Meeting The Korean Society of Clinical Microbiology, 2017.7.5～7.8
- 梅宮 敏文, 韓国, 釜山, 5th Congress of the Asia Association of Medical Laboratory Scientists, 2017.9.22～9.24
- 長沢 光章, 韓国, 釜山, 5th Congress of the Asia Association on Medical Laboratory Scientists & 55th Congress of the Korean Association of Medical Technologists, 2017.9.22～9.24
- 河野 弥季, 韓国, ソウル, 27th Annual Conference of the Korean Society for Clinical Laboratory Microbiology, 2017.11.2～11.5

・ 長沢 光章，韓国，ソウル，27th Annual Conference of the Korean Society for Clinical Laboratory Microbiology，2017.11.2～11.5
・ 長沢 光章，日本，京都，29th World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine，2017.11.15～11.18
・ 大澤 進，ベトナム，ホーチミン，チョーライ病院日本型人間ドック検査室開設準備，2018.2.1～2.7
・ 工藤 芳子，ベトナム，ホーチミン，チョーライ病院日本型人間ドック検査室開設準備，2018.2.1～2.7

2．公的協力

・ 長沢 光章，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　カンボジア技師会・精度管理支援事業 事前調査，2017.1.29～2.2
・ 工藤 芳子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　カンボジア技師会・精度管理支援事業 事前調査，2017.1.29～2.2
・ 長沢　光章，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　事前調査，2017.6.2～6.6
・ 工藤 芳子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　事前調査，2017.6.2～6.6
・ 木村　明佐子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　第1回現地研修，2017.7.13～7.17
・ 工藤 芳子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　第1回現地研修，2017.7.13～7.17
・ 木村　明佐子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　第2回現地研修，2017.8.24～8.28
・ 木村　明佐子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　第3回現地研修，2017.10.19～10.23
・ 工藤 芳子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　第3回現地研修，2017.10.19～10.23
・ 長沢　光章，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省），2017.10.21～10.24
・ 木村　明佐子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　第4回現地研修，2018.1.18～1.22
・ 工藤 芳子，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　第4回現地研修，2018.1.18～1.22
・ 長沢　光章，カンボジア，プノンペン，日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業（国立国際医療研究センター／厚生労働省）　事前調査，2018.1.25～1.28

3．国際学会などの委員

・ 清宮正徳，IFCC(International Federation of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine)「Harmonization of Interpretive Comments EQA (WG-ICQA)」CORRESPONDING MEMBER，2016.6～現在

4．国際学会学術発表

- 長沢 光章, The Current Status of Biosafety in The Laboratory in Japan, 54th Annual Conference of the Korean Society for Clinical Laboratory Science & International Symposium, 2016.5.27～5.28, Yeosu, Korea
- 大澤 進, Development of an assay for measuring biochemical parameters in around 65μL fingertip blood samples collected at home, the 68th AACC Annual Scientific Meeting & Clinical Lab Expo , 2016.7.31～8.4, Philadelphia, U.S.A
- 木村 明佐子, *FIR*haploinsufficiency switches PKM1 to PKM2 in mice thymic lymphoma revealed by quantitative proteomic analysis, the 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4, Kobe, Japan
- 清宮 正徳, "Usefulness of abnormal reaction data-detecting function of automated biochemical
- analyzer", the 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4, Kobe, Japan
- 大澤 進, Development of an assay for measuring diluted plasma sodium concentration in fingertip blood samples collected, the 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4, Kobe, Japan
- 清宮 正徳, "Development of ICG measurement (long-wavelength control) using an automatic
- biochemical analyzer", the 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4, Kobe, Japan
- 清宮 正徳, The examination of ALP isozyme anomaly case profile in our hospital, the 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4, Kobe, Japan
- 清宮 正徳, The examination of LD isozyme anomaly case profile in our hospital, the 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4, Kobe, Japan
- 長沢 光章, Usefulness of POCT at the time of the disaster, 32nd World Congress of the International Federation of Biomedical Laboratory Science (IFBLS), 2016.8.31～9.4, Kobe, Japan
- 工藤 芳子, Essential clinical examinations related to NCDs prevention and control in the primary healthcare facilities, National Capital Region, Philippines, The 8th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference, 2016.9.17～9.19, Tokyo, Japan
- 工藤 芳子, The role of nutritionists in NCDs prevention measures for developing regions, The 8th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference, 2016.9.17～9.19, Tokyo, Japan
- 清宮 正徳, Usefulness of Abnormal Reaction Data-Detecting Function of Automated Biochemical Analyzer, 14th Asia-Pacific Federation for Clinical Biochemistry and Laboratory Medicine Congress, 2016.11.25～11.29, Taipei, Taiwan
- 大澤 進, The change from the alkali picrate method to the enzymatic method and the standardization of serum creatinine measurement, 14th Asia-Pacific Federation for Clinical Biochemistry and Laboratory Medicine Congress, 2016.11.25～11.29, Taipei, Taiwan
- 河野 弥季, Preliminary Study on a High-Sensitivity NADH Detection Method Using the Metal Chelating Reagent, Nitroso-PSAP, 14th Asia-Pacific Federation for Clinical Biochemistry and Laboratory Medicine Congress, 2016.11.25～11.29, Taipei, Taiwan

- 木村 明佐子, FIR haploinsufficiency promotes splicing to pyruvate kinase M2 in mice thymic lymphoma revealed by six-plex tandem mass tag quantitative proteomic analysis, EUROMEDLAB ATHENS 2017 (22nd IFCC - EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine), 2017.6.11～6.15, Athens, Greece
- 清宮 正徳, Usefulness of the reaction data monitoring system in the automated biochemical analyzer, EUROMEDLAB ATHENS 2017 (22nd IFCC - EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine), 2017.6.11～6.15, Athens, Greece
- 大澤 進, Development of the enzymatic method for maltose permeability test of gastric mucosa using the oral glucose tolerance samples, EUROMEDLAB ATHENS 2017 (22nd IFCC - EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine), 2017.6.11～6.15, Athens, Greece
- 清宮 正徳, Preliminary study on a high-sensitivity hydrogen peroxide detection method using the metal chelating reagent, Chromazurol B (CAB), the 69th AACC Annual Scientific Meeting & Clinical Lab Expo , 2017.7.30～8.3, San Diego, U.S.A
- 大澤 進, Preliminary study on a high-sensitivity hydrogen peroxide detection method using the metal chelating reagent, Chromazurol B (CAB), the 69th AACC Annual Scientific Meeting & Clinical Lab Expo , 2017.7.30～8.3, San Diego, U.S.A
- 工藤 芳子, Essential clinical examinations related to NCDs prevention and control in the primary healthcare facilities, National Capital Region, Philippines, The 5th Congress of the Asia Association of Medical Laboratory Scientists, 2017.9.22～9.24, Busan, Korea
- 赤堀 ゆきこ, Molecular mechanism of anti-pneumococcal immune responses by Dectin-1 , International Cytokine and Interferon Society 2017, 2017.10.29～11.2, Kanazawa, Japan
- 木村 明佐子, Establishing a Remote Education System on Hematological Morphology between Japan and Cambodia, the 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM), 2017.11.15～11.18, Kyoto, Japan
- 工藤 芳子, Establishing a Remote Education System on Hematological Morphology between Japan and Cambodia, the 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM), 2017.11.15～11.18, Kyoto, Japan

5. その他

①卒業生による海外活動

- 2017年度現在卒業生はいないため、活動実績なし

②学科独自で受け入れた研修生

- カンボジア学生 11 名＋引率教員 2 名, IUHW 受け入れ　カンボジア国　プシサストラ大学 Study tour in Japan, 2016.9.22～10.1
- カンボジア学生11名＋引率教員2名, 日本臨床衛生検査技師会主催　カンボジア国　プシサストラ大学/国立保健科学大学　Study tour in Japan, 2016.9.29～10.8
- カンボジア臨床検査技師10名, 日本臨床衛生検査技師会　医療技術等国際展開推進事業 (国立国際医療研究センター／厚生労働省), 2017.11.15

③個人レベルでの海外活動

- 工藤 芳子, カンボジア, プノンペン, WHO Laboratory Partners Strategic Planning Meeting of Cambodia, 2016.4.17～4.2

- 木村 明佐子，カンボジア，プノンペン，血液形態学遠隔教育システム構築準備のための会議，2017.2.21～2.26
- 工藤 芳子，カンボジア，プノンペン，血液形態学遠隔教育システム構築準備のための会議，2017.2.21～2.26
- 工藤 芳子，フィリピン，マニラ，2017 ASEAN Medical Laboratory Science and Public Health Education Stakeholders Summit（招聘講演），2017.11.28～12.1
- 工藤 芳子，カンボジア，プノンペン，血液形態学遠隔教育システム構築／レプトスピラ症疫学調査準備，2018.3.13～3.17
- 木村 明佐子，カンボジア，プノンペン，血液形態学遠隔教育システム構築／レプトスピラ症疫学調査準備，2018.3.13～3.17

Ⅴ．各学部各学科の
自己点検・評価と今後の課題

Ⅴ．各学部各学科の自己点検評価と今後の課題

（1） 保健医療学部　看護学科

1．教育面

1）教育内容

本学の教育理念・教育目標に基づき、看護学科では、6 つのカリキュラムポリシーと 7 つのディプロマポリシーを策定している。現在運用されている平成 24(2012)年度改編カリキュラムは、より質の高い基礎教育、実践能力の強化を意図して改編されたものである。このカリキュラム導入後 4 年経過した平成 28（2016）年度には、カリキュラムの評価を行い、看護系大学における「到達目標 2011」で示された教育内容はほぼ網羅していることを確認したが、学習方法の検討が課題とされた。平成 29(2017)年度から、カリキュラム検討会を設置し、文部科学省から平成 29 年 11 月に提示された看護教育モデル・コア・カリキュラムを参照に、教育内容や目標を検討し、看護実践能力の育成にむけたカリキュラムの編成をめざしている。

さらに次のカリキュラムの改編に向けて、大田原、小田原、福岡、成田の 4 キャンパスの看護学科で、合同カリキュラム検討委員会を設置し、取り組んでいる。

2）臨地実習

学生は 4 年間で、看護学科履修者は、臨地実習 11 科目・23 単位、公衆衛生看護学履修者は、12 科目・27 単位を 90 実習施設の協力のもと履修している。各教員は少人数グループの学生を担当し，臨床現場に出向いて施設側の実習指導者と共同して学生の到達度を高めている。また臨地実習オリエンテーションでは，実習病院の指導者をまねいている。指導者に「臨床における安全」などの具体的なオリエンテーションを実施してもらうことで，学生の実習へ意識を高めると同時に指導者は，学生のレディネスの把握をすることができ実習指導に役立てることができることにつながっている。また，実習前，実習中，実習終了後における課題やその解決策について、指導者と話し合う機会を設け、質の高い一貫した教育ができるよう取り組んでいる。

3）国家試験対策

国家試験係会議を毎月開催し、国家試験対策や受験対応に関しての詳細を協議している。また行事や学年の様子を把握して予定を組むために、3，4 年生の学年担当者らと綿密に打ち合わせて調整をしている。支援教員は、場合によってはアドバイザー教員と協力しながら、学生対応をしている。成績低迷者に対しては、継続的にフォローするために支援教員への連絡を密にし、対応を依頼している。平成 28（2016）年度は看護師国家試験も保健師国家試験も全国大学合格率を上回ることができた。平成 29（2017）年度対応として、集中して受験勉強がすすむよう 12 月より登校学習を推奨した。成績低迷者は 1 月より登校学習としている。なお不合格となった場合、既卒生対応として 1 年間、学習法の相談や手続きを支援している。

看護師	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率	保健師	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
2015 年度	98.3%	94.9%	97.4%	2015 年度	98.4%	92.6%	93.5%
2016 年度	97.5%	94.3%	96.5%	2016 年度	98.3%	94.5%	95.4%
2017 年度	97.5%	96.3%	-	2017 年度	95.1%	85.6%	-

２．学生支援面

看護学科では、学年ごとにアドバイザー制をとり、各学生の大学生活全面にサポートしている。また、1・2 年次の学生には、学修支援の時間を設けて、特に専門基礎科目の強化を図り、年度末には実力テストと業者補講等も取り入れている。メンタル面に悩みや課題を抱えた学生も近年増加傾向にあり、細やかな学生への対応が求められ、保護者とも密な連絡を取りながら学生支援に取り組んでいる。

就職に関しては、毎年 100%が医療施設や行政機関などに就職している。医療施設等からの求人数は減少傾向にあるものの、年間 2 万人前後と多く、今後も同様の状況が続くと思われる。

３．研究面

平成 28 年度（2016）年度の研究業績として、著書 3 編、原著 15 編等であった。研究費の獲得状況として平成 29 年度（2017）年度、文部科研費を 5 件申請したが採択されなかった。学内研究費は 13 件受給している。

４．学科内ＦＤ活動

看護学科の FD 活動として、H27 年度は「高等教育の本質に迫る－専門職の実践力・判断力育成への改革－」、H28 年度「文化人類学から見た質的研究－分析の視座を問い直す」、H29 年度は「発達障害に対する教育的支援について考える」をテーマとして開催した。さらに、今年から『看護研究カフェ』と題して、若手教員の研究能力向上に資することを目的として、科研費獲得教員によるプレゼンテーションと自由な雰囲気の中でのディスカッションを行う場を設けた。研究活動の可視化により、若手教員の研究への動機づけとなっているため、今後も継続していく。

５．社会活動

地域貢献の一環として、公開学習会を年 1 回開催した。H27 年度は「教育学の知識とスキルを看護に活かそう－これからの参加型教育について考える－」、H28 年度「命の終わりのときまで輝いて生きるために－当事者・家族の声から学ぶ知恵－」をテーマとして行った。

６．今後の課題

・看護実践能力の育成にむけたカリキュラムの改編、および教育内容の質の向上を図る。
・実習病院との交流をさらに促進し、実習環境を向上させる。
・看護師および保健師国家試験の合格率を高める。
・科研費などの研究助成費の獲得を推進し、教員の研究活動を促進する。

（2） 保健医療学部　理学療法学科

1．教育面

1）教育内容

大学の3つの理念，教育理念を基盤とし，理学療法学科としての学位授与の方針を掲げ，取り組んでいる．特に，国際化に対応した幅広い知識・技能を修得し、国際的視点を持つことを念頭におき，理学療法学の専門的な知識および技術を習得させ，幅広い教養と寛容な精神を兼ね備えることで、チームの中で有機的な連携を図ることができる能力の育成を目指している．この能力は，大学理念にもある「ともに生きる社会の実現」を目指す上で重要な能力であり，時代や地域のニーズに応えることが実現できると考えている．

2003年度からOSCE，2009年度からCBT（実習前コンピュータ試験）を順次導入し，共用試験として9年間継続して実施している．教育手法においてアクティブ・ラーニング（Active learning）を積極的に導入し，ポートフォリオを活用し，内発的動機を喚起しながら授業・実習を進めている．この取り組みによって退学や留年率の抑制となり，2016年度実績において4学年全体で退学率3.8%，留年率1.2%となっている．今後はPBL課題およびルーブリック評価の拡充を進める．

2）臨地実習

臨地実習は関連施設を中心に実施しており，3年次に評価実習，4年次に総合臨床実習を235施設で実施している，関連施設における実習利用率は2017年度において3年次75.0%，4年次64.8%であった．関連施設を積極的に実習施設として利用することで，実習指導者との密接な連携を実施することが可能となり，各々の学生に合致した指導内容，より具体的な実習課題の構築を可能としている．今後は診療参加型臨床実習（Clinical Clerkship；CCS，クリニカル・クラークシップ）の導入に向けて整備し，自らの主体性と責任感をもって学ぶことを目的とした臨床実習に移行する予定で進めている．

3）国家試験対策

国家試験対策は前期・後期に分けて実施している．前期は過去問のテストを実施して，不得意分野のチェックを進めている．後期は特別講義と模擬試験を併用しながら進めている．模擬試験は6回分の業者模試とCBTを実施している．2010年度まで過去10回100%合格を実現しているものの，2011年度以降95%以上で推移している．今後も継続的に合格率の向上が実現できるよう他キャンパスとの連携や対策に関する改善を実施しながら進める．

理学療法士	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
2015年度	93.4%	82.0%	-
2016年度	99.0%	96.3%	97.5%
2017年度	100.0%	87.7%	-

2．学生支援面

就職に関してはキャリア支援センターと連携して3年次後期から進めている．キャリア支援センターではマナー講座，履歴書作成に関する対策講座，面接対策講座を実施している．理学療法学科では就職担当者とアドバイザーと連携し，ポートフォリオを活用しながら個人に合致した分野や領

域のマッチングを進めている．特に就職先に対して具体的な将来像を自ら説明できるように支援している．開学以来就職率は 100%を維持しており，今後も学生の希望に合致した就職先を支援できるよう取り組んでいく．

学生指導では，アドバイザー制を開学以来進めており，学生 10 名に対して 1 名の教員を配置し，学習および生活指導を実施している．2017 年度からはアドバイザーを統括支援する目的で統括アドバイザーを設置し，アカデミックハラスメント対策や学生への指導方法の支援として実施している．

３．研究面

研究発表において 2016 年度では国内学会 22 会場，国際学会 5 会場にて発表し，99 編発表した．著書，原著論文も多く執筆しており，著書 11 編，原著 46 編の実績であった．本学科の研究発表の特徴として本学大学院生との共同発表が多く，研究指導体制から構築されており，科学研究費補助金等の競争的資金への参画を拡充することを推進していきたい．

４．学科内ＦＤ活動

理学療法学科における FD 活動として水曜日朝に毎週実施している．活動内容は理学療法および近接医学領域における英論文を紹介し，研究シーズや教育分野におけるトピックスの動向に反映している．大学院および他キャンパスとの教育 FD 活動として年 2 回実施しており，大学院教育管理分野および福岡保健医療学部，小田原保健医療学部，成田保健医療学部と合同で実施している．前期（6 月）は東京青山キャンパス，後期（1 月）は小田原保健医療学部キャンパスにて教育手法の紹介，授業の工夫，OSCE 研修を中心に研鑽活動を進めている．今後も教育 FD を体系的に推進し，効果的な学習方法の検討を進める．

５．社会活動

講演活動は学会および地域支援として，2016 年度で合計 22 回実施している．社会活動においてはディプロマポリシーにおいても重点事業であり，特に，「ともに生きる社会の実現」を目指し、時代や地域のニーズに応えることを啓蒙する目的にもなる．また，国際化に対応した幅広い知識・技能を修得し、国際的視点をについて地域社会で提言する機会を充足する橋渡しにもなる．今後も，社会活動を充足させ，有機的な社会環境基盤の発展に寄与することを目的として進めたい．

６．今後の課題

本学科では年２回，同窓会を兼ね研究会を実施している．講演や学位論文の紹介などを中心に大田原キャンパスと東京地区で実施している．また，理学療法学科の活動について毎年情報誌「ザ・リガク」を発行し，関係者に配布している．内容は理学療法学科の新入学募集状況，カリキュラム，卒業研究，国家試験の動向，国際関係（国際協力活動，留学生，研修生，国際学術活動），教員紹介，研究活動，社会的活動，教育活動，大学院理学療法分野および教育管理分野の活動状況などである．新入生および在校生の保護者にも配布することで情報共有の実現にも寄与している．

（3） 保健医療学部　作業療法学科

1．教育面

1）教育内容

カリキュラムを改訂し平成 27（2015）年度入学生から新カリキュラムの運用を開始した。まず、大学教育における単位制度の実質化に向けた取り組みの一つとして、新カリキュラムより卒業に必要な単位数を 131 単位から 124 単位に変更した。また、大田原、小田原、大川の 3 キャンパスで必修科目を統一したことに伴い、大田原キャンパスでは 2 年次に「運動学実習」、「運動生理学」、「コミュニケーション技術論」を、4 年次に「作業療法総括論」を新規開講した。また選択科目では、基礎医学と臨床医学の繋がりを学生が理解できるよう「病態生理学」（2 年次）、作業療法の対象疾患として急増している認知症に特化して教授する「認知症作業療法特論」（3 年次）を新規開講した。

平成 29 年（2017）年度 4 月 1 日現在の在籍者数は 1 年生 78 名、2 年生 78 名、3 年生 106 名、4 年生 101 名であり、29 年度卒業生のストレート卒業率（卒業該当者数／平成 26 年度入学者数）は 93.9%（92 名／98 名）であった。

2）臨地実習

平成 27 年度運用開始の新カリキュラムでは、これまでの必修 19 単位を 23 単位とした。これには①早期から臨床に触れる機会を増して作業療法の理解を深める、②様々な臨床実践の場で作業療法対象者と十分関わる機会を作り臨床実践能力をより一層高めるという 2 つの狙いがある。

具体的には、旧カリキュラムでは臨床実習のなかった 2 年次後期に「臨床実習Ⅱ（早期臨床体験）」1 単位を新規開講した。学修の早い段階で医療・福祉の現場を体験し、作業療法士を目指す動機付け、使命感を体得させることを目的としたアーリーエクスポージャー（早期体験学習）の機会である。また、旧カリキュラムにおける 3 年次前期の課題実習Ⅰ（2 単位）と後期の課題実習Ⅱ（3 単位）を統合し、後期に臨床実習Ⅳ（5 単位）を置くこととした。この臨床実習Ⅳ（臨床推論・作業療法計画立案）は、前半 2 週間で臨床教育指導者の思考過程を学び、次の 1 週間は大学に戻って教員とともに 2 週間の実習を振り返って後半に向けて準備学修し、後半 3 週間で作業療法計画立案までを実施する構成であり、新カリキュラムの特色ともいえる実習形態である。4 年次の実習では、旧カリキュラムの「課題実習Ⅲ」4 単位を、「総合実習Ⅰ」6 単位へ変更し、旧カリキュラムの総合実習 6 単位を、「総合実習Ⅱ」7 単位へ変更した。これまでと同様、総合実習Ⅰまでは、大学関連施設を含む中核実習施設で密に連携・協力しながら実施し、総合実習Ⅱは学生が自主的に選択・交渉して決定した中核実習施設以外の実習地で行うことを基本とする。しかしながら栃木県内出身学生の増加に伴い、平成 27 年度からは中核実習施設にも総合実習Ⅱに協力いただいている。

学生の臨床実践能力養成のため、平成 27 年度より 3 年次後期に「臨床実習用講義」という課外学修を試行している。小グループでのアクティブラーニングの学修方法で、内容は、①実習に必要となる基礎知識の復習と確認試験、②モデル事例に対する作業療法評価の練習と客観的臨床能力試験（OSCE）である。

平成 29 年度からは、臨床実習における成績評価の公平性、客観性、厳格性を高めるため、ルーブリックの導入に着手していることを付記しておく。

3）国家試験対策

4 年次前期の水曜 1 限から 5 限を「国家試験対策講義」とし、教員講義、過去国家試験問題の解説作成、模擬試験等を実施、成績下位の学生には、週一回の特別講義、個別教育で必要な知識の修得を促している。夏季休暇中には大学セミナーハウスで 1 泊 2 日の集中学習合宿を実施、総合実習終了後は、修得度別の学習グループを編成して学習を進めている。修得度が低い学生グループには、学習方法の指導、学習時間の確保を支援し、学習状況に応じて個別の講義、口頭試問、確認テストなどで対応している。また受験者全員を学科教員に割り振り、前期には月 1 回、後期には週 1 回の頻度でチュータ面談を実施している。面談では学科独自に作成した面談シートを用い、個々の学生の学習時間、学習内容、心理・体調面を確認している。

ICT を利用して、大田原・小田原・成田・大川の４キャンパスの作業療法学科で国家試験対策に関する意見交換会を年４回程度開催している。

作業療法士	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
2015 年度	94.6%	77.5%	83.4%
2016 年度	93.4%	87.6%	91.4%
2017 年度	95.0%	83.7%	87.8%

２．学生支援面

各学年には担任・副担任の教員を置き、年 1～2 回の個別面談を実施して学生の生活状況や学習意欲・友人関係での悩みなどの心理面の状況把握に努め、必要に応じて定期的な面談や学生相談室の利用を促し、保護者も含めた三者面談を実施することもある。また、担任・副担任は夏季・春季の長期休暇中の学修課題の出題と確認、教務担当教員と協働で成績不振学生に対する個別の学習指導も担当する。

一年生全員に対しては学科教員によるチューター面談を実施、生活および学習状況を確認して大学生としての新生活の確立を支援している。

３．研究面

2015 年度から 2017 年度における学科教員の研究実績（件数）は、学会発表（筆頭）69、著書 28、原著論文 15、研究報告など 21、学内研究採択 7、研究費採択 2 である。

４．学科内ＦＤ活動

毎年度末には、2 日間をかけて学科研修会を開催し、年度内の教育活動、臨床実習、研究活動、社会的活動について報告し、今後に向けた検討の場としている。毎週開催する学科会議においても、教育・研究面での課題の議論に多くの時間を使っている。

また、栃木地区の大学関連施設作業療法士交流会を月 1 回実施し、臨床の作業療法士の事例や臨床実習に関する意見交換を行っており、教員の FD の機会ともなっている。

５．社会活動

栃木県：大学・地域連携プロジェクト支援事業「大田原市と協働した地域支え合いプロジェクト」、栃木県乳幼児健全育成事業（乳幼児二次健康診査）、特別支援学校自立活動指導充実事業（県内 6 特別支援学校・1 聾学校）

大田原市：認知症カフェ「大学オレンジカフェ　in 大田原」，大田原市早期総合発達支援協議会，乳幼児発達相談（すこやか相談），5 歳児健診支援者研修，通級による指導担当教員等専門性充実事業

那須塩原市：運動発達相談（のびのび相談）、地域自立支援協議会

介護認定審査会：大田原市，那須塩原市、南那須地区

障害支援区分審査会：大田原市、那須町、那須塩原市、南那須地区

６．今後の課題

- 建学の精神に基づいて地域との連携事業に積極的に参加し、成果を報告して作業療法および学科の広報等にも活用
- 地域包括ケアシステムにおいて様々な現場で活躍できる作業療法士養成のため、新たなカリキュラムの効果検証
- 高大接続の対応として、早期合格者への「入学前教育」、「リメディアル教育」、「初年次教育」の充実と個々の学生の能力に応じた学修支援体制の構築

（4）保健医療学部　言語聴覚学科

1. 教育面

1)教育内容

言語聴覚学科の教育方針・目標は、豊かな人間性と科学的な思考力、専門的な知識と技術、専門職としての価値観を修得し、言語聴覚障害児者が抱える問題を的確に解決できる高度臨床実践能力を備えた言語聴覚士を育成することである。これらを達成するために、4年毎にカリキュラムを検討し、以下のように構成している。①総合教育科目において、人間、自然、社会、国際等に関する幅広い教養と科学的思考力を養う。②専門基礎科目では、人間の言語・コミュニケーション行動を支える生物学的基盤、心理・行動面、医学面、言語構造、音声の物理的側面、情報科学などを学ぶ。③専門科目では、各種言語聴覚障害の原因、症状、発生メカニズム、評価・診断、訓練・指導・援助法に関する知識や技術および態度を学び、言語聴覚士に必要な臨床能力を養う。

臨床教育は、1年次から4年次にかけて、学内の言語聴覚センター、大学関連施設、実習協力施設にて見学・演習や臨床実習を行い、専門知識や技能を体系的に修得できるようにしている。2017年4月1日現在の在籍者数は、1年85名、2年83名、3年90名、4年98名の合計356名が在籍している。2015年度の卒業者は97名で、留年者4名、2016年度の卒業者は82名で、留年者7名、2017年度の卒業生は91名、留年生7名である。

2）臨地実習

臨地実習は言語聴覚士の養成カリキュラムにおいて重要な位置を占める。1年次には、保育園・幼稚園・福祉施設での会話体験実習や本学附属の医療・福祉施設の見学を通じて、コミュニケーションのとり方や言語聴覚士の職務について学習する。 2年次には、言語聴覚センターで教員が行う実際の臨床を見学して、臨床の視点、患者の全人的理解、症状把握、臨床記録のまとめ方などを学ぶ。3年次には、学内の言語聴覚センター、大学附属病院・関連施設において「臨床実習Ⅰ（基礎）」を行い評価・診断の実際について学ぶ。 4年次には、学内の言語聴覚センター、大学関連施設及び学外の実習協力施設で総合臨床能力、チーム医療・チームケアにおける連携能力習得に向けた「臨床実習Ⅱ（総合実習）」を行う。本実習では臨床実習指導者および教員の指導の許に評価から訓練・指導までの全臨床過程について実習する。学外の実習は、全国の実習協力施設のほか、本学の附属病院・施設においても実施している。

2015年度からは、3年次の「臨床実習Ⅰ（基礎）」の大学関連施設の協力を得て、臨地で評価・診断の実際を学べるようスケジュールの見直しを行ってきた。2015年度、2016年度は5日間、2017年度は10日間とより充実した実習を展開することができた。

3)国家試験対策

言語聴覚学科では、1年次より夏季・春季学習模試を行い、早い時期から国家試験に対する意識づけを行っている。本格的な国家試験対策は、3年次の1月より開始し、2015年度は計17回、2016年度は計16回、2017年度は計16回の模試（過去問題、学科作成問題、関連校作成問題、全国リハビリテーション学校協会作成問題）を実施した。また、早朝講義（毎朝30分）、冬季対策講義を行った。また、アドバイザー教員が担当学生と定期的に面談し学習指導を行った。また、アドバイザー教員の指導のもとグループ単位の対策学習を行った。

2015年度からは、従来からの対策に、春休みに専門基礎科目の知識を整理するための学習ノート作成の課題を加えた。さらに、2016年度、2017年度は、さらに前期に専門基礎科目の知識を定着させるための基礎模試を導入した。

上記の取り組みの結果、以下の通り、全国の合格率を大きく上回ることができた。

言語聴覚士　国家試験合格率

	本学（新卒者）	全国	4年生大学
2015年度	92.8%	82.0%	86.9%
2016年度	98.8%	89.9%	92.1%
2017年度	96.7%	91.3%	－

2. 学生支援面

アドバイザー制度を設け、定期的な個別面談を行い、生活状況や学習態度、心身の状態の把握に努めた。特に、親元を離れ不安な1年生には4月に新入生セミナーを実施し、学生同士の交流、学年を超えた交流の機会を設けた。学生の学習習熟度については、定期試験後、成績不良学生には面談を行った。また、成績表を個別面談を行いながら渡し、習熟度や勉学の悩みを把握するとともに、助言や指導を行った。

進路・就職活動指導は、オリエンテーション、希望調査、個別面談による活動支援を行った。その結果、学生の就職活動の効率化が図られ、2015年度、2016年度、2017年度ともに100%の就職率を達成した。

3. 研究面

2015年度から2017年度の研究業績および研究費申請・採択件数は以下の通りであった。

研究業績（筆頭・共同）

	教員数	原著論文	著書	総説	講演	学会発表	研究報告
2015年度	18	19	16	11	26	83	1
2016年度	17	12	12	3	25	84	3
2017年度	15	8	4	10	28	81	3

研究費採択（代表・分担）件数

	教員数	学内研究費	文部科研費	厚生労働科研費	その他研究費
2015年度	18	6	6	1	2
2016年度	17	8	9	0	1
2017年度	15	7	10	0	2

研究費の採択件数は年々増加しており、研究活動の活性化が期待される。一方で、2017年度は原著論文、著書の件数が少なくなっており、学科として研究に力を注げる体制を整えることが必要である。

4. 学科内FD活動

学科内FD活動として年2回の検討会を実施している。2015年度は「本学科における体系的、段階的臨床実習のあり方について」、「臨床実習前教育としてのアクティブラーニング」について議論を行った。2016年度は「講義展開の工夫」、「支援学生への対応」について検討を行った。2017年度は「臨床実習の指導」、「専門科目の演習、小テストのスケジュール」を議論した。

その他、栃木県北の本学関連施設の言語聴覚士との情報交換会を月1回行った。実習などの学

生教育に関する討議を行った。

5. 社会活動

言語聴覚学科の教員は、日本言語聴覚士協会をはじめ、関連する学会に所属し、理事、評議員、査読委員等を務め社会貢献を果たしている。本学科の教員が、役員、委員を務める学会・協会は、日本言語聴覚士協会、栃木県言語聴覚士会（会長）、日本音声言語医学会、日本コミュニケーション障害学会、日本高次脳機能障害学会、日本神経心理学会、日本特殊教育学会、日本リハビリテーション連携科学会、日本摂食・嚥下リハビリテーション学会、日本聴覚医学会、日本耳科学会、日本小児耳鼻咽喉科学会、日本めまい・平衡医学会、認知神経科学会、日本気管食道科学会、日本嚥下医学会である。

また、栃木県障害者施策推進審議会委員（会長）、栃木県発達障害者支援センター連絡協議会委員（会長）、栃木県発達障害者支援地域協議会委員（会長）ほか、栃木県、大田原市、那須塩原市、那須烏山市の就学指導委員、介護保険審査会委員等を務め、地域社会に貢献している。

6. 今後の課題

教育内容に関しては、現在、日本言語聴覚士協会において言語聴覚士養成の教育基盤において必須の教育内容を一貫してまとめたコア・カリキュラムの作成が進められている。本学科においても、常にカリキュラムを見直しより充実した教育プログラムを提供できるようにする。臨床教育については、臨床実習の受け入れ施設を確保するとともに、臨床実習に先立つ学科教員による指導をより充実させることが課題である。

国家試験対策については、専門基礎科目の学習に困難を示す学生が増えている。１年次から国家試験を意識し、学習させる指導体制を検討する必要がある。

学生支援に関しては、心身の不調を訴える学生に対してはアドバイザーだけでなく、保護者や専門家による支援が必要となる場合がある。そのような場合の対応について検討することが課題である。

研究面に関しては、論文投稿、学会発表などの形で業績を残すことが必要である。学科として研究に力を注げる体制を整えることが必要である。

（5） 保健医療学部　視機能療法学科

1．教育面

1）教育内容

学科の教育理念は、(1)専門科目では解剖･病理･生理学の基礎知識と関連づけながら段階的に理論を修得することで知識の定着を図るとともに、英文教科書を活用して幅広い最新の知識を身につけ国際性を養う。(2)学内の実習・演習では講義と密接に連携した課題を用いることで勉学意欲を高め、科学的洞察力を養う。(3)低学年から数多くの臨床体験を積むことで、医療職に携わる人間としての心構えと気配りを持ち、チーム医療の中心を担える豊かな人間性を育み、即戦力を有したプロフエッショナルを育成するである。この教育理念を具現化するため、1･2年次に総合教育科目と専門基礎科目、3年次に専門科目、4 年次に応用･発展科目を配置している。実習関連では、1年次に病院見学、2年次に社 会福祉学実習と外来見学実習、3年次に保育実習、ロービジョン医学実習、定期的な外 来実習、高齢者視機能評価実習、園児視機能評価 実習を開始した。4年次に臨地実習及び園児･視機能評価実習を実施している。卒業に必要な単位数は124単位以上である。専門科目の理解度の到達が悪い一部の学生に対して、平日の空き時間や夏期･春期休暇中に補講を実施している。全ての専門科目で再試験を実施しているため、進級条件に満たない学生数は各年度2-3名であった。なお2018年度2名であった。視覚障害者が安全かつ快適に　外出するためのサポートを行う公的資格「同行援護従業者養成研修」を3年次の視覚リハビリテーション実習（必修）を履修させて在学中に取得させている。

2）臨地実習

外部施設の眼科における臨地実習は、例年約40施設のご協力のもと、3年次の臨地実習Ⅰ（基本）において後期に1週間の実習を1回と4年次に臨地実習Ⅱ（応用）において前期および後期に6週間の実習を2回実施している。外部施設における臨地実習に向けて、学内で接遇や実習記録の書き方などの指導を行い、臨床での初対面の患者様に対する検査にスムーズに順応できるよう大学関連病院における外来見学や園児視機能評価実習、外部被検者視機能評価実習などを講義や実習に取り入れている。臨地実習終了後は、報告書の作成や実習報告会を実施し、実習指導者からの評価のフィードバックを通して、その後の実習や将来に向けて各学生の内省を促している。実習指導者に対して、毎年2月に臨地実習指導者会議を実施し、各指導者とコミュニケーションを取りつつ、実習に対するご意見をいただき、教育内容や実習に関する手続きの改善を図っている。

3）国家試験対策

学科教員は学生の個々の学習状況に応じて面接指導を行い、学習支援を行っている。卒業延期学生に対しては、1年間に渡って学習方法サポートや国試対策を行っている。成績下位者を対象として補講を実施し、3年生では夏期1週間（約10名）、春期2週間（約10名）、4年生では学年全員を対象としている。模擬試験4回（5月、9月、12月、1 月）で学力の向上が認められない学生には、通常の講義とは別に1月下旬より2月中旬まで通学合宿形式（タイムカード管理）の国試集中補講を実施し、各教員が日替わりでマンツーマン指導を行っている。この結果、本学の国試合格率は100%、全国合格率を上回っている。

視能訓練士	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
2015 年度	100%	98.0%	98.7%
2016 年度	100%	96.7%	98.2%
2017 年度	100%	99.4%	-

2．学生支援面

担任教員が各学生に履修指導や学生生活の相談にのり対応している。授業、実習に欠席が多い場合、学生と連絡を取り早期に学生の状況を把握し深刻化することがないよう対応に努めている。就職活動に対するモチベーション及びスキルアップを目的として、卒業生による就職活動体験講座を企画実施している。就職活動支援としては、ゼミ単位での履歴書の添削指導、個別模擬面接、求人情報のメール配信、病院見学のセッティング及びサポートを行っている。求人件数を増やすため、地元就職を希望する 4 年生の地方出身県の眼科を中心に約 1,000 件の求人票を送付している。求人倍率は、2015、2016、2017 年度はともに学生一人に対して 3～5 件であった。2015、2016、2017 年度の卒業生を母数とする就職率は 100%であった。

3．研究面

各教員は、自主性を持ち、それぞれが研究目標を掲げて研究を推進している。研究業績については、業績項目を参照のこと。現在　基盤研究(B)と若手研究(B)、基盤研究(C)、それぞれ 1 課題が継続中である。日本学術振興会科学研究費補助金・基盤（B）（平成 27 年 - 31 年）「多職種連携による発達障害の視機能及び眼球運動評価法の確立と普及」 、基盤（C）（平成 28 年 - 30 年）、若手（B）（平成 27 年 - 30 年）、若手（B）（平成 28 年 - 30 年）、若手（B）（平成 29 年 - 32 年）が採択された。学内研究費は毎年技 術助手を除くほぼ全員が採択されている。

4．学科内ＦＤ活動

毎週 1 回のミーティングの中で授業や実習の短期的問題点を話し合い、各講義間の連携を強化し、学生がシームレスに勉学できるよう教育内容の改善を図っている。長期的問題点に関しては夏期及び春期休暇中に不定期 のミーティングを開催し大幅な授業や実習の内容変更を行っている。また毎月 2 回視能訓練士勉強会を開き、英語論文抄読や研究内容公開することで情報を共有している。

5．社会活動

国立障害者リハビリテーションセンター、栃木県立盲学校・東日本盲導犬協会、日本網膜色素変性症協会栃木支部など視覚障害関連施設・団体との連携を図り 教育指導、施設見学、医療講演会等における学生ガイドヘルプ実践を行っている。さらに地域社会福祉協議会と共催して毎年「お役立ち講座」を開催している。

6．今後の課題

入学時の基礎学力不足、学力や学習意欲の差が大きいこと、一般教養科目や選択科目履修が少ないことが課題である。また留年学生の減少に努めることが必須であろう。

（6） 保健医療学部　放射線・情報科学科

1．教育面

1）教育内容

診療放射線技師の業務範囲拡大に係る法改正により、本学では平成 27(2015)年度と平成28(2016)年度にカリキュラム改編を行った。主な改編内容は必要科目の新設及び単位数の調整であり、特に「BLS(一次救命処置)」、「静脈内注射針の抜針」、「肛門へのカテーテル挿入」についてはシミュレーション教育を取り入れている。また、すべての科目をセメスター制(学期制)に対応させたことで、平成 27(2015)年度より 9 月卒業制度を導入した。それにより、3 月の時点で卒業に必要な単位を修得できなかった学生が、翌年度の前期で卒業要件を満せば卒業できるようになった。

新入生を対象とした少人数グループ指導（プレゼミナール）の一環として PBL (Problem Based Learning) を実施している。平成 27(2015)年度からは放射線検査に関連した実際の事例を基に、グループ内でその問題解決に向けた議論を展開し、そこから導き出された結論をまとめる作業を行っている。これにより、将来の職業意識が芽生えるきっかけにもなっている。

授業等への取り組み姿勢が気になる学生の早期発見と指導を目的に学科教員が自由に書き込める学生情報共有ファイルを設けた。その結果、速やかに各担当教員による個別指導が行える体制ができた。しかし、成績不振の学生数に目立った変化はなく、今後は成績不振の原因分析と指導方法の改善についても検討していきたい。

2）臨地実習

臨床実習委員が中心となり臨床教育の充実と円滑な実習運営に必要な施策を実行している。

1 年次にはプレゼミナールの一環として附属病院見学を実施し、自身の将来像を早期に明確にするとともに普段の学修を意欲的に取り組むよう促した。3 年次には実習前教育として「臨床実習概論」、「臨床実習演習」の中で、実習生として必要な技能と知識を習得するよう指導した。また、平成 25(2013)年度より導入した客観的臨床能力試験(OSCE)及び知識確認試験の内容は毎年リニューアルし、改善に努めている。特に、実習で最低限必要となる撮影技術や患者接遇の能力を評価する方法については今後もさらに検討を重ねる必要がある。

各実習施設と本学との間で情報共有を図り、円滑な実習が行える環境維持の目的で、事前に臨床実習指導者会議を開催しており、実習期間中には教員が実習施設の訪問を行っている。また、臨床実習における教育水準を担保する目的で、各実習施設には臨床実習指導ガイドラインを配布しおり、平成 27(2015)年度に指導内容を見直し、改訂版を発行した。

3）国家試験対策

国家試験対策については、留年者を増やすことなく高い国家試験合格率を維持することを目標に対応を進めている。

学生の習熟度確認と到達目標を明確にするために 3 年次より計 8 回の実力試験を実施し、その結果を基に各卒業研究担当教員が個別指導を行った。さらに各科目の専任教員による夏季補講、直前補講を実施し、弱点の強化やポイントの解説を行った。なお、9 月卒業生を含む既卒者については聴講生制度を利用して、引き続き国家試験対策の指導が受けられる体制を整えている。

本学新卒の国家試験合格率は全国平均よりも高く、今後も維持できるよう、新たな取り組みについても検討する必要がある。

診療放射線技師 国家試験	本学(新卒)合格率	全国合格率	全国大学合格率
2015 年度	95.7%	90.9%	93.1%
2016 年度	97.2%	96.0%	96.8%
2017 年度	93.6%	84.8%	−

2．学生支援面

学生生活支援については、学生委員と学生課が連携して様々な施策を実施しており、さらに学科では各学年担当による支援のほか、プレゼミナール、2 年ゼミナール、卒業研究による少人数グループでの支援体制も整えている。また、学生への緊急連絡網(メールシステム)については、定期的に確認作業を行い、緊急の事態に備えている。

学生の修学状況については、本学主催の「保護者懇談会」や「学科だより」等を通じて、保証人(保護者等)にお知らせしている。なお、各学科教員が書き込める共有ファイルを活用し、理由不明欠席者の早期発見と早期対処にも取り組んでおり、その状況に応じて保護者等にも速やかに連絡し、共に学生を支援するよう努めている。

就職・進学支援については、就職対策委員と本学キャリア支援センターが連携して対策を講じている。就職率は平成 27(2015)年度、平成 28(2016)年度ともに 100%を実現しており、大学院へ進学する学生も年々増えている。今後も学生本人が希望する進路へ進めるよう、支援方法の工夫に努めたい。

3．研究面

多数の教員は国内外の学会での発表、論文投稿を行っている。科学研究費の申請は、各教員の判断で実施している。また、学会の要職を担う教員も多く、各分野専門領域の学術大会の大会長や編集委員を務める等、放射線領域の学問発展に貢献している。

大学院生が増加したことにより、各教員の研究に対する意識が高まっており、今後より活発になることが期待される。

4．学科内ＦＤ活動

学科教育委員会では毎月 1 回、教務委員と各学年担当が中心となり、成績不振者への対応や学生の授業理解度の向上を目指して議論を行い、学科全体での教育・指導方針の統一化を図っている。さらに、学科教員の教育・指導能力を向上させる目的で、学科 FD を年 2 回開催している。平成 27(2015)年度は「学生のメンタルサポートについて」、「法改正に伴う教育指導の一部変更について」、平成 28(2016)年度は「本学と他大学の教育の違いについて」、平成 29(2017)年度は「初年度教育について」を企画した。また、大学 FD 委員会が企画する全学的な FD 活動と連携して、新たな教育スキルの獲得にも取り組んでいる。特に、新任や教育経験が浅い教員が授業等を行う際の一助となっており、一定の効果を得ている。

5．社会活動

診療放射線技師の職能団体、並びに各専門分野の学会の要職を担う教員も多く、学術大会の大会長や編集委員を務める等、放射線領域の学問の進展に貢献している。またそれらの団体の活動を通じて、検査・撮影技術の向上や画像診断領域の拡大に貢献している。

近隣高校への出張講義、キッズスクールなどを通じて診療放射線技師の業務の理解やエックス線を使った検査に対する知識を深める活動なども積極的に行っている。

6．今後の課題

教育面に関しては、診療放射線技師養成校における現行の履修単位数やカリキュラムの見直しが検討されており、その動きを的確に掴み、遅滞なき移行はもちろん、さらなる効果的、効率的教育を行う。

学生指導面においては、留年などにより４年間の課程で卒業(ストレート卒業)できない学生が一定数存在し、その比率に大きな増減がない。学科では入学直後から少人数グループ指導体制を導入し、個別の指導を行っているが、さらにきめ細かな原因分析を行うなどして、ストレート卒業率の向上を図る。

研究・社会活動面においては、外部研究費の獲得を目指す活動を推進して行く一方、教員のマンパワー確保により研究に充てることのできる時間確保など、環境面の整備も行う。

（7） 医療福祉学部　医療福祉・マネジメント学科

1．教育面

1）教育内容

本学科には、介護福祉コース、社会福祉コース、精神保健福祉コース、診療情報管理コース、医療福祉マネジメントコースの５コースがあり、２年生進級時の学生の選択により所属が決まり（介護福祉コースのみ入学時選択）、それぞれ介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、診療情報管理士等の資格取得が可能である。そのため、それぞれの試験の受験要件科目及び関連する専門領域を学ぶことは当然であるが、それに加えて幅広い関連知識を身につけるよう奨励している。例えば将来福祉関係の仕事を希望していても会計学も学ぶ、民間企業への就職を希望していても社会福祉も学ぶというような授業選択が可能な時間割を組んでいる。

また、医療福祉職に求められる豊かな人間性を育むため、１年次は学びの一環として自分で活動先を選んでボランティア活動を行うこととしており、その体験を振り返る中で医療福祉職に求められる資質に対する多面的な理解を促進している。

2）臨地実習

それぞれ目指す資格によって実習先の種類と実習指導者の要件等が定められており、介護福祉士コースは２年次及び３年次に特別養護老人ホームやデイサービスセンター等の介護施設で、社会福祉コースは３年次に各種福祉施設や行政機関等で、精神保健福祉コースは４年次に精神科病院等で、診療情報管理コース及び医療福祉マネジメントコースは３年次に病院で、それぞれ実習を行っている。実習前学習により実習に望む姿勢や必要な知識を身につけた上で、実際の臨地実習時には指導教員が定期的に巡回して実習先の指導者とも連携をとりながら実習学生を指導している。充実した実習を行うことで、どのコースの学生も確実に問題意識を深め、それぞれの専門職を目指す意欲が高まることが実習記録や振り返りの授業等から読み取れ、実習が大学４年間の学びの中で、重要な役割を果たしていることが分かる。

3）国家試験対策

本学科で取得出来る国家資格は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士であり、このうち社会福祉士、精神保健福祉士については下表の通り、毎年全国平均を大きく上回る成績をおさめている。これは、４年次前期に週１コマ、後期には社会福祉士で週４コマ、精神保健福祉士で週２コマの国試対策特別講義を行うとともに、ほぼ毎月模擬試験を行い、成績不良の場合には補講を行う等、個々の学生の学習の進行具合に応じて担当教員が丁寧に個別のアドバイス、支援をしている成果が現れているものと考える。

社会福祉士	本学合格率	全国合格率	全国大学合格率	精神保健福祉士	本学合格率	全国合格率	全国大学合格率
2015年度	56.9%	26.2%	47.0%	2015年度	94.6%	61.6%	74.1%
2016年度	65.7%	25.8%	46.3%	2016年度	89.7%	62.0%	71.7%
2017年度	77.9%	30.2%	54.6%	2017年度	86.7%	62.9%	76.9%

また国家資格ではないが、本学科では診療情報管理士の資格取得も可能であり、2015年度83.3%（全

国非公表)、2016 年度 88.1%の好成績をあげているが、これも学生個々の能力に応じてゼミ教員等が徹底して個別アドバイスや補講を丁寧にしている成果である。

2．学生支援面

本学科では、全学年でゼミを開講し、当該ゼミの教員がアドバイザーとして、学習支援、就職支援、また日常的な困り事や悩み事の相談相手となっている。

特に 1 年次には、早く新しい生活になじむとともに主体的に学ぶ姿勢を身につける必要があることから、入門ゼミにおいて一人の教員が 13 人前後の学生を担当し、学生間の交流を促進するとともに、早期に学生と個人面談を行い、それぞれの学生の課題に丁寧に対応している。

学習面で課題のある学生に対するしては、前期、後期の開始時期に、その前の期までのＧＰＡ値の低い学生を対象に正副学科長が個別面談を行い、学習の状況や成績不振の原因となるような生活問題の把握につとめた上で、必要に応じてゼミ教員等とともに対応している。

本学科には、2016 年度に車イスを使用している身体に障害を持つ学生 3 名、重度の聴力障害のある学生が 1 名入学してきたが、事務局とも連携して設備面での改善や工夫、授業における配慮等を行い、特段の問題なく学生生活を送っている。

3．研究面

それぞれの教員が各専門領域の学会に属し、発表、寄稿等行っている。また、科研費では、2015 年度２件、2016 年度 3 件、2017 年度 1 件の実績がある。産学連携では、本学科介護福祉コース教員が企業と連携して排尿の仕組みの模型を作成しており、2018 年度には商品化される予定である。

4．学科内ＦＤ活動

毎月 1 回、1 年生の入門ゼミ担当教員が集まり、個々の学生に関する情報交換をするとともに、それぞれの教育・教授法等を披瀝しながら、意見交換、情報交換を行い、教育能力を向上を図っている。また、定期的に行っている各コース会議においては、学習上の課題を抱えていたり、発達障害のある学生に対する適切な指導法等について、意見交換、情報交換を行っている。

5．社会活動

本学科では、積極的に地域活動やボランティア活動に学生、教員ともに取り組んでおり、毎年、隣接する福祉施設の夏祭りスタッフ、8 月の与一祭りでの流し踊り、11 月に行われる大田原マラソンでの大学に隣接する福祉施設利用者と一緒になっての沿道での応援、給水ボランティア等様々な活動に、学生と教員が参加している。

また、教員はそれぞれの専門性を生かして、地元自治体の審議会や職員研修の講師、近隣の施設や病院の職員研修の講師、市民のための講座の講師等を担っている。

6．今後の課題

就職率、国家試験合格率、卒業生の就職後の定着状況、卒業生の個々の声等を勘案すると、本学科が行っている教育体系、方法は概ね適切であると考えており、引き続き現在の枠組みをベースに、より充実を図ることを考えている。近年の傾向として、学習習慣の身についていない学生、人との対面関係でのコミュニケーションが苦手な学生、生活体験の幅が非常に狭い学生等が増えており、今後は関係教員がさらに綿密な情報交換、意見交換を行いながら、一人一人に合わせた個別的指導を行う必要があると考えている。また、公的研究費等を積極的に活用して、研究により活発に取り組む必要があると考えている。

（8） 薬学部薬学科

1．教育面

1）教育内容

薬学部の教育理念は、本学の三つの基本理念である「人間中心の大学」「社会に開かれた大学」「国際性を目指した大学」と同様である。

まず、カリキュラムポリシーとして以下の3項目が設定されている。

1. 「くすり」の専門家としての専門的な知識や技能の習得にとどまらず、多様な学問領域に関心を持ち、使命感、倫理観、責任感、思いやりの心などの豊かな人間性を持つ人材を育成する。
2. 真理や科学の本質を追究するものの考え方の基本を修得し、学問を創造的に追究するとともに、将来役立つ知識と技能と態度を身につけ、自ら考えて判断できる問題解決能力を持った人材を育成する。
3. 現在または近い将来の地域医療の問題、地域社会のニーズを捉えることができ、さらに、視野を広げて国際的な医療問題についても考えることができ、様々な国の人々と連携、協働できる素地を持った人材を育成する。

薬学部では、これらの理念と目標に合致した教育を具体的に行っており、また国際的な連携・協働の力を養うために相応しい選択科目を配置している。

6 年制薬学教育では、薬学教育の質を高め、それを一定水準に保つために、学習者の一般目標と到達目標が明記された「薬学教育モデル・コアカリキュラム」が作成されており、全教員がこのコアカリキュラムに沿って授業・実習を進めている。特に臨床教育に関しては、大学構内及び各地区の附属医療施設・関連施設を整備・拡充し、教育と臨床活動の有機的な連携を実践している。これにより、1 年次から障害や病を持つ人と直接触れ合う機会を得ることができ、医療人としての倫理観と使命感を身につけることに大きく役立っている。2 年次から 4 年次後期にかけては、実務実習モデル・コアカリキュラム事前学習の全項目を網羅した講義や医療系実習を多く取り入れ、なかでも実務実習事前学習実習に関してはモデル・コアカリキュラム以上のコマ数を当てている。そのため、全体としてはモデル・コアカリキュラムで定める 122 コマを超える設定となっており、充実した内容となっている。

最終的には、以下の4項目のディプロマポリシーに沿った人材の育成を目指している。

1. 医療の領域にとどまらず、社会生活の基本である「ひと」としての基本姿勢(人間性)を養うために、他者を理解し、多方面に関心を持ち、実行し、自己分析・評価することができる。
2. 科学的思考力を持った「くすり」の専門職をめざして、基礎薬学・衛生薬学・医療薬学・社会薬学などの知識を身につけ、反復学習し、それを活用(応用)できる。
3. 講義を通して知識を、実習を通して技能を、薬剤師を意識し続けることで態度を修得し、知識・技能・態度のバランスを保ちながら、自己研鑽できる。
4. 医療全体(チーム医療、地域医療など)を理解することができ、さらには他職種を理解することができ、あらゆる活動において積極的に協働できる。

2）臨地実習

国家試験受験資格に病院 11 週、薬局 11 週の長期実務実習が課せられていることから、薬学部では、5 年次にⅠ～Ⅲ期のうち 2 期にわたり、実務実習を必修単位として実施している。薬剤師免許の無い学生の参加型実習に対し、4 年次に薬学共用試験（CBT・OSCE）が課せられており、この試験に合格かつ 5 年次に進級できる学生が実務実習に参加できる。病院実習は、本学附属病院を含む関

連病院および契約病院にて実施し、薬局実習は薬学教育協議会関東地区調整機構により選定された施設にて実習を行っている。実習内容は薬学モデルコアカリキュラムに沿った SBOs を、病院 113 項目および薬局 122 項目すべて実施かつ到達する内容となっている。実習に先駆けて、学生は、事前学習や集中講義にて実習前教育を受ける。実習施設は、毎年 4 月に各施設の実務実習指導者を集めた「実務実習指導者連絡会議」を開催し、実習指導内容および実習評価の伝達を行い、さらに大学との連携体制を確認し、円滑な実務実習の実施に努めている。実務実習中は、Web による実務実習指導・管理システムを用いた大学 - 学生 - 実習施設指導者間の 24 時間体制の連絡・管理システムにて、実務実習の一元管理を行う。さらに、形成的評価のため、実習期間中の中間・終了時に指導薬剤師および学生に実習の評価を課し、実習成果の確認を行っている。また、教員による巡回指導を実施し、学生や指導薬剤師との面談を通じて、問題点の有無のチェックを行っている。実習終了後には、実習報告書の提出、実習報告会の開催により、実習の振り返りと知識・技能・態度の到達の確認を実施している。

	病院施設数	薬局施設数	学生総計
2015 年度	21 設数	98 設数	160 名
2016 年度	23 設数	111 設数	170 名
2017 年度	22 設数	115 設数	167 名

3）国家試験対策

薬学部では 4 年次に、1～4 年次科目の総復習を行っている。この復習により、基礎知識の定着を図っている。

6 年次では、前期に基礎学力の定着、後期に応用力の涵養を目的として授業・演習を行っている。演習では学内教員が国家試験の出題傾向を十分に分析したうえで問題を作成している。また国家試験の既出問題の理解度を問う試験を 6 回行い、既出問題の理解を徹底している。国家試験の既出問題の理解度を問う試験および年 3 回の模擬試験の結果が出ると、チューターが個々の学生に対してアドバイスを行い、学力向上、精神面の不安の解消などに努めている。

このようにして学生の学力向上・国家試験合格を目指している。ここ 3 年は薬剤師国家試験の新卒合格率が 100%近くとなり、全国の薬科大学でトップクラスに位置している。

薬剤師	本学新卒 合格率	全国新卒 合格率	全国新卒 大学合格率
2015 年度（第 101 回）	99.1%	86.2%	86.2%
2016 年度（第 102 回）	99.1%	85.1%	85.1%
2017 年度（第 103 回）	97.0%	84.9%	84.9%

2．学生支援面

早期に入学を決定した学生に対しては、希望者に対して入学前準備教育を行っている。入学直後には、勉学と生活の両面から 6 年間の学生生活が把握できるガイダンスを実施するとともに、実力試験を通して新入生の基礎学力を把握し、授業に反映している。各学年の科目履修指導については、前後期授業開始前、各実習前、定期試験前などにガイダンスを通して適切に行われている。また、チューター制を導入しており、学生の学習面・生活面に対するサポート体制を整えている。チューターとなる教員は担当する学生一人一人と定期的に面談を行い、成績に応じた学習方法を指導したり、メンタル面を含めた健康状態、交友関係、進路などについてアドバイスを行なっている。また、

成績不良者に対しては、学生本人、保護者、チューター、学年主任同席の三者面談を行い、学生の現状と今後の計画を共有し、学生の奮起を促している。さらに1～3学年の留年者に対しては、「学習支援室」と称した部屋を設け、講義のない時は、そこで自習学習するように指導している。チューターは定期的に該当学生の学習支援室への遅刻・出席状況や学習ノートをチェックし、学生の学習・生活態度を向上させることに努めている。

3．研究面

1）研究業績

薬学部では多数の研究論文を国内だけでなく、海外のジャーナルにも発表し、さらに以下に示すように研究業績を着実に積んできている。6年制薬学教育では、2年間（5、6学年）の卒業研究も設定されており、学生も含めた更なる研究活動の活性化が期待される。

○外部資金獲得状況

2015年度：文部科研費(10件)、厚労科研費(11件)、AMED(2件)、計23件
2016年度：文部科研費(16件)、厚労科研費(7件)、AMED(3件)、計26件
2017年度：文部科研費(19件)、厚労科研費(3件)、AMED(1件)、その他(1件)、計24件

○産官学関連

1）学術論文：原著論文4件
2）特別講演会（(株）ツムラとの共催）：2件
① 2016.6.19（長野）「漢方薬をがん緩和医療に活かす」（武田弘志学部長）
② 2017.7.16（長野）「がん治療の支持療法と漢方薬」（武田弘志学部長）
3）学会発表：10件
4）技術情報交流会（国際医療福祉大学）
2018.2.20「飲酒運転シミュレーター（汎用型泥酔体験メガネの開発）」（加藤英明准教授、宮川和也講師）
5）学生&企業研究発表会：受賞10件（金賞1件、冠賞3件、協賛企業賞1件、奨励賞5件）

2）先端漢方医薬学教育研究センター

平成21年（2009年）10月に、国内の薬系大学で初めて、産学連携による漢方医薬学の教育・研究拠点としての「先端漢方医薬学教育研究センター」が設立された。イベントとして上記の産官学関連講演会以外に以下の特別講演会も開催している。

2015.7.18（東京）「人にやさしいがん医療～西洋医学と東洋医学の融合～」（北島政樹学長）

4．学科内ＦＤ活動

まず教育の資質向上に向けて、年2回「成績分析会議」を行っている。これは薬学部全学生の成績と学習状況を共有するとともに、以後の指導方針や方策などについても話し合う。さらに「薬剤師国家試験検討会議」では毎回の薬剤師国家試験の全問題(345 問)を見直し、難易度や出題傾向等を共有し、次年度の薬剤師国家試験対策に生かしている。

研究面では6年生の「卒業研究発表会」を中心として、現在薬学部で行われている研究内容の共有と、教員の研究実施・指導能力の向上を図っている。

全国の薬学部は7年に一度、薬学教育評価機構による「第三者評価」を受ける義務がある。本学は2019年度に評価対象となるが、事務職員も含めて2016年度からFD活動の一環として対策を始めている。

5．社会活動

①薬学部フォーラム

年度	日程	開催地	参加者数	メインテーマ
2015	10/17(土)	宇都宮	108	・基調講演：「薬学へのいざない－薬学部の実践力養成教育－」（武田学部長） ・パネルディスカッション：「社会のニーズに応えうる薬剤師とは」
2016	9/10（土）	宇都宮	117	基調講演：「薬学へのいざない～薬学部の教育と人材育成～」（武田学部長） パネルディスカッション：「未来を支える薬剤師の仕事」
2017	9/9（土）	宇都宮	90	基調講演：「薬学教育のイノベーションと新たな展開」（武田学部長） パネルディスカッション:「医療チームの一員として求められる薬剤師」

②薬剤師のためのワークショップ

○2015 年度　認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ

7/19 - 20（国際医療福祉大学）

タスクフォース教員 4 名、参加教員 1 名、参加職員 2 名

10/11 - 12（星薬科大学）

参加教員 1 名

11/28 - 29（長野県薬剤師会）

参加教員 1 名

2/6　認定実務実習指導薬剤師養成アドバンストワークショップ（栃木県薬剤師会）

参加教員 1 名

○2016 年度　認定実務実習指導薬剤師養成アドバンストワークショップ

2/5（国際医療福祉大学）

タスクフォース教員 1 名

○2017 年度　認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ

9/23 - 24（日本薬科大学）

参加教員 1 名

③薬物乱用防止の啓発活動

中毒学分野の加藤英明准教授が中心となり、毎年大学祭の期間に開催している。いずれの啓発活動においても 2 日間で計 500 名程の来場者がある。内容としては適正飲酒の推進（アルコールパッチテスト、泥酔・飲酒運転シミュレーター体験）、薬物乱用防止（乱用薬物の説明、乱用薬物模造品の展示、啓発 DVD の視聴）、女性特有疾患の予防（乳がん触診モデル体験）などである。

6．今後の課題

1）広報・学生募集活動の充実

18 歳人口の減少が始まりつつあるが、現在薬学部は全ての入試枠において受験者数が好調に推移している。今後も広報・学生募集活動を活発にし、入学定員を確保していく。

2）薬学共用試験（CBT・OSCE）・薬剤師国家試験への対策

4年次の共用試験（CBT・OSCE）は合格率100%を維持している。国家試験は第101回（2016年）以後、合格率が全国トップレベルに達したので、今後も高レベルでの維持を図っていく。

3）2019年度第三者評価への対策

既に事務職員も含めた対策を始め、キックオフミーティングも開催している。特に教務、臨床実習、学生支援関連では、綿密なスケジュールを立てて、自己点検評価の調書作成に取り組んでいる。

4）新コアカリキュラムへの移行に伴う対策

2015年より薬学教育コアカリキュラムが改正されたため、授業・実習の適正配置を図っている。対象学年は2018年度には4年次に進級するので、共用試験対策も重要となる。

（9） 小田原保健医療学部　看護学科

1．教育面

1）教育内容

看護学科は、「人間への深い関心と尊厳をもって看護の対象を理解し、看護実践の場における倫理的な対処ができる」「多様な学問領域に関心をもち、人間や健康を学際的にとらえることができる」「自ら学問を探求する態度や学習課題を明らかにし、課題達成に取り組むことができる」「看護におけるさまざまな事象に対して、論理的かつ批判的に考え行動できる」「人の感情や体験に共感できるような感性を磨き、人間関係を円滑に築くことができる」「個人、家族、組織、地域社会における健康課題を査定し、チームの一員として基本的な看護実践ができる知識・技術・態度をもつことができる」「国内外における看護の機能と役割を追及する姿勢をもつことができる」という6つの能力を育てていくよう取り組んでいる。

これらの能力の育成のため、2015年度入学生からの新カリキュラムに伴い、学生に理解、統合されやすい内容構造となることを意図して、学修の順序性を考慮し、科目全体を再編成した。また、教育目標の達成に向けた教育課程の体系化の観点から、科目の内容を精選し、各科目がどのように連携し、関連し合うかを検討し、各科目の内容校正および履修年次を変更した。更にアクティブラーニングの促進を意図し、演習による科目を明示し、新設した。

具体的には、統合分野における「看護コミュニケーション論」を基礎看護学実習Ⅰ終了後の2年次前期に配置し、対患者とのコミュニケーションに焦点化する内容とした。また、「看護管理学Ⅰ（基礎）」（必修3年次）、「看護管理学Ⅱ（発展）」（選択4年次）の内容を統合し、「看護管理論」3年次必修とした。

専門分野における「生活援助論」を2科目に分け、「看護援助論Ⅰ（共通子本技術）」「看護援助論Ⅱ（生活技術援助）」へ、「看護過程展開論」の配当年次を1年次後期より2年次前期へ、「看護過程演習」を必修科目として新設し2年次前期へ、「フィジカルアセスメント」を2単位60時間から1単位30時間に変更し、2年生前期から1年次後期に変更した。「成人看護学実習」は「成人看護学実習Ⅰ（慢性期看護）」「成人看護学実習Ⅱ（周手術期看護）」名称を変更し、3年次後期に配置した。「老年看護学実習」の名称を変更し「老年看護学実習Ⅰ（病院看護）」を3年次に、「老年看護学実習Ⅱ（施設看護）」を4年次に配置した。

専門基礎分野においては、「生理学Ⅰ（動物性機能、内分泌）を「生理学Ⅰ（植物性機能）」へ、また、「生理学Ⅱ（植物性機能）を「生理学Ⅱ（動物性機能、内分泌）」へ、「解剖学Ⅰ（運動器系）を「解剖学（運動器系・内臓学・循環器系）」に、「解剖学Ⅱ（内臓学・循環器系）」を「解剖学Ⅱ（内臓学・神経系）に変更し、学修の順序性を考慮した科目・内容構成の変更を行った。

50名から80名への定員数の増加に伴い、授業・演習の展開方法の見直しが実施され、また、FD活動を通して現状の課題や授業改善、アクティブラーニングについて教員間でディスカッションを続けている。

2）臨地実習

実習科目は必修10科目、選択実習3科目を関連病院及び神奈川県下の施設で実施している。定期的に教員と実習指導者が連絡会議を開催し、目標・実施内容、学生の学修課題及び実習指導においての課題を明確にし、学生の実習目標達成のために努力している。学生の各実習の到達課題は実習のポートフォリオ及び個別面談を通して確認し、次実習に反映できるように工夫している。また、実習委員会において、気になる学生の情報を共有し、学生の実習支援対策を検討している。4年生卒業時には「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」（厚生労働省）13領域143項目の到達度を評価し、次年度に向けての教育内容の検討を継続している。

3）国家試験対策

1 年生入学時のオリエンテーション及び保護者懇談会から国家試験対策の導入を行い、継続学習の動機づけを行った。3 年生においては、後期に国家試験ガイダンス、全国模擬試験を実施し、4 年生に向けての動機づけを行った。4 年生の看護師国家試験対策は、各分野の講義を 15 回、全国模擬試験を 3 回実施した。業者の外部補講を取り入れるとともに、全国模擬試験の結果が思わしくない学生に対し、集団指導を実施するとともに、個別面談、後期にはほぼ毎日の個別指導を、国家試験委員を中心に実施した。担任と定期的な情報交換を行いながら、学習支援だけでなく、精神的支援を行った。

保健師国家試験は、24 回の講義を実施した。また、看護師国家試験同様に、全国模擬試験の結果が思わしくない学生に対しては、8 回の補講を行った。

看護師 国家試験	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率	保健師 国家試験	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
2015 年度	95.0%	94.9%	97.4%	2015 年度	100%	92.6%	93.5%
2016 年度	100%	94.3%	96.5%	2016 年度	100%	94.5%	95.4%
2017 年度	98.3%	96.3%	%	2017 年度	100%	85.6%	%

4）国際活動

選択制ではあるが海外保健福祉事業への参加が積極的に行われている。また、2016 年にはアメリカの University of North Carolina at Chapel Hill の Dean M. Harris を招いて、看護学科 1 年生に対して授業をしてもらった。2018 年 3 月には元培医事科技大学 国際学生学術会議に中本優香が派遣された。

2．学生支援面

担任制を導入しており、学生の履修指導、学生生活指導、卒後進路指導を行っている。また、各年度当初にはポートフォリオの作成指導や目標設定と達成に向けての個別相談を行い、総合的な学生生活支援を行っている。1 年生では教員 6 名が担当し、入学時の履修や生活の個別相談に対応している。2 年生では進級にかかる事項や 3 年生に向けての学修態度の育成、3 年生では実習中の精神的支援を中心に学生支援を行っている。4 年生では教員 6 人が担当し、担任と国家試験委員・就職委員との定期的な情報交換を行いながら、国家試験対策支援及び就職に向けた支援を行っている。

2013 年から韓国、中国、台湾からの留学生が入学している。定期的な個別相談の場を設け、日本語支援や学習支援、密な国家試験対策を行っている。留学生の国家試験合格率は 100%である。

3．研究面

2016 年の研究業績は、著書 16 編、原著論文 16 編、総説 2 編、研究報告 1 編、講演 30 件、学会発表 135 件であった。2017 年度の科学研究費の獲得は 15 件申請したうち 6 件が採択され、学内研究費 13 件（前年度比＋1 件）であった。国内外の大学との共同研究や住民活動を推進するための研究など広がりを持ち、徐々に活発化している。

4．学科内ＦＤ活動

2015年～2016年「学部教育における授業改善の実際と課題」を主テーマとし、創意ある教育活動を推進するための授業改善上の自己の課題、及び現行カリキュラムにおける教育上の課題と改善点を検

討した。2017年は「看護基礎教育における在宅看護の教育について」をテーマとし、看護基礎教育における在宅看護の教育の在り方について、本学のカリキュラムにおける課題について検討・共有した。

教員間の活発なディスカッションによって、各領域の教育内容のマトリックスの有効活用や「考える学生」育成のための方策等について検討することができた。

5．社会活動

小田原市教育委員会と協働のペアレントトレーニング、若年性認知症家族会の支援、子育て支援センターの母親の相談支援、地域包括支援センターでの体操教室など、大学所在地である小田原市での活動が増加している。また、神奈川県の教育研修、実習指導者講習など、学生教育を担う看護職者の育成に携わっている。年１回の市民公開講座は、健康講話、健康チェック、足の健康、脳の健康等について、市民の健康意識の向上に一役買っている。

一方で、所属学会の理事や評議員、査読委員などの役割を担い、保健医療専門職者の研究活動を支援している。

6．今後の課題

教育面では、学生の学修を統合させ「考える学生」を育成のため、積極的にアクティブラーニングを取り入れ、領域を超えた教育の展開方法について今後も検討を重ねていく。

研究においては、研究歴の浅い教員への研究支援体制の構築の検討が必要である。

(10) 小田原保健医療学部　理学療法学科

1．教育面

1）教育内容

理学療法学科では、平成 28 年（2016）年度より新カリキュラムが導入(学部間では必修科目を共有)され、学生の進路と学修選択の自由度に配慮した選択科目を多く配置した。また、収容定員が平成 29 年（2017）年度入学生より 40 名から 80 名と変更となった。カリキュラムは、総合教育科目、専門教育科目（専門基礎科目と専門科目）で構成されており、卒業要件総単位数は 124 単位である。本学科の教育特徴のひとつに、1 年生から 3 年生までの PT スキル科目がある。本科目は、学科教員がかかわる学年縦割りの内容も含んでおり、理学療法士に必要な基本的臨床実践能力（知識・技術・態度）を総合的に学修するシステムとなっている。

2）臨地実習

1 年生基礎実習、2 年生検査実習、3 年生評価実習、4 年生臨床実習合計 19 単位を 99 実習施設のもと実施している。実習に先立ち、臨床実習要綱を作成し、該当施設に送付するとともに、毎年 2 月に臨床実習指導者会議を開催し、評価基準や指導内容に確認を行っている。また、実習各期にわたり、各教員が、臨床実習施設への訪問や電話連絡を行い、連携の強化に努めている。2 年生の検査実習は、初めて患者の身体にふれる実習であり、理学療法評価技術の土台となる。実習前には、学科教員全員が代表的な疾患ごとの概要と課題抽出、理学療法検査スキルの確認を 1 週間かけて行う。また、関連職種連携実習では、国際医療福祉大学熱海病院において大田原キャンパスとの混合チームで連携し、その成果をまとめて発表した。各実習後は、実習期間外の学生が全員参加する学生主体の報告会を実施し、プレゼンテーション技術の向上と意見交換に努めている。3 年次の後期において、OSCE を実施(大田原 C・小田原 C 教員の協力)し、総合臨床実習に必要とされる標準的な理学療法実践能力の事前チェックを実施している。

3）国家試験対策

4 年生国家試験対策担当の教員を中心に、年間計画表を作成し、進捗状況の共有を図っている。国家試験対策講義では、他キャンパスの教員の協力を得ながら、63 回実施した。学修状況は、9 回の外部模擬試験を含む、毎週の模擬試験を実施し、進捗状況の確認を行った。成績不振者に対しては、担任主導のもと毎週の復習会、学習スケジュールの助言、面談を繰り返した。

また、大田原キャンパス、大川キャンパスの 4 年生担任および学科長でキャンパス間国家試験対策会議を実施し、情報共有すると共に連携し、各キャンパス共に高合格率を目指している。

	小田原合格率	全国合格率	全国大学合格率
2015 年度	95.8%	82.0%	－
2016 年度	100.0%	96.3%	97.5%
2017 年度	100.0%	87.7%	－

2．学生支援面

理学療法学科では、各学年の担任制度とアドバイザー制度を併用して行っており、履修指導、学生生活の助言などきめ細やかな対応を心がけている。学生や保護者との面談においても、担任およびアドバイザーで情報共有し、連携して応じている。心身の問題に対して、専門的な対応が必要な場合は、関連病院や学生相談室（カウンセリング等）などの利用をすすめ、早期の問題解決に努めている。

また、休暇中の生活の乱れや学習習慣の低迷を予防する目的で、長期休暇を利用したオンラインドリルの利用をすすめ、休暇終了後には確認試験を実施し、一定の成果を得ている。

3．研究面

平成27年（2015）度の研究業績として、著書6編、原著論文10編、総説論文1編、講演9回、学会発表32演題、研究費は科学研究費助成若手B、2015年度帰国隊員/青年支援プロジェクトがそれぞれ1題、学内研究費では、6題が採択された。

平成28年（2016）度の研究業績として、著書9編、原著論文9編、総説論文6編、講演15回、学会発表28演題であった。研究費は、理学療法にかかわる研究助成が1題、学内研究費では、3題が採択された。

平成29年（2017）度の研究業績として、著書9編、原著論30編、総説論文0編、講演22回、学会発表75演題であった。研究費は6題にかかわっており、学内研究費では、6題が採択された。

また、4年生の卒業研究の優秀演題は、理学療法科学学会で毎年発表の機会を得ている。

4．学科内ＦＤ活動

理学療法学科では、入学者および卒業者のアンケート調査(FD委員会企画)を行い、満足度および達成度について教員間で情報共有している。特に卒業時のアンケート調査は、本学のDPに理学療法士のモデル・コア・カリキュラムの一部を包含した内容となっており、学士および理学療法士の卒業時の到達目標が把握できる構成となっている。

学科内の取り組みでは、毎月1回の頻度で学科内勉強会を行い、教育研究から理学療法士の専門性に至るまで幅広く、知見の共有に努めた。また、診療参加型臨床実習への移行を検討する目的で、年3回の勉強会を開催し、意見交換に努めた。臨床実習指導者との意見交換も積極的に行い、医療系大学の特性に合わせた学内教育から臨床への円滑な移行を目指している。

教員の資質向上については、科目構成を複数の教員が担当することによって、教授スキルの向上と成績評価のバラツキを抑えるよう配慮している。

5．社会活動

・市民公開講座の実施
・小学生体力測定の実施および報告
・県西地区リハビリテーション連絡協議会への協力
・小田原保健医療学部理学療法学科同窓会学会の開催
・日本理学療法士協会への協力

6．今後の課題

・理学療法士国家試験100%合格率の保持を図る。
・地域の医療福祉に貢献できる理学療法士の育成を図る。
・臨床能力および研究能力の高い理学療法士育成を図る。
・臨床実習施設と連携し、質の高い臨床教育を図る。
・外部資金獲得等、研究活動の促進を図る。
・教員の教育・研究能力の向上を図る。

(11) 小田原保健医療学部 作業療法学科

1．教育面

1）教育内容

作業療法学科では、平成28年度にカリキュラムの改定を行ない、科目の再編、実習期間の見直しを行った。科目の再編は、昨今のリハビリテーションの状況を鑑み、在宅・地域・就労支援のための科目の充実を図った。また、質の高い研究論文を選択し、臨床実践に役立てることができる、または科学的に妥当な方法で実際に研究を実践できる人材を育成するため、研究法や研究実践に関する科目を充実させた。

学士力育成を目指し、27年度より社会人基礎力を基にした自己評価を導入し、学生が社会人としての汎用的スキルを身につけることの必要性を認識できる環境づくりを行った。さらに28年度からは、学生が自身の課題を適格に把握して、授業・演習・実習に望めるよう、1 年次より社会人基礎力の評価表を用いながら個別面談を実施した。

2）臨地実習

平成28年度のカリキュラム改定に伴い、3年次臨床実習の期間を4週から5週に変更した。また、2 年次に実施している学内での臨床実習は、期間の見直しを行ない、春休み期間の実施から後期期間中の実施に変更した。後期科目の授業編成見直しと実習実施期間の見直しを同時に行うことで、学生の学修負担の分散化を図ることができた。また、3年次・4年次の臨床実習施設を大学近隣と学生居住地域へ、極力集約するよう調整した。これにより、学生の実習施設へのアクセス、大学へのアクセスが容易となり、学修環境を改善することができた。また、遠方の臨床実習施設の場合は、学生の金銭的負担を極力減らすため、寮が併設されている施設を採用した。しかし、未だ実習施設までの通学に時間を要する学生もあり、さらなる改善が必要である。実習で不合格なった学生に対して、担任と学生相談室の臨床心理士と連携に取り組んだ。結果、順調に実習を遂行できた学生が増加した。

3）国家試験対策

国家試験対策は3年次と4年次にそれぞれ対策を実施し、グループ学修を中心に、講義の実施や外部業者の講座、教員指導、模擬試験を実施した。

3 年次対策は平成28年度から本格的に開始し、担当教員も2～3名体制とし、早期より充実した指導体制となるよう工夫した。また、グループでの学修と学生自身による講義を実施した。年度末には模擬試験も実施した。4 年次対策はグループ学修、特別講義、外部業者講座、業者模試を継続的に実施した。加えて平成28年度からは前期より、成績下位層の学生を中心に、範囲指定の小テストを定期的に実施した。これにより、学生の状況把握がしやすくなり、個別指導が実施しやすくなった。さらに、グループ学修の個別指導のため、各グループに担当教員がつき、学修法について定期的に指導を行った。結果として全国平均より高い合格率を達成することができた。以下に合格率の表を示す。

作業療法士 国家試験	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
2015年度	97.9 %	94.1 %	
2016年度	97.9 %	90.5 %	92.1%
2017年度	93.2 %	85.2%	－

2．学生支援面

担任制を敷き、各学年に教員2名体制で学生の生活・学修支援にあたってきた。前期・後期の開始時には、学生全員と個別面談を行い生活・学修上の悩みがないかを聴取した。また、生活上のトラブル、実習や授業等での問題が発生した場合も、都度個別面談を行い、対処方法についてのアドバイスや相談に応じた。さらに、学生相談室の臨床心理士と連携し、学生が相談室に向かいやすい環境の構築に努めた。実際に学生相談室の利用が、平成28年度、29年度には大幅に増加した。

3．研究面

この3年間で、作業療法学科の研究業績は、原著論文6編（内3編が筆頭）、著書4編、学会発表34題であり、外部資金獲得状況は、科研費基盤研究Cが2件、基盤研究B（分担）が1件、埼玉県ロボット研究開発委託事業1件（分担）、民間企業研究委託費3件（内分担1件）であった。研究活動は概ね順調と言える。

4．学科内ＦＤ活動

平成27年度より学士力を育成し、高い能動性・思考力・コミュニケーション力を兼ねそろえた臨床家の育成のための教育方法論の開発に力を入れてきた。教員間でディスカッションを重ね、経済産業省が提唱する社会人基礎力を基に、学科のポリシーと照らし合わせながら学科独自のルーブリックを作成し、教員と学生に対し運用を開始した。さらに、ルーブリックをよりよく運用するための方法についても議論を重ね、平成28年度からは、1年次より定期的な教員との面談に活用し、その効果を検証した結果、学生への一定の効果が認められた。

5．社会活動

殆どの教員が、日本作業療法士協会、神奈川県作業療法士会を始め、日本行動医学会、バイオメカニズム学会、国際医療福祉大学学会等の職能団体・学術団体の各種委員を務め、各種団体の活動や学術活動に貢献してきた。また、地域への貢献として、小田原市社会福祉協議会、神奈川県作業療法士会、株式会社福祉用具総合評価センターCECAP 等が主催する研修会に講師として参加した。特に、小田原市周辺住民を対象とした公開講座では、全ての教員が講師として参加した。

また、社会活動として、小田原市からの委託を受け、小田原市子育て支援センターへの訪問支援や小田原市教育員会支援教育相談支援チームとして小学校への巡回相談に参加した。さらに、インクルーシブ教育高等学校評議委員会へのオブザーバー参加、高等学校教員向けの研修会へも講師を派遣した。その他に福祉用具の標準化事業への協力や小田原市周辺の医療福祉施設での技術指導にも積極的に参加した。

6．今後の課題

昨今の高等教育では、単位や成績の厳格化が進みつつあり、学生は能動的な学修姿勢が問われるようになっている。また、専門的知識や技術だけでなく、学士力の育成も、高等教育に求められている。我々は、学修に対する能動的姿勢，高いコミュニケーションスキルと倫理感、柔軟で忍耐強い思考力の育成を図っていくことを目指す。具体的には、上級生の学士力の強化、下級生のライフ・スキルの強化を図ることを目的に、平成30年より縦割り編成クラス制度を導入する。臨地実習では、今後は臨地実習に困難さが予測される学生に対しても、学生相談室との連携を強化しサポートシステムを構築する。また、平成32年には指定規則改定が行わる予定である。より良い教育環境の構築に向けて、カリキュラム改変や実習見直しが次年度以降の大きな課題となる。

研究面では、競争的資金を獲得し、研究を行いやすい環境づくりに努めていく。教員間での連携を図り、より規模の大きい研究にも挑戦していく。また、研究法と卒業研究を、卒研ゼミと位置づけ、卒業研究を選択する学生を増加させる。さらには大学院への進学者の増加を目指したい。

さらに地域貢献として、神奈川県全体の発達障害児支援教育の発展を目的に、高大連携を強化したい。

(12) 福岡看護学部　看護学科

1．教育面

1）教育内容

教育課程については、2009年に看護師課程新カリキュラムの導入、2011年に保健師・助産師の新カリキュラムの改正に伴う科目編成を行い、2012年より、保健師履修コースを定員18名で開始した。保健師受験資格の履修は、総合教育科目、専門教育科目、保健師履修に必要な「日本国憲法」「体育理論」、「公衆衛生看護学」領域科目の全てを必修として、卒業要件を総計135単位以上とした。また、看護学科においては、卒業要件を124単位以上として科目編成の改変はせず、授業内容、方法など学習環境の充実を図った。2012年より、チーム医療・チームケアを在学中に実践することを目的とした「関連職種連携教育」を開始し、座学で「関連職種連携論」「関連職種連携ワーク」を学び、2015年からは「関連職種連携実習」を展開し、多職種連携・協働の集大成としての成果を得ている。

2）臨地実習

臨地実習は専門科目5分野と専門基礎科目1分野の23単位1035時間で構成され、62施設の実習施設の協力のもと履修している。実習指導は、各教員が小人数グループの学生を担当し、施設側の実習指導者と協働して臨床現場で指導している。卒業生の看護実践や就業態度について就業先の病院等から高い評価をいただき、実習教育の成果が見られる。今後も実習施設との知識・技術の交流や研究支援によって連携を深め、実習指導の質向上に努めていきたい。実習に伴い宿泊が必要な学生には関連施設のホテルに、一定の条件のもとに宿泊費用を大学で負担しており、学生の経費節減や健康管理に役立っている。

3）国家試験対策

補講や模擬試験は年間計画を担当教員が概ね計画し、4年生の学生国試委員と話し合い運営にあたっている。学科教員は学生個々の学習状況に応じて面接指導を行い、学習会等を開催し学習支援、並びに強化を図っている。保健師国家試験合格率88.2%、看護師国家試験合格率は93.9%となっている。国試の不合格者に対しては、次年度の受験への対応を担当教員が窓口となってサポートを行っている。

看護師	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率	保健師	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
2015	96.0%	94.9%	97.4%	2015	90.0%	92.6%	93.5%
2016	99.0%	94.3%	96.5%	2016	100.0%	94.5%	95.4%
2017	93.9%	96.3%	98.2%	2017	88.2%	85.6%	86.9%

2．学生支援面

看護学科では、アドバイザー担当教員が各学生に履修指導や学生生活の相談に乗り個別にサポートを行っている。授業や実習等を複数回欠席した場合は、学生と密に連絡を取り、早期に学生の状況を把握しながら問題が深刻化する前に対応している。また、年に1回保護者懇談会を行い、その際に個別面談も実施し、必要時には適宜保護者との連絡や面談も行っている。メンタルな問題を抱える学生には週に1回の臨床心理士のカウンセリングを紹介している。

3．研究面

著書は2015年、2016年と8件で推移し、原著は年間4件、研究論文発表は4件と3

件であった。文部科学省の科学研究費は新規で毎年3件から4件採択されている。学内研究費の獲得は、2015年は8件、2017年は6件であったが、2017年は10件と増加している。

4．学科内FD活動

看護学科のFD活動として、2016年から年に2～3回のミニFDを実施している。千葉大学と文部科学省で作成したFDマザーマップを用いて学科全体のFDのニーズを把握し、ニーズが高いものや適宜学習上の課題となるものをテーマとしている。2016年度は、「学生の主体的学習への支援」「看護の理論と実践を結びつける効果的な教材設計」、2017年度は「科研費獲得のポイント」「学生の問題行動に対する教育的視点からの対応」「実習態度に問題のある学生の指導困難事例」を実施した。

5．国際性

2015～2017年度、韓国建陽大学看護学科（協定校）研修受け入れ（学生13～16名、教員1名、期間：約10日間）を行った。各年度テーマに沿った講義・演習・病院施設見学、学生・文化交流を行い、日韓の看護・看護教育制度の共通点や相違点についてお互い学ぶことができた。2015・2017年度には台湾元培医事科技大学（協定校）スタディプログラム（大学院生を含む学生約20名、教職員1～4名：1日間）で、我が国の医療・介護保険制度に関する講義・学生交流を行った。学部生の2015～2017年度「海外保健福祉事情」事前・事後報告会では、海外研修国の保健医療福祉分野における知識、研修後の知見の共有を行い、海外諸国と日本の看護の専門性について考察することができた。

6．その他

＜公開学習会の開催＞

2015、2016年には「TNC夏まつり」、2017年は「RKBラジオまつり」に参加し、大学ブースで血圧測定や骨密度測定、関連施設紹介パフレットの展示、ラジオ番組での入試告知などを行った。高大連携事業として2016年7月と11月に沖学園高等学校生に模擬講義を行った。2016年11月には企業の健康保険組合の健康フェアでBLS講習を実施した。また、2017年の大学祭に合わせて「糖尿病と上手につきあおう」と題した公開講座を開催し、2018年には地域の2か所の会場で折り紙の講習会や糖尿病の講習会を実施した。

＜卒業生とのつながりを強化する対応＞

2015年～2017年度、就職活動開始時期の4年生と関連病院および臨地実習病院に就職している本学科卒業生とのつながり強化の機会として交流会を開催した。卒業生が大学および後輩の学部生との交流を深め、また、国家試験の勉強の仕方や、学部生が卒業後の新しい職場環境に適応できるよう助言を受けるなど、有意義な時間を過ごすことができた。

7．今後の課題

今後は、看護学教育モデルコアカリキュラムに基づいたカリキュラム改正に伴う教育内容の見直しを図り、本校の特色でもある国際性を高めるための語学教育と研修内容の充実と多職種連携教育を強化するための教育内容の点検も行っていく。

また、教員のFD向上を図り、研究面では科研費申請と採択数の増加を促す対策を検討していく。

さらに、質の良い学生の受け入れを促進するために、入試改革も考慮に入れて本学とともに検討していく。

(13) 福岡保健医療学部　理学療法学科

1．教育面

1）教育内容

①教育方針：理学療法学科の基本理念は、(1) 基礎及び基本原理の重視：理学療法学の基礎となる科目、および理学療法専門の基本を重視した教育に力を入れる。(2) 自学の精神：自ら学び、自ら問題を解決する能力を養う。(3) 専門性の選択：多くの専門科目を選択することにより、興味のある分野で活躍できる、としている。

②カリキュラム：カリキュラムは総合教育科目、専門基礎科目ならびに専門科目に分かれ、学生は科目を系統的に学習する。平成 29（2017）年度入学生より、新カリキュラムを導入した。1 年次の演習科目の PT スキル I 演習（課題発表・PBL）では、理学療法技術の基本となる触診技術を学ぶことに加え、開学初めて 2 学年の学生との屋根瓦教育を実施した。これは、学年の垣根を越えた教育を目指したものである。

③在籍者数：平成 27（2015）年度は、399 名（1 年 103 名、2 年 93 名、3 年 102 名、4 年 101 名）であった。平成 28（2016）年度は、380 名（1 年 81 名、2 年 105 名、3 年 92 名、4 年 102 名）であった。平成 29（2017）年度は、380 名（1 年 93 名、2 年 85 名、3 年 100 名、4 年 102 名）であった。

④単位認定：卒業要件は総合教育科目、専門基礎科目ならびに専門科目の総計 125 単位以上を修得することとしている。進級要件として、2 学年から 3 学年へは必修の専門教育科目のうち、未修得科目が 2 科目以内であること、3 学年から 4 学年へは 3 学年までの必修科目（理学療法特論 I を除く）をすべて修得していることとしている。要件を満たした者に認定した。平成 27（2015）年度の留年者は 10 名、退学者は 3 名であった。平成 28（2016）年度の留年者は 20 名、退学者は 0 名であった。平成 29（2017）年度の留年者は 12 名、退学者は 11 名であった。

2）臨地実習

1 年生は、大学関連施設を利用して見学実習を行った。2 年生と 3 年生は、大学関連施設での検査測定実習を両年とも 1 週間で行った。3 年生および 4 年生の関連内外施設における実習では、事前に臨床実習指導者が出席する臨床実習指導者会議を通じて医療施設・関連施設との密接な連携を図った。さらに、臨床実習中には教員が直接訪問し、臨床実習指導者との連携をとることで臨床実習が円滑に進むように支援した。両年とも臨床実習を 8 週間で行った。

3）国家試験対策

平成 28（2016）年度より、全学年に対して Computer Based Testing（CBT）を導入し、早期より国家試験に向けた意識づけをした。平成 27（2015）年度、平成 28（2016）年度ならびに平成 29 年度（2017）年度は、4 年生に対してグループ学習、特別講義ならびに模擬試験を行い、成績不良者に対しては個別指導等を実施した。国家試験の合格率として、平成 27（2015）年度受験生は、全員合格した。平成 28（2016）年度は 95 名中 78 名が、平成 29（2017）年度は 88 名中 87 名が合格した。

理学療法士	本学合格率	全国合格率	全国大学合格率
平成 27（2015）年度	82.1%	82.0%	－
平成 28（2016）年度	98.9%	96.3%	97.5%
平成 29（2017）年度	92.4%	87.7%	－

2．学生支援面

各学年に担任制を設け（2名）、各学年の学事運営を行った。適宜、担任は個別面談を行い、学生の成長を促した。また、1年から4年生までの学生を学年横断的に10グループに編成し、理学療法学科の全教員がチューター教員となって学生を受け持った。理学療法学科は担任制とチューター制を共存させ、学習面や生活指導面をきめ細かく指導できる体制をとっている。特に、担任とチューター教員は4年次における就職支援と国家試験対策を行った。

3．研究面

平成27（2015）年度は、著書3冊、原著論文17冊、総説2冊、講演7題、学会発表60題の業績があった。公的研究費獲得状況としては継続2件、新規に1件の採択があった。

平成28（2016）年度は、著書2冊、原著論文18冊、講演5題、学会発表68題の業績があった。公的研究費獲得状況として、継続が3件であった。

平成29（2017）年度は、著書4冊、原著論文25冊、講演2題、学会発表68題の業績があった。公的研究費獲得状況として、新規に1件の採択があった。

4．学科内ＦＤ活動

若手教員（助手と助教）に対して、教授および准教授の講義および演習科目を聴講してもらい、教育力の向上の底上げを図った。また、教員間における臨床実習教育の共通理解を目指し、臨床実習指導者会議の際の基調講演を開催した。平成27（2015）年度は名古屋大学医学部保健学科に所属の内山靖氏に「大学教育における臨床実習教育のありかた」を、平成28（2016）年度は増原クリニックに所属の中川法一氏に「臨床実習におけるクリニカルクラークシップの導入」を、平成29（2017）年度は名古屋大学医学部保健学科に所属の内山靖氏に「理学療法臨床の現状・展望とこれからの臨床実習教育のありかた」と、国際医療福祉大学熱海病院の吉野賢一氏と高木病院野田嵩一氏に「臨床での取り組みの実際」をテーマに教授いただいた。

5．社会活動

福岡県大川市の公民館介護予防事業（ゆうゆう会）における「高齢者の健康・体力づくりプロジェクト」として、福岡保健医療学部理学療法学科の全プロパー教員は平成28（2016）年度より公民館で認知機能検査および体力測定を行った。平成28（2016）年度は17施設の公民館で、平成29（2017）年度は19施設の公民館で総計428名（平成28年；315名、平成29年；327名）に対して行った。また、平成28（2016）年度より隣接する福岡県三潴郡大木町にも活動を広げている。町主催の「一般介護予防事業普及啓発・活動支援事業（おおき健康モデル事業）」においては平成28（2016）年度18回、平成29（2017）年度6回に、社会福祉協議会主催の「高齢者生きがい活動支援通所事業「もみじ倶楽部」は、平成28（2016）年度6回、平成29（2017）年度6回に渡って参加し、高齢者への体力測定および運動指導を行った。

7．今後の課題

今後の課題に対する取り組みとして、1）魅力ある学生生活に対して学習支援を行うこと、2）新カリキュラムへの移行に伴いチューター班の再構築し、屋根瓦式学生交流の促進を図ること、3）学生の関連学会への参加機会を提供し、教育の質の推進を図ること、4）より一層にオープンキャンパスを活性化させること、5）入試区分と学業成績の関連性を経時的に分析すること、6）国試対策として、国試出題ガイドラインの整合性を再確認し、成績下位層の早期対策を図ること、卒業研究の推進を図り、関連病院への就職率及び卒業生の大学院進学率増につなげること、7）教職員の研究活動を奨励すること、以上7点である。

(14) 福岡保健医療学部　作業療法学科

1．教育面

1）教育内容

①教育理念：作業療法学科の教育理念は「人間関係を重んじ、人の生き方について論理的に思考し科学的に探究することで、作業療法に必要な専門性と人間性を身につけ、社会に応え信頼される情熱と誇りを持った創造的かつ独創的な作業療法士の育成を目指すこと」である。この理念の基に学内教育・臨床教育を実践している。

②カリキュラム：早期よりさまざまな臨地実習を導入し、学生の作業療法士としての意識付けを心掛けている。また各学年間においても学生交流を促すためにIG制度（Interactive Group System）を導入している。これは同学年や先輩・後輩などとの人間関係の構築により学生が主体的に活動して学習効果をあげ、作業療法学科が掲げる理念の基にそれぞれの作業療法士像に向かって切磋琢磨できる環境作る相互作用学習関係組織のことである。

③在籍者数：平成27（2015）年度は、197名（1年44名、2年48名、3年56名、4年49名）であった。平成28（2016）年度は、190名（1年43名、2年42名、3年53名、4年52名）であった。平成29（2017）年度は、174名（1年42名、2年41名、3年43名、4年48名）であった。

④単位認定：卒業要件は総合教育科目、専門基礎科目ならびに専門科目の総計125単位以上を修得することとしている。平成27（2015）年度の留年者は9名、退学者は1名であった。平成28（2016）年度の留年者は5名、退学者は2名であった。平成29（2017）年度の留年者は5名、退学者は1名であった。

2）臨地実習

臨地実習は学内講義と臨床を結びつける意味でも非常に重要なものである。作業療法学科の臨地実習の位置づけとしては1年次「アーリー・エクスポージャー」、2年次「基礎実習」、3年次「地域作業療法学実習、評価実習」、4年次「総合実習」がある。これらは、これから作業療法士を目指すための意識付けや、これまで学んだ知識・技術を基に実際の臨床の場において作業療法を体験する場でもある。学科の臨地実習の基本方針は実習指導者に全ての指導を一任するのではなく、専任教員が実際の臨床場面に参画し、臨床実習指導者と共に学生を指導していくスタイルをとっている。これにより効果的に作業療法士になるために必要な知識・技術・態度を習得することが可能である。

3）国家試験対策

国家試験対策としては集中対策講義、グループ学習の遂行、模擬試験の実施、を実施している。集中対策講義は国家試験の出題傾向の高い箇所を優先的に実施している。グループ学習はアクティブラーニングの形態で実施しており、そこに担当教員が参画することにより大きな効果を上げている。また模擬試験の実施によって不得意分野の把握などにつながっている。これらにより、作業療法学科の国家試験合格率は全国平均に比べても高くなっている。

資格名	本学合格率	全国合格率	全国大学合格率
2015年度	93.6%	94.1%	－
2016年度	98.1%	90.5%	92.1%
2017年度	93.5%	85.2%	－

2．学生支援面

学生支援面においては、生活安全支援、メンタルケア支援、ハラスメント防止、キャリア支援など積極的に行っている。具体的には学生に対しアンケート調査を実施し実態把握を行ったり、学生相談窓口を設置するなどで対応している。卒業生の就職状況としては平成27（2015）年度、平成28（2016）年度とも就職率100%を達成している。平成29（2017）年度は3月末時点で100%となっている。

3．研究面

平成27（2015）年度は、著書7、原著論文0、総説1、短報7、講演12、学会発表32の業績があった。公的研究費獲得状況としては1件の採択があった。
平成28（2016）年度は、著書7、原著論文2、総説0、短報1、講演17、学会発表39の業績があった。公的研究費獲得状況として2件であった。
平成29（2017）年度は、著書2、原著論文0、総説0、短報1、講演12、学会発表36の業績があった。公的研究費獲得状況として、新規に1件の採択があった。

4．学科内ＦＤ活動

各年次における臨地実習に関してFD活動を実施している。各年次の講義内容と実習の関係、次年次の実習への展開を考慮している。特に4年次の総合実習に関してクリニカル・クラークシップ型臨床実習の導入、また昨今特に作業療法分野で注目されている生活行為向上マネジメントの臨地実習への導入への検討に力を入れている。

5．社会活動

大川市における様々な事業（乳幼児の発達教室、巡回相談事業、健康・体力づくり支援プロジェクト、市民公開講座、大川樟風高等学校との高大連携授業など）に積極的に関与している。また福岡市における事業（生活支援相談室ケアマネジメント事業、自立支援法障害支援区分認定調査、高次脳機能障がい支援ネットワーク会議など）にも関わっている。

6．今後の課題

今後の課題に対する取り組みとしては、1）オープンキャンパスの充実、積極的な高校訪問を行い作業療法士になりうる優秀な学生の獲得が挙げられる。これは国家試験の高い合格率へとつながるであろうし、作業療法（士）の質の担保にもつながると推測されるからである。2）臨地実習でも4年次の総合実習の充実である。現在クリニカル・クラークシップ型の実習への移行期であるが早期に移行を達成させる必要がある。日本作業療法士協会の意向で生活行為向上マネジメントの実習での活用が求められているが、この対応も早期に実施していく必要がある。また臨床実習指導者の質の向上への対策も求められている。3）教職員の研究活動を奨励すること、以上3点である。

(15) 福岡保健医療学部　言語聴覚学科

1．教育面

1）教育内容

①教育理念：大学の基本理念と教育理念のもと言語聴覚学科は、(1)言語聴覚障害学・言語聴覚療法の理論・技術の修得　(2)対象者の方の人格を尊重した臨床態度の形成　(3)対象者や関連職種とのコミュニケーション能力の促進　(4)言語聴覚療法を通して地域・社会に貢献する人材の育成、という目標を掲げている。

②カリキュラム：平成19(2007)年度の開学時から、見学実習の早期経験と文章作成など学科独自の学習方法により、教育の質を高める努力をしている。完成年次を向えた平成22（2010）年度に続き、平成28（2016）年度再度カリキュラムを改編し、科目名や開講年度等の変更を申請した。

③在籍者数：平成27(2015)年度は1年生48人、2年生56人、3年生47人、4年生40人平成28(2016)年度は1年生43人、2年生47人、3年生56人、4年生41人、平成29(2017)年度は1年生43人、2年生47人、3年生45人、4年生48人であった。退学者および留年者により学年間に差がみられる。

④単位認定：進級条件はシラバスに明記されているように2段階となっている。3学年への進級は、平成27(2015)年度では2学年までの必修の専門科目のうち、未修得単位が1科目以内であること、平成28（2016）年度以降は2学年までの必修の専門科目の単位をすべて修得していることが条件である。4学年への進級は3学年までの必修科目の単位をすべて修得していることが条件である。この条件によって進級判定が実施され、平成27(2015)年度は2年生6人、3年生7人、平成28（2016）年度は2年生7人、3年生9人、平成29（2017）年度は2年生4人が留年となった。また卒業要件を満たさなかった4年生は平成27(2015)年度1人、平成28(2016)年度6人、平成29（2017）年度5人が留年となった。今後も成績不振に対する学習および心理面へのサポートはますます重要になると思われる。

2）臨地実習

総合臨床実習においては臨床実習指導者会議を開催し、実習施設との緊密な連携を図った。3年次は、医療施設で2週間、情報収集を中心とした基礎的な臨床実習を行った。4年次は、多様な施設で6週間の総合的な臨床実習を2回行った。また、実習中は教員が直接訪問し、実習指導者との連携によって円滑な実習を支援した。実習終了後には症例報告会を実施し、同級生、下級生と貴重な体験を共有できるよう配慮した。

3）国家試験対策

過去の国家試験を科目別に分類し、授業に取り入れてもらえるよう科目担当の教員に配布した。3年生に対しては模擬試験を1回実施した。4年生には、言語聴覚療法特論および補講による補完的学習指導と実力試験を4回、全国模擬試験を1回実施した。グループ学習、特別講義、模擬試験、アドバイザーを中心に成績不良者への個別指導を行い、合格に向けての対策を強化した。

言語聴覚士	本学合格率	全国合格率	全国大学合格率
平成 27（2015）年度	84.2%	82.0%	86.9%
平成 28（2016）年度	97.1%	89.9%	92.1%
平成 29（2017）年度	100.0%	91.3%	92.6%

2．学生支援面

アドバイザー制を導入し、学生の学習面・生活面に対するサポート体制を整えている。アドバイザーの教員は担当する学生一人一人と定期的に面談し、個々に応じたアドバイスを行っている。特に休みがちな学生に対しては本人およびその家族と連絡を取り、面談を実施し、専門機関への受診を勧めることにしている。一人暮らしの女子学生には、戸締りに注意するよう指導した。また、薬物等の問題点については、ビデオ放映により注意喚起した。

学生への就職・キャリア支援に関しては、学生の希望する分野の専任教員が個別相談に応じている。

3．研究面

平成 27(2015)年度は著書 2 編、原著論文 6 編、総説 12 編、学会発表（国内）11 件、（国外）3 件であった。平成 28（2016）年度は研究報告等が 3 編、学会発表（国内）11 件、その内 1 件は国際学会であった。平成 29（2017）年度は著書 2 編、分担 3 編、原著論文 3 編、研究報告 1 編、学会発表（国内）31 件、その内 4 件は国際学会、（国外）2 件であった。

また、助成金の申請は平成 27(2015)年度は科学研究費などが 8 件、その内 1 件の採択、継続が 1 件、学内研究費の申請は 6 件であった。平成 28（2016）年度は科学研究費 6 件、その内 2 件採択、継続が 1 件、学内研究費の申請は 4 件であった。平成 29（2017）年度は科学研究費 4 件、その内 1 件採択、継続が 2 件、分担による継続は 3 件、学内研究費の申請は 6 件であった。科学研究費や研究助成には毎年申請しており、研究活動は活発である。

4．学科内ＦＤ活動

学内全体で開催される教員研修会には、各年度とも学科の教員全員が参加し、授業内容や授業方法の改善を図っている。平成 27(2015)年度には、国家試験対策のあり方について 1 名がパネルディスカッションした。また、講義の内容および研究について報告するミニ講義を 2 人が担当した。平成 28（2016）年度には教授法について 1 人が発表した。本校主催の教員研修会には、毎年学科から 1 人以上参加し、各年度とも学内報告会を行った。学科内では、シラバスの作成について年に数回検討し、教育の共有と質的向上を図った。

5．社会活動

地域活動への参加･協力

2015年度

深浦順一：・大川市立大川小学校ことばの教室・言語通級教室との連絡会議開催

為数哲司：・福岡県言語聴覚士会筑後ブロック世話人代表としてブロック会の企画および運営。

・久留米地区成人症例検討会を運営し5回実施した。
・久留米市自立支援地域ケア会議に1回出席し、専門職アドバイザーとして助言

安立多惠子：・大川市立大川小学校ことばの教室・言語通級教室との連絡会議開催、評価・助言指導。
・発達障害児等教育継続支援事業に係る巡回相談（４回）
・幼児教育カウンセラー活用事業に係る巡回相談（８回）
・療育事業において助言（島根県隠岐郡知夫村　2015.9.7～9.8）
・筑後地区難聴・言語障害教育連絡協議会定例事例検討会において助言（３回）
・柳川ことばの発達支援グループによる活動（１回）
・大川市乳幼児発達教室　（月２回）
・大川市1歳半・3歳児健康診査（月２回）
・大川市「早期からの教育相談・支援体制構築事業」大川市子育て応援パンフレット監修

平島ユイ子：・福岡市就学相談（年３回）
・福岡市難聴言語通級指導教育研究会研修会講師（年３回）
・福岡市固定制難聴学級指導相談（年３回）
・福岡市東福岡特別支援学校療育相談会（年２回）
・糟屋町立幼稚園保育園研修、相談（年２回）
・春日市立小学校の指導研修・相談（年１０回）
・太宰府市通級教室研修・相談（年２回）

岩﨑裕子：・福岡・高次脳機能障害者と共に歩む翼の会総会・懇親会参加
・失語症友の会：賛助会員
・脳外傷友の会：賛助会員
・近隣在住の高次脳機能障害者に対する認知・コミュニケーション機能の評価および指導（10回）
・近隣在住の高次脳機能障害者に対する進学指導・推薦状の作成
・地域のデイサービスにおけるボランティア：計44回
・ＮＰＯ法人日本言語障害児・者社会活動支援の会：会員として活動に参加・協力

難波　雄：・高木病院ST部門　週1回、共診という形で臨床指導を行った。
・福岡県言語聴覚士会　地域ケア会議アドバイザー養成研修会　修了
・第３回木室校区高齢者学校「認知症ケア」

石川幸伸：・悠声会（喉頭摘出者の会）（ボランティア活動）
・久留米地区ST症例検討会

福井恵子：・失語症サロン　スタッフ（失語症パートナー「あんど」主催）（4回）
・福岡県言語聴覚士会　地域ケア会議アドバイザー養成研修会　修了（修了番号45）

2016年度

深浦順一：・大川市立大川小学校ことばの教室・言語通級教室との連絡会議開催

為数哲司：・福岡県言語聴覚士会筑後ブロック世話人代表としてブロック会の企画および運営。
・久留米地区成人症例検討会を運営し3回実施。
・久留米市自立支援地域ケア会議に3回出席し、専門職アドバイザーとして助言。
・小郡市自立支援地域ケア会議に1回出席し、専門職アドバイザーとして助言。

安立多惠子：・大川市立大川小学校ことばの教室・言語通級教室との連絡会議開催、評価・助言指導の実施（４回）
・発達障害児等教育継続支援事業に係る巡回相談（１回）

・幼児教育カウンセラー活用事業に係る巡回相談（８回）
・療育事業において助言（島根県隠岐郡知夫村　2016.9.1～9.2）
・筑後地区難聴･言語障害教育連絡協議会定例事例検討会において助言（３回）
・柳川ことばの発達支援グループによる活動（１回）
・大川市乳幼児発達教室（月１～2回）
・大川市1歳半・3歳児健康診査（月1～２回）

平島ユイ子：・福岡市就学相談（年５回）
・福岡市難聴言語通級指導教育研究会研修会講師（年３回）
・福岡市固定制難聴学級指導相談（年３回）
・福岡市東福岡特別支援学校療育相談会（年２回）
・春日市立小学校の指導研修・相談（年３回）
・太宰府市通級教室研修・相談（年２回）

岩﨑裕子：・福岡・高次脳機能障害者と共に歩む翼の会総会・懇親会参加
・失語症友の会：賛助会員
・脳外傷友の会：賛助会員
・近隣在住の高次脳機能障害者に対する認知・コミュニケーション機能の評価および指導（計3回）
・地域のデイサービスにおけるボランティア：計40回
・ＮＰＯ法人日本言語障害児・者社会活動支援の会：会員として活動に参加・協力

義田俊之：宮若市中央公民館若宮分館若生学級において地域の高齢者を対象に「心について」の体験型講話（2016.9.21）

石川幸伸：・悠声会（喉頭摘出者の会）（ボランティア活動）
・久留米地区ST症例検討会

福井恵子：失語症サロン　福岡地区スタッフ（会計担当）（失語症パートナー「あんど」主催）（1回）

2017年度

深浦順一：・大川市立大川小学校ことばの教室・言語通級教室との連絡会議開催

為数哲司：・福岡県言語聴覚士会筑後ブロック世話人代表としてブロック会の企画および運営。
・久留米地区成人症例検討会を運営し3回実施。
・小郡市自立支援地域ケア会議に1回出席し、専門職アドバイザーとして助言。

安立多惠子：・大川市立大川小学校ことばの教室・言語通級教室との連絡会議開催、評価・助言指導の実施（４回）
・発達障害児等教育継続支援事業に係る巡回相談（８回）
・幼児教育カウンセラー活用事業に係る巡回相談（３回）
・大川市教育委員会による発達障害児等の巡回相談（６回）
・療育事業において助言（島根県隠岐郡知夫村　2017.9.3～9.5）
・筑後地区難聴･言語障害教育連絡協議会定例事例検討会において助言（３回）
・大川市乳幼児発達教室（月１～2回）
・大川市1歳半健康診査（月1回）

平島ユイ子：・福岡市就学相談
・福岡市難聴言語通級指導教育研究会研修会講師
・福岡市固定制難聴学級指導相談
・福岡市東福岡特別支援学校療育相談会

・太宰府市通級教室研修・相談
・福岡県立福岡聴覚特別支援学校外部指導員

岩﨑裕子：・久留米市自立支援地域ケア会議アドバイザー
・福岡・高次脳機能障害者と共に歩む翼の会総会・懇親会参加
・失語症友の会：賛助会員
・脳外傷友の会：賛助会員
・近隣在住の高次脳機能障害者に対する認知・コミュニケーション機能の評価および指導（計3回）
・地域のデイサービスにおけるボランティア；計40回
・ＮＰＯ法人日本言語障害児・者社会活動支援の会：会員として活動に参加・協力

石川幸伸：・悠声会（喉頭摘出者の会）
・久留米地区ST症例検討会

福井恵子：失語症サロン　福岡地区スタッフ（会計担当）（失語症パートナー「あんど」主催）（2回）

ジャーナリズム

2015年度

深浦順一：・「リハビリテーション専門職種の動向」座談会に参加した内容が総合リハビリテーション43巻9号に掲載された。
・教育医事新聞にインタビュー記事が掲載された。

平島ユイ子：・横浜市特別支援教育センター教職員研修事業
・佐賀県難聴言語教育研究会研修会
・沖縄県難聴言語障害児親の会研修会
・福岡市南区人権教育研修（福岡市若久特別支援学校）
・筑紫地区特別支援教育研究会研修会
・福岡県難聴・言語障害教育研究会
・広島県子ども療育センター山彦園研修会
・春日市特別支援教育研修会

岩﨑裕子：・平成27年度福岡市介護研修センター介護講座講義「脳の働きを高めよう」

義田俊之：・南筑後地区特別支援教育担当教師ネットワークの研修会講演「子どもと親を元気にする学校　認知行動療法からのヒント」
・筑後市学校人権同和教育研究協議会　「しょうがい」児教育部会学習会講話「共生共学について（共に学ぶことの有効性について）」

2016年度

平島ユイ子：・筑紫地区特別支援教育研究会研修会
・福岡県難聴・言語障害教育研究会

岩﨑裕子：平成28年度丹後中央病院（京都府京丹後市）研修会講師「コミュニケーション障害のある方との関わり方」（2016/3/10）

2017年度

為数哲司：・介護老人保健施設光風（長崎県壱岐）研修会講師「摂食嚥下障害の評価と対応」（2017/7/9）
・九州先端科学研究所主催市民公開講座「自分目線の高齢化社会」における摂食嚥下障害

の講演（2017/11/24）

平島ユイ子：・九州地区難聴・言語障害教育研究会熊本大会
・広島県子ども療育センター山彦園研修会
・福岡市通級指導教室研修会
・久留米市ことばの教室学習会
・春日市特別支援保育研修会

岩﨑裕子：第11回柳川療育セミナー講演「こどもの高次脳機能の発達」（2017/10/1）

所属職能団体

2015年度

石橋大海：・編集委員：Journal of Gastroenterology, Case Reports in Internal Medicine, World Journal of Gastroenterology
・論文査読：Journal of Autoimmunity、Liver International、Hepatology Research 肝臓、日本内科学会「専門医部会の頁」
・九州大学医学部同窓会（代議員）

深浦順一：・一般社団法人日本言語聴覚士協会（会長）
・佐賀県言語聴覚士会（相談役）

為数哲司：・日本言語聴覚士協会（審議員、コアカリキュラム検討委員、教育部部員）
・福岡県言語聴覚士会（筑後ブロック世話人会代表）
・リハビリテーション教育評価機構（評価員）
・全国リハビリテーション学校協会（学術部委員、ＳＴ部会委員）

福井恵子：・日本言語聴覚士協会（認知症小委員会委員）

2016年度

深浦順一：・一般社団法人日本言語聴覚士協会（会長）
・佐賀県言語聴覚士会（相談役）

為数哲司：・日本言語聴覚士協会（審議員、コアカリキュラム検討委員、教育部部員）
・福岡県言語聴覚士会（筑後ブロック世話人会代表）
・リハビリテーション教育評価機構（評価員）
・全国リハビリテーション学校協会（学術部委員、ＳＴ部会委員）

平島ユイ子：福岡県言語聴覚士協会（選挙管理委員）

2017年度

深浦順一：・一般社団法人日本言語聴覚士協会（会長）
・佐賀県言語聴覚士会（相談役）

為数哲司：・日本言語聴覚士協会（審議員、コアカリキュラム検討委員、教育部部員）
・福岡県言語聴覚士会（筑後ブロック世話人会代表）
・リハビリテーション教育評価機構（評価員）
・全国リハビリテーション学校協会（学術部委員、ＳＴ部会委員）

福井恵子：・日本言語聴覚士協会（認知症小委員会委員）

大内田博文：・日本言語聴覚士協会（第３回全国研修会実行委員長）
・福岡県言語聴覚士会（理事・学術局長）

国，自治体，公的機関の役員･委員等

2015年度

石橋大海：・厚生労働省：疾病・障害認定審査会委員
・厚生労働省：原子爆弾被爆者医療分科会委員（第２部会長）
・日本安全医療調査機構　「診療行為に関連した死亡の調査分析モデル事業」日本肝臓学会九州ブロック委員および地域推薦窓口担当者

深浦順一：・言語聴覚士国家試験委員会　副委員長
・公益財団法人国際医療技術交流財団　評議員
・公益社団法人日本脳卒中協会　理事
・一般社団法人日本リハビリテーション病院・施設協会　理事
・一般社団法人全国リハビリテーション学校協会　理事
・一般社団法人リハビリテーション教育評価機構　理事
・一般財団法人訪問リハビリテーション振興財団　評議員

為数哲司：・久留米市　自立支援地域ケア会議　専門職アドバイザー

安立多惠子：・筑後地区難聴・言語障害等教育連絡協議会　顧問
・大川市通級に係る適正就学指導委員会　委員
・大川市乳幼児発達教室事業　講師
・大川市乳幼児健康診査
・島根県隠岐地区障害児小規模療育事業　療育指導委員
・福岡県発達障害児等教育継続支援事業　巡回相談委員
・大川市「早期からの教育相談・支援体制構築事業」教育相談員
・大川市幼児教育カウンセラー

平島ユイ子：・福岡市就学支援員

2016 年度

深浦順一：・言語聴覚士国家試験委員会　副委員長
・公益財団法人国際医療技術交流財団　評議員
・公益社団法人日本脳卒中協会　理事
・一般社団法人日本リハビリテーション病院・施設協会　理事
・一般社団法人全国リハビリテーション学校協会　理事
・一般社団法人リハビリテーション教育評価機構　理事
・一般財団法人訪問リハビリテーション振興財団　評議員

為数哲司：・久留米市　自立支援地域ケア会議　専門職アドバイザー
・小郡市　自立支援地域ケア会議　専門職アドバイザー

安立多惠子：・筑後地区難聴・言語障害等教育連絡協議会　顧問
・大川市教育支援委員会　委員
・大川市乳幼児発達教室事業　講師
・大川市乳幼児健康診査
・島根県隠岐地区障害児小規模療育事業　療育指導委員
・福岡県発達障害児等教育継続支援事業　巡回相談委員
・大川市「早期からの教育相談・支援体制構築事業」教育相談員
・大川市幼児教育カウンセラー

平島ユイ子：福岡市就学支援員

2017 年度

深浦順一：・言語聴覚士国家試験委員会　副委員長
・公益財団法人国際医療技術交流財団　評議員
・公益社団法人日本脳卒中協会　理事
・一般社団法人日本リハビリテーション病院・施設協会　理事
・一般社団法人全国リハビリテーション学校協会　理事
・一般社団法人リハビリテーション教育評価機構　理事
・一般財団法人訪問リハビリテーション振興財団　評議員
為数哲司：・久留米市　自立支援地域ケア会議　専門職アドバイザー
・小郡市　自立支援地域ケア会議　専門職アドバイザー
・文部科学省大学設置　学校法人審議会専門委員（リハビリテーション分野）
（任期：2016/11/1～2017/10/31）
安立多惠子：・筑後地区難聴・言語障害等教育連絡協議会　顧問
・大川市教育支援委員会　委員
・大川市乳幼児発達教室事業　講師
・大川市乳幼児健康診査
・島根県隠岐地区障害児小規模療育事業　療育指導委員
・福岡県発達障害児等教育継続支援事業　巡回相談委員
・大川市「早期からの教育相談・支援体制構築事業」教育相談員
・大川市幼児教育カウンセラー
平島ユイ子：福岡市就学支援員

社会的活動に対する表彰等
2015年度
石橋大海：・Best Doctors in Japan 2014-2015
・カザフスタ国よりカザフスタン国医師の教育に対して顕彰：GOLD MEDAL of Asfendyarov Kazakh National Medical University for developing of medical education and healthcare in the Republic of Kazakhstan"

2016年度
深浦順一：第45回医療功労賞受賞

６．今後の課題

・教員のマンパワーを確保し、教育内容をより充実させる。
・実習施設との連携をより密にし、実習の質の向上を図る。

(16) 福岡保健医療学部　医学検査学科

1．教育面

1）教育内容

① 教育理念

医学検査学科では、大学の基本理念と教育理念のもと、以下ポリシーに従い教育活動を行った。

アドミッションポリシー

1. 本学科の特質を理解し、臨床検査医学に対する明確な目的意識を持ち、医療の発展に寄与する意志を持つ人
2. 思いやりの精神を持ち、「共に生きる社会」の実現に向け、周囲と協働して国際的な社会貢献ができる人間性を持つ人
3. 臨床検査技師として、常に進歩し続ける臨床検査医学分野を自ら積極的に学び開拓する資質を持つ人

カリキュラムポリシー

1. 臨床検査技師として必要な基礎的知識・専門的技術を身につけた、高度医療に対応する人材を育成する。
2. 医療における臨床検査の重要性と使命を知り、倫理観やチーム医療の重要性を理解した人材を育成する。
3. 国際的に通用する表現力、問題解決力、コミュニケーション力を身につけた人材を育成する。

ディプロマポリシー

1. 医学・臨床検査に必要な基礎知識・専門的技術を持ち、高度医療に対応することができる。
2. 医療人としての使命感・倫理観を持ち、チーム医療を実践できる。
3. 国際人として、高いコミュニケーション力、表現力を持ち問題解決ができる。

② 在籍者数

年度	1年	2年	3年	4年	退学	除籍	留年
2015	95	89	112	−	2	−	2
2016	84	92	83	112	1	1	23
2017	87	86	85	100			8

2015 年度から 2017 年度までの在籍者数を下表にまとめた。

2）臨地実習

1 年生に対しては、「まなび学」の一環でアーリーエクスポージャーとして関連病院を訪問し、臨床検査技師が業務する現場の見学実習を行った。3 年次 9-10 月に臨地実習が実施された。福岡地区および関東地区の関連病院を含め、福岡県内の病院を主として、2015 年度は 44 施設、2016 年度は 30 施設、2017 年度は 32 施設が実習施設となった。充実した実習を行うために、臨地実習調整担当者が全学生と個別面談を行い、最適な実習施設に配置できるよう配慮した。実習終了後には、報告会にて、個々が実習で得ることができた成果についてプレゼンテーションを行った。

3）国家試験対策

当学科は2016年度に初の国家試験受験に臨んだ。国家試験対策として、医学検査特論Ⅰでは、ゼミ毎に対策問題作成を担当し、皆で解くことを行った。特論IIでは、分野ごとに対策講義を3回実施した。2017年度は、特論Ⅰでは、分野ごとに重要ポイントをまとめたプレテストを行い、その内容について講義を行った上で、確認試験を実施し、要点知識の定着を図った。特論IIでは、分野別講義と対策試験を中心に実施した。ゼミ担当教員が担当学生に対して個別指導や成績管理を行った。

国家試験合格率を下表にまとめた。

臨床検査技師	本学合格率	全国合格率	全国大学合格率
2015年度	未受験	-	-
2016年度	96.8％	89.9％	93.7％
2017年度	86.3％	90.5%	-

2．学生支援面

当学科ではチューター制をとっており、教員一人あたり各学年それぞれ7-8人の学生を担当している。学生の学習面や生活面、その他をサポートし、個々に応じたアドバイスを行ってきた。必要があれば、保護者と連絡をとり、また心の相談室の心理カウンセラーと相談した。

キャリア支援として、3年次より、毎月キャリア支援セミナーを行い、接遇、面接マナー、履歴書の書き方などについて専門家のセミナーを受けた。4年生には、採用要項が届く度に、担当教員からメールにて詳細を伝え、情報伝達を徹底した。ゼミ担当教員は、担当学生に対して個別相談を実施した。

3．研究面

2015年度から2017年度までの研究業績および研究費獲得状況を下表に示す。文部科学省科学研究費および学内研究費については、原則として学科全教員が申請することとしている。研究活動は活発であった。

年度	著書	原著論文		総説	その他出版物	講演	国内学会発表		研究助成金			特許
									科研費		その他	
		筆頭	共著				筆頭	共同	新規	継続		
2015	51	2	9	9	14	36	12	20	1	3	2	0
2016	10	1	9	10	3	18	10	23	2	2	2	0
2017	5	3	22	3	3	12	3	40	3	2	6	1

4．学科内ＦＤ活動

学科としての教育方針及び指導方針に関する情報交換として、定期的な各教員の担当学生についての学習面・生活面の状況、就職活動状況などの報告により情報共有化を行ってきた。

学科教員の教育・研究に関する情報交換と教育の資質向上として、日本臨床検査学教育協議会や健康食品安全協会の教員研修会、日本臨床衛生検査技師会の各種研修会などに積極的に参加し、その情報を学科にフィードバックを行ってきた。また、臨地実習指導者と学生指導について意見交換し、学科教員の資質の向上を図った。さらに、高木病院検査技術部との連携を深め、検査技術部職員の取り上げた事例・課題などについて議論し、専門性の向上を図った。

5．社会活動

当学科所属教員はそれぞれ、職能団体である臨床衛生検査技師会を主として、また、それぞれの専門分野の関連学会および研究会に所属し、理事、評議員、各委員会、研究班などの構成員として活発に活動している。

6．今後の課題

当学科は今年度（2017 年度）で、開設から 5 年を経過し、2 回の卒業生を輩出した。国家試験対策にあたっては、ある程度予定どおりに進められた年度と、想定していた結果を得ることができなかった年度を経験した。今後、大学入学人口が継続的に減少し、より幅の広い学力レベルの学生が入学してくることが想像される。基礎学力を習得させることと、専門的学力を教授することを如何に実践していくかが課題となる。

(17) 医学部　医学科

１．教育面

１）教育内容

2017 年 4 月に医学部が開学して一年に満たないが、教員と学生の熱意のもとに「国際性を重視しグローバルスタンダードに対応する医学教育」が実践されている。特徴として、「医学教育統括センター」が設置され教育カリキュラムの策定・運営、教員の支援、学生の修学状況の管理の中枢機関として機能している。

殆ど全ての講義に active (interactive) learning method を取り入れ、多くの講義・実習を英語で行っている。入学以来ほぼ毎日の医学英語の講義や補習により留学生２０名は勿論日本人医学部生１２０名の英語力も著しく向上している。2018 年 2 月までに既に正常解剖演習、基礎医学総論、発生・出産、更には器官別統合講義（循環器、呼吸器）が終了している。１年次にこれらの内容を短期間に習得するには多大な努力を要するが、学生の勉学に対するモチベーションは高く、また教員も補講や個別相談を積極的に行うことによりカリキュラムは円滑に進行している。これらと並行して医師としての未来像を明確にするために「医療プロフェッショナリズム」「医療面接・身体診察Ｉ」の講義や実習も行われている。本医学部は世界屈指の規模のシミュレーションセンターを有しており、既にこれらの講義に有効に活用され始めている。

来日間もない日本語に不慣れな留学生に対しては「留学生別科」で日本語や生物学の講義を行い、４月からの系統講義への円滑な参加を促している。

２）臨地実習

関連病院での臨床実習は 4 年次から始まる。しかし 1 年次から既に「医療プロフェッショナリズム」「医療面接・身体診療１」を通して医学部生は医療の実践に触れている。特に 9 月に医療に興味のある市民の協力により「模擬患者の会」が発足した。学生は症状を訴える模擬患者を模擬診察室内で問診・診察し、その診療内容を臨床医学系教員により評価されまた模擬患者からもフィードバック・アドバイスを受けた。このトレーニングを通して学生は医師としての自覚を 1 年次から身に着けることが期待される。

３）国家試験対策

医学部生は 3 年終了時に OSCE（客観的臨床技能試験）と CTB（コンピューターを用いた客観試験）に合格し臨床医学実習に進み、卒業時に医師国家試験に合格する必要がある。加えて本医学部では USMLE（アメリカ医師国家試験）の受験も推奨されている。このため既に希望する医学部生に対して USMLE 対策に特化した課外教育プログラム（計 45 回）が行われている。

２．学生支援面

医学部では「学生相談員システム」を設置している。教員１人（もしくは２人）が７人の医学部生（日本人６人・留学生１人）の担任となり定期的な食事会や具体的な学習支援を行っている。本システムは学生の精神的な面を含めた様々な相談に対するきめ細かいサポーターとして機能しており、学生が上述のハードなカリキュラムを乗り越える心の支えとして機能している。加えて毎週の「学生サポート会議」では学生の講義出席や成績のみならず日常生活の管理を行い、学生の修学を多角的に支えている。

開学１年未満ながらもハロウィーンパーティや球技大会が開催され、幾つかのクラブ活動が大学の公認となっている。本医学部の東日本医学医科学生体育連盟への参加が承認され、今後クラブ活動を通した学生間、特に学年を超えた交流が活発になると予想される。

３．研究面

2017年度の研究業績として著書 51編、英語原著論文256編、英語総説31編、和文原著論文31編、和文総説61編であり、学会発表は国際学会82演題と国内学会417演題であった。研究費の獲得状況として、文科省科研費では基盤研究（C）36題、基盤研究（B）2題、挑戦的萌芽研究1題、新学術領域研究1題であり、厚労省科研費は1題、AMED研究費は4題であった（代表研究者のみ）。学内研究費として26題が採択され、その他にはFIRST Projec（ベトナム）1題、日本血液学会研究助成1題、国立遺伝学研究所共同研究1題、ノバルティスファーマ研究助成1題、内藤記念科学振興財団研究助成1題、上原記念生命科学財団研究助成2題、大和証券ヘルス財団調査研究助成1題が採択された。更に資生堂スキンケア研究センターとの臨床研究も進行中である。

春から夏にかけて「公津の杜研究推進会議」を開催し、医学部WA棟に導入する研究機器について教員間で意見を交わし機器の選定を行った。

４．学科内ＦＤ活動

4月から毎週のミニFD、更に3回の医学部全体の総合FDを開催し、実際に講義を行った教員からのフィードバックや「学生を惹きつける講義」の展開方法を教員間で共有した。また他教員の講義を聴講し、気付いた事柄をフィードバックすることにより互いに講義の進め方の理解を深めてきた。

全ての授業後の学生アンケートにより講義の方法や内容に関する学生の意見を集めており、その結果は講義を行った教員に迅速に返却され次回の講義に活用されている。更にアンケート結果は教員サポート会議で集約され、講義全体の流れの調整に生かされている。

５．社会活動

１）国際性

多くの教員が積極的に海外からの大学学長や病院医師の病院・医学部設備（シミュレーションセンター）の視察を受け入れている（Hue University of Medicine and Pharmacy、チョーライ病院、ホーチミン医科薬科大学（以上ベトナム）、クリスチャン大学（タイ）、オタゴ大学（ニュージーランド）など）。さらに日本学術振興会特別研究員（マレーシア）、研修生（ベトナム）、EPA介護福祉士候補者（フィリピン）を海外から数か月～2年間受け入れ、専門技能の取得向上に貢献している。

国際原子力機構主催のアジア地区における核医学診療・研究の普及のため、インドネシア、タイ、ミャンマー、ベトナム、イエメン、シリア、バングラデシュなどからの核医学医師を対象に2回の教育講演を実施した。

２）国内

慢性腎臓病や脳卒中に関する市民公開講座やBLS（一時救命処置）講習会を開催し、地域の医療啓蒙活動に積極的に取り組んでいる。また医学部の特徴である医学シミュレーションセンターには千葉県や成田市の行政職員や医学教育学会の会員が見学に訪れ、本センターを広く社会にアピールする機会となった。

６．その他

・2年次の正常人体解剖実習のためのご遺体を確保するために「献体の会」が立ち上げられた。2018年2月末にて入会者数は130名を超えている。現在も月に約30件の入会希望の問い合わせがあり、献体数も月1-2体のペースで受け入れている。2018年2月の時点で総献体数は16体である。

・8月と10月に医学部オープンキャンパスを開催した。教員相談コーナーでは本医学部の受験を考えている受験生とその親からの相談に対応した。その他、医療シミュレーター体験や English Session が開催された。とりわけ医学部生が主体となり企画した「キャンパスライフ紹介」では医

学部生が学生生活や受験勉強法をユニークにプレゼンし、好評を博した。
・夏季休暇中には３名の医学部生がMedical Exchange & Discovery Program（アジア人医学生を対象としたスタンフォード大学医学部を拠点とする夏期医学留学プログラム）に参加した。
・本学医学部への進学リクルート活動として、医学部教員が出身高校を訪問し講演を行った。

７．今後の課題

今後５年間は毎年学生数が増加し新たな教育カリキュラムが開始されることとなる。この未知の状況を混乱なく円滑に進めることが大きな課題の１つである。具体的には教員マンパワーの確保、学内webシステムの強化、教員支援、出席確認方法の固定化などが急務の課題である。

一方、来年度より大学院医学研究科が開学する。これに伴う医学部研究施設での基礎研究の立ち上げと研究費や研究員・大学院生の獲得も重要な課題である。

(18) 成田看護学部　看護学科

1．教育面

1）教育内容

成田看護学部では、建学の精神を基盤とし、教育理念にある高い国際性を目指したカリキュラムによる教育を展開している。教育内容として、国家試験受験資格に関わる科目の他に、国際空港をもつ成田市にある看護学部として災害・感染症対策に関する科目等で独自性を打ち出している。また、多様な価値観に対応でき国内外で活躍できる人材輩出を目指した科目やキャリア開発を促進するための独自科目を設置している。開学から2年が経過し、現行カリキュラム進行中ではあるが、文部科学省から提示された看護学教育モデルコアカリキュラム（平成29年10月公表）の内容を踏まえたカリキュラム改定を行う予定である（2020年4月改定予定）。

2）臨地実習

成田キャンパスは、開学2年目で、実習科目1年次1単位、2年次8単位を履修者全員が修得した。実習場は、病院13、小中学校31、保育園6、介護老人福祉施設13・保健所・健康増進施設等8であった。実習前準備として、「実習ガイド」「実習要項」を作成し各施設責任者、成田市教育委員会、実習指導者との打ち合わせを行い調整した。履修環境の整備として、非常勤実習担当教員・実習用電話の確保をした。学内で人権・個人情報遵守等の倫理教育、事故防止等の安全教育、感染防止の授業・演習を行った。感染症予防として、抗体価検査、予防接種、検便、QFT 検査を学生、実習担当教員全員が実施した。実習中は施設側の実習指導者と協働して個々の学生に応じた指導を行った。実習施設関係者、科目責任者、常勤教員、非常勤教員と連携して、履修者全員の支援ができ、無事に臨地実習を終了することができた。実習終了後は、担当者間で評価会を行い、成果と課題を確認し、学部全体で共有した。

3）国家試験対策

図書館HPに導入されている看護師保健師国試WEBの使用方法をについて説明し、学生自身が実際に使用できるようにガイダンスを主に1年生向けに行った。また、低学年模試を1年生および2年生向けに行い、出題カテゴリ別の得点等の分析により苦手分野の抽出を行った。今後、この結果を活用して学習方法の相談等のサポートを行っていく。

看護師保健師国試WEBは現在アクセスが学内に限定されており、学外からアクセスできるプランへの学生からの変更要望を受けて国試支援について検討し、改善策を稟議中である。

学生の自主的な組織である学生国試対策委員会の立ち上げの支援を行っており、今後の組織づくり、活動計画づくりなどのサポートを行っていく。

2．学生支援面

アドバイザリー制度により支援した。1年生は1グループの学生9～10名を教員2名、2年生は1グループの学生27名程度を2名の教員で担当した。支援内容は、①学生生活、健康管理、学修や進路の相談に応じた。②学修に支障をきたす状況の学生に対して科目責任者と連携を取りながら支援した。支援方法は、個別相談、グループ活動などを各グループの状況に応じて行った。これにより学生の課題にできるだけ早期に対応するよう努力した。今後は学年が増える中でのグループ構成の検討と支援のさらなる充実が課題である。

学年を越えて1年生と2年生が交流するきっかけづくりとして、合同交流会を6月に開催した。今後もさらに学年間の交流が早めに図れるように開催時期を検討して継続する。

留学生支援は、まず留学生が所属するアドバイザリーグループの教員が行った。さらに、1年生

には日本人学生による留学生サポート支援体制を構築し実施した。初年度は、1名の留学生に1名の日本人学生サポーターが支援した。2年目には、日本人学生サポーターの負担を考慮し、1名の留学生に3名の日本人学生サポーターが支援した。留学生へのヒヤリングでは、この制度が役に立つと評価しており、今後もこの制度を継続する。しかし、留学生は、入学当初、学生生活や日本人学生とのかかわりに戸惑いをもっていたことも明らかとなった。次年度からは、先輩留学生の経験（学生生活の仕方、学修の仕方など）を新留学生に情報提供する場を設ける予定である。

3．研究面

成田看護学部はまだ開学して2年目であり、初めて看護教育に携わる教員も多くおり、さらに各専門領域教員がすべて着任していない中で、教育活動を行ってきた。教育活動のみならず、積極的な社会活動や地域貢献等を行いながらも多くの外部研究費を獲得している。2016年度以降現在までの科学研究費補助金助成獲得状況（分担研究含む）は、基盤研究（A）1件、基盤研究（B）3件、基盤研究（C）11件、挑戦的萌芽研究1件、若手研究（B）2件であった。成田看護学部で初めて看護教育に携わる教員には、看護研究者としてさらに発展することができるように、組織として研究活動を支援していく体制を整えることが今後の課題である。

4．学科内ＦＤ活動

2016年度は、新人教員の教育の質向上を目的として、「実習指導」、「研究倫理」、「カリキュラムの構造理解」に関する研修会、さらに教育機器に関する説明会、ITを活用した教材説明会を開催した。2017年度は、教員の学習・教育ニード調査を実施し、その結果から、4つのテーマで開催した。1)「科研費獲得に向けて」：科研費獲得の方法とコツを共有した。2)「臨地実習の質向上をめざしてPart Ⅰ・Ⅱ」：2回の事例検討を通して、臨地実習教育における教員の役割・指導方法について意見交換した。3)「本学部のカリキュラム」：本学部のカリキュラムの強み・弱み、今後の課題について意見交換できた。4)「授業ピアレビューの実践」：1つの授業を評価の視点を持って観察し、討議した。さらに委員はFDに関する外部研修会に参加し、伝達講習会や学部FD企画に活かした。教育の質向上のためのプログラムの構築とFD研修会への参加促進である。

5．社会活動

2016年度の開学当初より、海外における公的協力（海外活動報告参照）だけでなく、地域における社会活動として、成田看護学部教員による地域住民向けの公開講座の開催や、大学を有する成田市の更なる活性化に向けた行政の取り組みへの貢献でもある地域創生総合戦略会議委員の受諾、さらに、地域のお祭りやイベントに積極的に参加し、地域住民との交流を行っている。また、市内の小学校や保育園等で子どもたちに向けた衛生教育を学生ボランティアとともに行うなどの活動も展開している。

6．今後の課題

教育：看護教育モデルコアカリキュラムの内容を踏まえた新カリキュラムの策定
臨地実習：実習場の確保維持・環境整備、実習担当教員確保と指導の質を保証するための研修実施
国家試験対策：国家試験対策に向けた学生への学習方法の相談やその支援体制づくり
学生支援：学生数に対応したアドバイザリーグループ構成と留学生支援体制づくり
研究：組織的な教員研究活動支援体制づくり
FD:教育の質向上のためのプログラムの構築と学科教員のFD研修会への参加促進

(19) 成田保健医療学部　理学療法学科

1．教育面

1）教育内容

成田保健医療学部は2016年4月に開学し、理学療法学科においては2018年3月時点で1年生84名、2年生92名が在籍している。2学年縦割りのアドバイザー制を用いており、学修カルテを用いながらの少人数でのきめ細かい指導を行ってきた。また2年生と1年生がお互い刺激し合いながら学修を進めていけるよう、2学年共通の基礎知識検定を年に2度実施した。2017年度には、2年生を対象にCBT（実習前コンピュータ試験）を実施し、学生自身が自分の学力を客観的に評価できる機会を設けた。CBTは3年次、4年次と継続して実施していく予定である。また学科専門科目ではGoogleフォームを用いて小テストを行うなど、ICTの導入を積極的に進めている。新入生に対しては、入試合格者を対象に学科で作成した入学前課題を配布し、入学前から理学療法の基礎知識に触れると同時に、コメント欄を用いて教員とのコミュニケーションを測ることで、学生のモチベーションを高めるよう工夫している。

2）臨地実習

理学療法学科の臨地実習は、1年次に基礎実習1単位、2年次に検査実習2単位、3年次に評価実習4単位、4年次に総合臨床実習12単位の履修計画がなされている。基礎実習は、早期臨床体験の位置づけとしてキャリアデザインに対する学習成果の獲得、また、検査実習から総合臨床実習は、理学療法における臨床推論能力の向上を教育目標としている。全ての臨地実習において診療参加型（クリニカルクラークシップ）の実習形態をとり、学生、臨地実習指導者、大学教員が綿密な意思疎通を図るよう努めている。平成28年度と29年度は、上記の計画通りに検査実習まで実施できた。平成30年度以降は、評価実習と総合臨床実習が開始となるため、履修計画に沿った適切な学生支援ならびに実習指導を遂行していくことになる。

3）国家試験対策

本学科は完成年度を迎えていないが、国家試験対策も他キャンパスの方法を参考に実施していく予定である。具体的には定期的なCBT（Computer Based Test）の実施による学修理解度の評価を行い、学生への個別面談および指導を行っていく。また、2019年度より他キャンパス合同の国家試験対策を実施し、定期的な模擬試験の実施および成績評価のキャンパス共通化に向けて準備を進めていく。

2．学生支援面

各学年3名の担任教員の配置と学年縦割りで12のアドバイザーグループを構成し、学年間およびアドバイザーグループ間における綿密な学生支援体制を整えている。2019年の完成年度では、第1期生が就職活動の時期を迎えるため、大学のキャリア支援部署と連携しながら履歴書の書き方や面接などの指導をする体制を整えていく予定である。

3．研究面

本学科では、積極的な国内・国外での学会発表および論文の投稿を推奨している。また、研究活動資金の獲得に向け、学内の競争的研究資金への申請はもとより、「科学研究費補助金」をはじめ、学外の多くの競争的研究資金への申請も活発に行っている。研究成果の公表状況は、研究活動の重要さは大学教員である以上、十分な認識があると考えられるが、学術年鑑などの結果からみれば個人差があるのが現状である。しかし、年次を重ねるにつれ、専任教員の充足と共に、論文総数及び

学会発表総数は増加傾向にあり、十分に評価できる。

研究を遂行するための環境として、各教員の研究室の設備は、個人に対して対応しており充実している。教員の研究時間は、担当授業時間数の課題、学内諸業務の内容等も考慮する必要があるが、各教員間で調整することで対応している。研究のために必要な研修機会の確保は、各教員がそれぞれの申し出によって行っている。上記のように教育やその他の公務を考慮して研究機会を見合わせている場合も見られるものの、概ね妥当な機会を得ている状況である。

４．学科内ＦＤ活動

理学療法学科ではFD勉強会を週1回実施している。H28年度（開学初年度）は、教育概念や臨床実習の基礎を構築するために「クリニカルクラークシップによる臨床実習」、「空間概念図を用いた臨床実習ならびに学修指導」「アクティブラーニングとは」、「臨床実習指導の課題」などのテーマで開催した。H29 年度は「ティーチング・ポートフォリオチャートの作成」、「理学療法士／学生のキャリア形成」、「OSCEの紹介とその活用」など、さらに具体的な教育手法の共有を図っている。また一方では、地域病院・施設との相互理解を深めるために、積極的に研修会を開催し、リサーチミーティングの導入なども進めている。

５．社会活動

地域市町村との連携事業として、成田市と共同で介護予防のための体操「なりたいきいき百歳体操」を制作し、普及に向けて地域サポーターの養成や体操DVDの作成を行っている。また印旛郡栄町の住民活動推進課が開催した「栄町まちづくり大学介護学部」では本学教員および学生が介助技術の講義および実技指導を実施した。

本学主催の地域公開講座では、「健康と運動」をテーマに講演および体力測定を実施した。

６．今後の課題

現状の分析および点検評価を踏まえ、現時点では、良好な学科運営が遂行できていると判断できる。今後の課題として、1.教育面、2.学生支援面では、年次進行に伴う適正なカリキュラムの運用、学生数の増加に対応できる学生支援体制の強化が必要である。そのためにも、綿密な教員間の連絡調整、事務局と協働した学生支援体制の構築を行っていく。

3.研究面、4.学科内FD活動においては、競争的研究資金の獲得へ向けた研修会の実施、申請書のピアレビューなどを積極的に実施していくことが必要である。研究成果の公表においても、各教員が高い自覚を持ち対応する環境整備を行っていく。さらに教育の質向上に向けた取り組みや自身の研究成果の教育への展開なども含め、教員個人の研究フィールドの構築と実践環境の整備も必要である。

5.社会活動について、開学2年目ではあるものの、成田市との連携や地域在住の方への情報の提供など、十分な活動が行われている。引き続き、理学療法学科では社会活動を推進できるよう、対応が可能な活動に関する情報の収集と教員間、大学内での情報の共有を進めていく。

(20) 成田保健医療学部　作業療法学科

1．教育面

1）教育内容

本学科は本学4つ目の作業療法学科として平成28（2016）年4月に開設された。本学の基本理念と教育理念に基づきながら、本学科独自の教育目標を学年毎に定めており、最終学年（4年次）の教育目標としては、①1～3年次に修得した態度・行動、知識、技術を臨床実習の場で活用しながら、個々の病院・施設・機関の役割と対象となる人々の必要性に応じた作業療法計画を立案・実施できる、②4年間の学習内容を結び付けて活用しながら、地域社会や国際社会等の社会的文脈の中で作業療法・作業療法士の役割を具体的に位置付けて理解することができる、を挙げている。

カリキュラムでは、特に必修専門科目で先行3キャンパス作業療法学科と統一を図りつつ、同時に、①独自科目の設置、②学年進行の工夫などによって本学科の独自性を追求している。

平成29（2017）年4月時点での在籍者数は、1年生42名、2年生42名である。平成28（2016）年度の退学者は1名であった。

2）臨地実習

本学科の実習は「中核実習施設構想」に基づいて企画・運営されている。これは、大学関連施設や所在する成田市近隣施設などを中心に、実習の考え方・方法論を本学科と共有できる施設を「中核実習施設」とし、実習指導者と学科教員が密にコミュニケーションを取りながら、手を携えて学生の実習指導に当たるものである。現段階までに、平成28（2016）年度は「臨床実習Ⅰ（早期臨床見学）」を4施設、平成29（2017）年度は「臨床実習Ⅰ（早期臨床見学）」を12施設、「臨床実習Ⅱ（早期臨床体験）」を20施設で実施した。また、平成29（2017）年度には初めての臨床教育運営会議を開催し、中核実習施設構想や実習の考え方・方法論について共有と検討を行った。今後、学年進行と共に実習施設が増え、かつ実習指導者とのコミュニケーションが深まることによって、中核実習施設構想の実現に至ることを想定している。

本学科では必修専門科目61単位のうち23単位を臨地実習が占めている。このうち、特色の強いものの一つとして「総合実習Ⅱ（作業療法実践）」が挙げられる。この実習では、学生の自主性・社会性の涵養を目的として、学生自らが実習施設の選択・交渉・決定を行う。平成29（2017）年度後期には既に、平成31（2019）年度前期の「総合実習Ⅱ（作業療法実践）」に向けて、学生自らが教員の助言を受けながら施設の検討を開始している。

3）国家試験対策

本学科ではまだ在学生が卒業年次に達していないため、本格的な国家試験対策は開始されていない。しかし、平成28（2016）年度から既に、先行3キャンパス作業療法学科の国家試験対策担当者らとの間で遠隔会議システムを使った情報交換会を年数回ずつ実施し、本学科教員が国家試験及びその対策の現状を把握する機会を設けている。

また、半年に一度の頻度で基礎医学系科目の全キャンパス共通確認試験を行い、学生の国家試験へ向けた意識づけとその時点での学修状況の自己認識を深める機会として活用している。

2．学生支援面

本学科では学年担任制を取っており、1学年約40名の学生を2名の教員で担当している。各学年で基本的に年2回程度の個別面談を行い、学生の学修状況や生活状況等を把握している。その他、必要に応じて臨時面談の実施や定期面談の設定を行うことで、学生個々の状況に即した対応を取っている。また、状況によっては、学生相談室や大学関連病院の紹介、学生相談室との情報交換、保

護者を含めた面談などの手段を用いて、学科のみならず、学生相談室、学生課、家庭、大学関連病院とも連携した支援を提供している。

３．研究面

平成 28-29（2016-2017）年度の本学科教員による研究業績は、著書 6 編、原著論文 5 編、報告 7 編、学会発表 30 演題であった。科学研究費補助金の獲得は代表 4 件、分担 3 件であり、学内研究費では 13 件が採択された。

また、本学科の教育成果を測る教育研究に平成 28 年度以来学科教員共同で取り組んでいる。

４．学科内ＦＤ活動

年度末に 1 日をかけて学科研修会を開催している。その中では、教育活動、学生支援活動、研究活動、社会活動、国際活動等の振り返りや次年度に向けた検討を行っており、それによって、PDCA サイクルを意識した学科運営を実施している。

平成 28-29（2016-2017）年度は 2 年連続で本学科教員がグッドティーチング賞に選出された。

５．社会活動

専門分野への貢献では、すべての本学科教員が職能団体に所属しているだけでなく、日本作業療法士協会国際部部員、千葉県作業療法士会理事や学術部部員など役割を担う者が多い。

地域貢献では、本学科教員が成田市の保健福祉審議会や総合計画審議会の委員を務めている他、介護予防・日常生活支援総合事業や地域包括支援センターの活動にも協力している。また、他の近隣市町でも公開講座への講師派遣や在宅医療・介護連携推進会議への参加を行った。県レベルでは、理学療法学科・言語聴覚学科と共にちば地域リハ・パートナーを務めている。

６．今後の課題

教育面では、引き続き完成年度へ向けて円滑かつ効果的にカリキュラムを遂行していくことが課題である。特に、科目間の関連性・整合性や講義科目と実習科目の関連性を確認し、担当教員間で共有しながら授業を展開することが必要である。また、臨地実習では中核実習施設構想の実現へ向け、着実に実習施設の数を増やすと共に、臨床教育運営会議や教員による実習施設訪問の機会を通じて実習指導者とコミュニケーションを取り、本学科における実習の考え方や方法論について共有と理解を深めることが必要となる。

教育面でのもう一つ大きな課題として、完成年度後の新カリキュラムの検討に着手し、その具体化を進めることが挙げられる。その際、指定規則改正を視野に入れた検討を行う必要があることは言うまでもない。

また、国家試験対策では今後の本格的取組みへ向け、具体的戦略の検討開始が必要である。

学生支援では、学年進行に伴い、就職・進学・留学等の具体的なキャリア支援が求められる。

研究・社会活動・国際活動では、学年進行に伴って教育業務のボリュームが大きくなる中で、これまで同様の活発さを維持することが課題である。また、特に社会活動・国際活動では、本学科の特色として地域性と国際性を掲げていることを踏まえ、学科教員の地域社会や国際社会での取り組みをどのように学部教育に反映するか、その方法論の具体化も必要である。

最後に、上記のような教育・学生支援・研究・社会活動・国際活動等の課題に対しての学科での取り組みにおいて PDCA サイクルを確立することが学科内 FD 活動の課題と考えられる。

(21) 成田保健医療学部　言語聴覚学科

1．教育面

1）教育内容

成田保健医療学部言語聴覚学科は、高度な専門性と豊かな人間性を持ち、国内外で貢献できる言語聴覚士の養成を目標とし、4つのカリキュラムポリシー、6つのディプロマポリシーを設け、カリキュラムを編成している。カリキュラムは、①総合教育科目：人間、自然、社会、国際等に関する幅広い教養と科学的思考力を養う、②専門基礎科目：人間の言語・コミュニケーション行動を支える生物学的基盤、心理・行動面、医学面、言語構造、音声の物理的側面、情報科学などを学ぶ、③専門科目：各種言語聴覚障害の原因、症状、発生機序、検査・評価・診断、訓練・指導・援助に関する知識や技術および臨床家としての態度を学ぶ、で構成されている。

平成28年4月の開学から2年目に入り、平成30年1月1日現在の在籍者数は、1年43名、2年40名である。この内、2年生1名はベトナムからの留学生である。

2）臨地実習

成田保健医療学部言語聴覚学科は、保健医療学部（大田原キャンパス）および福岡保健医療学部（大川キャンパス）の言語聴覚学科との共通カリキュラムに則り、3・4年次に臨床実習を配置しているため、平成30年1月1日現在、まだ、臨床実習の経験は無い。平成31年度からの臨床実習開始に向け、臨床実習協力施設の確保など、諸準備に取り組んでいるところである。

本学科では、学生が言語聴覚士としてのコミュニケーション技能をスムースに体得できるよう、1年次より、段階的に臨床教育を実施している。1 年次には、コミュニケーション技能演習科目を設け、本科目では、健常な異世代（小児と高齢者）とのコミュニケーション技能を体得するため、近隣の保育園・高齢者施設を訪問し、学修の機会を設けている。2 年次には、コミュニケーション障害演習科目を設け、本科目では、コミュニケーション障害を有する児・者とのコミュニケーション技能を体得することを目的に、学生は近隣の学外臨床機関に1日赴き、指導者の指示の下、コミュニケーション障害児者と会話を実践する機会を設けている。加えて、言語聴覚療法場面を見学し、言語聴覚療法の業務や、言語聴覚士の役割について実際的な理解を深めている。

3）国家試験対策

1 年次より、各期に学習した科目に関連する過去問題を抽出し、夏期休暇および春期休暇に自主学習を課している。休暇明けには確認試験を行い、自主学習の成果を確認するとともに、成績不振者に対しては個別指導を実施している。

2．学生支援面

成田保健医療学部言語聴覚学科では、アドバイザー担当制度を導入しており、1 学年を 5 グループに分割し、各グループに教員2名を配置している。1年次には基礎ゼミナールを週に1回開講し、大学における学習リテラシーの向上を目標とした取り組みを行いながら、学生と教員との密な関係構築に励み、頻回に、履修指導、学習面の支援、生活面の相談を行っている。その他、各グループとも、年間2回程度、学生と教員とが集まる機会を持ち、学生と教員との適度な距離感の確保を行っている。

また、各期の定期試験前には学習支援デイを開催し、定期試験に向けた学習指導を実施している。

３．研究面

成田保健医療学部言語聴覚学科の平成 28（2016）年の研究業績（専任教員 6 名）は、原著論文 1 編、学会発表 11 編であった。研究費の獲得状況として、同年は科学研究費基盤 C1 題であった。

その他、学内研究費として平成 28(2016)年度は一般研究費 2 題、奨励研究費 1 題が採択された。これらの研究結果は翌年度の国際医療福祉大学学会で報告されている。

４．学科内ＦＤ活動

成田保健医療学部言語聴覚学科の FD 活動として、月 1～2 回程度、臨床実習のあり方についての検討や、基礎ゼミナールでの読み書きリテラシー向上のための課題内容について情報交換及び議論を実施した。

５．国際性

成田保健医療学部言語聴覚学科では、教員の国際性向上に向け、平成 28（2016）年度は週 1 回の英語による文献抄読会を行い、英語コミュニケーション能力の向上に取り組んだ。平成 29（2017）年度は、学科長が大会長となった第 10 回アジア・環太平洋音声言語聴覚学会学術大会（APCSLH 2017）の運営に学科全体で関わった。同大会は 9 月 17～19 日の 3 日間にわたり、17 カ国より 474 名が参加し、基調講演等の特別プログラムの他、計 255 演題の研究発表を中心に活発な議論が展開された。また、学生もボランティアとして参加し、各国からの参加者と英語を用いたコミュニケーションを行う、貴重な機会となった。

６．その他

＜本学関連施設の臨床支援＞

成田保健医療学部言語聴覚学科では、南関東地区の本学関連施設からの依頼の下、学科教員が定期的に本学関連施設を往訪し、言語聴覚士の臨床指導等を行っている。この活動を通し、関連施設言語聴覚士の資質向上を支援するとともに、臨床実習における学生教育に関する情報交換を行い、将来の本学科の臨床実習計画立案の一助としている。平成 28（2016）年度（専任教員 6 名）は、教員 1 名が国際医療福祉大学三田病院に月 1 回、教員 1 名が国際医療福祉大学熱海病院に月 1 回、教員 1 名が国際医療福祉大学市川病院（旧　化学療法研究所付属病院）に月 2 回、教員 1 名が山王病院に月 3 回赴いた。平成 29（2017）年度（専任教員 11 名）は、教員 2 名が国際医療福祉大学三田病院に月 1 回ずつ、教員 4 名が国際医療福祉大学熱海病院に隔月 1 回ずつ、教員 3 名が国際医療福祉大学市川病院（旧　化学療法研究所付属病院）に月 2 回ずつ、教員 1 名が山王病院に月 3 回赴いた。

＜オープンキャンパスにおける大田原本校卒業生の招聘＞

成田保健医療学部言語聴覚学科では、オープンキャンパスの際、広報担当部門の理解と協力の下、大田原本校卒業生で千葉近郊にて言語聴覚士として勤務している卒業生を招聘し、オープンキャンパスの手伝いを依頼している。卒業生の参加により、言語聴覚士の業務と本学の特徴について、高校生にとっては具体的なイメージを持つことが可能となっている。

＜職能団体への参加＞

成田保健医療学部言語聴覚学科は言語聴覚士の職能団体である日本言語聴覚士協会ならびに千葉県言語聴覚士会の活動に積極的に参加している。平成 30 年 1 月 1 日現在、本学科から日本言語聴覚士協会には常任理事 1 名、学術誌編集委員 2 名、千葉県言語聴覚士会には代表理事（会長）1 名、理事 1 名を輩出している。

7．今後の課題

・臨床実習の実施に向け、実習協力施設確保と連携体制構築を行い、実習の質の向上を図る。
・言語聴覚士国家試験の合格に向けた支援体制を構築する。
・外部研究費の獲得を含め、教員の研究活動の促進を図る。
・学生募集活動を強化し、質の高い学生を獲得する。
・教育技法などの質の向上を図る。

(22) 成田保健医療学部　医学検査学科

1. 教育面

1)教育内容

2016 年度開校に際して文部科学省にカリキャラムを提出した。カリキュラムの主な内容は指定規則に沿った科目構成とし、総合教育、専門教育には基礎専門（学部共通）と基礎専門（医学検査学科）、専門科目のカリキュラムとし、卒業要件単位数を 124 単位以上とした。

2)臨地実習

臨地実習は 4 年次に実施する予定で、千葉県下を中心に 25 の医療施設で 45 単位を実施する予定である。3 年次学生を対象に臨地実習の希望先などの調査を行う予定である。

3)国家試験対策

2 年次からの専門科目の授業から国家試験を考慮した試験を実施して、学生の国家試験取得の意識付けを行っている。4 年次には特別講義を行い、国家試験の模擬テストなどを中心に集中的な国家試験対策を実施する。

2. 学生支援面

各年次には担任 2 名を配置し、勉学や生活などの相談を定期的に行っている。またメンタル面や修学での相談は逐次、担任が対応している。特に成績不良学生には個人面接を行い、修学へのアドバイスを行っている。

3. 研究面

本学科 12 名の研究業績は、2016 年度は著書 2 編、原著 13 編、総論 1 編、学会発表 32 演題（うち国際学会 14 演題、シンポジスト 3 演題）、2017 年度は著書 9 編、原著 7 編、報告 1 編、技術 1 編、学会発表 45 演題（うち国際学会 9 演題、シンポジスト 7 演題）であった。

研究費の獲得状況は、2016 年度は科学研究費助成事業（文部科学省）基盤（C）2 題、公益財団法人黒住医学研究振興財団研究助成金 1 題、厚生労働行政推進調査事業費補助金特別指定 1 題、株式会社リージャー受託研究費 1 題、2017 年度は科学研究費助成事業（文部科学省）若手（B）1 題、吉川市研究助成金 1 題、株式会社リージャー受託研究費 1 題であった。その他、学内研究費として 2016 年度は、一般研究費 5 題、奨励研究費 1 題、2017 年度は、一般研究費 7 題、奨励研究費 1 題が採択された。

4. 学科内ＦＤ活動

教員からの一方向授業ではなく学生との相互方向授業実施に向けて、ICT を活用した教育の導入を視野に入れ、隔週で行っている学科会議内にて意見交換を行っている。これに関連して、授業運営や評価方法に関して討論し、学生の資質向上に向けて検討している。また適宜、検査機器説明会、各教員の研究内容紹介を実施し、教育・研究の資質向上に向けて意見交換を図っている。

2016 年度は、臨床心理士を招聘し、学生対応、学生情報の共有、プライベートへの対応に関して座談会を開催し、学生に対する教員の対応姿勢に関して討論を行った。以後、精神不安定な学生、学力低下傾向のある学生の情報共有、意見交換を行っている。

5. 国際性

2016、2017 年共にカンボジア国プシサストラ大学・国立保健科学大学から臨床検査技師を目指す大学生（28 年 11 名、29 年 11 名）のスタディーツアーを学科で受け入れている。本プログラムでは学科教員が講義および実習を行い、日本の最先端臨床検査を体験してもらいカンボジア側から高評

価を受けている。また、本事業は、本科1年生の国際保健学講義内にプログラムを組んでいる。このカリキュラムでは、両国学生同士で臨床検査に関する様々なディスカッションを行うために、日本人学生は事前学習を行い日本国内で得られる情報と実際に諸外国の方からインタビューした内容の相違や類似点を考察し、相互理解を深く進めることが出来ていると共に「国際保健学」を体験から理解する機会となっている。この学習は、2年次に行われる海外保健福祉事情実習の基礎となる。

6. その他

＜公開学習会の開催＞

2017年度　1月17日

テーマ：「健康を支えるために今からできることを臨床検査のエキスパートが伝えます」

講師：大澤 進、長沢 光章

2016 年度は 「健康を支えるために今からできることを臨床検査のエキスパートが伝えます」と題し、自宅で可能な臨床検査法の紹介、および、感染予防対策について講演するとともに、 講演後に血色素量および血圧・血管年齢などの健康チェックを実施し、68名の参加者を得た。

2018年度　1月10日

テーマ：「がん検診と臨床検査」「遺伝子検査でわかること」

講師：山口 良孝、池田 勝秀

2017年度は 「がん検診と臨床検査」「遺伝子検査でわかること」 と題し、それぞれ臨床検査の先端技術について講演するとともに、講演後に血色素量および血圧・血管年齢などの健康チェックを実施し、45名の参加者を得た。

＜高大連携＞

2018 年度は医学検査学科の教員が成田国際高校への出張講義（生物学、化学）を予定しており、高校生が医学や臨床検査への関心を持つことで、国民健康への貢献に寄与できる高校生の育成を行う。

7. 今後の課題

1) 教員の充実；開校して2年目であり、学年進行中であるため2017年度現在の教員数は12名で、大川キャンパスの16名と比較して4名不足している。2018年度には実習科目がすべて行われるため16名体制を確立する。
2) 実習機器の整備；学年進行中であるが、2018 年度には実習科目もすべて行われるため、当初の機器設備を整える必要がある。生理検査関連では、心電計、脳波計、心電図・誘発電位検査装置、超音波装置、眼振電図計測装置、重心動揺計測装置など、また大型機器では共焦点レーザー顕微鏡、オールインワン蛍光顕微鏡や高速液体クロマトグラフ質量分析装置、血液像自動分類装置などが未整備である。
3) 臨地実習への対応；2019 年度には学生の臨地実習が予定されているため、臨地実習施設の学生への紹介と学生の実習希望との調整、臨地実習前の患者との接遇教育の実施などを行い、円滑に臨地実習が行える体制を整える。
4) 国家試験対策；4年生を対象に特別講義として国家試験に対応した教育や模擬試験を行い、国家試験に合格できる能力を身に付けるように対策を行う。

（23）留学生別科

留学生別科（大田原キャンパス）

１．設立目的と時期

大田原キャンパス留学生別科は、本学の学部または大学院を中心に、国内の大学・大学院進学を希望する外国人留学生に対して、必要な日本語等の予備教育を行うことを目的として２０１５年４月、本学キャンパス大学院棟に設置された。同年１０月に留学生１４名を迎え、初級コースが開講されている。

２．別科の特徴

学年は２期に分かれ春学期は４月１日から９月３０日まで、秋学期は１０月１日から翌年の３月３１日までとなっている。標準修業年限は１年であるが、最長２年間在籍することができる。１コース１６単位となっており、修了するためには１年以上在籍し、合計３２単位を取得する必要がある。つまり、２コースの単位認定が必要となっている。
クラスは担任制を取っており、専任の先生が一人ひとりの修得状況を把握し、学生へのフィードバックを行いながら、日本語能力試験（ＪＬＰＴ）や日本留学試験（ＥＪＵ）対応など、きめ細かな学習指導を行っている。また、留学生との面談を通し、入学試験対策、面接試験対策などの個別進路指導も実施している。

３．施設の紹介

授業を受ける教室は３室用意しており、３コース同時開講ができるようになっている。この他に大型モニターやプロジェクターが設置された４０人規模の収容能力を持つ多目的教室があり、ＰＣを利用した講義、プレゼンテーションや、本学見学者への日本語体験授業・日本文化事情を教授する場として利用されている。寮については、スーパーマーケットが近くにあり、バス停からも近いなど立地条件の良い民間アパートを借り上げ、留学生が２人部屋、１人部屋として利用できるようにしている。

４．留学生の推移

	2015/秋	2016/春	2016/秋	2017/春	2017/秋
入学者数	14名	2名	4名	5名	2名
在籍者数	14名	14名	6名	8名	8名

開講時の 2015 年度秋学期は、14 名の入学生数であったが、その後の入学者数は１桁台で推移。現在まで累計で２７名の入学実績となっている。また、国籍は、フィリピン、タイ、中国、台湾、ベトナム、ウガンダ、ネパール、中国（香港）と、国際色豊かなものになっている。

５．過去取り組んできた活動・内容・成果

２０１７年４月に初めて留学生別科の修了生２名が本学学部に進学となった。２０１７年度３月に別科を終える留学別科生６名の内、５名は、本学学部への進学者含め、大学・大学院・専門学校への進学者であり、充実した日本語授業、進路指導等の成果が表れてきている。
学部授業である「医療技術通訳」には留学生別科生もロールプレー役で参加し、国際親善交流パーティーや秋のバスツアーに参加するなど、積極的に学部生との交流、相互理解に努めてきた。また、“大田原産業文化祭”　“ホームステイウィークエンド in 那珂川”などの地域行事にも毎年参加し、地域の方たちとの国際交流にも広く関わってきた。

６．今後の取り組み・課題

（1）留学生募集に当たっては、現地の日本語学校等のエージェントと提携することはしていない。従って、本学別科の認知度を上げるためにも海外に向けた発信力を高めていく必要がある。
（2）学生自ら発信する留学生別科生ライフが充実したものになるよう、更なる学生の満足度向上に向け、専任教員、非常勤講師、職員合わせて連携を強めていく。
（3）1年間以上在籍し、2コース・32単位取得することが修了条件となっているため、本プログラムにマッチングした日本語能力のある留学生の確保を行っていく必要がある。

留学生別科（成田キャンパス）

1. 設立目的と時期

成田キャンパスでは平成29年4月に医学部が開設された。医学部では140人の入学定員のうち20人はアジアを中心に留学生を受け入れ、日本語能力が十分でない場合は入学が決まった段階で早めに来日させ、別科の受講を推奨することが、設置認可申請時に文部科学省に提出した「医学部設置の趣旨等を記載した書類」にも明記されている。このため、医学部の設置が平成28年8月末に認可されたのを受けて成田キャンパスに留学生別科を平成28年10月に開設した。

2. 別科の特徴

上記の設立目的から、成田キャンパスの留学生別科は「医学部準備コース」であることが最大の特徴である。医学部では留学生にも日本人学生と全く同じカリキュラムで医学教育を行っている。1年次に始まる総合教育科目は日本語での授業が多い上、3年次には専門科目の授業を日本語で行う。3年次末には共用試験（CBT・OSCE）を受検し、4年次からの臨床実習などを経て最終的に医師国家試験の合格を目指す。こうしたカリキュラムの中で留学生には徹底的な日本語教育をする必要があり、特に入学までに日本語を学ぶ機会が少なかった留学生には別科での集中的な日本語学習がきわめて重要である。
成田キャンパスの留学生別科は原則として毎年10月に開講している。日本語力のレベルに合わせた少人数のクラスを編成し、学生は90分授業を1日4コマのペースで受講する。母国で理数系の学習が十分でない場合や英語力を補強する必要がある学生には、医学部教員などが日本語以外の補習授業を行っている。日本語をはじめとする学力や日本での生活への適応に問題がなければ3月に医学部入学が決定する。

3. 施設の紹介

早期に来日して留学生別科に入学する学生は、成田キャンパスから約4km離れた所にある学生寮「成田インターナショナルハウス」に入寮する。朝・晩の食事やwifiを完備した個室による勉強しやすい環境を提供しているほか、登下校のために大学のマイクロバスを運行している。学生寮では日本人の医学部学生も生活し、日々の交流は互いの語学力向上にもプラスになっている。
また、医学部開設と同時に3階に設置された国際交流センター及び語学教育センターは、約280㎡のスペースに留学生支援のスタッフ及び日本語教員が業務にあたっており、学部に所属していない別科生が頻繁に訪れる施設となっている。国際交流センターの一部は国際交流スペースとなっており、月2回のランチ会（2017年度は14回開催）をはじめ様々な国際交流イベントを提供するほか、地域の国際交流団体と留学生を結びつけるとともに、個別に相談したい学生が利用できるカウンセリングルームを4部屋併設している。

4. 留学生の推移

年度	別科在籍者	医学部進学者
2016年度	14名	13名
2017年度	19名	16名

2016 年度には秋以降 14 名が成田キャンパスの留学生別科に入学し、13 名が 2017 年 4 月に医学部に進学した。2017 年度は、2 名が 4 月から 1 年間のコースに在籍したほか、秋以降 17 名が別科に入学し、これらの学生のうち 16 名が 2018 年 4 月に医学部に進学することになった。

5. 過去取り組んできた活動・内容・成果

成田キャンパスの留学生別科は 2016 年 10 月に開設して以来、アジア各国の提携大学から推薦され、
現地における本学の入試を経て選抜された奨学生を受け入れている。これまで入学した留学生の国籍は、ベトナム・ミャンマー・モンゴル・カンボジア・インドネシア・ラオスである。学生の多くは日本語の学習歴がほとんどないまま来日し、別科での集中的な日本語教育を受けて 3 か月から半年の短期間で日本語能力を向上させるとともに、理数系の科目などについても補習を受けて医学部進学に備えている。別科の 1 期生は医学部進学後も優秀な成績を修めており、別科での日本語教育などの顕著な成果が表れている。

6. 今後の取り組み・課題

成田キャンパスの留学生別科は、今後も医学部進学のための日本語を中心とした準備教育という目的を実現するため、以下の課題に取り組んでいきたい。

1）各国の入試スケジュールや来日の準備等の事情により、別科への入学時期がこれまでは秋から 1 月にかけてまちまちであったが、今後はできるかぎり 10 月にそろえて一斉に日本語の学習を始めることが望ましい。10 月に入学できない場合も想定しながら短期間の在籍で日本語能力などを向上させるための効果的な教育プログラムを作成する必要がある。

2）成田キャンパスの留学生別科では、医学部在籍者を含む日本語の専任教員と非常勤講師合わせて 10 数人が教育に当たっている。医学部準備コースとしての特性から、今後は医学部の医学教育統括センターとの連携を一層強め、別科の運営の責任体制もより明確にしていく。

3）留学生の健康状態のチェックに来日前から万全を期すと共に、来日後の心身の健康のためのサポート体制を一層強化していきたい。

4）留学生を含め、本学学生に対する成田市など地域の期待は大きく、国際交流やさまざまな活動を通じた地域貢献を、学習に支障のない範囲で推進していきたい。

Ⅵ. 大学院各専攻各分野の自己点検・評価と今後の課題

（1） 保健医療学専攻　特定行為看護師養成分野　修士課程

１．教育面

院生４１名の座学、演習、実習および論文指導を行った。

２．研究面

栗田が日本医学教育学会、五十嵐が日本NP学会で、それぞれシミュレーション教育についての研究発表を行った。今後もシミュレーション教育手法について研究を積み重ねていく。

３．社会活動（生涯教育等）

看護系雑誌社主催の循環器系セミナーを計１４回開催し、看護師特定行為の啓蒙と本分野の勧誘を行い、例年数名ずつ入学に至っている。

４．今後の課題

勧誘の成果により院生数の増加となったが、過去最高の４２名の大所帯となるため、教育の質を落とさないようにすることが重要。

（2） 保健医療学専攻　助産学分野　修士課程・博士課程

1．教育面

助産専門職育成の目標のもと、診断能力を身につけるための助産診断の教授内容の改善および実践力育成のために厚労省規定は10例程であるが15~20例の分娩介助を目標とした実習の実施。前記実習内容の改善に伴い実習要項の全面的改訂と毎年度の修正と評価を行う。

NCPR(新生児蘇生)Aコースの資格取得の授業は、大学病院で臨床の環境の中で実施。

大学周辺地域理解のために助産所実習施設の拡充を図った。

コンサルテーション論の授業の導入や各専門分野で活動している当大学院修了者による授業の企画および当事者の声を聴き対象理解を促す試みの実施。

海外演習では単に見学だけではなく、母乳育児ケアなど日本の助産師が持つ技術を提供する演習を企画・実施した。また、発展途上国ではあまり行われていない思春期教育を院生がカンボジアの地方の小学生対象に実施できるよう企画し実施した。

また、福岡キャンパスとの遠隔授業を多く取り入れ、資源の有効活用と交流に繋げている。

以上、教授内容の改善、実践重視の演習・実習の展開、資源の活用等への取り組みをしている。

2．研究面

・学内研究費獲得および国福大学学会発表
・科学研究費申請
・母性衛生学会共同発表、年数件

助産学分野は他の大学院分野と異なり、国家資格受験要件の単位数が多く2年間で59単位を教育しなければならない。そのうち29単位を助産関連の授業および実習に費やす。また教員数に比較し院生数が文科省調査の実態よりも多く在学する。おのずと研究に要する割合が少ない状況である。

3．社会活動（生涯教育等）

・全国助産師教育協議会に属し、助産師教育向上のための協議会へ組織および個人として参加し当分野教育へ還元。
・新生児蘇生「専門」認定者として講習会アシスタント参加。
・ALSOプロバイダーコース認定者としてアシスタント参加。

4．今後の課題

教育面では、現在の実践重視の教育内容をさらに促進させる。改善後3年の時点で評価し、今後の方向を見出す。その延長上には10年間の教育評価とカリキュラムの改善が今後の課題としてある。

研究面では、各教員の持つ研究テーマに沿って継続的な研究が遂行できるよう、時間の使い方を計画的にし、研究費の獲得と効果的活用を模索していく必要がある。

社会貢献では、これまで大学周辺との関わりが少なかった。学会や専門職団体に所属し、一構成員としての役割を果たしてきたが、更に責任ある役割が担えるような活動が必要と考える。

（3） 保健医療学専攻　理学療法学分野　修士課程

1．教育面

学生数：平成 11 年より平成 28 年度までの修士入学者 588 名、修了者（修士学位取得者）569 名であった。平成 27 年は 30 名、平成 28 年は 41 名、平成 29 年は 42 名であり、年平均 30-40 名の院生が入学してきた。平成 27 年以後の退学者は 2 名であった。また、最近の 3 年間で入学してきた留学生は 10 名であり、そのほとんどが中国からである。

教育面：教員は各キャンパスの学科教員がほとんど兼務して院生の指導に当たっている。大学院常勤の教員は東京青山キャンパスの２名のみである。理学療法学分野では教員相互に協力し合って、主および副研究指導教員の他にも自由に指導を実施している状況である。

カリキュラムは、基礎理学療法学（動作分析、評価）、応用理学療法学（治療、教育、国際交流）に関した授業と VOD による科目がある。

2．研究面

院生の実験系研究は、各職場で実施または、学科があるキャンパスで実施している。研究内容は動作分析、画像分析、呼吸循環、体力などの評価診断に関する研究、治療技術の効果、理学療法教育関係の研究が主である。

教員の研究発表などに関しては各キャンパスの学科教員を参照

3．社会活動（生涯教育等）

乃木坂スクールとして毎年、後期に医療福祉職に対して公開授業を行っている。平成 27 年度はリハビリ職のための医療福祉管理、平成 28 年度はスポーツを支援する理学療法士の役割、平成 29 年度はがん理学療法に関して、それぞれ 7 回実施した。

大学院修了者に対して、講演会を年 1 回開催して、特別講演 2 演題、博士取得者による研究発表会を実施した。

4．今後の課題

今後の課題は、研究内容を充実させ、学術大会の発表、論文投稿などができるように指導することである。また、留学生に対する日本語教育も含めて学習支援の充実、同窓会活動の充実などの課題がある。

（3） 保健医療学専攻　理学療法学分野　博士課程

1．教育面

学生数：平成 13 年より平成 27 年度までの博士入学者 145 名、博士学位取得者 99 名であった。その中で留学生は 11 名であり、8 名が博士学位を取得した。平成 28 年は 9 名、平成 29 年は 16 名が入学し、170 名の入学者であった。留学生はほとんどが中国からであったが、韓国、フィリピン、ミャンマーも数名いた。

教育面：教員は各キャンパスの学科教員がほとんど兼務して院生の指導に当たっている。大学院常勤の教員は東京青山キャンパスの２名のみである。理学療法学分野では教員相互に協力し合って、主および副研究指導教員の他にも自由に指導を実施している状況である。

博士過程は研究が中心で行なわれていることから、個別指導が多く行なわれている。また、各キャンパスで、毎週ゼミを開催して、研究発表などを行なっている。

２．研究面

院生の研究は、各職場で実施または、学科があるキャンパスで実施している。研究内容は動作分析、画像分析、呼吸循環、体力などの評価診断に関する研究、治療技術の効果、理学療法教育関係の研究が主である。なお、院生の研究発表として学術大会、国際学会での発表、論文当校を積極的に薦めている。

教員の研究発表などに関しては各キャンパスの学科教員を参照

３．社会活動（生涯教育等）

乃木坂スクールとして毎年、後期に医療福祉職に対して公開授業を行っている。平成 27 年度はリハビリ職のための医療福祉管理、平成 28 年度はスポーツを支援する理学療法士の役割、平成 29 年度はがん理学療法に関して、それぞれ 7 回実施した。

大学院修了者に対して、講演会を年 1 回開催して、特別講演 2 演題、博士取得者による研究発表会を実施した。

４．今後の課題

今後の課題は、課程修了の博士取得率を向上することと、研究内容の充実、多くの学術大会の発表、論文投稿の推進である。

（3） 保健医療学専攻　理学療法学分野　博士課程

1．教育面

学生数：平成13年より平成27年度までの博士入学者145名、博士学位取得者99名であった。その中で留学生は11名であり、8名が博士学位を取得した。平成28年は9名、平成29年は16名が入学し、170 名の入学者であった。留学生はほとんどが中国からであったが、韓国、フィリピン、ミャンマーも数名いた。

教育面：教員は各キャンパスの学科教員がほとんど兼務して院生の指導に当たっている。大学院常勤の教員は東京青山キャンパスの２名のみである。理学療法学分野では教員相互に協力し合って、主および副研究指導教員の他にも自由に指導を実施している状況である。

博士過程は研究が中心で行なわれていることから、個別指導が多く行なわれている。また、各キャンパスで、毎週ゼミを開催して、研究発表などを行なっている。

2．研究面

院生の研究は、各職場で実施または、学科があるキャンパスで実施している。研究内容は動作分析、画像分析、呼吸循環、体力などの評価診断に関する研究、治療技術の効果、理学療法教育関係の研究が主である。なお、院生の研究発表として学術大会、国際学会での発表、論文当校を積極的に薦めている。

教員の研究発表などに関しては各キャンパスの学科教員を参照

3．社会活動（生涯教育等）

乃木坂スクールとして毎年、後期に医療福祉職に対して公開授業を行っている。平成27年度はリハビリ職のための医療福祉管理、平成28年度はスポーツを支援する理学療法士の役割、平成29年度はがん理学療法に関して、それぞれ7回実施した。

大学院修了者に対して、講演会を年1回開催して、特別講演2演題、博士取得者による研究発表会を実施した。

4．今後の課題

今後の課題は、課程修了の博士取得率を向上することと、研究内容の充実、多くの学術大会の発表、論文投稿の推進である。

（4） 保健医療学専攻　作業療法学分野　修士課程

1．教育面

学生数：平成27年の入学者は9名、平成28年は15名、平成29年は7名であり、退学者は出ていない。また、最近の3年間で入学してきた留学生は3名であり、いずれも作業療法士制度が整っていないミャンマー（2名）とベトナム（1名）からの理学療法士であり、母国に戻り作業療法の普及に努める。

教育面：教員は各キャンパスの学科教員がほとんど兼務して院生の指導に当たっている。大学院常勤の教員は東京青山キャンパスの特任教授1名のみである。作業療法学分野では教員相互に協力し合って、主および副研究指導教員の他にも自由に指導を実施している状況である。年に複数回研究進捗報告会を行い、教員・院生の垣根を超えた議論を行っている。

カリキュラムは、作業活動支援学、作業活動分析学、精神神経障害作業療法学に関した科目がある。

2．研究面

院生の研究は、各職場で実施または、学科があるキャンパスで実施している。研究内容は院生の興味のある内容を行い、量的研究から質的研究と幅広い。

教員の研究発表などに関しては各キャンパスの学科教員を参照

3．社会活動（生涯教育等）

乃木坂スクールとして、平成27年度後期「医療・福祉現場で役立つ音楽活用術Ⅱ」、平成28年度後期「医療・福祉現場で役立つ音楽活用術Ⅲ」を実施した。

4．今後の課題

今後の課題は、研究内容を充実させ、学術大会の発表、論文投稿などができるように指導することである。また、留学生に対する日本語教育も含めて学習支援の充実、同窓会活動の充実などの課題がある。

（4） 保健医療学専攻　作業療法学分野　博士課程

1．教育面

学生数：平成27年の入学者は4名、平成28年は9名、平成29年は3名であった。中国、韓国からの留学生も入学した。

教育面：教員は各キャンパスの学科教員がほとんど兼務して院生の指導に当たっている。大学院常勤の教員は東京青山キャンパスの特任教授1名のみである。作業療法学分野では教員相互に協力し合って、主および副研究指導教員の他にも自由に指導を実施している状況である。年に複数回研究進捗報告会を行い、教員・院生の垣根を超えた議論を行っている。

カリキュラムは、作業活動支援学、作業活動分析学、精神神経障害作業療法学に関した科目がある。博士課程は研究が中心で行なわれていることから、個別指導が多く行なわれている。

2．研究面

院生の研究は、各職場で実施または、学科があるキャンパスで実施している。研究内容は院生の

興味のある内容を行い、量的研究から質的研究と幅広い。なお、院生の研究発表として学術大会、国際学会での発表、論文当校を積極的に薦めている。

教員の研究発表などに関しては各キャンパスの学科教員を参照

3．社会活動（生涯教育等）

乃木坂スクールとして、平成27年度後期「医療・福祉現場で役立つ音楽活用術Ⅱ」、平成28年度後期「医療・福祉現場で役立つ音楽活用術Ⅲ」を実施した。

4．今後の課題

今後の課題は、課程修了の博士取得率を向上することと、研究内容の充実、多くの学術大会の発表、論文投稿の推進である。

（4） 保健医療学専攻　作業療法学分野　博士課程

1．教育面

学生数：平成27年の入学者は4名、平成28年は9名、平成29年は3名であった。中国、韓国からの留学生も入学した。

教育面：教員は各キャンパスの学科教員がほとんど兼務して院生の指導に当たっている。大学院常勤の教員は東京青山キャンパスの特任教授1名のみである。作業療法学分野では教員相互に協力し合って、主および副研究指導教員の他にも自由に指導を実施している状況である。年に複数回研究進捗報告会を行い、教員・院生の垣根を超えた議論を行っている。

カリキュラムは、作業活動支援学、作業活動分析学、精神神経障害作業療法学に関した科目がある。博士課程は研究が中心で行なわれていることから、個別指導が多く行なわれている。

2．研究面

院生の研究は、各職場で実施または、学科があるキャンパスで実施している。研究内容は院生の興味のある内容を行い、量的研究から質的研究と幅広い。なお、院生の研究発表として学術大会、国際学会での発表、論文当校を積極的に薦めている。

教員の研究発表などに関しては各キャンパスの学科教員を参照

3．社会活動（生涯教育等）

乃木坂スクールとして、平成27年度後期「医療・福祉現場で役立つ音楽活用術Ⅱ」、平成28年度後期「医療・福祉現場で役立つ音楽活用術Ⅲ」を実施した。

4．今後の課題

今後の課題は、課程修了の博士取得率を向上することと、研究内容の充実、多くの学術大会の発表、論文投稿の推進である。

（5） 保健医療学専攻　言語聴覚分野　修士課程・博士課程

1．教育面

本分野は、2015 年度～2017 年度の間に修士 26 名、博士 8 名の学生が学位を取得した。学位を取得した 34 名中 33 名が病院、施設、養成校などに勤務する言語聴覚士であり、日中は職務に従事し、夜間に大学院で学んでいる。また学生の 9 割は 20 歳～30 歳代である。学修に対する主なニーズは研究技術の修得と学位取得および言語聴覚臨床に関する最新の知識・技術の修得であり、このようなニーズに応えるべく下記の通り授業を多角的に展開している。

研究技術の修得：2015 年度より、「言語聴覚研究法」および「言語聴覚臨床英語」の科目を新設し、言語聴覚研究を実践する上で必要な研究技法の修得と、英語文献を批判的に読む技能の修得を図っている。「言語聴覚障害学講義・演習」においては、研究計画の立案、データ収集と分析、論証、研究報告の仕方について理論を解説し、演習で各学生がその理論を自分の研究に適用することを行っている。博士課程については、月 1 回の研究ゼミを領域横断的に実施している。このような教育の成果として、学位研究を学会誌に投稿し「優秀論文賞」を取得した学生が複数名存在する。具体的には、2016 年 11 月に日本高次脳機能障害学会の「長谷川賞（優秀論文賞）」、2015 年 6 月に日本言語聴覚学会の「優秀論文賞」を本分野修了生が受賞した。

最新の臨床知識・技術の修得：幅広い視野から言語聴覚臨床に関する最新の知識・技術を提供するため、専門領域を異にする教員が授業を担当している。また臨床事例の検討を中心とした発表・討議を毎回の授業で実施し、修得した臨床知識・技能を臨床にいかに活用するかについて実践的に学修している。

2．研究面

本分野には 10 名の教授、2 名の准教授、1 名の講師が在籍しており、各教員は専門領域の課題について、科学研究費や学内研究費等を取得し研究を実施している。主なテーマは、「失語症の統語障害の病態と訓練法」、「左視空間無視の病態とリハビリテーション」、「神経変性疾患の高次脳機能障害の病態と支援法」、「自閉症スペクトラム障害の社会的認知」、「聴覚情報処理障害の多角的評価」、「嚥下障害の病態とリハビリテーション」「吃音の生起要因」などである。また教授 3 名が (社) 日本言語聴覚士協会の言語聴覚士教育モデル・コア・カリキュラムの作成（科学研究費）に参加している。

3．社会活動（生涯教育等）

（社）日本言語聴覚士協会の生涯学習において、本分野の教授 4 名は中枢的役割を担い講義を担当している。また大部分の教員が言語聴覚士県士会において生涯学習の講演を担当している。地域活動としては、栃木県、福岡県、千葉県、島根県において乳幼児健診や発達障害児教育支援事業などに参加し、言語聴覚障害に対する社会的啓発および指導・支援を行っている。

4．今後の課題

学位論文の質の向上を目指すには、指導教員による個別的指導の他に、領域横断的ゼミナールの充実など集団指導体制を強化することが重要である。教員の研究については、科学研究費の取得率の向上と共に、研究のための時間確保や実験設備・機器の整備を図る必要がある。

社会的活動については、（社）日本言語聴覚士協会の初代会長・現会長は本分野の教授であるが、若手教員の職能活動への貢献度を高めることが必要である

（6） 保健医療学専攻　視機能療法学分野　修士課程・博士課程

1．教育面

修士・博士課程兼担教員は教授４名：新井田孝裕（分野責任者・眼科医）、原直人（眼科医）、藤山由紀子（視能訓練士）、高野雅彦（熱海病院・眼科医）、准教授２名：内山仁志・伊藤美沙絵（視能訓練士）、修士課程の講義・演習担当教員は講師２名：望月浩志・四之宮佑馬（視能訓練士）、非常勤は向野和雄（神奈川歯科大・眼科医）、早川友恵（帝京大学心理）、佐伯めぐみ（慶應義塾大学・視能訓練士）である。H29 年度末で准教授２名、講師１名が退職するが、新任教員として准教授で着任される内川義和・岡野真弓先生（視能訓練士）の科目担当審査は既に承認されており、講師は学内昇格人事で補う予定である。分野に入学する院生の大多数は視能訓練士であり、外部の病院に勤務する社会人と視機能療法学科の教員で学位の取得を目指す場合が多い。社会人が多いため、基礎知識を養い、最新の知見を得るため研究に関連する英語論文の精読指導に力を注いでおり、半期ごとに全文和訳のレポート課題を課している。指導教員と副指導教員に加え、分野の教員全体で情報を共有して予演会等で指導する体制になっており、指導に偏りがないように配慮している。

2．研究面

研究テーマは教員の専門分野である視能（眼科）検査領域、神経眼科領域（瞳孔・調節を含む自律神経系、眼球運動）、視能矯正（弱視・斜視関連）領域であり、修士・博士論文作成と並行して、あるいは修了後に極力外部雑誌への投稿を行っており、下記（一部抜粋）のように大部分が原著になっている。【修士課程】1）太田陸、原直人、古川珠紀、他：ゲーム機器が近見反応に与える影響の検討．眼臨紀 10(1)：28-31，2017．　2）野上豪志、佐藤 司、伊藤美沙絵、新井田孝裕：ソフトコンタクトレンズ装用中止後の角膜形状変化．日視協誌 46:217-223，2017．　3）．吉田美穂、新井田孝裕、藤山由紀子、他：遠視性不同視弱視における方向変換ミラーを用いた両眼開放視力と単眼遮閉視力の比較．眼臨紀 11(1)：55-60，2018．　4）．鎌田泰彰、原直人、小野里規子、佐藤司、向野和雄、新井田孝裕：光干渉断層計による網膜・脈絡膜の病態生理の検討　～健常者とパーキンソン病の比較～．自律神経 55(2)，2018 印刷中．【博士課程】1）小町祐子、新井田孝裕：重度脳性麻痺児（者）における視機能評価方法．特殊教育学研究 55(3)：123-132，2017．　2）鈴木賢治，新井田孝裕，原 直人，藤山由紀子：アイトラッカーを用いた視運動性眼振の緩徐相速度の評価．臨眼 71(9)：1407-1413，2017．3）鈴木賢治，新井田孝裕，原 直人，藤山由紀子：アイトラッカーを用いた無指示時の視運動性眼振の分類．眼臨紀 11(3)：220-225，2018．

3．社会活動（生涯教育等）

分野として積極的な社会活動は行っていないが、日本視能訓練士協会主催の生涯教育プログラムの新人教育で「視覚生理学―ヒトの視覚特性・両眼視」を、専門教育プログラムで「研究の進め方と医学論文の作成」の講師を分野責任者が毎年担当しており、分野の大学院生の最先端の研究を紹介するとともに、大学院における学びの意義の啓発に努めている。

4．今後の課題

学科所属の教員を除いて学部卒業生の大学院への進学者が少なく、附属病院に在籍する卒業生で大学院に進学したのは分野開設以来１名のみである。定期的に英語論文の抄読会を開催し、学会での症例発表や原著作成を奨励し多方面で支援しているが、なかなか入学には結びつかないのが現状

である。職種として教員志望者以外で学位を取得するメリットが少ないことも一因と考えられる。

（7） 保健医療学専攻　福祉支援工学分野　修士課程・博士課程

1．教育面

福祉支援工学分野では、2015 年度に修士 12 名、博士 2 名、2016 年度に修士 7 名、博士 3 名、2017 年に修士 7 名、博士 1 名の院生が修了した。当分野には福祉支援工学領域と福祉用具領域があり、理学療法士、作業療法士、義肢装具士、介護福祉士、看護師、柔道整復師などさまざまな職種の院生が所属している。毎年、分野全体の合宿を行い、2015 年度から 2017 年においても 9 月に八王子セミナーハウスにおいて 2 日間の合宿を実施し、全院生の発表と時間をかけた質疑を行った。いずれの領域でも毎週 1 回、修士、博士それぞれのゼミを行って院生の研究の進捗について確認を行っている。福祉支援工学領域では月に 1 回の集中講義によって計測器を使用した実習とデータ処理について学ぶ機会を設けた。福祉用具領域では年間を通じて毎月 1 回日曜日に演習を行い、福祉用具の操作技術を習得している。福祉用具領域の福祉用具管理指導者コースは公益財団法人テクノエイド協会の福祉用具プランナー管理指導者の資格認定を得ることができるため、2016 年度には同コースを修了した 1 名が福祉用具プランナー管理指導者として活躍している。2016 年度修了者のうち 1 人は台湾からの留学生で、研究をまとめる際は、指導教員である東畠 が調査フィールドである台湾・台北に赴き、調査協力の協力などを取り付けた。なお合宿の他、11 月には博士課程の院生の分野報告会、3 月には修士・博士(学位取得者)修了する院生の報告会を実施している。

2．研究面

分野責任者の山本は 2015 から 2017 年度にかけて科研費の研究として課題名「回復期片麻痺者の歩行改善の分析―下肢装具と理学療法が歩行に及ぼす影響」を実施し、結果を国際義肢装具連盟学術誌（Prosthetics and Orthotics International）に投稿して採択された。2017 年度～2019 年度には課題名「短下肢装具の背屈制動の有無が回復期片麻痺者の歩行に及ぼす影響」で科研費を取得して、現在、研究を実施中である。また、東京電機大学、川村義肢㈱、藤倉化成㈱との共同研究で、膝継手制御機構つきの長下肢装具の開発を行っている。福祉用具領域を担当する東畠 は、2015 年は単著「介護保険制度下の福祉用具事業」を著し、2017 年は「社会保険旬報」（社会保険研究所）に「福祉用具における混合介護の可能性」、「2025 年に向けた訪問入浴介護」の 2 つの論文が掲載された。同誌は学会誌ではないが、社会保障分野で著名であり査読がある。

3．社会活動（生涯教育等）

山本は第 50 回日本理学療法学術大会（2015 年 6 月）、第 31 回回復期リハビリテーション病棟協会学術大会（2017 年 11 月）、山梨県、高知県の理学療法士協会研修会などでバイオメカニクスに関する講演を行った。東畠 は毎年、日本認知症ケア学会の評議員として大会のセッションリーダーを務めている。消費者庁消費者安全委員会の委員として、事故の原因と再発防止に参画し、2016 年には「電動車いす」の事故についての報告、2017 年には「手動車いす」について注意喚起を行った。2018 年 4 月からの介護保険制度改定に伴う福祉用具貸与の変更について、全国福祉用具専門相談員協会理事として、新たに福祉用具サービス計画書の書式(厚労省老健事業 全国福祉用具専門相談員協会に委託、副委員長として担当)を開発し説明を各地で行った。

4．今後の課題

博士課程の院生において 3 年間で論文を提出できずに満期修了になる院生がいるため、今後、修了生のフォローを続けるとともに、できる限り 3 年間で論文提出ができるようにサポートする必要がある。

（8） 保健医療学専攻　リハビリテーション学分野　修士課程・博士課程

1．教育面

医学系大学院の開設と共に、新たな位置づけが求められる分野である。
これまで、医療関連職種の学部卒業生にとっての大学院進学は、多くが理学療法、作業療法といったその出身領域の課程に進学するものであり、研究テーマがこれらの枠に収まらない横断的なトピックスを選択した大学院生の受け皿として、リハビリテーション学を選択する例が大半を占めた。
指導側は医師である例が多いので、動作解析や義肢具関連、あるいは自動車運転などの研究テーマが取り上げられている。
医学系では、研究論文を英文で仕上げることが普通であるが、ごく例外的に英文論文が提出されることもあるものの、多くは日本語論文であり、今後ともどのように指導していくかが課題である。

2．研究面

脳卒中に関する研究が多くなるが、分野所属の教員のそれぞれで実施中。

3．社会活動（生涯教育等）

これも、分野所属の教員のそれぞれで所属の学会の活動に参加。

4．今後の課題

医学系研究科の博士課程には、臨床医学系としてリハビリテーション医学も整備されるので、そことの役割分担をどうするのかも課題。

（9） 保健医療学専攻　放射線・情報科学分野　修士課程

1．教育面

当分野への入学者数は平成27年度7名、平成28年度6名、平成29年度6名で、過去5年間の平均は6.4名であった。平成27年度以降の退学者は1名、その他は無事修了（修士学位取得）している。医用診断機器および放射線治療機器の基礎技術の修得、診断･治療に係る基礎研究、臨床上で問題となる問題の解決のための研究、新方式の開発などに取り組めるよう、カリキュラムを整備し、遠隔システムを利用した講義等を展開している。教員組織は、理工学系（5 名）・専門技術学系（6名）・医学系教員（4名）から成り、多角的視点から教授できる体制としている。

放射線治療学領域は文部科学省の「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に参画し、臨床の現場で活躍できる医学物理士を養成する医学物理コースを開設している。放射線治療学領域の院生全員が本コースを選択する。このコースは定期的に医学物理士認定機構の審査を受けており、教育の質が担保されている。

所属する院生全員が社会人であることから、平日夜、土日祝日を中心に指導教員による面談指導等を実施している。また、分野内全教員による検討会を年2回実施し、研究の新規性・妥当性等を検討しながら、研究者としての資質の涵養に努めている。修士課程における研究成果は、課程修了後に原著論文として投稿できるレベルに到達している院生もおり、院生全体のレベルを向上させるべく、教育・指導内容の更なる充実を目指して改善を図る。

2．研究面

各教員の専門領域における先端的研究を中心に、院生個々の能力に合わせた研究テーマを院生・教員が共有し、研究を展開している。実験系研究は院生が所属する職場あるいは外部機関等で実施している。指導教員は学部あるいは臨床業務を兼担しながら研究指導にあたっており、極め細やかなサポートを可能としている。

各教員は学会・関連団体等の指導的立場にあり、必要に応じて外部研究機関との連携を図りながら、研究の質の維持向上に努めている。また、文科省科研費や外部資金による研究と連動しながら研究を推進している。研究成果は、臨床上の問題解決を可能とし、その成果を論文公開、学会等での発表、学術講演等での報告および専門領域に関る多くの著書に反映させ、可能な限り情報を発信するよう努めている。なお、更なる研究活動の活性化を図り学際的研究を推進するために、分野横断型プロジェクト研究を計画準備中である。

3．社会活動（生涯教育等）

「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の事業の一環として、外部講師を招聘し分野主催の講演会を開催した。2015年度は「放射線治療における QA/QC　TG142 のコンセプトとその利用」2016年度は「放射線治療部門の情報化：治療 RIS 現状整理と未来に向けて」として実施した。

各指導教員は専門領域の学会や講習会等での講師として、一般人向けの啓蒙活動や医療従事者向けの専門教育を数多く担当し、放射線医学の発展に貢献している。

4．今後の課題

修士課程の在籍者のうち放射線治療学領域を専攻する院生が7割を占める。更なる研究活動を推進・展開するためには、医用画像学領域の院生の確保も重要である。放射線・情報科学分野における研究範囲は幅広く、今後、社会構造の変化やゲノム医療と相まって展開されることが予想される。他分野との連携も視野に入れながら教育及び研究面を充実させる必要があり、様々な研究テーマに対応できる大学院内の研究環境の整備も大きな課題として挙げられる。併せて、院生数の増加に伴

う指導体制の維持・強化策について改めて検討する必要がある。

（9） 保健医療学専攻　放射線・情報科学分野　博士課程

1．教育面

当分野への入学者数は平成 27 年度 2 名（留学生 1 名）、平成 28 年度 2 名（留学生 1 名）、平成 29 年度 1 名であった。博士学位取得者は平成 27 年度以降 2 名（留学生 1 名）であった。修士課程同様、博士課程においても「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に参画した。院生（留学生を除く）には博士課程に開講した「がん先端医療に対する多職種連携重点コース」プログラムの履修を推奨し、多角的視野をもった研究者を養成している。

所属する院生は全て社会人であることから、平日夜、土日祝日を中心に指導教員による面談指導等を実施している。また、分野内全教員による検討会を年 2 回実施し、研究の新規性・妥当性等を検討しながら、研究者としての資質の涵養に努めている。

各院生の研究成果は、その領域を代表する学会での発表や論文として纏められ、高い評価を得ている。今後もレベルを維持向上させるよう、更なる教育面での改善を目指す。

2．研究面

院生および教員は、各教員の専門領域における先端的研究を基盤として研究を展開している。また、院生の実験系研究は、院生が所属する職場あるいは外部機関等で実施し、調査研究も適宜実施している。研究内容は、MRI を用いた画像解析研究、画像診断装置の新方式の開発研究、治療装置の特性に係る基礎研究、放射線治療データベースの新たな概念設計などであり、幅広い。各教員は学会・関連団体等の指導的立場にあり、必要に応じて外部研究機関との連携を図りながら、研究の質の維持向上に努めている。

研究成果は、臨床上の問題解決を可能とし、その成果を論文公開、学会等での発表、学術講演等での報告および専門領域に関る多くの著書に反映させ、可能な限り情報を発信するよう努めている。なお、更なる研究活動の活性化を図り学際的研究を推進するために、分野横断型プロジェクト研究を計画準備中である。

3．社会活動（生涯教育等）

「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の事業の一環として、外部講師を招聘し分野主催の講演会を開催した。平成 27 年度は「放射線治療における QA/QC　TG142 のコンセプトとその利用」平成 28 年度は「放射線治療部門の情報化：治療 RIS 現状整理と未来に向けて」として実施した。また、博士課程の院生を対象とした「がん先端医療に対する多職種連携重点コース」では、他分野の院生に対し放射線医学の理解を深める講義等を実施した。

各指導教員は専門領域の学会や講習会等での講師として、一般人向けの啓蒙活動や医療従事者向けの専門教育を数多く担当し、放射線医学の発展に貢献している。

4．今後の課題

博士課程の在籍者総数は、5 名（留学生 2 名含む）であり、院生の確保が大きな課題である。

放射線・情報科学分野における研究は幅広く、今後ゲノム医療と相まって展開されることが予想されている。時代の要請に合わせたカリキュラム構築を早急に検討し、他分野との連携を模索する必要がある。また、プロジェクト研究を早期に開始することで、独自性のある質の高い研究が生まれ、研究の活性化に繋げられることが期待できることから、教職員が一丸となって取り組むべき課題である。併せて指導体制の強化を図ることも検討する。

(10) 保健医療学専攻　生殖補助医療胚培養分野　修士課程・博士 課程

1．教育面

現在日本では20人に1人が生殖補助医療により誕生している。生殖補助医療の普及という面では、世界の最先端であるが、それを担う胚培養士の教育システムは確立されているとは言えない。当分野は、日本で初めて胚培養士を養成する教育課程として発足した。胚培養士の業務内容を考慮すると培養に関する知識だけでなく生物学、遺伝学、産婦人科学等の幅広い知識が必要とされる。そのためこれらの科目をバランスよく系統的に学習できるようにカリキュラムを組み胚培養教育のイニシアチブをとっている。また卒業後、即戦力として活躍できるために720時間以上の実習時間を実際の臨床現場で経験できる体制をとっている。近年、必須科目である生殖補助医療胚培養基礎系講義および臨床系講義はｅラーニングシステムに対応させ、社会人として仕事を継続しながら、また通学圏内に本学のキャンパスがない地方在住者でも入学を可能とし、より広く胚培養教育を拡充する体制の整備が進んでいる。

胚培養士を養成するコースを持つ本学は、最近胚培養に特化した学科を設置した岡山大学、近畿大学と協力し、「生殖補助医療技術教育カリキュラム標準化懇談会」を設立した。生殖補助医療技術者は、現在、保健学系や応用動物科学系の大学や専門学校を修了した者が各医療機関でその技術や知識を習得後にその仕事に従事しており、日本卵子学会などによる資格制度や、学会ならびに医療機関の主催する種々のリカレント教育等により、その質の保証とレベルの向上が図られている。しかしながら、生殖補助医療技術者を輩出している大学などの高等教育機関では、僅かの大学・大学院で専用のカリキュラムが準備されているものの、他の多くの機関では特別なカリキュラムは準備されておらず、カリキュラムを有している大学についても個々に独自のカリキュラムを実施しているのが現状であり、生殖補助医療技術者を目指して就職する学生がどれだけの技術や知識を有しているのかについて、高等教育機関として必要最低限の品質保証が示せていないのが現状である。そこで、賛同する高等教育機関がコンソーシアムを形成し、生殖補助医療技術者を養成するためのカリキュラムの標準化（最低限習得すべき技術および知識の内容と到達基準レベルの設定）とその普及を目指すことで、生殖補助医療技術者となるべく生殖補助医療機関に就職する学生への教育レベルを高等教育機関で保証し、もって生殖補助医療技術者養成のための医療機関の負担を軽減するとともに、我が国の生殖補助医療技術の質の底上げにより、我が国の生殖補助医療に資することを目的として、生殖補助医療技術教育カリキュラム標準化懇談会を立ち上げた。この活動の最終的な目標としては、胚培養士の国家資格化も見据えており、本分野の今後の大きな課題と考える。

2．研究面

赤坂キャンパス、山王病院、国福大病院、高木病院等の関連施設には、動物実験施設が付随せず、現状では、動物卵子等を用いた研究は実施不可能である。山王病院や学生の所属先の臨床データを用いた臨床研究は活発であり、国内外での学会発表や論文発表等は実施している。

修士課程は上記研究を継続発展させることで対応できるが、今後の課題として博士課程の学生教育がある。成田キャンパスでは、河村産婦人科教授の元で基礎研究も活発に実施されることが目前に迫っており、当分野の博士課程との共同研究も選択肢として期待している。

3．社会活動（生涯教育等）

必須科目である生殖補助医療胚培養基礎系講義および臨床系講義は乃木坂スクールでも視聴することができるため、現職の胚培養士のリカレント教育やこれから不妊治療を始める方や治療中の方、生殖補助医療関連の企業の方にもご参加いただいている。また入学に興味を持っている方が実際に

講義を体験できる場としてもご活用いただいている。

4．今後の課題

先に述べたように、生殖補助医療の成績は胚培養士の教育にかかっていると言っても過言でないほど重要な職能教育でありながら、日本の現状は遅れている。当分野は先達としての使命を果たすとともに、胚培養士の重要性を社会に認知させ、胚培養士の国家資格化等にもリーダーとして努力すべき課題が山積している。その実現には分野の教官の数的かつ質的向上も必要である。省庁への働きかけ等には本分野のみならず、大学院、国福大をあげた協力体制の構築も重要と考える。

胚培養士の数は他の医療職と比較して極端に少なく、全国でも数千人程度とされている。その中で大学院の進学を希望し、通学圏内に当学のキャンパスがある方は非常に限られている。そのため当分野では時間や場所に縛られることなく学習できるようにｅラーニングシステムを導入しているが、選択科目の中でｅラーニングシステムに対応している数が少なく、学生が興味のある科目を選択できない状況にある。今後できるだけ多くの科目がｅラーニングシステムに対応していただければ、当分野だけでなく大学院としての魅力を高められるのではないかと感じている。

(11) 保健医療学専攻　医療福祉教育・管理分野　　修士課程（1年　課題研究コース）

1．教育面

医療福祉教育・管理分野は、平成27年度に発足し、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の資格を持つ35名が学位を取得した（学位取得率100%）。平成27年度開設、PT5名、OT2名、ST1名、平成28年度はPT14名、OT4名、ST1名、平成29年度PT6名、OT2名であった。

本分野の院生は、一定の社会的経験を積んだ社会人であり、学修動機に応える魅力ある教育プログラムの実施や社会人に配慮した学修環境の整備等配慮している。学修は、すべての必修科目に加え、選択科目の多くがe-ラーニングとVODで構成されている。学修はインターネットが接続された環境であれば、どこでも何時でも行うことができ、各講義の最終には確認問題を提示し、担当教員が丁寧に指導を加える。

また、春期・夏期・冬期には集中講義を準備し、対面でアクティブ・ラーニングを中心とした学びを行っている。さらに、課題研究は、指導教員が対面・インターネット電話サービス・e-mailなどを用い、積極的なかかわりをしている。本分野の事務局ではe-ラーニングの進捗状況の確認や個別相談窓口として、学修の遅れに対してもきめ細やかな支援となるよう配慮している。

本分野では、院生の学修支援を充実させるため、毎月の事務局担当教員と分野責任者との連絡調整会議を行っている。また、年3回の集中講義の際には分野の担当員全体の会議を行い、方向性の確認と情報共有を行っている。

2．研究面

各指導教員の研究実績については、学部報告をご参照されたい。

院生の研究活動は、課題研究の特性を生かし、教育的手法を取り入れた教育研究や人材育成、業務改善に向けた研究が多くみられている。1年のコースであるが、論文や発表の作法の学修は取り入れ、学会発表や論文作成を進めている。平成29年度院生のうち、4名は学会発表、6名は学術誌への投稿を行った。

3．社会活動（生涯教育等）

各指導教員の社会活動については、学部報告をご参照されたい。

4．今後の課題

1.　本分野への入学率の向上

理学療法士・作業療法士の指定規則の改定作業が進んでおり、今後、社会人の出願が見込めると考えている。本分野は、日本で唯一のリハビリテーション専門職の教育や管理に対応した大学院プログラムである。本大学院の遠隔通信機能とe-ラーニングを用いた学修形態を充実させ、遠隔地の院生の獲得を目指したい。そのための、広報活動の整備が今後の課題である。

2.　大学院教員の教育力向上と研究活動の推進

積極的な関連学会への参加や論文投稿をすすめる。

3.　H30年度より開始される「2年修士論文コース」の運営

より実践能力を高めるプログラムの1年コースと修士論文を作成する2年コースとの特徴の違いを明確にし、社会に貢献できる研究活動を推進するとともに、博士課程への進学をすすめられるような土台づくりを行う。

(12) 保健医療学専攻　臨床検査学分野（大川キャンパス及び成田キャンパス）

臨床検査学分野は2016年に大川キャンパスが開校し、2017年に成田キャンパスも開校した。成田キャンパスは学年進行中で修士と博士の各1名は社会人入学である。

1．教育面

①在籍者数（大川及び成田キャンパス：[]）

年度	修士　1年	修士　2年	博士　1年	博士　2年	博士　3年
2015					
2016 開設	5		1		
2017	2 [1]	5	1 [1]	1	

②教育面

教員は学部教員が兼務して院生の指導に当たっている。修士初年度の臨床検査技術学講義Ⅰ、臨床検査技術学演習Ⅰについては、大学院教員全員のオムニバスとして行っている。臨床検査技術学講義Ⅰでは、臨床検査学に必要な多方面の基礎医学や実践的な臨床検査の技能を論理的に組み立てていく能力養成を目標としている。臨床検査技術学演習Ⅰでは、その講義で修得した知識、検査技術を駆使しテーマに沿った全般的な研究手法を身につけるための演習を行っている。博士過程は研究が中心で行なわれているが、修士課程も博士課程も研究指導に関しては個々の教員の専門的な個別指導で進められている。

2．研究面

院生の研究は、キャンパス、各職場で実施している。研究は多方面に渡り、今年度（2017年度）に終了した修士学位論文の題名は次の通りである。

「マイクロRNAによる生活習慣病の新規バイオマーカー開発」

「マイクロRNAを用いたリンパ系疾患のバイオマーカー開発」

「アルブミンの研究」

「超音波粒子解析を用いた肝線維化の検討」

「日和見感染菌を対象としたモンテカルロシミュレーションにおけるカルバペネム系抗菌薬による治療戦略に関する基礎的検討」

なお、院生の研究発表として学術大会、国際学会での発表、論文当校を積極的に薦めている。
また、教員の研究発表などに関しては各キャンパスの学科教員を参照。

3．社会活動

特になし

4．今後の課題

当学科は2017年度で、開設から2年を経過し、5名の修士（臨床検査学）取得者を輩出した。成田キャンパスでは修士と博士が各1名入学した。今後の課題は、博士課程、修士課程の入学者を増加させること、研究内容の充実、多くの学術大会の発表、論文投稿の推進である。

(13) 医療福祉経営専攻　医療経営管理分野　修士課程･博士課程

1．教育面

1) 教育理念

本学大学院の修士課程の目標は「保健医療福祉の分野において他分野を理解し、連携することのできる高度専門職または研究職」の育成をめざし、博士課程の目標は「保健医療福祉の分野において指導者的役割を果たすことのできる人材」の育成を目標にしている。

近年、わが国の保健医療福祉は、内容的にも社会制度的にも大きな変革を重ねてきており、この変革をよりよく担う実践家や教育･研究者を育てることへの需要が増してきている。本学大学院は、保健医療福祉分野において、国際的な視野に立って、多様化する保健医療福祉需要に対応できる指導的な人材の養成を実現すべく、年齢を問わず、また学生であるか社会人であるかを問わず、生涯にわたって学習の機会を提供し、このような社会的な需要に応える教育を展開するものである。

本学大学院医療福祉学研究科のカリキュラム・ポリシーは以下である。①国際医療福祉大学の基本理念と教育理念とを充分に理解し、専門職業人として「共に生きる社会」の実現に貢献する強い意志を涵養する。②大学院で自分が何をしたいかを明確に自覚できるようにする。③実践家又は教育・研究者としての自立性を確立できるようにする。④志望分野が特定の要件を要求する場合、それを満たす。医療福祉学研究科のディプロマ・ポリシーは、カリキュラム・ポリシーに掲げた目標が達成されているかどうかを確認することを基本目標とする。

2) 医療経営管理分野の特長

医療経営管理分野には、修士課程としてヘルスケア分野において経営戦略立案力を身に付け、その第一線で活躍できる人材の養成を目的とする「医療経営戦略コース（ｈ－ＭＢＡコース)」と、ヘルスケアに関して専門的な研究を行い論文にまとめる「医療福祉管理学コース（研究コース)」の2つのコースが開講されている。

医療経営戦略コース（ｈ－ＭＢＡコース）は、2010年度に開講したもので、経営幹部養成カリキュラムを基盤に、ケースメソッドと演習を組み合わせ、医療福祉経営に精通する実践的人材の育成を目指している。経営管理プログラム、データ解析プログラム、財務管理プログラム、医療マネジメントプログラムの4つのプログラム別に演習が行われている。必須科目は毎月第3、4金曜日と毎週土曜日に集中しており、大学院生が通いやすいように設定している。2017 年度の在籍者数は 48人（1年24人、2年24人）である。

医療福祉管理学コース（研究コース）は、教員から直接指導を受けながら研究を行い、その研究成果を論文にまとめていくものである。医療福祉ビジネスの税務会計分野の専門職養成を目的に、税理士試験の科目免除への対応も可能となっている。2017年度の在籍者数は11人（1年7人、2年4人）である。

尚、博士課程の医療福祉経営学分野の2017年度の在籍者数は14人（1年7人、2年3人、3年4人）である。

2．研究面

専任教員による公的研究費や研究助成金による複数の研究が行われている。

厚生労働科学研究費補助金による研究は「診療情報データベースを用いた帯状疱疹の疫学等に関わる研究」「肺炎球菌ワクチンの費用対効果等についての社会の立場からの評価研究」がある。その他、専任教員が研究分担に係わる研究は、「がん研究10か年戦略の進捗評価に関する研究」「医療通訳認証の実用化に関する研究」「社会構造の変化を反映し医療・介護分野の施策立案に効果的に活用し得る国際統計分類の開発に関する研究」「診断群分類を用いた病院機能評価手法とデータベース利

活用手法の開発に関する研究」「医療経済評価を用いた意思決定のための標準的な分析手法および総合的評価のあり方に関する研究」である。

文部科学研究補助金による研究は、「医療機関における経営企画機能のあり方に関する調査研究」「レセプトを活用した職域がん検診及びがん医療費の分析」「職域における健康診断の効果と保険者に与える影響に関する研究」がある。

その他、専任教員が研究分担に係わる研究は、「医療経済評価に用いる健康関連 QOL 集積のための実証的研究」「正常者の MRI 大脳白質所見に影響を及ぼす健康阻害因子に関する研究」がある。

その他、「後発医薬品普及促進のためのレセプトナショナルデータベース活用研究」が厚生労働大臣の承認を受け研究進行中である。

３．社会活動（生涯教育等）

医療経営管理分野の専任教員が係わる社会活動は以下がある。中央社会保険医療協議会の入院医療等の調査・評価分科会の座長と委員に２人が就任中である。構造改革徹底推進会合の「健康・医療・介護」会合の副会長に１人就任中である。その他の社会活動として、専任教員が係わる地方自治体向けの講演や、地方自治体の病院職員採用試験問題作成並びに採点等がある。

生涯教育等に係わる活動として、社会人向け公開講座「乃木坂スクール」のコーディネーターを選任教員が担当しており、担当する講座は「医療政策の過去・現在そして未来」、「ICT・人工知能を活用したヘルスケア戦略」、「同時改定後の医療・介護の展望」「医工連携イノベーター養成講座」「医療コンコーダンス講座」「医療通訳講座」「戦略的医療経営講座」がある。医療福祉に関心のある方への学びの場を提供している。

その他の生涯教育に係わるものには、看護生涯学習センターの認定看護管理者教育課程において、専任教員が最新の医療福祉動向の講義や各種マネジメント理論の講義を行うことで看護職員の人材育成や生涯学習に係わる支援を行っている。

４．今後の課題

わが国の医療提供体制は、「2025 年問題」への対応から「病院完結型」から「地域完結型」へと大きく変容する過程にあり、地域医療構想によって医療機関の経営も大きく転換する過程にある。また、「日本再興戦略 2016」において世界最先端の健康立国が掲げられ、ヘルスケア産業の一層の成長が期待されている。このように外部環境が大きく変容する中にあって、医療に係わるヘルスケアスタッフ等の他、ヘルスケア産業に係わるスタッフ等にもこれまで以上にマネジメント理論の理解が必要になっている。

医療を取り巻く環境が大きく変容する過程にあっては、大学院教育もこれまで同様の内容では受講者の期待に応えることが出来ない。そのためには、基礎的なマネジメント理論を踏まえたうえで、最新のヘルスケア業界の動向を踏まえた講義内容等の充実が必要になる。さらにこれまでの医療経営管理分野大学院での講義は、主に急性期医療機関の経営に係わるケースを中心に取り上げてきたが、これからは慢性期医療領域や在宅医療領域の他、介護領域のケースや医療機関以外のヘルスケア全般に係わる企業のケースも取り上げることで受講者の関心や満足度を高めることも肝要である。

(14) 医療福祉経営専攻　診療情報アナリスト養成分野　修士課程
保健医療学専攻　診療情報管理・分析学分野　博士課程

1．教育面

わが国で唯一の診療情報管理学の学位が取得できる大学院として2008年度には修士課程「診療情報管理アナリスト養成分野」、2010 年度には博士課程「診療情報管理・分析学分野」を開設した。３つのコースが設けられた修士課程は、医療現場の実務課題をアカデミックな観点から問題解決を図る「実践コース」、修士学位論文を執筆する「研究コース」、がん登録を専門的に学ぶ「がん登録コース」が設けられている。特に、社会人大学院生が学びやすいようにｅラーニングシステムを早い時期から取り入れており、３人に一人は関東以外の遠方から入学されているのも特徴と言える。学術研究は、「退院時サマリの精緻化」「特定の診断群を対象にした在院日数の分析」など実務課題をテーマにした論文執筆が多い。また、2016年度博士課程において「DPC/PDPS制度下における看護提供指数導入に関する研究」が行われた。

2．研究面

文部科学省公的研究助成金は2016年度に「教材作成とがん登録システムの改良とその評価」が採択された。がん登録実務者を育成するための教材を開発し、授業で使用しながら改良を加えていくものである。また、大学院生における論文執筆には研究指導教員が在学中から修了後にも手厚く関わることにより、学会誌への掲載につなげている。

2015年度は博士課程院生による原著論文１編と共に、修士課程修了生による日本診療情報管理学会学会誌に掲載された原著論文「新生児医療におけるDPC点数妥当性の検証」は優秀論文賞を受賞した。また、2017年度に原著論文１編「在院日数分布に基づく脳梗塞症例に分類」（博士課程院生）のほか、事例報告１編および研究速報１編（修士課程院生および修了生）が掲載された。

3．社会活動（生涯教育等）

院生の専門職種である「診療情報管理士」の生涯教育の観点から、病院実務に関連した教育カリキュラムを構築している。「乃木坂スクール」は大学院の講義と併せて継続的に実施されている。講座名「診療情報管理講座・疾病コーディング」は、臨床医や外部講師による専門的な講義と演習を組み合わせている。受講者数は演習で利用する医療情報演習室に設置されたPC端末数に限りがあるため、2015年度14名、2016年度13名、2017年度14名となっている。また、「DPCコーディング」「電子教材によるサマリの作成と監査」「診療記録の質向上を目指す・サマリ監査と活用「医療福祉におけるデータサイエンティストを目指す」などの講座を定期的に開講している。

4．今後の課題

「診療情報管理士」は、医療現場においてデータ収集分析を行い医療および経営の質的向上に貢献する専門職である。DPC 制度の導入や診療報酬による評価が進む中で医療機関における認知度は高まってきたと考えているが、まだまだ十分とは言い難い側面もある。さらに、求められる業務の拡大に対応できる専門職として、関連学会や職能団体と連携しながら卒後教育のあり方を検討していくことが今後の課題である。

(15) 保健医療学専攻　医療福祉国際協力学分野　修士課程・博士課程

1．教育面

医学系大学院の開設と共に新たな位置づけが必要な分野である。
これまでの院生の多くが外国からの留学生であり、日本語での対応が困難な例に対して、英文での論文作成指導を図るとともに、より具体的には病理学や感染制御をテーマに取り上げるケースが多かった。担当の教員が英語での指導・対応を行っているので、提出される論文も英文で執筆される例が多く、審査にあたって人選が特定の人に偏りがちである。
医療福祉学分野で国際協力を考える看護学や医療援助の場合には、今後とも志望する院生が入学してくる場合が想定されるものの、より医学系に近い上記の病理学や感染症領域では、公衆衛生大学院の方が受け皿としては適切かも知れない。

2．研究面

分野所属の教員のそれぞれで実施中。

3．社会活動（生涯教育等）

これも、分野所属の教員のそれぞれで所属の学会の活動に参加。

4．今後の課題

医学系研究科に修士課程として国際協力学分野が作られたので、そことの役割分担をどうしていくかが喫緊の課題。
求められる単位数は医療福祉学研究科が 30 単位であるのに対し、医学系研究科公衆衛生学では 42 単位と多くなるが、学費は逆に安くなる。

(16) 医療福祉経営専攻　医療通訳・国際医療ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ分野　修士課程

1. 教育面（540 時間/年 = 週平均 18 時間の授業担当）

英語科目のコースディレクター及び科目責任者（420 時間の授業）

医学部においては下記の 3 つの科目をコースディレクターとして計画、統括している他、全ての科目の責任者として他の英語担当教員 12 名と共に必修科目 240 時間、選択科目 180 時間、合計 420 時間の授業を実際に担当している。

- **英語 I**（60 時間）
- **英語 II**（180 時間）
- **英語コミュニケーション A & B**（180 時間）

英語 I の「Japan」「Career」「News」「Healthcare」の 4 つのコースでは「**Healthcare**」を担当し、日本語履修が必要な留学生を除く 121 名を対象に「**外国人患者に日本の医療を説明できる**」ことを目的とした実践的な授業を展開した。
英語 II の「Culture & Humanity」「Medicine & Science」「Global Issues」「Patient Encounter」の 4 つのコースでは「**Patient Encounter**」を担当し、140 名の 1 年生全員を対象に「**胸痛、腹痛、頭痛に関して、USMLE Step 2 Clinical Skills のフォーマットに沿って病歴聴取、身体診察、患者教育ができる**」ことを目的とした実践的な授業を展開した。

1 年生の英語力の目安として 2018 年 1 月に実施した TOEFL ITP では、1 年生 140 名の合計平均点が 2017 年 4 月から 32 点アップの **551 点**を記録した他、日本人学生 120 名が 34 点アップの 543 点、留学生 20 名も 25 点アップの 603 点を記録した。また日本人学生の合計平均点の 543 点、Section 1 の平均点 54 点、Section 2 の平均点 53 点、そして Section 3 の平均点 56 点は、全て英語圏の大学留学に必要な「中上級レベル」である CEFR B2 Level の指標と合致している。つまり平均 509 点だった日本人の新入生は、10 ヶ月間で平均 34 点スコアが伸び、合計点及び全ての Section の平均点が「中上級レベル」の CEFR B2 レベルに到達しただけでなく、もともと高いスコアだった留学生も平均 25 点伸ばしたことになる。日本の医学部の平均点が 483 点であることを考えると、本学 1 年生はこの 10 ヶ月間の英語プログラムを通して高いレベルの英語力を獲得したと言える。

新入生オリエンテーションの担当者（30 時間のオリエンテーション）

新入生オリエンテーション（2017 年 4 月 3 日から 7 日の 5 日間）において企画と実務を担当し、新入生が互いに打ち解け、本学の医学教育に前向きに取り組んでいくための素地づくりを行った。

USMLE Seminar（45 時間のワークショップ）

本学の医学教育として**唯一の United States Medical Licensing Examinations (USMLE) 対策に特化した課外教育プログラム**として、毎週月曜日と木曜日の 17:30 から 18:30 の 60 分間、2017 年 4 月 17 日から 2018 年 2 月 13 日までの期間に**合計 45 回（月曜日に 18 回、木曜日に 27 回）**の USMLE Seminar を実施している。
USMLE の対策としては**スコアが最重視される Step 1** と、**英語が母国語ではない受験者にとっては最難関となる Step 2 Clinical Skills (CS)** の 2 つを重視し、この 2 つの試験のフォーマットに沿った形式で医学が学べるように工夫している。2017 年 4 月 17 日から 2018 年 2 月 13 日までの期間では **Step 1 の内容・形式として 20 回、Step 2 CS の内容・形式として 25 回**実施している。1 年生が基礎医学の授業で学習している内容を扱うことで、**基礎医学の補講としての機能**も果たしており、

USMLE 受験を考えていない学生も数多く参加している。今年度は**さらに5回の USMLE Seminar（合計50回）を予定**している。

「国際医療通訳入門」の科目責任者（22.5時間の授業）
成田キャンパス2学部5学科の学生を対象とした2学期開講の「**国際医療通訳入門**」の科目責任者として、**11名の学生**（臨床検査学科6名、看護学科3名、作業療法学科1名、理学療法学科1名）を指導した。15回の90分間のワークショップ形式の授業を通して、参加学生が医療通訳の基礎知識と技術を学ぶ他、多文化医療について多角的に学ぶことができる参加型授業を展開した。18時開始という授業時間にも関わらず、11名の履修学生全員がほぼ100%出席し、非常に示唆に飛んだ最終レポートを提出した。

「医療通訳・国際医療マネジメント分野」のコースディレクター及び科目責任者（22.5時間の授業）
大学院において「医療通訳・国際医療マネジメント分野」のコースディレクターとして、厚労省の「医療通訳育成カリキュラム基準」に沿った本学独自の医療通訳養成カリキュラムを作成し、科目責任者として11名の修士学生の指導を行った。
また同分野と並行して実施された乃木坂スクールの「医療通訳講座」でもコースディレクターとして厚労省の「医療通訳育成カリキュラム基準」に沿った本学独自の医療通訳養成カリキュラムを作成し、英語医療通訳者の実践指導を行った。

以上、2017年度は合計で年間**約540時間**（授業週を30週とすると**平均週18時間**）の授業を担当した。

2. 学生支援面

- **学生相談教員**（7名の学生を単独で担当）
- **学生サポート会議**（学生サポート会議のメンバーとして、週1回の会議に参加）
- **教員サポート会議**（教員サポート会議のメンバーとして、週1回の会議に参加）
- **Narita Medics 顧問**（英語を利用した様々な国際医療活動を行うサークル「Narita Medics」の顧問として、様々な学生活動をサポートしている）
- **成翔祭参加**（10月7日開催の成翔祭に参加し、学生が行う様々なイベントに参加）
- **ハロウィーンパーティ参加**（10月31日開催のハロウィーンパーティに仮装をして一緒に参加し、学生たちの写真を撮影）
- **医学部球技大会参加**（11月11日開催の医学部球技大会に参加し、学生たちとスポーツを通して親睦を深めた）
-

3. 研究面

研究論文1編、著書2編、学会発表3編であった。
また2016年度からの**科研費が1題**、2017年度からの**厚生労働行政推進調査事業費が1題**であった。
この他、**医療機関からの招待講演を3回**、**大学からの招待講演を19回**、**国際交流団体からの招待講演を15回**実施した。

論文（1編） 押味貴之：医療通訳の認証制度の研究．**医療通訳の認証のあり方に関する研究**．厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）平成28年度 総括・分担研究報告書，2017．9．

著書/連載（2編）

1. 押味貴之：**Medical English：医者なら知っておきたい英語表現**．DOCTOR' S CAREER Monthly，株式会社リクルートドクターズキャリア，東京，2011．10 - 現在に至る．
2. 押味貴之：医学英語師範・Dr.押味の**病院に外国人患者さんがやってきた！「学生さん、対応してね」**．iCrip magazine，株式会社メック，東京，2017．4 - 現在に至る．

学会発表（3編）

特別講演

押味貴之：**Academic Writing 101：30分で身につく英語論文作成に必須のスキルとツール**．第15回日本臨床腫瘍学会学術集会，神戸，2017．7．

シンポジウム

押味貴之，山田貴之：**医学部におけるUSMLE対策**（シンポジウム：医学英語教育を介しての国際的医療人養成のknow-how（tips））．第20回日本医学英語教育学会，名古屋，2017．7．

一般演題

- 押味貴之：市民公開講座（医療通訳人材育成）**英語での医学教育：国際医療福祉大学医学部での英語教育**．第2回国際臨床医学会学術集会，東京，2017．12．

科研費（2題）

- 文部科学省科学研究費（基盤研究 C）「**医学部低中学年を対象とした英語医療面接指導のための評価ルーブリックの開発**」
- 地域医療基盤開発推進研究事業（厚生労働行政推進調査事業費）「**医療通訳認証の実用化に関する研究**」

4. 学部内FD活動

- **mini FD**：毎週水曜日に実施されるmini FDに参加する他、**4回のmini FD**（4月26日、10月18日、11月8日、1月17日）で**演者**を務めた。
- **英語教員ミーティング**：毎週月曜日の12:00-13:00に英語担当教員でミーティングを行い、授業改善や研究内容について議論している。

5. 国際性

- Medical Exchange & Discovery Program（アジア人医学生を対象としたスタンフォード大学医学部を拠点とする夏期医学留学プログラム）にFaculty Advisorとして3名の本学1年生を引率（August 6-27, 2017）した他、Exploring Health Care Program（日本人医学生を対象としたスタンフォード大学医学部を拠点とする春期医学留学プログラム）の学内広報を実施して本学学生の海外医学留学をサポートしている。

- 2018年3月25日に開催される The 2nd JrSr International Physician Seminar の講師の一人として、本学医学部1年生を含む、日本の医学生/臨床医に英語圏での臨床留学について幅広く指導する予定。
- **国際交流委員会**のメンバーとして、月1回の会議に参加している。

6. その他

- Tokyo Medical English Discovery Seminar

国際医療に関する活動を行っている医学生団体「Team Medics」が毎月主催する「Tokyo Medical English Discovery Seminar (Tokyo MEDS)」の講師として、月1回土曜日の午後に東京大学医学部にて3時間の医学英語ワークショップの講師を務めている。毎回30から50名の医学生や英語医療通訳者が参加し、臨床推論や臨床英会話のスキルを学んでいる。本学1年生も毎回10名程度の参加があり、他大学の医学生との交流を通して医学英語の学習動機を高めている。また2018年1月20日の Tokyo MEDS には別科生の新留学生16名を引率して参加させた。

- Movember campaign

11月 (November) に男性が髭 (mustache) をたくわえて男性特有の癌 (前立腺癌や精巣癌など) の啓蒙を高める活動である「Movember Campaign」を学内で実施し、募金活動を行った。

- **国立科学博物館「人体」への学生引率**

2018年3月16日 (金) に国立科学博物館の特別展「**人体: 神秘への挑戦**」に、解剖学の教員と共に参加を希望する1年生を引率する予定

- **語学教室の装飾**

季節のイベント (「ハロウィーン」や「クリスマス」など) に合わせて語学教室 (Language Rooms) を自費で購入した物品で装飾し、学生が語学教育を楽しめる環境作りを行った。

7. 今後の課題

来年度の教育活動の課題として以下の項目を考えている。

- 新規加入教員へのオリエンテーションを3月中に実施する
- 英語コミュニケーションの授業において、コースやトピックを大幅に増やし、学生がそれらを自由に選択できるように改革する
- 高いレベルの学生をより高いレベルに引き上げるために、よりそれらの学生に対応できるように課題設定を多様化する
- 低いレベルの学生をより高いレベルに引き上げるために、よりそれらの学生に対応できるように課題設定を多様化する
- 今年度の教育実績を分析し、学会にて発表する (7月の日本医学英語教育学会に4題、8月の日本医学教育学会に1題の口頭発表を応募予定)
- 本学医学部の英語教育の成果を広報を通して学外に積極的に発信する

- 本学医学部の英語教育を医学部オープンキャンパスに活用して、本学のアドミッションポリシーに沿った志願者を増やす
- 大学院「医療通訳・国際医療マネジメント分野」の修士研究発表会を一般公開の研究会として発展させ、全ての修士論文が学会誌に掲載されるようにする
- 大学院「医療通訳・国際医療マネジメント分野」において3月にe-learning用の教材を作成し、学生の自宅学習および学生募集に活用する

(17) 臨床心理学専攻　臨床心理学分野　修士課程・博士課程

1．教育面

・臨床心理士資格試験合格率８１％（平成28年度、全国平均６１％）を達成し、本専攻を修了した臨床心理士有資格者の総数は、166名となった（平成30年４月時点）。

・(公財）日本臨床心理士資格認定協会による認証評価（中間期）においてA評価（平成29年度）を達成した。

・臨床心理学専攻（修士課程）入学定員（25名）の１００％充足（平成２９年度）を達成した。

・臨床心理学専攻（修士課程）修了者（26名）の就職率１００％（平成２９年度）を達成した。

2．研究面

・平成２８年９月には、本学が主幹校となって日本心理臨床学会の３５回秋季大会（実行委員長：亀口憲治）をパシフィコ横浜で開催し、９、０００名近い参加者を得て、成功裡に終えた。招聘講師としてアメリカ心理学会（ＡＰＡ）会長でロチェスター大学のマクダニエル教授と、国際家族心理学会（ＩＡＦＰ）会長でシアトル・パシフィック大学のソバーン教授を迎え、国際シンポジウム「２１世紀日本における家族・地域との協働」を開催した。

・平成２８年４月に山川助教、２９年４月に青木万里教授、３０年１月に中田光紀教授が着任し、教員組織がさらに充実することとなった。平成３０年４月には、赤坂キャンパスへの移転と同時に学部が新設され、心理学科（定員６０名）が医療マネジメント学科と共にスタートする予定である。

・新キャンパス８階には、世界屈指の観察室併設の家族相談室が複数配置され、最新の映像記録システムも完備した本格的な家族療法や家族面接の教育・研究体制が整えられる予定である。また、１０００人収容のホールもあることから、今後は大規模な学会や各種の研修会・講習会の開催も可能になり、研究面での交流促進が大いに期待される。

3．社会活動（生涯教育等）

・港区芝浦港南地区子育てあんしんプロジェクトの企画・運営に関し、専攻として連携協力した。教員３名、院生・修了生１８名が、対象地区で開催された年間延べ６０００人前後の親子を対象とする子育て支援事業の運営に参加し、平成２７年１０月には、「港区芝浦港南地区子育て委安心プロジェクトの今後のあり方に関する報告書」を作成し、関係機関へ配布した。

4．今後の課題

・新設の国家資格である公認心理師の資格取得を目指す者の多くは、大学院修士課程への進学をめざすことが予測される。本学の心理学科新設により、既設の臨床心理士養成の修士課程や博士課程と合わせて、公認心理師と臨床心理士の資格が取得可能な、臨床心理学の４（学部）・２（修士）・３（博士）制の一貫した高等教育機関が整備されることになる。意欲ある心理学科の学生は、ボランティア活動や実習等を通じて、臨床心理学専攻の大学院生と交流を深めることができる。

・子育て支援や産業分野でのメンタルヘルス対策、急増するがん患者や家族・支援者への心理支援等での地域貢献も期待される。また、他専攻や既設の「看護生涯学習センター」とも連携し、修了後の卒後研修やキャリア形成を促進する「臨床心理生涯学習センター」の設置も構想している。

(18) 薬学研究科　博士課程・薬科学研究科　修士課程

1．教育面

薬学研究科入学生は2015年2名、2016年1名、2017名4名であり、在籍院生はそれぞれ16名、11名、11名となった。学位取得者は、2015年6名、2016年4名、2017名2名であった。薬科学研究科入学生は、2015年1名、2016年1名、2017名1名であり、在籍院生はそれぞれ2名、3名、2名となった。学位取得者は、2015年1名、2016年1名、2017名1名であった。留学生の受け入れは、IUHW留学生として、ミャンマーより、2013年および2015年に各1名ずつ博士課程に入学し、1名は2017年3月に博士（薬学）の学位を取得しミャンマー初の薬学博士となった。残る1名は3年次生に在学中である。また、2014年にタイからの留学生が薬科学研究科に入学し、2016年に修士（薬学）の学位を取得している。

薬学・薬科学研究科において、研究指導を担当する教員は、教授15名、准教授5名の計20名おり、化学系、物理系、生物系、衛生系、薬理系、医療系など、薬学の各専門科目の担当教員が在籍し、院生の指導・教育に携わっている。

薬学研究科（博士課程）在籍学生

	1年	2年	3年	4年	計
2015年	2	2	6	6	16
2016年	1	2	2	6	11
2017年	4	1	2	4	11

薬科学研究科（修士課程）在籍学生

	1年	2年	計
2015年	1	1	2
2016年	1	2	3
2017年	1	1	2

薬学研究科および薬科学研究科では、在籍する院生のほとんどが、社会人大学院生であり、主として、大田原キャンパスおよび東京キャンパスに在籍して、教育・研究指導を受けている。昼間は勤務している為、講義の開講を夜間や週末に集中させたり、勤務等の都合で欠席せざるを得なかった学生には開講後1週間の期限を設けて、VODにて講義の視聴を可とするなど、修学環境の整備に努めている。対面講義とVOD講義の知識の習得状況に差が出ないよう、課題レポートの提出による習熟度の測定や質問を積極的に受け付ける等の環境を整え、結果、概ねの院生が知識の習熟ができたと考えている。

研究指導に関しては、東京キャンパス、大田原キャンパスで随時研究指導教官の指導の下研究を遂行した。指導方法として、対面での指導に加え、当学の特徴でもある遠隔システムを活用して、きめ細かな研究指導を実施することができた。

2．研究面

1の項でも述べたとおり、在籍する教員の研究指導により、多くの論文発表や学会発表を行っており、活発な研究活動が行われている。

2015-2018年現在で大学院生が発表した論文（査読有）は、計22報、学会発表は計68回、その他の発表は学会奨励賞受賞を含み計6回となっている。以下、内訳の詳細を示す。

1）論文発表

No.	研究発表者氏名	論文題目	学会誌 及び雑誌名	巻（号）	掲載年
1	Miyagawa K, Tsuji M, Takeda K	Prenatal stress induces vulnerability to stress together with the disruption of central serotonin neurons in mice.	Behavioural Brain Research	277:228-236	2015
2	大野凜太郎、大塚昌宏、渡辺義和	ホスフルコナゾールにおける負荷投与の適正化に向けた薬剤部の取り組み	日本病院薬剤師会雑誌	51(2): 189-192	2015
3	山西由里子、山西友典、池田俊也 ほか	過活動膀胱治療における選択的β_3アドレナリン受容体作動性薬ミラベグロンの薬剤経済学的検討	日本排尿機能学会誌	26(2):284-288	2016
4	Ito K, Ikeda S, Muto M	A rereiw of clinical stdies of barnd-name and generic drugs used in arrhythmia	医療と社会	25(4):417-429	2016
5	伊藤かおる，池田俊也	日米欧の高血圧診療ガイドラインにおける医療経済評価の活用状況	国際医療福祉大学学会誌	21(1): 101-109	2016
6	Daisuke Ishii, Kazuya Miyagawa, Minoru Tsuji	Chronic inflammatory pain induces maladaptation to stress in mice	日本緩和医療薬学会学会誌	9:55-60	2016
7	Taro Imai,Shunya Ikeda	Economic evaluation of Kampo therapy	Traditional & Kampo Medicine	3(2):151-156	2016
8	Miyagawa K, Saito A, Takeda K	Prenatal stress induces vulnerability to stress together with the disruption of central serotonin neurons in mice. [Article in Japanese]	Nihon Yakurigaku Zasshi	147(4):212-218	2016
9	宮川和也、齋藤淳美、武田弘太郎	HDAC 阻害薬とストレス反応の調節機構	心身医学	56(4):322-327	2016
10	Kato H, Tsuji M, Takeda K	Ethanol Withdrawal-Induced Impaired Recognition Is Reversed by Chronic Exposure to Stress and the Acute Administration of Corticosterone in Mice.	Biological and Pharmaceutical Bulletin	39(10):1631-1637	2016
11	Takeda K, Tsuji M, Miyagawa K	5-HT7 receptor-mediated fear conditioning and possible involvement of extracellular signal-regulated kinase	Neuroscience Letters	638:69-75	2016
12	石井大輔、宮川和也、齋藤淳美	神経障害性慢性疼痛が惹起するストレス適応形成障害とパロキセチンの除痛効果	国際医療福祉大学学会誌	21(1):75-81	2016
13	石井大輔、齋藤淳美、宮川和也	神経障害性慢性疼痛は受動的ストレスコーピングを障害する	国際医療福祉大学学会誌	21(1):66-74	2016
14	宮川和也、齋藤淳美、宮岸寛子	胎生期ストレス刺激が惹起するストレス脆弱性と脳内 5-HT 神経機能異常	日本薬理学雑誌	147(4):212-218	2016
15	宮川和也、齋藤淳美、宮岸寛子	HDAC 阻害薬とストレス反応の調節機構	心身医学	56(4):322-327	2016
16	Nyo Mi Swe、宗像達夫、渡邊敏子	ベンズ[f]インドール-2-カルボン酸エチルの求電子置換反応における反応性と位置選択性	国際医療福祉大学学会誌	22(2):46-52	2017
17	Rintaro Ohno, Hiroko Miyagishi, Minoru Tsuji	Yokukansan, a traditional Japanese herbal medicine, enhances the anxiolytic effect of fluvoxamine and reduces cortical 5-HT2A receptor expression in mice	Journal of Ethnopharmacology	216 8:9-96	2018

18	Hiroko Miyagishi, Minoru Tsuji, Atsumi Saito	Inhibitory effect of yokukansan on the decrease in the hippocompal excitatory amino acid transporter EAAT2 in stress-maladaptive mice	Journal of Traditional and Complementary Medicine	7(4):371-374	2017
19	Rintaro Ohno, Hiroko Miyagishi, Atsumi Saito	Yokukansan, a traditional Japanese herbal medicine, enhances the anxiolytic effect of fluvoxamine and reduces cortical 5-HT_{2A} receptor expression in mice	Journal of Ethnopharmacology	216(24):89-96	2018
20	齋藤淳美、宮川和也、宮岸寛子	ATP 感受性カリウムチャネル Kir6.2 のストレス応答における役割	国際医療福祉大学学会誌		2018 年掲載予定
21	Rintaro Ohno, Hiroko Miyagishi, Atsumi Saito	Repeated treatment with yokukansan, a traditional Japanese herbal medicine, suppresses the increase in the conditioned fear response induced by sigma$_1$ (σ_1) receptor agonist in mice	国際医療福祉大学学会誌		2018 年掲載予定
22	Atsumi Saito, Kazuya Miyagawa, Hiroko Miyagishi	Possible involvement of monoamine neurons in the emotional abnormality in Kir6.2-deficient mice.	Physiology and Behavior		in press

2）学会口演発表

学会発表は 2015 年に国内学会発表 27 回、国際学会発表 1 回、2016 年に国内学会発表 26 回、2016 年に国内学会発表 13 回、国際学会発表 1 回の計 68 回であった。

3）その他（著書・報告書・作品発表・取得した特許・新聞記事ほか、研究成果発表に準じるものとして特に登録しておきたいもの

No.	研究発表者氏名	発表題目	発表媒体	発表年月	備考
1	天野 隆弘,武田 弘太郎,山我 美佳	がん先端医療に対する多職種連携重点コース　医学臨床実習報告	国際医療福祉大学学会誌	20(2):78-81	2015 年 1 月
2	岩井譜憲・川村真由美・長谷川フジ子他	がん先端医療に対する多職種連携重点コース 医学臨床実習報告	国際医療福祉大学学会誌	2015 年 8 月	20(2) 78-81
3	松澤建・松本謙一・長谷川フジ子他	キューバ紀行文～米国の経済制裁解除目前のキューバを訪問して～	ＮＰＯ法人ＯＭＥＴＡ報告書	2015 年 10 月	
4	長谷川フジ子	薬剤師の役割を画期的に変える「在宅医療」	日医工ジャーナル	2015 年 10 月	
5	能登真一，福田敬，伊藤かおる	新潟医療福祉大学 医療経済・QOL 研究センター第 3 回セミナー「わが国で始まる費用対効果評価制度の全貌」	シンポジスト	発表予定	
6	齋藤淳美、宮川和也、辻稔	ストレス性精神疾患モデルとしての ATP 感受性 K^+チャネル Kir6.2 欠損マウスの有用性	口頭発表	2015 年 11 月	日本ストレス学会奨励賞（高田賞）受賞

3．社会活動（生涯教育等）

国際医療福祉大学大学院は文部科学省 「がんプロフェッショナル養成プラン」、「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」、「未来がん医療プロフェッショナル養成プラン」に採択され、平成 19 年度の「がんプロフェッショナル養成プラン」では薬科学研究科修士課程／生命薬科学専攻／医

療薬学分野／がん薬物療法学領域を設け、がん薬物療法認定薬剤師を取得できるコースを開設した。平成24年度「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」日本病院薬剤師会のがん専門薬剤師認定事業の一環として「がん薬物療法に精通した薬剤師」および「がん先端医療に対する多職種連携重点コース」を、平成27年度の「未来がん医療プロフェッショナル養成プラン」では、「ライフステージに対応したがんプロフェッショナル多職種協働人材育成コース」および「ゲノム解析医療・希少がん診療に精通した医療者育成コース（インテンシブコース）」において、がん治療に関する専門知識を有する人材の育成に当たっている。

4．今後の課題

社会人の大学院入学希望生が多く、特に実験系ではない研究テーマを希望する院生が多い。実験系の研究テーマを実施するためには、大田原キャンパスへの通学が必須となるため、実験系の院生募集が難しい現状がある。今後、大田原キャンパスに在籍する院生募集に力を入れ、本学付属の病院勤務薬剤師、栃木県内の勤務薬剤師等、就学しやすく、向学心のある薬剤師への積極的な働きかけを行う予定である。さらに、研究内容を充実させ、薬学の研究者・教育者の育成を図っていく必要がある。また、薬学以外の卒業者であって、製薬業界や医療業界への勤務を希望する者の受入れもあることから、基礎的な薬学教育をも考慮して行く必要があると考える。

また、講義・研修では、研究科横断的な教育を行っているが、研究発表会、ゼミ等での研究交流をさらに推進していきたいと考えている。

Ⅶ. 2017 年度自己点検・評価の総括

2017年度自己点検・評価の総括

この度の国際医療福祉大学2017年度の自己点検・評価では、「国際交流の更なる展開」を課題として、近年の本学における国際交流活動に着目した。国際については実は既に2010年に取り上げたことがある。その際には「国際性を目指した大学」という課題に基づき、本学開学より2010年度までの国際交流活動を取り扱ったため、今回はそれに引き続くという形で2011年度以降の流れを取りまとめた。したがって重複する2010年度以前については本報告書では割愛したことをご理解いただきたい。

さて前報告書の総括においても強調したように、「国際性を目指した大学」は開学以来の、基本理念の一つとして、本学のあらゆる活動の拠って立つ基礎を構成するものである。保健医療福祉分野における教育・研究の進展と成長を図るはもちろんのこと、それと併せて学内外での国際交流や国際理解をさらに進め、広く人間社会に貢献することもまた、本学の担う社会的使命と考えている。本報告書の取りまとめを通じて、私たちの原点であるとともに常に志向する目標でもある「国際」というものを改めて顧みることは、これからの新たな成長を促す上でも極めて重要かつ必要な作業であろう。

学科ごとの詳細な活動については、関係各部署によって編まれた当該箇所をご参照いただくとして、まず本項目では2011年度以降に着手・進展された諸動向について、その概略を述べておきたい。

(1) 本学の国際交流

本報告書は2011年度以降、17年度に至る本学の各種国際交流活動について資料・情報を取りまとめ、関連学科・分野ごとに詳説する。それに先立ち本節では、「留学生」「海外研修」「海外姉妹校・協定機関」についてその概略を述べたい。

まず「留学生」は本学の場合、前報告書と同じく学部および大学院に所属するほか、2012年度より「科目等履修生」として海外姉妹校より本学学部へ派遣される留学生、および2015年より主として学部正規課程への進学を目的とした予備教育機関たる「留学生別科」がそれぞれ新たに加わった。①全キャンパスに属する学部留学生は、11年度にわずか15名だったものが12年度19名、13年度31名、14年度35名、15年度42名、16年度44名、そして17年度現在では68名である。17年度からは医学部在籍生も含められることとなり、この7年間で約4倍の増加を迎えた。②大学院在籍者は2011年度23名から12年度28名、13年度32名、14年度29名、15年度には36名まで増加するものの、翌16年度は34名、17年度は30名と、この数年では30名前後の規模を維持している。③「科目等履修生」に基づく海外姉妹校からの派遣留学生の受け入れは、2012年度に大田原キャンパスの医療福祉マネジメント学科1名（台湾・元培医事科技大学）に始まり、翌13年度以降は同キャンパス所在の視機能療法学科が引

き続き毎年 1～3 名の規模で受け入れている。④15 年度以降には留学生別科が、大田原キャンパスおよび成田キャンパスにそれぞれ設置された。入学要件および修了後の進学先などにおいて両者間に相違はあるものの（本学医学部進学者に限定した後者に対し、前者は本学以外への進学希望者も入学可）、毎年度それぞれ 5 名前後・15 名前後の在籍留学生を迎えている。

医療分野を専門とする本学の特殊性を鑑みると、学部課程においては卒業時の国家試験による資格取得を直接の目的とし、また主として研究を目的とする大学院においても医療・医学分野を主専攻とすることから、自ずと求められる日本語や外国語（英語）の能力は高度とならざるを得ない。こうした資格もしくは言語習得の要件が、他の一般総合大学に比べ留学生の増加を阻む要因として採用していることは否めない。なお彼ら留学生は中国や韓国を中心として、主として東アジア・東南アジア出身者によって占められている。学部入試を受験する留学生も毎年 10 名から 20 名の間を推移しており、2011 年度から 17 年度までの間で計 89 名の受験者数へと至っている。

学生の海外研修は 1997 年より「海外保健福祉事情」として、引き続き毎年実施している。大田原および小田原の 2 キャンパスが選択科目であるのに対し、成田・福岡・大川の 3 キャンパスでは必修科目として原則全学生が参加することとなっている。全キャンパスからの参加学生数は 11 年度 369 名、12 年度 310 名、13 年度 372 名であったものが、14 年度 518 名、15 年度 491 名、16 年度 480 名と 500 名前後まで増加し、さらにその前年に設置された成田キャンパスも加わった 17 年度には 827 名にまで至ることとなった。これに並行する形で派遣先の国家も中国、韓国、台湾、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、イギリス、オーストラリアと多岐多彩に渡っており、18 年度にはさらにモンゴルとハンガリーがこれら研修実施国に並ぶこととなっている。

なおこれら「海外保健福祉事情」での派遣先はあくまで本学の海外姉妹校・協定機関であり、海外研修による派遣は実施していないものの本学と学術交流を提携する大学・医療機関は他に多数存在している。数年後には医学部の海外臨床実習が実施される運びとなっており、そのための新たな協定校との提携強化も現在進展中である。

ともあれ、この 7 年のうちに国際交流活動の拡大に伴い、本学が世界に多数の姉妹校・協定機関を迎えることができたのは無上の喜びである。今後も引き続き、より多くの留学生・日本人学生が海外において学びを享受できる機会を心より期待したい。と同時にこうした海外提携校との交流の深化と発展を糧として、本学の教育と研究が広く社会に還元されることを切に願って止まない。

（2）各学部各学科の自己点検・評価と今後の課題

各学部各学科の自己点検・評価と今後の課題について、テーマを統一してこの報告書をまとめた。教育面として、教育内容、臨床（地）実習、国家試験対策、学生支援面、

研究面、学科内のFD活動、その他とした。

以下に、各項目について総括を述べる。

教育面としては、全キャンパスでカリキュラム名称を統一し、アドミッションポリシーと各講義の関連についてシラバスで明示している。また、キャップ制、GPA制度を導入し、学生への開示とともに学生指導、成績優秀者表彰、奨学金貸与者選考の為の一基準などに活用している。なお、総合教育科目の拡充につては、総合教育センターでアンケート調査を実施し教養教育の在り方について議論を進めている。今後、平成32年度カリキュラム変更に向けて、3つのポリシー（アドミッション・ディプロマ・カリキュラム）の改訂を検討する。

臨床実習では、人材の問題、実習先の確保、公平な統一された実習評価、関連施設との調整などが今後の課題とされる。また本学では、4つの附属病院及び多くの関連施設を有しているが、昨年開設された医学部の臨床実習が2020年度から開始されることから、これらの施設での実習をこれまでよりもハード面ソフト面において一層充実したものにする必要がある。

国家試験対策は、各学科独自の方法により積極的に実施されている。全国平均より高い合格率を保っているがさらに向上させるため、より積極的かつ学生の資質にあった多様な対策が必要と考える。成績低迷者に対しては、個別な対応をとるなど精神的なものも含めて支援している。特に昨年開設された医学部においては、2022年度に初めて医師国家試験を迎えるが、3年終了時にOSCE（客観的臨床技能試験）とCBT（コンピューターを用いた客観試験）に合格しなければならないため、十分な試験対策を準備する必要がある。

学生の就職支援では各学科の担当教員と大学が設置しているキャリア支援センター職員が連携し、個々の学生の希望や特性に応じた支援を行い、高い就職率を誇っている。

学生生活面での支援については、個別面談等には各学科の学生委員やアドバイザーなどが対応している。大学が設置している学生相談室などとも連携しながら、学生一人一人に寄り添い丁寧な支援を行っていく必要がある。特に、身体障害を持った学生に対する支援策として、教室等のスライドドア化や歩道段差を改修するとともに、今後、障がい学生支援会議を定期的に開催して、学科の教員と事務局と学生情報を共有化し常にタイムリーな支援策を検討していく必要がある。

研究面では、論文数、学会発表数などは、学科、教員個人によって多少のばらつきが見られる。外部研究費の獲得も含めて、今後より積極的な研究活動を期待したい。特に研究費に関しては、科学研究費などへの応募を積極的に推進し、評価することが必要である。

FD活動としては、年2回の研修会への出席を全キャンパスの全教員に義務付けている。研修の内容はFD委員会が企画運営し、外部講師による合同教員研修会、若手研究者奨励賞選考・発表会、授業アンケートに基づくグッドティーチング賞受賞者選考・発

表会等である。現在、授業アンケートの回答方法や内容の改訂およびグッドティーチング賞表彰要領の改訂が検討されている。昨年開設された医学部においては全授業科目毎にWebアンケート調査が導入され、タイムリーな教育の質改善に利用している。

国際医療福祉大学自己点検・評価委員会規程

第１条　国際医療福祉大学に自己点検・評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

第２条　委員会は、本学における教育研究活動等の状況に関する自己点検・評価について、次の各号に掲げる事項を行う。

一　自己点検・評価の方針の策定に関すること。

二　自己点検・評価の実施に関すること。

三　自己点検・評価の報告書の作成及び公表に関すること。

四　その他自己点検・評価についての連絡調整に関すること。

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　学長

二　副学長

三　大学院長

四　副大学院長

五　学部長

六　研究科長

七　副学部長

八　学科長

九　大学院専攻主任

十　学生部長

十一　教務委員長

十二　図書館長

十三　センター長のうちから学長が指名した者

十四　常任理事の中から理事長が指名した者

十五　事務局長

十七　学長が指名する各キャンパスの代表者

十八　その他学長が必要と認めた者

２　自己点検結果の評価を行う場合は、前項の委員のほか学外の有識者若干名を加えることができる。

第４条　前条第１項第１４号の委員の任期は、１年とする。ただし、再任を妨げない。

なお、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

２　委員は理事長が委嘱する。

第５条　委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

２　委貞長は、委員会を召集し、その議長となる。

３　委員会に副委員長を置き、学長が指名する。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

第６条　委員会に、必要に応じ小委員会を置くことができる。

２　小委員会に関する事項は、委員会において別に定める。

第７条　委員会の事務は大田原事務部総務課及び東京事務部総務企画部で処理する。

第８条　この規程の改廃は、常任理事会の承認事項とする。

附　則

この規程は、平成 11 年 11 月 12 日から施行する。

附　則

この規程は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

この規程は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

2017年度自己点検・評価委員会委員一覧

2017.4.1現在

役 職	所 属		氏 名
学長		委員長	大友 邦
副学長			天野 隆弘
			松谷 有希雄
			宮崎 勝
			糸山 泰人
			新井田 孝裕
大学院長			(天野 隆弘)
副大学院長			中村 秀一
			赤居 正美
			丸山 仁司
			今泉 勉
学部長	保健医療学部		(新井田 孝裕)
	医療福祉学部		丸木 一成
	薬学部		武田 弘志
	医学部		北村 聖
	成田看護学部		山下 香枝子
	成田保健医療学部		杉原 素子
	小田原保健医療学部		黒澤 和生
	福岡看護学部		大池 美也子
	福岡保健医療学部		辻 貞俊
研究科長	医療福祉学研究科		(天野 隆弘)
	薬科学研究科		(渡邊 敏子)
	薬学研究科		(武田 弘志)
副学部長	医学部		吉田 素文
	小田原保健医療学部		荒木田 美香子
学科長	保健医療学部	看護学科	坪倉 繁美
		理学療法学科	久保 昌
		作業療法学科	谷口 敬道
		言語聴覚学科	畦上 恭彦
		視機能療法学科	(新井田 孝裕)
		放射線・情報科学科	内藏 啓幸
	医療福祉学部	医療福祉・マネジメント学科	小林 雅彦
	薬学部	薬学科	渡邊 敏子
	成田看護学部	看護学科	(山下 香枝子)
	成田保健医療学部	理学療法学科	西田 裕介
		作業療法学科	河野 眞
		言語聴覚学科	城間 将江
		医学検査学科	大澤 進
	小田原保健医療学部	看護学科	(荒木田 美香子)
		理学療法学科	(黒澤 和生)
		作業療法学科	藤本 幹
	福岡看護学部	看護学科	今村 桃子
	福岡保健医療学部	理学療法学科	森田 正治
		作業療法学科	原口 健三
		言語聴覚学科	爲数 哲司
		医学検査学科	永沢 善三
大学院専攻主任	医療福祉学研究科	保健医療学専攻	(丸山 仁司)
		医療福祉経営専攻	竹内 孝仁
		臨床心理学専攻	亀口 憲治
	薬科学研究科	生命薬科学専攻	山田 治美
学生部長			(小林 雅彦)
教務委員長			(谷口 敬道)
図書館長		大田原キャンパス	前田 眞治
		成田キャンパス	(城間 将江)
センター長のうちから学長が指名した者			
常任理事の中から理事長が指名した者			
事務局長		法人全体	西留 秀二
		大田原キャンパス	小林 一也
		成田キャンパス	榎森 洋
		小田原キャンパス	高橋 宏寿
学長が指名する各キャンパスの代表者			
その他学長が必要と認めた者		国際医療福祉大学病院長	大和田 倫孝
		国際医療福祉大学塩谷病院長	須田 康文
		国際医療福祉大学三田病院長	宮崎 勝
		国際医療福祉大学熱海病院長	佐藤 哲夫
		国際医療福祉大学市川病院長	佐伯 直勝

2017年度自己点検・評価　小委員会委員一覧

役　職	所　属		氏　名	
委員長			副大学院長	丸山　仁司
副委員長	医療福祉学部	医療福祉・マネジメント学科	学科長・教授	小林　雅彦
	保健医療学部	看護学科	教授	世良　喜子
		理学療法学科	准教授	金子　純一朗
		作業療法学科	教授	小賀野　操
		言語聴覚学科	教授	阿部　晶子
		視機能療法学科	教授	原　直人
			臨床准教授	伊藤　美沙絵
		放射線・情報科学科	准教授	樋口　清孝
	医療福祉学部	医療福祉・マネジメント学科	副学科長・教授	山本　康弘
	薬学部	薬学科	教授	角南　明彦
	成田医学部	医学科	教授	森田　林平
	成田看護学部	看護学科	教授	木戸　久美子
	成田保健医療学部	理学療法学科	准教授	糸数　昌史
		作業療法学科	講師	平野　大輔
		言語聴覚学科	教授	内田　信也
		医学検査学科	講師	木村　明佐子
	小田原保健医療学部	看護学科	准教授	青柳　美樹
		理学療法学科	准教授	堀本　ゆかり
		作業療法学科	准教授	窪田　聡
	福岡看護学部	看護学科	教授	白石　裕子
	福岡保健医療学部	理学療法学科	講師	池田　拓郎
		作業療法学科	准教授	多賀　誠
		言語聴覚学科	教授	安立　多惠子
		医学検査学科	講師	佐藤　謙一